
HANABI

こつぶ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

H A N A B I

【Nコード】

N 5 7 6 7 A

【作者名】

こつぶ

【あらすじ】

米花花火大会。それは、米花市で毎年行われる真夏の夜の一大イベント。そこにはいろんなドラマがあつて。彼、工藤新一と幼馴染毛利蘭は高1のとき、漆黒の空に打ちあがる花火を見ながら、ある約束を交わした。それはほんの些細な約束。「また来年も一緒に来ようね」彼も、彼女も、その約束は叶えられるものだと思っていた。そして、その1年後……。2人の恋愛模様だけでなく、同時進行で、ある少女の心の成長の変化も描いていく。そして彼らを取り巻く人間模様。一体彼らが向かう先には何があるのか。ぜひごらんく

だ
さ
い。

第1話 私を花火に連れてって！

7月。

ミンミンと蝉が鳴きしきる季節。

まだ、人も斑で、蝉もまだ寝ぼけている時間帯、まだ静かな道路を一瞬だけわいわいと賑やかす集団があった。

少年探偵団、ご一行。

夏休みも始まり、子供たちの心はどれも浮き足立っていて、ラジオ体操の帰り道、こんな朝早くよく元気でいられるね・・・なんてふと思ってみたりして。

その少年、江戸川コナンは、ぼんやりクラスメートの光彦や歩美の話を聞きながら通学路を歩いていた。一体この道を歩いているだけで、何度欠伸あくびをしただろう。彼の隣には、夏休みの予定を楽しそうに話す歩美。そして、少し離れた後ろで、光彦と元太が夏休みの自由研究のアドバイスをもらっていた。後ろの方でゴホゴホと咳をしている哀に、少し気が行っていた。最近殊に寝不足のようだ。

(・・・たく。無理しやがって)

コナンは思わず心の中で独りごちた。そんなとき。

「・・・だけど、コナンくんも、もちろん、いくよね？」

「へ？」

何を話していたんだろう。歩美の言葉の最初の方を聞き逃してしまったようだ。

「・・・米花花火大会だよ。・・・7月の終わりにあるでしょう？」

「ああ、・・・もうそんな時期か」

不安げに彼女に尋ねられた後で、コナンはポツリと、懐かしげにつぶやいた。

米花花火大会。

それは毎年7月の最終土曜日に行われる、米花町近隣にとっては夏の一大イベントである。今年で24年目となるこの花火大会は、多くの自治会や商店街の人が参加する。それは、長年開催してきた努力の賜物であって、そのおかげで今では多くの屋台が出展し、色とりどりの花火も75,000発上がり地元では幅広い総の人気を誇っていた。

また、どこからかその噂を聞きつけ、近年、数台テレビカメラが来て、ワイドショーなんかで流れていることもあるほどで、その効果で地元以外の客が足を運ぶことも増えてきていた。

そんな中、去年の夏、彼がまだ『工藤新一』だったとき、初めて幼馴染の蘭と二人でこの花火大会を見に行ったのだ。彼女は真っ黒の空に大きく華やかに、次々と輝く花火に目を輝かせていた。藍染の浴衣がとても綺麗でそれを当たり前のように着こなしていた、いつのまにか大人の艶を持った蘭に、しばし見惚れていたことほどだった。浴衣の生地、赤い金魚の柄が今でも目に焼きついている。それほど、彼女は綺麗だった。

花火大会の帰り道、蘭は何度も何度も新一にこう言った。

「来年。また二人で来ようね」

とっても嬉しそうに、少し恥ずかしそうな表情で、彼を見上げて

「コナン君……。コナン君??」

コナンはハッとしてわれに返った。光彦が自分の顔を覗き込んでいる。

「どうしたんですか？さっきからボーっとしちゃって」

さっきまであんなに離れていた4人との距離がいつの間にか縮まっている。

「いや、昨日は夜遅くまで博士に作ってもらった新作のゲームで遊んだから。あんまり寝てねーんだ」

「そうですか。ふふっ、そうですよね。博士のゲームはどれも面白

いですもんね」

咄嗟にごまかしたその彼の言葉を信じたようで、なるほど・・・という顔を満面浮かべた光彦はとても嬉しそうにそう言った。そしてその横で、歩美は一人納得いかない顔で、コナンを見つめている。

「なんだよ、俺の顔に何かついてるか??？」

「ううん。もしかして行けないのかなって思っで。今度の花火大会」
「え??？」

思いもかけない人物から出たその問いに、どう答えていいかわからず思わず口籠ってしまふ。灰原ならまだしも、歩美に気づかれるなんて・・・いや、行けない、ということもないかもしれないけれど。

「マジかよ!? そーなのか、コナン!! 付き合いわりぞ、オメー!」

「僕らの絆はそんなものだったんですか!？」

「いや、あの・・・」

ブーイングの嵐に、さすがのコナンもたじたじた。思わず哀に救いを求めるが、彼女は「自分で何とかしなさい」とでも言わんばかりの表情をして、ふいつと顔をそっぽに向けた。どうやら助けは無理らしい。コナンは大きいため息をついた。

実際、彼は迷っていた。

今年の花火大会、コナンとして少年探偵団と行くべきか、蘭と行くべきか。

蘭の場合、どうせこの姿じゃ2人きりで花火を見に行くということとはないだろう。園子や小五郎が同伴だ。ロマンティックなことなんて期待できるはずもない。それでも、去年交わした約束もあったし、何より蘭と一緒にもう一度あの場所へ臨みたかった。

なのに、蘭と一緒にいたいと思うのは、今いる『江戸川コナン』ではなく、『工藤新一』だ。

あの場所に行き、つらそうな顔をして、『新一』の思い出を語る蘭。そんな蘭をはたして見ていられるのだろうか。自分は求められていないのに。それでも、笑顔でいられるだろうか。「俺が新一だ」なんて思わず口に出してしまったりしないだろうか。

ふと、そんなことを考えてしまうのだ。そして、少年探偵団に対しても。こんなに自分を、『江戸川コナン』を求めているのに。その誘いを断るのも何となくできない気がして。

自分を心から必要としてくれるから。そして、そこに居場所を求める自分がいるから。

いつもは、どちらかの誘いを先延ばしにすることで、何とかなっていたが、今日は一年に一度のイベント。次に行くのは来年になっ
てしまう。

自分を純粹に信頼し、必要としてくれる少年探偵団が。

はたまた、約束はもちろん果たせないし、きつと思いをさせてしまっ
うし、その気持ちを感じてしまうことになるだろうけれども、それでも『工藤新一』として、あの時間を一緒にいたい蘭だろうか。

(・・・やっぱり、こいつらには悪いけど・・・)

迷いに迷って、そんな思いに行き着いた瞬間。

「なあ、聞いてんのかよ!! さっきからボーっとしてよお!

お前、もしかして俺らと行きたくないんじゃないかねーのか!? なあ、おい、どうなんだよ! 答えるよ、コナン!」

元太がとうとうコナンの胸倉を掴んだ。その腕力は相当なものだ。
「ちよっ、やめて元太君のばか! コナン君をいじめちゃダメー!!
!」

歩美は目に涙をためて、元太を睨みつけた。

「でもよ、歩美い・・・」

困ったように元太が言う。

「これ以上コナン君に何かしたら、2人とも絶交だから!」

「ええっ！？僕もですか？？」

「マジかよ？」

光彦と元太は顔を青くして顔を見合わせた。

「わかったよ・・・」

元太は納得いかないような顔をしつつも、コナンを無造作に離す。その瞬間、彼はコンクリートの地面に落とされ、ドテン、という派手な音をたててしりもちをついた。

「アテテ・・・」

「・・・天下の高校生探偵さんも、形無しね」

哀は嘲笑して、しりもちをついたままのコナンを見下ろす。

「うつせ・・・」

お尻を擦りながら立ち上がり、コナンは思わず膨れっ面をした。くすり、と小さく笑って哀が手を伸ばす。なさけねえな、と思いいながら、コナンは「サンキュ」とつぶやき、その手を軽く掴んだ。

「それで？今回の花火大会、例の彼女と行くつもりなの？」

「え・・・」

いつのまにか元太、光彦、歩美は前列を歩いていて、後ろを哀とコナンが歩くという形になっていた。前の3人には聞こえないように、低めの声のトーンを更に落として話す2人の会話。ぎくり、とした彼に対して、「やっぱり」と確信を持った顔で哀がつばやいた。

「それで、迷ってるのね」

「やっぱり彼女は鋭い。」

「あなた、あの子達を無碍に扱う人じゃないでしょ。あなたがいつまでも迷っている理由。それは一つしかないじゃない」

まったく優柔不断なんだから、と溜息とともに吐いた哀の言葉に、悪かったな、と、コナンは思わず苦笑する。

「・・・で？オメーはどうすんだよ。めんどくさいからまたパスか？」

「いいえ。行くわ。私も日本の夏の風物詩とやらを味わいたいからね。博士と一緒に・・・」

そう言って、哀はゴホゴホと咳き込んだ。

「おい、大丈夫か？さっきから咳してるけど、そんなんで行けるのかよ」

「そうですよ！昨日の水泳教室も来なかったし・・・」

光彦が、2人の間からいつのまにかひょっこり顔を出して心配そうに口を出す。水泳教室とは、学校で学年ごとに夏休みに開かれる短期スクールのことである。小学1年、2年は午前中に1時間ほど組まれていて夏休み前期は週に2回くらいのペースで行われていた。

「・・・日焼けするのがいやだったのよ」

掠れた声でそう言っていると、それでも心配する光彦に、大丈夫よ、とやさしく微笑んだ。そんな彼女を見つめて、コナンはふっと思わず微笑む。それから、

「・・・じゃあ、一緒に行くか」

とクラッとした表情で、しっかりと、まるで自分に言い聞かせるようにしてそう言った。

そう、考えが変わったのだ。

去年の蘭の表情。それは今でもコナンの、いや、「工藤新一」の胸にしっかりと焼き付いている。まるで昨日のことのように少しも薄れることもなく。あのときの幸せそうな顔。・・・忘れるわけがない。一緒にいたいと思う。

けれど、きつと同じ笑顔を彼女が今の自分に向けてくれることはない。

なぜなら、今の自分は「江戸川コナン」であって、「工藤新一」ではないから。

いくら中身がホンモノでも子供のままでは工藤新一の代わりをしてやることはできないから。

それならば、江戸川コナンを待っている彼らと行くべきではないのか、とようやく結論が出たのだ。今の、哀の表情を見て。

少なくとも、もし少年探偵団と約束したならば去年の蘭と同じような笑顔を見せてくれること間違いないから。そして、断ってしまったならば絶対100パーセントの笑顔を見ることはないと思うから。誰も幸せにできずに、自分のエゴで哀しみが増えていく。自意識過剰かもしれない。

けれど、これ以上、自分のせいで悲しむのは見たくない。

ならば、「蘭と一緒にいたい」なんて気持ちは捨てようと思った。元に戻れば、きっと何度も一緒に見られる機会が訪れる。この子供たちと同じ視点で見ることとはなくなってしまうのだから。

・・・考えれば辛くなってしまうけれど。

「ホント、ホントに！？コナンくん！！」

パタパタと嬉しそうに駆け寄ってコナンの両手を握る歩美の目はとっても輝いていた。その横で、哀がジト目でコナンを睨む。

「仕方なくて行くのなら別にいいわよ。彼女はどうするのよ」

「いや。純粹にオメーらと行きたいから行くんだよ」

コナンは言って笑った。

「んじゃ、絶対来いよな！！」

「今度の土曜日ね！浴衣着るから、楽しみにしててね！！」

「待ってますからね！！」

分かれ道で、毛利探偵事務所に向かう道に歩くコナンに、元太たちはうれしそうに手を振った。コナンも

「おう！」

と言って手を振り、それから子供たちを背にして歩き出した。後ろのほうで、歩美が哀に何か話しかけているのが聞こえたが、コナンは気にせず蘭が作る朝ごはんに間に合うように、あわてて家路に急いだのである。

+++

コナンが家に着くと、すでに朝ごはんが用意されていた。小五郎はまだ寝ているらしい。蘭はエプロン姿で鼻歌を楽しそうに歌っている。

「ただいま」

「あ、お帰り、コナン君。朝ごはんできてるわよ。手を洗ってうがいを忘れずにね」

「あ、うん……」

コナンは素直に手を洗ってうがいをしてから再び蘭の元に戻る。
「あ。そうそう。コナン君、今度の土曜日、花火大会あるの知ってる??」

蘭は野菜サラダに使うキュウリを包丁で軽快に切りながら、スー
プを器によそっているコナンに言った。

「あ、うん。河川敷でやる米花花火大会のことでしょ??」

ドキリ、心臓が疼いた。

「うん。そのことだけだね、園子と行こうと思ってるの。コナン君もどう??」

「新一兄ちゃんとは行かないの??」

パンをオーブンに入れながらさりげなく聞いてみる。どうせ、答えはわかっているけど。

あの約束は覚えているだろうか。

「……そうだね。行けたらよかったけど。アイツ、事件で忙し
うだから、仕方ないよ」

蘭は振り返り、寂しそうにコナンに笑ってみせた。その笑顔は無理に作られた笑顔だった。その笑顔を見て、コナンの心は一気にシクシクと痛み出した。自分で試したことだったのに、こんな表情を見てしまうのはわかっていたのに。……自分は意地悪だ。

蘭はそんなコナンを見て、彼が自分に対して、何を言ってあげればいいのかうまい言葉を搜していると見受けたのか、少しやさしい表情を浮かべて、彼の頭を無言で撫でた。それから再び彼から背を向けて、ゆっくりきゅうりを切り始める。

（蘭、ごめんな）

コナンはすまなそうに思いながら、蘭の後姿を見つめた。

「で？コナン君はどうなの？？」

蘭は振り返らずに、止まりかけていた包丁をまたいつもの早く軽やかなテンポに戻ってキュウリを切っていく。

「僕？？僕はみんなと行くよ」

コナンは子供の顔に戻り、愛くるしい笑顔を作った。

「博士の車で連れてってもらうんだ」

「そう。博士も、子供たちのおじいちゃんね」

蘭はくすつと笑って再びコナンの方に体を向ける。しかし、ふと何か引かかるものを感じたのか、ちよつと待って、とつぶやき、その、綺麗に整った眉に皺を寄せた。

「ん？どうしたの？？」

「博士確か・・・」

そう言いながら、その白い壁にかけてあるカレンダーを覗き込む。今度の土曜日に『花火大会』という文字が蘭の綺麗な字で書かれている。そしてその下に、赤い字で『博士、学会』という文字が書かれていた。

「学会？？」

「あ、そう。夜、哀ちゃん一人になっちゃうから、泊まっていたらどうかな？？」と思って、書いていたんだっ！」

まるで電気がピリリ！と彼女の声の反動で小さく震えるほど、大きな声で彼女が叫んだ。そして次の瞬間、まるでタイミングを合わせたように、T R R R R R R T R R R R R R R という、けたたましい程の電話の着信音が鳴ったのである。

第1話 私を花火に連れてって！（後書き）

始めましての方も、お久しぶりの方もこんばんは、こつぷです！。前は「小粒納豆」として活動していました。この「HANABI」もその時期に書いた一番初めに書いた連載小説です。

今、小説研究というものをしています。自分の小説を見て、他の方の小説の作品を見て。研究、というかただ見ただけなんだけれど（笑）。それで、どうやったらこんなに素敵な作品になれるんだろう、ということもあがれていたんです。でも、最近自分の小説もすごく面白いと思えるようになって。・・・いや、好きで作った小説を「面白くない」と感じる方がおかしいのだけれど。いつも劣等感抱えていたから。

でも、その劣等感もなくなりました。自分の小説を好んで読むようになりました。だからいっぱいいっぱい尚も小説を書き続けていければいいなあと思います。

今回のHANABIは、どうして改訂版をこちらで書かせていただいているかというのは、感覚を掴みたかったからかな。この作品が私の作った小説の中で一番好きだと言ってくれた方が多かったからそして、あのとき、確かに毎日（確かに時間は死ぬほどあったけど）暇さえあれば寝ながらでも書いていたから。あのような感覚を取り戻したくて、またここに立っています。そういうわけで、感覚が掴めたら、嬉しいな。

それでは、よろしく願いいたします。これからよろしく願います。

第2話 夏はやっぱり浴衣でしょ？

米花中央駅、改札。

そこには既に鈴木園子と毛利蘭、それに円谷光彦、小嶋元太、江戸川コナンの5人がいた。

灰原哀と吉田歩美の姿はまだない。歩美からは「浴衣の着付けで遅れる」と先ほど探偵バツジに連絡が来ていたが、博士からも遅れるという連絡がないから、きっともうそろそろ来る頃だろう。

先ほどまで乗車していた電車の中は、まるでサラリーマンが行き交う朝のラッシュアワー時のように込んでいた。もちろん家路を急ぐサラリーマンやOLもいたが、辺りはほぼ浴衣や甚平を着込んだ若いカップルや家族連れで一杯だった。

去年もこんなに込んでいただろうか。ふとそんなことを感じながら、蘭と手を握り、このラッシュ時を切り抜けた。ようやく地獄から解放された、と思い、安堵の息をつきながら改札を抜けると、既に園子が光彦、元太を携えて、仁王立ちをして、こちらを睨んでいた。

「・・・で？結局この子達のお守りを頼まれちゃったわけ？？しかもジャガイモちゃんばかり。ほんと、イケてねーって感じ」

黄色の生地に赤の金魚柄のかわいらしい浴衣を身に着けた園子が順番にコナン、光彦、元太の少年3人組をうんざりした顔つきで見ている。

「ジャガイモちゃんってなんだよ。俺、バターつけてもうまくねーぞ」

元太が頬をめいっぱい膨らませて抗議する。

「僕ですよ！」

光彦も、元太の後に引き続き、抗議した。

「元太君はジャガイモかもしれませんが、僕やコナン君は・・・」
「おい、それってどーいう意味だよ」

元太は光彦の胸倉をつかみ、今にも殴りかかろうとしていたので、蘭が、もう何やってているの！と慌てて2人を引き離した。

「・・・でもさ、園子」

まだギクシャクしている子供たちをなだめながら、蘭は目線を園子に向ける。

「この子達だけだといくらなんでも危ないよ。いくらコナン君や哀ちゃんがいっしょに居るって言うてもまだ小学1年生なんだし・・・」

蘭の言葉に、子供たち4人はにつこりして頷く。そんな子どもたちをちらりと一瞥すると、

「その点、保護者で、しかも空手有段者の蘭がいれば、とりあえずは安全か・・・」

園子はため息混じりにつぶやいた。

「ああ、あたしの一夜のアバンチュールがああ・・・」

(京極さんはどーした、京極さんは)

一生の終わり、というほどショックを受けたような表情の園子に対し、コナンは呆れたような表情をしてそんな彼女を見つめていた。

蘭もまた浴衣を着ていた。

紺地に白の帯のような線が入った、大人びた浴衣。

先月、母親の英理に譲り受けたのだ。今でこそ別居中であるが、夫である毛利小五郎との思い出のデートのときに着けた浴衣を。今日の浴衣は彼女が先ほど妃法律事務所まで出向き、英理に着付けてもらった。

浴衣を着たのは中学のとき以来着てないし、母親に着付けてもらったのは小学校ぶり。しかも父親との思い出の品とくれば、蘭の心をウキウキさせるに申し分ない。

もちろん、コナンは久しぶりに見る蘭の晴れ姿に、鼻の下が思い

つきり伸びてしまったのだが。しかし、彼女の浴衣姿をコナンと同じ目線で見る男がもう一人。

「それにしてもいつ見てもコナンのねーちゃんって、美人だよな。胸もでっけーしょ」

元太である。

（ガキのくせして、変なところ見るなよ）

思わずそう言ってやろうと口をまあるく開いた瞬間、元太はにやにやとした顔で更にコナンを責め立てた。

「オメー、風呂とか入れてもらってんじゃねーの？『蘭ねーちゃん、一緒にお風呂入ろうっ』なんてぶりっ子したようなその可愛い声なんて出しちゃって。」

「あはは、ぶりっこコナンくんですかっ！」

「ばっ、何変なこと言い出すんだよっ！オメーら！き、聞こえたらどうするんだっ」

思わず顔を真っ赤にさせてコナンは抗議した。

「でもよー、実際・・・」

「ぶっぶー」

そのとき、後ろで怒っているような、イラついたような声がして、3人の背筋が一瞬にして凍りついた。振り返れば、やっぱり腕を組んで睨んでいる園子と、苦笑いを浮かべる蘭が立っていて。

「残念でした。・・・もう『聞こえてる』んだけど」

園子は作り笑いをしながら、指をポキポキと鳴らす。男子児童3人の顔はもう真っ青で。

「ちよつと、園子ったら」

あわてて園子を制止する蘭。

「止めないで、蘭。今日という今日は許さないんだから！！こら！よく聴け！このエロガキどもっ、覚悟しておきなさいっ！あんたにはそんな話題するだけでも100年早いつてこと、わからせてあげるんだからっ！」

園子が3人を交互に指差して力強く言い放った、ちよつどそのと

き・・・

「コナン君、みんな!!」

という、その声に、5人は振り返る。そこには、母親に連れられた赤い浴衣を着た歩美がニコニコと可愛らしい笑顔で手をふっていた。
「歩美ちゃん・・・」

彼女は、しっかりと握られていた母親の手をほどくと、ぴよぴよこととても軽やかにこちらへ向かって走ってくる。とても鮮やかな赤の浴衣。白兔の絵模様が染められた、かわいらしい浴衣。

「いいですねえ・・・」

「かわいいぜ・・・」

目がハート印の光彦と元太。コナンもその可愛らしさに思わず目を丸くしたほどだ。

「おまたせ!!」

歩美はうれしそうにそういうと、につこり微笑んだ。歩美が5人のもとにたどり着いたのを見届けると、母親は蘭たちにぺこりとお辞儀をして、去っていった。蘭たちも軽く会釈する。

「素敵よ、歩美ちゃん」

「うん、すつごくプリティー」

蘭と園子にほめられ、歩美は心からうれしそうにうなずいた。

「うん、あのね。博士に買ってもらったんだ!!哀ちゃんとおそろいで!!」

「博士に??」

コナンは驚いて、歩美を見る。博士は女の子に甘いのだ。あまりに可愛らしい浴衣を目にして、欲しがる素振りを見せる歩美に、黙って去るわけにはいかなかったのだろう。思わず口元を綻ばせた。
「じゃあ、哀ちゃんも浴衣着るの??」

蘭の言葉に、歩美は頬をほころばせて、大きくうなずいた。

「うん。水色の浴衣がすごい似合ったから!・・・あれ?哀ちゃんはまだなの?」

そのときになって初めて彼女がいない状況に気づいたのだろう。

歩美は辺りをきよろきよろと見渡す。

「うん。米花中央駅に6時30分って言ったんだけどなあ・・・」

蘭は時計を見ながらつぶやく。現在6:41だ。

ここから河川敷まで10分はある。7:00に花火打ち上げ開始であるのに、彼女はまだ来ない。

「僕、迎えに行つて来ます!!」

光彦がそう叫んで阿笠邸に向かい、走り出したそのとき、目の前の横断歩道で1台の車が止まった。黄色のワゴン、博士の車だ。運転席にはほくほくとした表情の博士が、こちらに向かって手を上げた。

「きた!!!」

歩美、光彦、元太は同時に叫んだ。車からは、博士だけが出てくる。哀の姿は窓に映っているが、一向に出てくる気配はない。その横顔は少し、物悲しそうで。

(・・・灰原?)

怪訝な気持ちになり、コナンは車内にいる彼女を見つめた。やはり、具合が悪いのだろうか。

「どうしたんでしょう・・・」

光彦は心配そうにつぶやいた。

「やあやあ、蘭君、園子君に歩美君。みんな見違えるようにきれいじゃな」

博士だけがみんなのもとにやってくると、人のよさそうな笑顔で、女性陣の浴衣を次々と褒めちぎっていく。その笑顔を見て、コナンはほっと安心した。あんなに哀においては特に心配性の博士がこんなに明るい表情でいられるのだ、きっと大丈夫。虫の居所が悪いだけのことだろう。

「あたりまえよ、なんせ今日の夜は何人の男を振り返らせられるかに賭けてたんだからね!それを・・・」

まだ未練があるようだ。園子は子供たちを次々に睨んでいく。女

の執念は恐ろしい。コナンは苦笑いした。

「あれ？でも博士、」がつかいのあつまり”は？？”

歩美が不思議そうに博士に尋ねる。その言葉に、一瞬口淀んでから、彼はさつと視線を逸らし、またにつこり歩美に向かって微笑んだ。

「ああ、ちよつと遅れることにしたよ。この駅から反対方向じゃかな。今からじゃ間に合わんじやろ」

博士はそう言つて、腕時計を見た。

「そんじやなんでもつと早く来れなかつたんだよ」

コナンがジト目で博士を睨む。博士が困つたように口を開きかけたとき、歩美がうれしそうに言つた。

「そりや哀ちゃんの浴衣の準備が手間取つたのよ！」

「女の子は、支度に準備がかかりますからね！！」

「俺なんか着替えるのもメシも5分で終わるぞ！うな井だつたら3分だ！！」

子供たちの飛び交う言葉に、博士はぎこちなく笑つてみせる。コナンは訝しげにそんな博士の横顔をただ見つめていた。

「ところで、その灰原はどうしたんだよ？？」

「ああ、彼女なら・・・」

コナンの言葉に、博士はちよつと困つた顔をして、振り返つた。そのとき。車のドアがゆっくり開く。

「灰原さん、こっちですよー！！」

光彦は大きく手を振つた。歩美は彼女が着てくるであろう、浴衣の柄を嬉しそうに蘭に話していた。

「哀ちゃんね、水色がすごく似合つて・・・て、あれ？？」

歩美は博士の少し後から付いてくる、哀を不思議そうに見ていたが、すぐに哀しそうな顔に変わった。

「なんで・・・??？」

哀はゆっくりと車から降りてきた。

ゆっくり、ゆっくり。ただゆっくりこちらに向かってくる。

しかし、彼女の姿は、歩美が言っていた水色の地の兎模様でなく、ただ一色。漆黒のワンピースだった。

まるで、明るい色を着ることを完全に拒否しているようで。

あの頃の。出会い始めたあの頃と同じ真っ黒のワンピースを身に纏い、何か一つの決意を持っているかのように、こちらをキツ、と睨みつけて。

彼女は、ふらり、ふらりと歩いてきていた。

(・・・はい、ばら?)

一瞬目が合った感じを受け、コナンは戸惑った気持ちを抑えきれずに、思わず、一步、彼女の方へ歩み寄った。
くすり、彼女は静かに微笑んだ。

後にして思えば、その笑みは灰原哀」でもなく、「宮野志保」でもなく、ただ一人の女。科学者であり、黒の組織の一員であった「sherry」そのものの笑みであつたような気がする。

それだけ、彼女の瞳はまだ10にも満たない姿であるのに、子供らしからぬぎらぎらと光った色をしていて、そして何より・・・

・・・何より、恐ろしいくらい、妖艶だった。

第3話 オンナの友情！？

「・・・ごめんなさい、おそくなつて」

彼らの元にたどり着いたとたん、その少女、灰原哀は静かに笑顔を零した。

彼女は漆黒のワンピースを着ていた。彼と彼女がまだ出会って間もないとき、彼女がよく好んで着ていた服。黒の組織を連想させるその色に、組織を自分から背負い込むことはない、とコナンが言った次の日から、着てくることは少なくなってきたのに。よりもよって、今日、水色の浴衣とは正反対の黒のワンピースを彼女は着こんでこの場所に辿りついた。ふらり、ふらりと歩く足元はおぼつかず。それを必死に隠しているようだけれど。

「・・・おめー、大丈夫なのかよ」

「・・・？何が」

「何が、つて・・・。なんつーか・・・」

ぼそぼそと、何と言おうか言葉を選ぼうとしていたとき、歩美の肩が震えていることに、彼と彼女はほぼ同時に気がついた。

「…吉田さん」

「んで…」

「…え？」

「何で哀ちゃん、浴衣着ないの??あれほど一緒に着ようね!って約束したじゃない!!」

悲鳴に近いその劈つぱくようなその声に、一同、小さな歩美の顔を見つめることしかできなかった。歩美の瞳からは涙がポロポロ流れている。透明で、あったかい涙が。歩美と哀、この2人を囲んで、周りはただおろおろするしかできなかった。

「歩美ちゃん」

「哀ちゃんのうそつき!!」

歩美の瞳は潤んでいたが、目の前の哀を捕らえて離そうとはしなかった。それに対して、哀は無言のまま、彼女の顔だけを見つめている。

「どうしてっ… どうしてそんな嘘なんてつくの!? そんなワンピース、全然可愛くない! 哀ちゃんに似合わない! 真っ黒なんて哀ちゃんの色じゃないもん! 哀ちゃんは歩美と同じピンクか水色じゃないといけないんだもん!」

「これ、歩美君!!」

泣きじゃくって、どうして、どうしてよ、と何度も哀の胸をボカボカ叩く歩美。それをさえぎるように、哀を守るように博士は2人の前に立ちはだかった。

「仕方ないんじゃないよ、だって哀君は…」

「博士!」

哀は何か言いかけた博士を強い口調で止める。

「でも、哀君… 君は」

博士は心配そうに哀を見る。哀は力なく笑って、博士に小さく首を振って見せた。仕方なく、口を噤んでしまう博士に対して、コナンはさすがにいぶかしんだ。彼女の怒りは治まらず、哀しみだけが溢れるだけ。

「なんかわけがあつたら言ってよ! 私たち、ともだちでしょ!!!」

歩美は哀を怒った眼差しで尚も鋭く見つめていた。

『ともだち』

はっとした後で、彼女の表情は確かに変わった。今まで自信ありげな表情が少し崩れた。優しく、そして悲しげなその表情に。

「…そうね、友達」

ポツリ、と哀は小さくつぶやく。

「理由なんてないわ。ただ、着られなかったのよ…。ただそれだけ」
「え…、それ、どういう…」

彼女の言葉に、元太や光彦、それにコナンまでどういう意味かわ

からず、ぼんやりと哀の顔を見入っていた。ただ、博士だけは事情を知っているようで、口を一字にして黙っている。

「おい、はいば…」

「…そっか」

急に合点がいった、という顔をして、歩美がにつこり笑った。

「…着られなかったって…哀ちゃん女の子一人だもんね。博士になんて着付けやつてもらいたくないもんね。だから着付けができなかったんだ」

「え?????」

今度は哀と博士が顔を上げる番だ。きょとん、とした顔で歩美の顔を見つめていた。

「かわいそ…ごめんね、歩美が悪かったの。ぜんぜん哀ちゃんの気持ちに気づかなくて。歩美のママに頼めばよかったね、今からでも遅くないからママに…」

「ちよつと待つて、言ってる意味が…」

哀、呆然として歩美を見つめている。

「それに時間が…」

「いいから行くの!!」

歩美は哀の腕をむんずと掴んで力強く言った。

「今日は歩美が哀ちゃんのことを助けるんだから!!だって哀ちゃん私の大切なお友達だもん!!」

そうだよ、と確かめるように自分を見つめるその視線に、哀はやさしく微笑みを返した。

「…ばかね」

「ばかだもん!!」

歩美は笑顔でそう言った。

- そんな2人の様子を離れて見ている女子高校生2人と男子児童一人。園子と蘭とコナンだ。

「いいわねえ、蘭。あの子達、青春してるわよ」

園子がふざけて蘭をつつく。しかし蘭はそんな園子をよそに、哀と歩美を笑みを含んで黙って見つめていた。園子もそれに倣い、2人にじつくりと目を向ける。

「ねえ、園子。あの子達、きっとこれからも仲良くやっていけるわよね」

蘭が園子に笑顔でそつと言った。

「うーん・・・どうかしら、あのクールで生意気な大人のような子供の哀ちゃんと、ちよっとおませちゃんだけど、子供チックでかわいらしい歩美ちゃんとかじゃねえ・・・。対照的っていうか・・・」

園子は微妙・・・という顔をする。そんな親友に、蘭はくすつと笑った。

「あら、哀ちゃんだって女の子らしいし、やさしい面もあるし。なんか歩美ちゃんのよきお姉さんって感じじゃない???」

「お姉さん・・・ねえ」

園子は疑惑の目で哀と歩美に目を戻す。その横でコナンはにっこり微笑んで言った。

「大丈夫だよ、だって園子姉ちゃんと蘭姉ちゃんがこんなに長く友達でいられるんだから。まるで『対照的』な2人なのに、さ」

かわいらしい、屈託のない子どもが無垢な笑みを武器にして園子に笑いかければ、案の定その言葉にキレたようで。

「なんですってええ??」

園子はバチンとコナンの頭を殴った。

「あてて」

「コナン君ってば・・・」

頭をさすって本気で痛がるコナンに、蘭が困ったように笑った。

「コナン君!!」

遠くでなにやら博士たちと話していた歩美があわててコナンのもとへ駆け寄った。

「もう、コナン君たら何ふざけてんのよう。哀ちゃんのことでもちは大変だつて言うのに」

歩美は怒ってコナンを睨む。

「家に電話したら、まだママ帰ってないんだつて。きつとどこか寄り道してるみたい。どうしよう、時間あんまりないのに!!」

かなり焦っているのだろう、肩を揺らして、困ったような、泣きそうな顔を浮かべて。

「いいじゃねーか。灰原が洋服だつて。友達なんだろう？だつたら、着ているモンが浴衣でも洋服でも…」

コナンが歩美をたしなめる。が、歩美はぶんぶん大きくかぶりを振った。

「やだよ!!博士が私たちのために買ってくれたおそろいの浴衣を初めて着るときは、いっしょがいいの!!いっしょじゃなきゃだめなの!!」

彼女の目には涙があふれている。

「でもよ…」

「もういい!!コナン君のばか!!」

歩美は泣きじゃくりながら言った。

「お。おい…」

気まずい雰囲気がある場に流れた。そんな歩美を見かねて、園子が蘭をつつく。

「あんた、浴衣着付けできなかったっけ?」

「無理よ、一度、一通りお母さんに教わったことはあるけど、誰かにやってあげられるほどうまくないし…」

困ったような顔でしばらく顎に指を当て、思案気につぶやいた。

「どうしよう…」

歩美が涙を拭き、顔を上げる。

「蘭お姉さん。お願いします」

ぺこりと頭を下げる歩美。

「お願いします!!」

元太、光彦も続いて頭を下げる。

「でも・・・」

「自信を持って。大丈夫だから」

そのとき、コナンがそつと蘭に言った。

「・・・うん」

蘭はうなずく。それから、おずおずと

「私でよければ」

と言った。少遠慮がちに、しかしその瞳には燐とした、まっすぐなモノを含んでいて。

「やったあ！」

歩美、光彦、元太は大きな声で叫び、蘭を取り囲む。

「ありがとう！！歩美、すごくうれしい」

「蘭お姉さんなら、引き受けてくれると思いましたよ！」

「やるじゃん！」

口々と褒め称える子供達。しかし、その中にコナンはいない。蘭が振り返ると、コナンは少し離れたところに哀といた。そして、ニツと笑う。優しい、大人びた笑顔。どこか新一に似てる笑顔。その笑顔に、蘭も照れくさそうに笑った。

「・・・」

哀がそんな2人を黙って見つめていた。さびしそうな表情をして。

そして、そんな風に自分を見つめていることなど、コナンは気づくはずもなかった。

第4話 女心

結局、蘭は哀を連れて博士に一度阿笠邸に戻ってもらった。博士ももう学会を遅刻はするつもりでいるようだ。

コナンたち5人は、一足先に河川敷へと足を向けていた。打ち上げ花火開始まであと僅か。この人や車による渋滞。とりあえず待ち合わせ場所を決めてはいたが、これだけの人。落ち合えるという確率は少ないかもしれない。ふとそんなことを考えながら、コナンは少年探偵団の少し後ろを、ただ一人のんびりと歩いていた。

（・・・あいつら、うまくやってるかな・・・）

毛利蘭と、灰原哀。2人にさせてはたしてよかったのだろうか。

（アイツ、蘭のこと、苦手っぽいなあ・・・）

嫌いあっているわけではない。寧ろ、蘭は哀のことを好いていると思うし、哀だって嫌いというわけではないだろう。けれど、哀が蘭に対して抱えているモノ。恐らくそれによって一つの壁が2人を塞いでいるわけであって。

うまくいけばいいと思う。

けれど、その思いを取り除くのはきつとすごく難しいことだとも思う。

「俺にはどうすることもできねえんだろうな、きつと」

ポツリ、とつぶやいてみる。

でも、それでも。

少しでも2人が笑顔で話してくれたら。二人の距離が縮んでくれたら。

そんなことを切に思って……。

「おい、そのマセガキ！……迷子になっても知らないよ！」

そのとき、ぎゅぎゅぎゅっと耳を強く引っ張られ、彼はわれに返った。園子が両手を組んで、彼の前に仁王立ちをして、こちらを睨んでいる。

「いてて……痛いよ、園子ねーちゃん！」

「ったく……あたしはあんたたち4人を蘭だけじゃなく、親御さんから預かってる身なんだからね。一人でも迷子にさせちゃったら、あたしに責任が来るんだからっ」

まったく、嫌な役を頼まれちゃったもんだわ、と園子はぷりぷりと怒っていた。

（すまないねえ……）

思わず苦笑いする。確かに、この混雑で迷子になることはありうるから。花火大会会場に向かうこの場所でもこんなに混んでいるのに。会場に着き、屋台や花火を見たら、コーンして飛び出したりすることだってありうる。

「……ホントに、蘭たちと会えるのかしら」

困ったように、園子はポツリとつぶやいた。

「会えるよっ！会って、お揃いの兎の浴衣で花火を見るんだからっ。

だって哀ちゃん、すごく似合うんだよ！！お店で着せてもらったとき、店のおねーさんにいっぱい褒められてたんだからっ」

そう高らかに宣言した歩美は、それをきっかけに、その浴衣はどんな柄だったか、どうして2人がこれを選んだかを、楽しそうに園子に話しはじめた。園子もまた、そんな歩美の話に楽しそうに聞き入っている。そんな2人の姿を、コナンは呆れた様子で眺めていた。

「どうしたんですか？コナンくん」

不思議そうに聞き返す光彦に、納得いかないという表情でコナンは振り返った。

「いや、歩美ちゃん、何がそんなに楽しいのかな、と思ってさ？おそろいがそんないいもんか？俺は人が自分と同じの着ててもあんまうれしくねーけど」

そんな彼に対して、光彦はちつつち、と舌打ちする。

「コナン君、君には女心が少しもわかっていないようですな。女の子は何でもお気に入りのおものを大好きな人と共有したいと思うんですよ。それに、同じものを身に着けてれば連帯感が沸くでしょう？」

「連帯感・・・ねえ」

「そう、それに、2人がどのようにしてこれを揃えたか、というのがまた大事なんですよ。2人で一緒に買いに行った、とか、デザインを考え、一緒に作った、もしくはお母さんに作ってもらった、とか・・・その過程がまた楽しいんですよ」

「・・・ふうん。そんなもんかねえ・・・」

コナンは歩美の話をニコニコして聞いている園子を見上げた。そういえば、蘭もまた、園子と中学時代、よくお揃いのキャラクターマスコットを揃えていたような気がする。小学のときも、幼稚園のときも。『あのとお揃いなんだ』と嬉しそうに笑う蘭の姿を何度も見ていたような気がするそれを見て、羨ましいと思うことはもちろんなかったけれど。・・・オンナというものはそういう生き物なのだろうか。

「やっぱ女ってわかんねえ・・・」

コナンはそれでもやっぱり、合点がいかない、という顔で首を捻るしかなかったのだった。

一方、阿笠邸にようやく車が到着し、居間で哀の着付けが始まるうとしていた。博士は心配そうに女性陣に追い出された部屋の外で行ったり来たりしている。

「博士、私のことはもういいから、早く行きなさいよ。このままじや遅刻どころか、学会に出席できなくなっちゃうわよ。今日は大切な会議があつたはずじゃない」

浴衣を自分で羽織りながら、哀が博士に呼びかける。

「じゃが、哀くん。君一人置いては」

「ここには蘭さんがいるし、あっちに行けば江戸川君やみんなにも会えるわ」

「じゃが・・・」

困ったような博士の言葉。哀はため息をついた。これでは埒があかないわね、そう言いたげな表情に見えた。それからドアに向かって

再び声をかける。

「博士にこれ以上迷惑かけられないわ。お願いだから」

「哀くん・・・」

そんな2人の話を黙って聞きながら、蘭はソファにかかっていたオレンジの帯を取り、準備に入った。そして哀がきちんと浴衣を羽織ったのを確かめると、「じゃあ、始めるわよ」

と、緊張した面持ちで自分に号令をかける。それから、ついに帯を締めてやろうと哀の細い体に触れたとたん、蘭の手がぴたりと止まり、黙ったまま哀を見つめた。

「哀ちゃん、あなた・・・」

「・・・何？」

哀は見返すことができぬまま、視線を逸らして聞いた。

・・・本当は、彼女が博士の代わりにいっしょに花火大会に行くと聞いたとき、家に残ろうかと思った。

本当は、彼女に彼女に着付けをやってもらうことになったとき、辞退しようかと思った。

でも、あの屈託のない一人の少女の笑顔を思い浮かべたら・・・

「やつぱり・・・!!」

蘭は哀のおでこに手を当ててつぶやいた。哀は一瞬びくつと体を硬直させたが、それを拒むこともなく、ただじつと身を任せていた。

「哀ちゃん、すごい熱よ!!こんなんでよく歩けたわね。博士が心配で学会に行けないの、当然よ!」

蘭は驚きの色を隠せないようだった。

哀はほんの1時間前まで氷枕をしてソファで寝ていた。38、9度の高熱。博士は何度もやめるようにいったのに、哀は首を縦に振るうとはしなかった。けれど、待ち合わせ時間もぎりぎりになったところで一向に寝ようとしないうちに哀に対して、博士の方が仕方なく折れて、哀を花火大会に行かせることにした。

そう、それが事実。

コナンが心配しているのも判っていたし、体が思うようにいかなかったけど、それでもこの花火大会に絶対参加しようとしていた。なぜなら――。

「大丈夫よ、これくらい」

「なに言ってるの、哀ちゃん。今日の花火大会はやめにして、来年に……」

哀は蘭の顔をキッと見上げた。

「私は、大丈夫……」

「哀ちゃん……」

蘭はその言葉を聴き、哀の顔をまじまじと見た。哀は蘭を見据えていた。その表情に蘭はあきらめたようにため息をつく。

「……失礼なこと、言っちゃうようだけど」

蘭が哀の額から手はずし、ゆっくりと言った。

「何？」

「あなた、馬鹿よ」

「え？」

予想もしなかった言葉に、哀は拍子抜けした表情をする。しかし、その言葉に腹は立てなかった。悪意は少しも感じなかったからだ。

「でも、コナン君と同じね」

蘭は微笑して言った。

「あの子もね、すごい怪我だったり、ひどい風邪ひいたり、そんなときでもへっちゃらみたいな顔して、私たちに絶対弱みなんか見せないの。それでいてこつちが困つてるときは、いつも助けてくれる。まるで新一みたいに。時々、本当にコナン君が新一じゃないかと思うときもあるんだから。そんなことあるわけないのに。」

蘭はさもおかしそうに笑った。自分の考えがあるわけないと完全に信じているその表情。哀はただ黙って蘭の話を聞いていた。

「でもやっぱりコナン君は新一じゃないんだ。新一の代用は利かないんだ。いつでもやっぱり心のどこかで新一に頼ってるんだ。一方的に電話してきて、一方的に現れて、いつ会えるかどうかもわからないアイツにさ。ホント、なんかくやしけど・・・」

蘭の瞳は少し切なくゆれていた。いつの間にか涙が彼女の頬を伝っていた。

「・・・これ」

哀が自分のバッグの中からハンカチを取り出すと、蘭にそっと差し出した。

「ありがとう」

蘭は泣き笑いの表情を浮かべる。そしてそれを受け取り、涙をふき取る。

「ごめんね、病気の哀ちゃんに気をつかわせちゃったね」
「・・・いいえ」

哀はそういうと、そつばを向いた。少し、照れくさかったのかもしれない。蘭はそんな彼女の様子に微笑み、また着付けを始めた。ぎこちなくだが、丁寧に帯を締め上げていく。

30分後、ようやく着付けが完成した。

「・・・やつぱり行くのね??」

蘭が水色の浴衣を羽織った哀にもう一度念を押した。

「ええ」

哀が答える。

「歩美ちゃんのために?」

哀が驚いて蘭を見ると、彼女は何も言わず、ただ、にっこり微笑んだ。

「・・・いいわ、もう何も言わない。ただ、あんまり無理しないでね。もちろん、私や園子が付いてて見ててあげるけど。・・・危な

いと思つたら即帰ること。もう帰らない、なんて言わせない。・・・
いいわね」

「ええ」

哀は力なく笑った。

体は息苦しさや気持ち悪さでいっぱいだったが、彼女の優しさが
身にしみてうれしかった。

それから博士の車で再び花火会場まで送ってもらい、2人は別れ
た。博士は最後の最後まで哀の体調を気にかけていたが、渋谷学会
の集まりの方へ行ったのである。

河川敷。凄い人込み。どこへ行っても、ヒト、ヒト、ヒト、ヒトである。
小学1年生の体の哀の視界は、周囲はヒトの壁で固められ、いまや
花火すら見えない。

「哀ちゃん」

土手を歩きながら、蘭は慣れない浴衣姿でぎこちなく歩く哀に声を
かけた。

「何」

哀は蘭を見ずに答えた。少し、恥ずかしかったのかもしれない。蘭
はそつと哀の手を握った。どきりとして哀は顔を上げる。蘭はにつ
こり微笑んでいた。

まるで子供にするような笑顔。きつと、彼女は自分のことを大人ぶ
っているただの6歳児だと思
っているのだろう。

「ばかにしているわ」

哀は蘭に気づかれないように小さくつぶやいた。しかしだからといって、しっかりと握られているその手を振り切ろうとはしなかった。今はこうしていよう、と思った。哀はうつむいたまま、じっと蘭の手のぬくもりを感じていた。

第4話 女心（後書き）

こんにちは、少しずつ改定しています。今の書きたい気持ちを修正したりしているので、前の話に行き着くかは実は心配しているのですが・・・。

第5話 開演 く光彦の心配く

河川敷。既に時刻はPM7:00を回っていた。開催セレモニーが着々と行われる中、コナンたちはそのような放送をまるでBGMのように耳に流しながら屋台を散策していた。恐らく全ての客がそうであるかとは思っていたが。

彼らは動くに動けない状況で、それでも少しずつ焼きソバやわた飴などの列は動いているから、少しでも希望を持ちながら、蘭と哀の2人の帰りを待っていた。はたして2人は、花火の打ち上げ開始時間に間に合うのだろうか。そして、落ち合うことはできるのだろうか。

「おつそいねえ、哀ちゃんたち」

ようやく手にしたアンズ飴を食べながら、歩美は漆黒の夜空を見上げ、さびしそうに呟く。

「もうすぐ花火始まっちゃうよお・・・」

今年の花火大会は一段とアベックの数が多いようだった。行きかう人、行きかう人が若いアベックで、通行するのも一苦労だった。これでは待ち合わせなんてできそうもない。

「ちよつと待つて。蘭に連絡してみる」

園子が、ケータイを浴衣の袂から取り出すと電話し始めた。

園子が電話をしている間、子供たちは尚もキョロキョロあたりを見渡しながら歩いていた。

「なあ、これ食わねーか!？」

元太が焼きとうもろこし屋の屋台の前で立ち止まると、よだれをたらしながら目の前でジュシーに焼かれたとうもろこしを指差す。もうすぐ花火が打ち上げられるからだろうか、この辺りの屋台は先ほどまでの列とは違い、並びやすそうに感じ取れた。

「元太君、また食べるの??まだ花火見ないうちからそんな食べちゃって。おなか壊すよお??」

呆れた顔で歩美が呟く。その言葉どおり、元太はアンズ飴のほか、既に焼きそば、チョコバナナ、わたあめを完食しているのだ。

「だって、食いもん見ると、どうしても食いたくなるんだからしょうがねーだろ!」

元太は頬をぷつと膨らませて抗議する。そんな2人をよそに、光彦はずっと黙ったままでも思いつめた表情をしていた。

「どうした?光彦」

コナンはきょとんとして光彦を見た。

「灰原のことか?大丈夫だよ、すぐ来るって。来なくても蘭姉ちゃんが付いてるんだから迷子になることはねーって」

「でもっ!!・・・でも灰原さん、すごく体調悪かったようでしたから」

「・・・!!」

コナンははっとして光彦を見た。・・・光彦も気づいていた。

「きたらきたで、心配なんです」

「光彦・・・」

「おい!!」

園子の声がした。

振り返れば、遠くの方で耳にケータイを当てたまま、こちらに向かって彼女が手を振っている。どうやら連絡は取れたらしい。

「もうこっちに戻ってるらしいわよ!すぐ近くにいますみたい」

園子の言葉に、4人はあわてて園子のもとに戻ってきた。携帯電話の電源をオンにしたまま、5人は歩いていた。・・・そして。

「園子、コナン君、みんな!!」

蘭が浴衣姿の哀を連れてやってきた。歩美と同じウサギ柄の水色の浴衣を着て、頬を少し赤く染めた哀がそこに立っていた。そんな2人の姿を見て、コナンはほっと思わず安堵の息をつく。

「哀ちゃん・・・」

「すっげー！！かわいいぜ！なあ、光彦！？」

潤んだ瞳のままの歩美、そしてコーフンを隠しきれない元太。

けれど、光彦だけは目を合わせることもなく、ずっとうつぶいていた。確かに歩美とおそろいのその浴衣は哀を子供らしく魅せていて、とてもかわいらしかったのだけれど。

「光彦・・・？」

きつと心中ひどく複雑なのであろう。あまり無理して欲しくない。
・彼の気持ちが高ナンには痛いほど伝わってきて、何て声をかけていいかわからなくなっていた。

「・・・光彦、あのさ・・・」

「・・・どうしましょう、コナンくん。・・・2人とも可愛すぎて、顔を上げられません・・・vvvv」

「・・・」

コナンはもはや突っ込む気力もなくしていた。

「遅くなって、ごめんなさい」

哀が弱い声で言った。相変わらず、コナンの目からは具合が悪そうに思えた。

それだけこの日を大事にしていたことなのだろうから、あまり強くは言えなかったが。

「なーに、気にすんなよ。そのおかげで灰原のめつたに見られない浴衣姿が拝めたんだからよ！なあ、光彦??」

元太がうれしそうに光彦の背中をバシバシたたく。

「痛いですよ！やめてください」

光彦が声を張り上げた。

「いいじゃんかよ！こんなめでーことはないんだからよ！」

（・・・っーか、オメー、さっきからオヤジくせーぞ）

コナンはジト目をしながら心の中で元太にツツコミを入れた。

「それにしても2人ともよく似合うわね。双子ちゃんみたいよ」

「・・・だね。歩美ちゃんも哀ちゃんもかわいい」

園子と蘭はニコニコと微笑んだ。

「双子???すごいうれしい!!」

歩美はうれしそうにぴよんぴよん飛び跳ねる。そんな歩美を見て、哀は幼い妹を見る姉のように優しくに微笑み、それから辛そうに天を仰いだ。

PM7:15。市長や後援会長の話も終わり、ようやく花火大会が始まるようだ。スポットライトに照らされていた会場内が、一瞬にしてすべて消えた。薄暗い闇に包まれる。これから始まる、という期待と緊張感が会場内に自然と沸き起った。

「これより、花火打ち上げを開始します」

マイクの音声とともに、とうとう花火の打ち上げが始まる。

ド・・・ン ドドーン ドドーン

始まった・・・。

赤、緑、黄、橙・・・鮮やかな色の花火が大きく咲き乱れる。

「わあああああ」

ざわざわとしていた観客の視線が、ひとつにまとまった。

まだ薄黒いキャンパスに咲く花、花、花。

錦菊、牡丹、彩色千輪菊・・・

それはどれもすばらしく、観客を魅了した。

「きれいですねえ・・・」

光彦がつぶやいた。

「ええ・・・」

哀も空を見上げたまま、つぶやいた。光彦の視線が、花火から哀の方へ移される。

しばらく彼女の横顔を見つめていた。そして、何か言おうと口を開きかけた。

が、ふたたび花火に目を戻す。

「・・・何よ。何か言いたいこと、あるの??」

気持ち悪いわね、と呟いてから、哀はジト目で光彦を睨む。そんな彼女に対して、光彦は「いや・・・」とちよつと焦ったように口ごもってから、それからしつかりと哀の顔を見据えた。

「・・・灰原さん」

「・・・何?」

「無理しないでください。僕ら、灰原さんがつらそうなのを見るのが一番つらいんですから。・・・そんな具合が悪いのに無理して僕らのために」

「・・・そんな。あなたたちのためなんかじゃないわ」

哀は空を見上げながら、かすれた声で静かに言った。

「・・・したかったのよ。あなたたちと一緒に見たかっただけ」

「灰原さん・・・」

光彦は大きな花火があがつてるときも、哀の横顔を見つめ続けて言った。

「灰原さんって、結構素直じゃないですよねvv」

その言葉に、哀はぎょつとして、思わず光彦の顔をまじまじと見た。

「そ、そうかしら?」

「はい。でも、僕はそんな君のことが・・・えと、その・・・」

光彦の顔がだんだん赤くなっていく。

「・・・す、す・・・好きですよ。あ、もちろん僕だけじゃなくて・・・えと、その。コナン君・・・そう、コナン君も・・・歩美ちゃんも元太君も・・・みんな、君のことが、だ、大好きです!!」

光彦が声を張り上げる。道行く人々が、その声に一斉に振り返っては、クスクス笑っている。光彦はそのことに気づくと、モジモジと小さくなつてうつむいた。

「バカね・・・」

哀は優しく笑った。おそろおそろ光彦は顔を上げた。彼女の顔は本当に優しく、女神のように美しく思えて。ぽわん、と光彦の顔が再び桃色に染まっていく。

「エスコート、してくれるんでしょ？」

光彦が心から好きな表情でそう笑ってくれるから、光彦の顔はさらに、さらにでれでれに緩んでいく。

「もちろんです！僕が今日ずっと灰原さんのことをお守りいたしますー！」

光彦はまるで高木刑事が佐藤刑事に敬礼をするときのように、顔を赤らませ、背をしゃきつと伸ばして敬礼した。

「ずりーぞ、光彦。自分だけ！お前きつと『1年2組男子人気ナンバーワン』でグランプリ取るつもりだな！？」

突如2人の間に割り込んできた元太。彼はいつの間にか買っていた焼きとうもろこしを半分まで食べ終えて、光彦の袖を引っ張った。

光彦はそれを振り返り、元太をにらむ。

「そうじゃありませんよ。僕はただ純粹に」

「そんなこと言っても、わかってるんだぞ！！ナンバーワンになった人は、給食のデザートが」

3日間だけ2人分っていう得点付きだもんな」

「違いますっばー！！」

光彦と元太は延々ケンカに近い口論をしていた。そんな二人を照らす花火は、絶えることもなく華やかに舞い続いていたのだった。

第6話 蘭の気持ち

「ねえ、新一。どうして今日からのサッカー部の合宿休んじやたのよ。秋季全国大会のための強化合宿だったじゃない！それを・・・」
私は、責めるようにアイツに言った。

そう、今日から帝丹高サッカー部は、突如関東代表に決まった全国大会で優勝するための強化合宿に入るのである。

それなのに・・・なぜかこの男は、私の住む毛利探偵事務所で、冷蔵庫に入ったアイスを呑気に食べているのだ。父、毛利小五郎が楽しみに取っておいたアイスを。

「いいじゃねーか、別に」

アイツは、おいしそうにアイスをなめている。のんびりとした顔で、間延びした口調で。

「よくないよ！」

私は叫んだ。

だって、サッカーをしているアイツが私は好きだから。サッカーをしているアイツは一段と輝いて見えたから。ホームズについて語るアイツも好きだけど、グラウンドを颯爽と走り回り、ボールをまるで体の一部みたいに操るアイツの表情が何よりも好きだった。・・・なのに、あんなにあっけらかんとして言う彼が許せなくて。

だけど、彼はそんな風に怒る私を、まるでからかうように優しく笑ってこう言った。

「いいんだよ、これで・・・こっちの方が俺には大事だから」
「・・・え？」

「だって、今日休まないとオメーと見られなくなるだろ？一年に一度のイベントなんだし。サッカーの合宿を一日ぐらい休んだってどーってこと・・・」

「ね、ちよつと待って！見られなくなるって・・・何を？」

私は彼が何を言いたいのか、話についていくことができず、きよとんとした顔で尋ねた。その質問に対して、今度は彼がきよとんと、寧ろ呆然とした表情を浮かべていて。

「は！？お前何言って……。今日は夏恒例の米花花火大会だろ？」

「そういえばそうだけど……。それがどうかした？」

アイツはシヨックを受けた顔をして、オメー……。それはないだろ、と呟いた。その様子に、私は彼の言わんとしている意味をようやく気づく。

（……まさか新一、わたしを誘ってくれてるつもりだったの？？もしかして合宿もそのために休んでくれたの？？）

そのことに確信を持ったのは次の瞬間。

「行きたくなきゃ別にいいんだぞ」

照れたような拗ねたような表情でアイツが窓の外を見ながら言った。まるで子供のように口先を少し尖らせて。

そんな横顔を私は眺めていた。いつもは見せたことのないアイツの表情に、少しときどきしながら。

「蘭姉ちゃん、蘭姉ちゃん……」

蘭は腕を引っ張られて、ハッと我に返った。コナンが不思議そうな顔でこちらを見つめていた。どうやらまたボーっとしていたらしい。このところ、いつもそうだ。

「蘭姉ちゃん。どうしたの？ボーっとしていると、人込みにぶつかってあぶないよ」

「あ、うん。そうね、ごめんなさい」

蘭はそう言つと、コナンの方に向き直つた。

哀と子供たちはずいぶん先のほうを歩いているようだ。ここから姿は見えない。どうやら、子供達は拳つて縁日初心者である哀を「エスコート」しているらしい。また園子といえば、蘭と自分の、2人分のクレープを買うために一人行列に並んでいるので、ここには蘭とコナンの2人しかいなかった。

「ねえ、コナン君。新一からの電話、私がいなときまさか、来なかったよね」

ふと、口に出たその質問は、やっぱり去年のことが頭にあつたから。忘れることができない一つの約束。もしかしたら、彼は覚えているんじゃないか、そう思ったから。

「え?・・・あ、うん、ま、また電話するからって」

「ほんとに!？」

目を輝かせて、蘭は戸惑つたままのコナンの細い腕を両手で思わず掴んでしまう。少しの期待が体の中で駆け巡る。

「それだけ!？それ以外に何か言つてなかった?？」

「あ、うん。・・・あとね、あと・・・『心配かけてごめんな』って「・・・そう」

蘭は、突然シユンとしてつぶやいた。

「なら会いに来ればいいのにね」

口元に笑みさえも浮かべて、蘭はさびしそうにつぶやく。

「蘭・・・姉ちゃん?？」

コナンが心配して声をかけてくれてはいたが、もう彼女の耳には少しも通らなかつた。

その言葉なら何度も聞いた。上っ面だけの言葉ならいらぬのに。どうしてそんな言葉をかけるんだらう。いったいどれだけ人の心を縛り付けば気が済むのだらう。

去年は大切なサッカーの合宿にドタキャンしてまで私につきあつて

くれたのに・・・

『来年、また来ようね』

何度も新一に向けて約束の言葉をかけたのに。

あれから一年。その約束は叶えられそうもない。

一体どれくらい、自分は待てばいいのだろうか。何度寝たら新一に会えるのだろうか。

不安だらけで過ごす毎日。

新一がいなくなってもうずいぶん経つというのに、トロピカルランドで目の前から消えたあの日以来、私の不安はずっと消えない。胸が苦しくて、夜も眠れない。

新一にもらったケータイ。鳴らなかった日はすごい不安でたまらない。

もう、かけてこなかったらどうしよう？？変な事件に首突っ込んで死んじゃってるんじゃないかな。それとも、もう戻ってこないつもりなのかな・・・？知らない女のヒトとどこかで暮らしていて、私のことなんて、もう忘れちゃったのかな・・・？
そんなことばかり考えて。

新一が、ただ戻ってきて「ただいま」って笑って言うてくれれば、そんな不安も一気に吹き飛んでしまうのに・・・

「蘭・・・姉ちゃん。・・・蘭ねーちゃん？」

再度呼びかけたコナンの声に、蘭はようやく我に返った。

「どうしたの、さつきから。今日の蘭姉ちゃん、変だよ」

「ごめんね。ちょっと考え事してて」

コナンはわかっていた。こんなにも蘭を悩ませているのは、他ならぬ「工藤新一」自分であることを。

だけど、自分はどうすることもできない。このガキの姿じゃ、どうすることもできないから。

覚悟していたとはいえ、やっぱり、目の前でそんな泣きそうな姿を見るのは自分にとってつらかった。思っていたことがやっぱり目の前で現実になっていく。つらい表情の蘭を目の前にして、自分はただ、どうしていいかわからずばんやりしているだけであつて。

（ホント、なさけねーよな・・・）

自嘲の言葉を心の中で一人ごちた後で、彼はそつと蘭の手を握った。そのぬくもりにはつと気づいて、蘭はコナンを一瞬見たが、ありがとう、と言つて、握り返した。

今はこれしかできないから。いや、今の自分が「コナン」として、彼女にしてあげることがはこういうことであるはずだから。本当にっらいことだけだ。

子供の姿でもできることはきつとあるはずだから。

「おーい！！」

元太達の声に気づき、2人は声の聞こえる方に目をやった。土手の上で、こちらを見下ろしている元太、光彦、歩美、それに哀がいる。子供達はこちらに向かって大きく手を振っていた。

どうやら、たくさんの収穫があつたようだ。彼らの手には金魚すくいの袋や、ヨーヨー、射的の景品、仮面やイバーのお面など持ちきれないほどのもの。

蘭も笑顔を作り、手を振る。

元太たちは、笑顔で2人の方に駆け下りて来た。

「よかった。迷子にならないかって、お姉さんちょっと心配しちゃ

った」

蘭は4人に向かって、心からホッとした表情で言った。

「オメー、少年探偵団を馬鹿にしてねーか?？」

ムツとした顔で、元太が蘭を睨んだ。そして胸元の探偵バッジを誇らしげに見せる。光彦も歩美も同等だ。蘭はくすりと笑った。

「そうだったわね、こんなことは慣れてるか・・・」

「当たり前だぜ！どんな難事件だって俺達少年探偵団にかかればすぐに解決するんだから！」

元太は鼻の穴を膨らませて、力説する。

「これは、トランシーバーになってますから、ぜんぜん不安はありませんでした」

誇らしげに言う光彦。

「だからってあんま遠くまで行くなよ。灰原だって病人なんだから」その言葉に光彦は「あ」とつぶやいて哀を振り返った。どうやら、遊ぶことに夢中で忘れてしまったらしい。光彦は傍から見ても心から落ち込んだ様子で溜息をつくと、ごめんなさい、と哀に向かって素直に頭を下げた。

「気にしないで。逆に感謝しているのよ。とても楽しめたわ。あなた達のおかげで」

哀は力なく微笑むと、ゆっくりと天を見上げた。休みなく打ち上げられる、大輪の花火。

打ち上げられた花火に照らされた彼女の横顔は薄白い。

「灰原・・・」

哀はチラリと蘭とコナンの顔を順に見た。そして自嘲を含めた笑みを浮かべると、誰にも気づかれないうちにコナンの手を両手でそつと握った。

ドキリ、としてコナンは哀の顔を見る。

すごい熱い手をしている。

しかし哀の予期せぬ行動にコナンの思考回路はそこまで回っていなかった。

（何考えてるんだ？）

そのとき、コナンは空であった左手に、何かを握らされている感触を味わった。

・・・それは小瓶の感触だった。ピンク色に透き通ったガラスの小瓶。

「灰・・・ば」

何が入っているのか、視線を手に移そうと思った瞬間、コナンは目の前で哀がゆっくりと倒れていくのを見た。

「灰原!!」

「「哀ちゃん!!」」

「灰原さん!」

4人があわてて哀に駆け寄る。コナンが哀のおでこに手を当てる。・
・ひどい熱だ。40度はあるかもしれない。彼女の意識は朦朧と
しているようだ。

しくじった、彼は思った。

もっと早く気づいてやっていれば。・・・具合は悪そうだと判っていたのに。

「おい、しっかりしろ!灰ば・・・」

コナンが哀を抱き起こそうとしたとき、哀が何か必死に話そうと口をパクパクさせていることに気がついた。

「何だよ!何が言いてーんだよ!？」

「げ・・・どく・・・しさ・・・ひ・・・んよ・・・」

つか・・・なさい」

コナンはハッとして手に握らされていた小瓶の中身を見た。それから、驚いて哀に目を戻す。

「灰原・・・、おまえ・・・」

「・・・」

哀はコナンを見つめたままわずかに微笑み、すうっと目を閉じた。

「お、おい！大丈夫かよ？」

あわてて元太が哀を支える。哀は目を閉じたままで。

「は、灰原さん！！」

光彦が哀にしがみつき、体をゆすった。

「おきてください、灰原さん！ねえ、起きて！」

半ば半狂乱になっている。誰も、何もかも。

「大丈夫だ、光彦。死んじやいねえよ。氣イ失っちゃったただけだから」

コナンがたしなめる。

そう、彼女の吐息はハアハアと小さく喘いでいた。・・・しかし、このままほつとくと万が一ってこともありえるかもしれない。

（できるだけ早く灰原を病院に連れてかねーと）

コナンはつらそうに喘ぐ哀を心配そうに見つめた。

「救急車呼んできます！」

光彦があわてて土手を下ろうとした。

「いや、救急車を呼ぶより、この近くで客待ちしているタクシー呼んだほうが早いぜ」

コナンの言葉に、光彦は「なるほど」と言っ土手を下っていった。交通規制をしているものの、やはりテレビで騒がれるほどの大イベント。タクシーはすぐにつかまるだろう。コナンはそつと哀の手を握ってやった。哀の手はとても熱かった。

思っていたよりも、とても熱く。まるで手が轟々と音を立て、燃えているようで。

「あたしが・・・いけないんだ」

コナンは、隣で消え入るような蘭のか細い声を聞いた。

「・・・ら、蘭？」

蘭は青い顔で哀を見つめていた。そして、彼女の細く白いその手は、
体は、夏だというのに、がくがくと小刻みに震えていた。

第6話 蘭の気持ち（後書き）

こんばんは。ここから話は少しずつ深みにはまっていきます（こ
らこら。）

最初から、沢山の人にスポットライトのように照らし、主役として扱おうと思っていました。でも、何だかめちゃくちゃだったんですね！今気づきました（苦笑）。でも楽しいからいいのー><！

第7話 小瓶の中身

コナンの腕に抱かれた哀は力を失ってずしりと重く、ぴりぴりと小学生の体である彼の腕を痺れさせた。その腕に伝わる彼女の体温。まるで火傷をしたように熱い。

思っていたより重症で。

はあはあ、と彼女の口から出される吐息も、間隔が早く、一刻を争う事態だということは彼にはわかっていた。

どうして気づいてやれなかったんだろう。

自分を責め立てる。ずいぶん前からこいつが具合が悪かったのを知っていたじゃないか、と。

今日だって顔色が悪かったのを知っていた。

年に一度の花火大会ということで気持ちが高ぶって立っていたか？

たいしたことない、と考えていたのか？

あいつが無理しすぎる性質だということ、前々から知ってたはずじゃないか。

ぎり、と歯ぎしりを立てる。目の前の、弱い、小さな少女を見て。

「・・・ごめんな」

心の中でつぶやき、そっと彼女の濡った髪をなで上げようとしたとき、彼は隣で、ポツリ、とつぶやく蘭の声を彼は拾った。私がいけないんだ、という声を。

「・・・蘭・・・ねえちゃん？」

哀を抱きかかえながら、コナンは驚いて蘭を見上げた。

「・・・私が哀ちゃんの熱に気づいていながら行かせたから・・・」

蘭の瞳には大粒の涙が零れていて。ああ、蘭も知ってたのか。コナンの表情は子どもが見せるそれとは似てもにっかない、大人のような優しい笑みを浮かべ、静かに言った。

「そんなことないって。蘭姉ちゃんが気にすることないんだから。」

これは灰原が自分で決めたことなんだよ。誰がなんと言おうとこの子はここにくるつもりだったんだから」

そう、そうなんだ。きつと、これを俺に渡すために。

彼は手中にある小さな小瓶をぎゅっと握り締めた。

コナンは先日、子供たちと花火大会に行く約束をしたとき、「例の彼女と行くつもりなの？」といったときの表情を思い出した。そして、彼女に向けたそのときの自分の表情も。きつと、情けない野良犬みたいな顔をしていたのだろう。だからきつとまた無理して・・・。

（だからって倒れられて欲しくなんてねえんだけどな・・・）
そう思ってしまう。

「蘭ねーちゃんは全然悪くないんだよ」

コナンは諭すようにもう一度、そう言って笑ってみせた。

そう、むしろ悪いのはそんな状況に追い込んでしまった自分なのだから。・・・言えるわけもないけれど。歩美も元太も心配そうにこの成り行きを見ていた。

「うっん、ちがうの。コナン君」

蘭は首を横に振って、辛そうに言った。

「それでも私が止めなきゃだめだったんだよ。あんな倒れるくらいなら」

蘭は、元太の腕の中にいた哀をそっと受け取ると哀のやわらかい髪

を撫でた。

「・・・蘭姉ちゃん」

彼女の気持ちは、コナンがなんと言っても動こうとはしないようだった。思い沈黙が2人の間に立ち込める。やっぱり蘭は抱えてしまっている。お前は悪くない、悪いのは俺なんだよ。そう言おうと決めて、意を決して口を開いたそのとき。

「あ、あたし、光彦君のそこ行ってくるね」

「お、俺も・・・」

そんな気まずい雰囲気にならなかったのか、歩美と元太は光彦の

背を追いかけて、土手を下っていった。

哀はハアハアと苦しそうな呼吸を相変わらず続けている。

（何やってるんだよ、おまえ・・・）

コナンはため息をついて哀を覗き込んだ。

苦しそうな表情。熱のせいで大量の汗が彼女の体から出ている。

蘭がそれに気づき、自分のハンカチで哀の汗を拭いてやった。

その横で、コナンは哀の熱で熱くなってしまった手のぬくもりがまだ残っている小瓶をポケットの中で握り締めていた。

小瓶の中身。

綿に包まれた一粒だけのカプセル。

この前文化祭のときに使用したものと同じものが一粒だけ。

そう、APT X 4869の解毒剤の試作品。

あのときはあれほど頼んでも、もうくれなかったのに。

コナンは、何で今、哀が自分にくれたのかわからなかった。

別に蘭に正体がバレそうになったわけではないのに。

しかし確かに彼女は薄れ行く意識の中でコナンに言った。

『解毒剤の試作品よ、使いなさい』

彼女はうつすらと笑みを浮かべていた。
幼馴染の蘭を大切に想う工藤新一のために・・・

コナンはある決意をして顔を上げ、哀をただじつと見つめている蘭に視線を移した。

それから顔を上げ、哀をただじつと見つめている蘭に視線を移した。

「あのさ、さつき来た新一兄ちゃんの電話のことだけど・・・」

「・・・え？」

蘭が振り返り、コナンを見る。コナンは頭の中で筋道を立てながら、次の言葉を選んでいた。

「お待たせー！！」

そのとき、何にも知らない園子がクレープを2つ手にして、うれしそうに駆け寄ってきた。

「ごめーん！クレープ超人気でさー。すっごく並んじやったvvはい、これ蘭の分」

園子がクレープを蘭に渡そうと近づいたとき、哀の様子に気がついた。

「・・・れ？どしたの、この子」

園子は蘭の腕の中の哀の姿を覗き込み、きょとんとして蘭とコナンを見比べた。

「・・・ごめん、園子。子供達連れて先帰ってて。あたし、これから病院に哀ちゃん連れてくから」

「うん、いいけど」

園子がクレープを一口食べながら言った。もちろん、片手には蘭のクレープを持ったままで。

そして蘭は今度はコナンに向き直ると、

「いいこと？ちゃんとお父さんに伝えるのよ??」
と言った。

「うん・・・」

哀はハアハアと苦しそうに喘いでいた。

コナンはその様子を心配そうに見てから、また蘭に視線を移す。

「・・・うん。でも・・・この子を連れてくのも園子姉ちゃんに頼もうよ」

「だめよ。あたしが連れてかなきゃ！だってあたしの責」

「・・・違うんだ。蘭ねーちゃんのせいじゃない！」

強く言い放つ蘭をさらに覆いかぶさるようにコナンの声が遮った。

驚いて自分を見つめる2人の視線を気にすることもなく、彼は言葉を続ける。

「僕だって最初から具合が悪いことは気づいてた。でも、行かせたんだ」

「・・・コナンくん・・・」

呆然、とする蘭に、コナンはまじめな顔で蘭を見つめている。どうして？蘭の目はそう聞いている。

「やつぱり歩美ちゃんのこと？」

ううん、コナンは首を振った。

「それもあるけど・・・僕たち、新一兄ちゃんと約束してたの。・

・・・さっきの電話もその電話」

「・・・どういう、こと？何の・・・」

「言いわすれてただけど、新一兄ちゃん、今日この花火大会来てるらしいよ。そのことで『またかけなおす』って言ったんだ」

コナンはまっすぐ蘭を見ていった。蘭はどきつとしてコナンを見た。

園子もその言葉を聞いて思わずにんまりする。

「ちよつとコナン君？ガセネタじゃないでしょうね！」

園子はコナンの耳を引っ張って言った。

「ち、ちがうよ！『蘭に会いたい』んだってサ。そして僕が灰原を・・・あのこに協力してもらった」

「・・・え？『会いたい』って」

カアアツと頬を赤く染める蘭。

「・・・『1年前の約束。・・・忘れてるんじゃないやねえよな？』って。『すぐ帰ってくつから、待ってる』って」

園子の前だが、こうなったら致し方ない。彼は顔を真つ赤にさせて言葉を続けた。全力投球でいかなければ、哀に申し分たないから。「ヒューヒュー」。あの推理オタクも言うときは言うわね！待ってるだなんて。もうホント旦那気取りじゃないーvvvvで、どこにいるの？その問題児は？」

園子は冷やかすようにして蘭をつつくと、キョロキョロと辺りを見渡した。

「き、きつとこの混雑でわからないんだよ！だから蘭姉ちゃん、ここ離れちゃだめだよ！きつとまた会えなくなっちゃうよ！」

「でも・・・」

蘭は哀の苦しそうな表情を見つめた。

「やっぱり結局は私のせいで、哀ちゃんは無理したわけでしょ、だったら」

「だから灰原は蘭ねーちゃんのせいじゃなくて・・・むしろ新一兄ちゃんのために・・・！」

そう、俺のために。言いながら、コナンは歯を食いしばる。

そのとき、園子が蘭から力ずくで哀を奪い取った。そして哀を落としそうになり、あわてて体制を持ち直す。

「おっと」

青い顔をする園子。まったくヒヤヒヤものだ。

「園子！」

「アタシね、蘭があたしと真さんのこと応援してくれてるように、アタシも蘭と新一君がうまくいってくれるように思ってるんだよ。だからこういうときはアタシに任せて、あんた達はラブラブなデートを楽しみなさい！」

「園子・・・」

「へえ」

コナンは思わず感心の声を上げた。

（園子もたまにはいいことを言うな）

「あの男のどこがいいのかはアタシにはわからないけど」

園子は忘れずにその言葉を付け足した。

「ハハ・・・」

コナンは思わず乾いた笑いをした。

「ありがと・・・園子」

蘭はつぶやいた。

「タクシー来ましたよー!!!」

光彦が蘭たちを呼びに来ようと、かけてきた。

「あ、園子さんも一緒に来てくれるんですか」

「・・・ええ。『園子さんも』ってことは・・・」

「僕らも行きますよ！だって大切な僕の・・・と、友達が苦しんでいるんですよ！見捨てられないじゃないですか！」

光彦はそう叫び、また駆け足でタクシー乗り場まで駆けていく。

「ちよっとお！お母さんに怒られても知らないからね！」

園子はそう叫びながら手をぶんぶんと振り回した。

「ったく」

そう言いながら、彼女の口元はゆるかった。

そして哀を担ぐとタクシーまでよたよたと人込みを掻き分けながら何とかたどりついたのである。

「あら、コナン君もタクシー乗っていかないの？」

蘭は振り返って言った。その表情はさつきと違って本当に明るい。

「う、うん。僕、ちよっと博士のところ行こうと思うんだ。

だから電車で・・・」

「そう。・・・はい、お金」

蘭はポケットから財布を差し出すと、往復1000円を渡した。

「いいよ。それぐらい」

あわてて押し返す。

「いいの。だってすっごくうれしいんだもん。やっと新一に逢える

んだよ……。こんなことってないよ」

蘭の瞳に涙がたまっていた。先ほどのとは違う種類の涙だ。

「蘭……。姉ちゃん」

コナンは、ポケットの中に大切にしまいこんだ小瓶をぎゅっと握った。

「……。じゃあ。あとでね」

坂が急な土手を登り始めながら、彼は踵を返してそう言った。

「うん。気をつけて帰るのよ。あと、哀ちゃんのことだけど」

「蘭姉ちゃんが気にすることないよ。本当に大丈夫だから」

「う、うん」

申し訳なさそうな蘭の顔。

コナンは土手を登りきってから振り返ると、笑って蘭に言った。

「じゃ、新一兄ちゃんによろしくね」

「うん、言っとく」

コナンは再び手を振ると人込みの中に入っていった。蘭はしばらくコナンの姿が消えるまでじっとその後ろ姿を見つめていた。

「新一……」

蘭はつぶやいた。

「やっと、逢えるんだね」

みるみる自分の両頬が赤くなってくるのを蘭は感じていた。それは、もちろん外の暑さのせいでも、屋台のライトのせいでも、花火のせいでも、なかった。

まぶたの裏に、新一の優しい表情が映っていた。

第7話 小瓶の中身（後書き）

こちら結構書き直しました！・・・コナンさんの自分の気持ちも入れ込みました。ふふふ。いや、改訂してたら、ちよつと矛盾が生まれて・・・。

きゃー><！（ 退散。では、失礼します。

第8話 待ち人きたり

米花中央駅前に聳え立つデパート。

通常なら閉館の時間なのだが、今日は花火大会当日だということで館内のどのコーナーもまだ営業をしていた。けれども館内、屋上、駐車場、ロビーに溢れんばかりの人がいたが実際売り場には人は疎らであって、どれも皆、河川敷で行われている花火大会に魅了されていたのである。

そんな中、彼、江戸川コナンだけは違った。

彼は、兎角急いでいた。

エレベーターを上り、花火の景色が見えるロビーの横をすり抜け、一目散に紳士洋品売り場に行き、服や靴を一式、悩む間もなく選ぶと、足早にカウンターに向かう。そこには遠くのガラス窓に映る花火の欠片を羨ましそうに眺める、大学を卒業したばかりであろう女性が立っていた。

「おねーさん、これ」

Tシャツ、半袖シャツに、Gパンにスニーカー。

目の前の少年に一つもサイズが合うはずもない紳士洋品一式を突然カウンターの上に突き出され、女性は一瞬驚いた顔をした。それから、にっこり笑ってそれを受け取る。

「お父さんにプレゼント？」

「・・・うん」

「偉いね、こんな日にお出かけなんて。急がないと花火終わっちゃうよ。包装するんなら、包んどくから、後で取りにきたら？」

馴れた手つきでレジのキーを叩くと、彼女はそれをビニールに入れた。た。

「うっん、急がなくていいんだ。すぐ着るから包装しなくていい」

レジの画面に出された数字を見て、財布からお札と小銭を抜き出すと、彼は女性にさっと手渡した。

「・・・ふうん。・・・『すぐ着る』って、もしかしたらそれ、今日の花火大会のための服？」

「そう。だから早く行かないと間に合わなくなっちゃうつ」

しばらくただ、黙ってコナンの顔を見つめていたが、突然女性はふっとおかしそうに口を押えて笑う。

「・・・何？」

「まるでおとぎ話のシンデレラみたい、って思って確かに。」

そう考えてコナンは思わず笑顔を引きつらせた。

（さしずめ、俺がシンデレラで蘭が王子、灰原は魔法使い、ってとこか）

・・・あんまり嬉しくないけど。

ド、ド、ドーン　ドーン　ドドー・・・ン

暫し途絶えていた、腹に響く打ち上げ花火の音に彼ははっと我に返る。

「じゃあ、僕、もう行かなくちゃ」

「・・・気をつけてね。可愛い魔法使いさん」

気を利かせてそう言ったつもりのようだ。そんな彼女に軽く会釈をしてみせて、彼はカウンターから勢いよく非常階段に向かって飛び出した。

（だから俺がシンデレラ、なんだよ）

彼女にしてみれば、退屈な時間に遊びに来てくれた名も知らない少年がかなり嬉しかったのだろう。手をひらひらさせて笑顔で見送ってくれる。きっとコナンがここで買った洋服を父親や知り合いのお兄さんに渡して花火大会のデートを楽しませる。彼女の目には彼が

その引き立て役として映ったに違いない。あとで、その女性は同僚に、退屈な時間にやってきた一人の少年のストーリーを面白おかしく話すに違いない。

今の彼にはもうそんなことはどうでもよかったが。

早く、彼女の許へいかなくては。

花火大会の約束。

『来年の花火大会も、一緒に来ようね』

些細な約束。それでも2人にとっては重要な約束だから。きつと、一人、自分のことを待ちわびているから。

「待つてろよ、蘭」

彼はそうつぶやき、更に走るスピードを早めた。

人々の間を縫うように擦り抜け、非常階段を駆け下り、デパートを出る。

駐車場には、人、人、人。

「ここら辺はダメだな・・・」

人気がないところ。花火大会の会場が近いこの近隣では、今の時間帯、ありえないのだろうか。どこもかしこも浴衣や甚平を着た若い男女や、子供連れの親子が沢山いる。

（・・・つたく。どうすりゃいいんだよ）

はあはあ息切れさせながら、途方に暮れかけたそのとき。

デパートの裏にどっしりと聳え立つ大きな倉庫が2つ、彼の視界に飛び込んだ。

ここだ。

彼は直感的に足を踏み入れる。きっと、鍵は開いているわけもないし、開いていたとしても、途中で閉められてまた余計な時間を費やす恐れもあったので、彼は倉庫と倉庫の隙間に体を滑り込ませた。大人が余裕で入れるスペースで、コナンはゆっくりと奥へ奥へと進んでいく。

何度も何度も花火の低くずんと響く音を聞きながら、彼はこの花火の下で『自分』を待っている少女の顔を思い浮かべていた。一体どんな力才で待っているのだろう。小さな胸がきりりと痛む。

小さく深呼吸をし、徐にポケットから小瓶を取り出すと、蓋をゆっくりとはずす。

小瓶を掌上でひっくり返せば、綿に包まれていたカプセルが少年の掌にポトリと落ちていく。

コナンはそれをじっと見つめ、自分の体を代償に、一粒の薬をくれた灰原哀に感謝しながら、一気に口の中に放り込んだ。

河川敷。

彼女、毛利蘭は一人花火を見上げていた。

人込みにまみれ、何度押しつぶされそうになったかわからない。

彼女は心の底から小さくため息をついた。

新一に会える・・・

いつもだったらその感情が彼女の心を全て埋め尽くされているはずだった。

きっと幸せで穏やかな気持ちで蘭の心をいっぱいにしていただろう。でも今は違った。

確かに新一に何ヶ月ぶりにあえることが言葉にならないほどに嬉し

くて、仕方なかった。

しかし今は灰原哀のことを考えずにはいらなかった。

目の前で苦しそうに倒れていつて。

はあはあ、喘いで。

自分は何も救えないで。

それどころか、親友や子供たちに気を遣ってもらって、幼馴染の帰りを待っている。

『蘭ねーちゃんのせいじゃない！むしろ新一兄ちゃんのために・・・』

『

結局自分の周りにはみんな気を利かせてくれている。

クラスも、親友も、子供たちにまで。

『でもやっぱりコナン君は新一じゃないんだ。新一の代用は利かないんだ。いつでもやっぱり心のどこかで新一に頼ってるんだ。一方的に電話してきて、一方的に現れて、いつ会えるかどうかもわからないアイツにさ。ホント、なんかくやしーいけど・・・』

「あんな言葉、言わなければよかった」

あの言葉を言ったときには、もう哀はこの花火大会に参加するつもりだった。

けど、自分があんな弱みなんて見せるから子供たちは心配するのだ。自分を犠牲にするのだ。

ずっと強がっていれば・・・園子の前で新一のことを語るときみに、ずーっと強がっていれば。

でも、どうしてか無理のような気がした。

所詮、コナンくんは、哀ちゃんは『新一』ではないのに。
それなのに、やっぱり弱音を吐いてしまいたくて。

「新一……」

蘭は口の中でつぶやいた。

「私、どうしたらよかったのかな」

答えが帰ってきそうな気がして、蘭はぼんやりその携帯電話を見つめていた。

新一がくれた携帯電話。待ち受け画面に映る自分の寝顔。どんな表情をしてアイツはそれを撮ったのだろう。

蘭は新一の優しい笑顔を思い出した。そしてきゅん、と胸が切なくなる。

やっぱり……やっぱり逢いたい。

逢いたいよ、新一。

そのとき、新一専用ケータイの着信音が突然鳴り出した。

彼女の好きな倉木舞衣の曲。ハツとして、彼は通話ボタンを押し、耳にあてた。

「もしもし、新一!？」

「……よお。やっとオメーの声が聞けた」

新一だ。

蘭の瞳からは大粒の涙。

自然にポロポロ流れてくる。

「どこにいるの？私、ずっとずっと待ってたんだよ!」

自分の感情を抑えきれなくなって、受話器の相手に向かって叫んでいた。

本当はこんなこと言いたくなかった。
新一を困らせたくなかったのに。

「すまねーな。例の事件が立て込んで・・・」
「だから花火大会のことなんて、忘れちゃったんだ・・・」

言葉に出るのは、まるで幼い子供のような言葉だけ。
わかっているのに、どうしても変えることができなくて。
そして、それでも彼の言葉は優しくして。

「・・・いや、俺は一時たりとも忘れたことなかったぜ。
去年二人で行った花火大会のこと、『来年もまた行こう』と約束
したことも。

『約束やぶった』ってあとで蘭に騒がれても嫌だしな」
「何よそれ」

蘭はそう言いながらも、顔は笑っていた。

不思議だ。

新一が言葉を発することに、だんだん気持ちが穏やかになっていく。
逢いたい気持ちが強くなっていく。

「ねえ、新一。今、どこにいるの？ここ、すごく込んでるんだよ、
本当に逢えるの？」

逢いたい気持ちが抑えきれない。

早く逢いたくて逢いたくてたまらなかった。

「どこって・・・オメーの後ろに立ってるよ」

その言葉に、蘭は「え？」とつぶやいて振り返った。

そのとき観客のどよめく様な歓声が一段と大きくなる。

ドーン ドーン

この花火大会の見せ場のひとつである数百発も上がるワイドスターマインに照らされて、土手の上の青年を映し出していた。

そこには、蘭がずっと待ちわびていた顔があった。

工藤新一がそこにいた。

夢かもしれない。

あまりに突然な出来事だったので、蘭は全てが頭の中で整理できていなかった。

「へっ。マヌケっつらしてやがる」

新一が蘭に笑いかける。

去年まで当たり前のように見てきた表情だ。

自分をからかう、優しい笑顔。

「何よお・・・」

蘭は再び涙腺が緩んでいた。涙がとめどなく流れてくる。

「ただいま」

新一が言った。

「・・・おかえり、新一」

蘭はつぶやいた。

夢でもいい。

こうして、新一といつまでもいられるなら。

ずっと覚めない夢でいて・・・

ドドーン・・・ ドーン・・・

2人の再会を祝福するように、花火は2人のちょうど頭上で咲き誇った。

赤、青、金色、銀色・・・

何十、何百もの花火が絶えることもなく次々と上がっていく。

この感動をどう伝えたらよいだろう。

しかし、2人はそんな花火さえも目もくれず、ただ、ただ、見つめあっていた。

逢えなかった時間を少しでも取り戻そうとしているかのように。

第9話 生か死か？

米花総合病院 815号室。灰原哀はそこに搬送されていた。

静まり返った病室内。

薬を打たれ、昏々と眠る哀を子供達は心配そうに囲んでいる。酸素マスクを付け、点滴をしている彼女の姿は見るからに痛々しい。

鈴木財閥の令嬢の関係者ともあって、特別に個室を用意されていたので、彼らのほかにはその部屋には誰もいなかった。部屋の外では園子が主治医と哀の病状について話しているようだ。

「哀ちゃん、大丈夫かなあ？」

「そんなに熱があるなんて思っても見なかったぜ・・・」

歩美と元太は眠り続ける哀をしょんぼりした顔で見つめていた。光彦は哀の表情をしばらく覗き込んでいたが、急に立ち上がると落착かない様子でベッドの周りを行ったり来たり歩き始める。そして「コナン君、灰原さんがこういうときに、いったい何をしてるんでしょう」

と苛々したようにつぶやいた。

（彼女が一番来て欲しい人は彼のはずなのに）

そんなこと、皆の前では言えないけれど。

「ちよつと連絡してみる！」

歩美は早速探偵バツジをONにする。光彦は黙って歩美の様子を見ていた。

「コナン君。こちら歩美、聞こえますか？どうぞ」

「・・・」

応答がない。何回試してもだめだった。元太は、哀の細く華奢な腕に点滴をするための太い注射針が刺さっているのを見ると、一瞬身震いする。

「痛そうだな」

「哀ちゃん、死なないよね・・・」

「ハハ・・・何言ってるんですか。灰原さんが死ぬわけ・・・」

子供達は顔を見合わせた。不安の色は一刻一刻過ぎていくことになつていた。

ドドドーン・・・ドーン

一同の視線が自然と窓に向いた。哀のことに夢中になつてて今まで気がつかなかつたが、

花火の打ちあがる音が窓の向こうから微かに聞こえていたのだ。

「まさか、まだ河川敷にいるのかな？」

歩美はそうつぶやき、窓の向こうを不安気に見つめていた。

「あらあら、おとなしくしてて偉いじゃない」

園子が静かに病室に入ってくる。その姿は一見では普段と変わらない様子だった。

「園子お姉さん！」

早く哀の病状が知りたくて待ちくたびれた子供達は、園子にワツと駆け寄った。

「哀ちゃんは!？」

「・・・」

園子は歩美の問いかけに首を振ると、突然黙つて顔を覆い、う、うつ、と肩を小刻みに震わせ、すすり泣き始めた。

「・・・そ、園子お姉さん??」

思わず顔を見合わせる3人。何だろう、この胸騒ぎは。子供達の顔に不安の色が過る。園子は憔悴しきつた表情で呟いた。

「あの子、治らないんだって・・・」

「え・・・?」

「嘘だろ・・・?」

歩美も元太もショックで顔は青白くなつていた。

もちろん、光彦も。

彼女の言っている意味がわからなくて、放心状態で「嘘だ、嘘だ」と呟くしかなかった。

ぽんつと肩に手を置かれ、彼は思わず振り返った。園子が言葉を続ける。

「かわいそうね、まだ7つなのに・・・治らないなんて」

歩美の目からはもちろん、元太の目からも大粒の涙があふれていた。

「・・・もう治らないのよね、あの性格・・・・・・・・・
なーんちゃって」

・・・一瞬、病室内に沈黙が流れた。ぽかん、とした表情で一同固まっていた。

聞こえるのは哀の微かな寝息と、単調な機械音だけ。

「園子お姉さん・・・」

フルフルと怒りで震える光彦、元太、そして歩美。

「あら、怒った?？」

園子は意地悪っぽく微笑んだ。してやったり、という顔だ。

「この状況でそういう冗談言わないでください!!」

思わず叫ぶ目に大粒の涙。園子はその涙を見てあわててしまう。

「えっ?ちょっ・・・何も泣かなくても」

確かにこの状況ではブラックジョーク過ぎたかもしれない。

園子は子供達の顔を見て思いなおして、「そうだったわね。ごめんなさい」と素直に謝った。

それから自らしゃがみ子供達の目線に合わせると、まっすぐ彼らの目を見て言った。

「哀ちゃんは無理をしすぎてたみたいよ。寝不足もあったみたいだ

し、疲労も溜まっていた。・・・だから風邪をこじらせちゃったみたい。肺炎にかかってるから、しばらく入院ですって」

「入院？・・・哀ちゃん死なない？？？」

歩美はまだ不安げに園子の顔を確かめるように見上げた。園子は優しい表情をして頷いてみせる。

「よかった・・・」

子供達はホッと胸をなでおろした。

「じゃ、安心したところで花火見物再開しましょうっか？」

「うん！！」

園子の言葉に、子供達は今度は満面の笑みで言った。

哀が肺炎にかかってしまったことは心配だが、少なくとも命には別状はないということが、今の子供達にとって何よりもうれしいことだった。

子供たちの中では、一番に歩美が哀の様子を気にしながら窓辺に移動し、外を覗き込んだ。

「きれい」

少し離れた病院の窓からでもその花火は明瞭と見えたようだ。歩美は思わず歓声を上げた。その声につられて、元太も光彦も窓に一目散に駆け寄る。

「すっげー・・・」

男子児童2人は目を大きく見開いて、半ば興奮気味になっていた。おそらくこの6年生きていて、見たことのない情景だったかもしれない。それほどまでこの花火は特別だった。

そう、今まで見ていた花火と、今回はぜんぜん趣が違った。

今まではたくさんの花のような花火が一箇所で打ち上げっていただけだった。

しかしこの花火は窓から見える河川敷の端から端まで花火が連続的に発射されている。キラキラキラ輝いている。まるで天使がこ

の世にある世界中の宝石を空中にばら撒いたかのように。

「・・・ワイドスターマインっていうのよ」

突然の園子の言葉に、子供達は驚いて振り返った。

「続けて何百発も発射された花火のことをスターマインっていうでしょ？それを何セットもつくるの。つまりスターマインの豪華版つてやつね」

「見直したぜ！」

「すごい！」

元太と歩美の賞賛に、園子は気持ちが高ぶる。

「あたりまえでしょ？天下の園子様をなめないでよ」

園子が少々偉ぶって子供たちの後ろに立つと、ひょっこり窓から外を覗き込んだ。それから子供たちにはれないように、ポケットからそつとプリントを取り出した。今日行われる米花花火大会の演目だ。実は今年の花火大会は鈴木財閥が多く出資しているので、何から何まで園子にはわかっていた。そしてこの点滅物ワイドスターマインは最後から数えると3番目の大イベントだった。

「スゲー・・・」

子供達はまだその大花火から目が放せないようだった。園子はそんな子供達にさらに尊敬のまなざしを得ようと、

「この大会にはテーマがあつて、一つ一つの大きな花火に名前がついてるのよ？」

と教えた。もちろん子供達はその話に食いつく。

「なんていう名前なの？？早く教えてよお・・・」

目を爛々と輝かせて、歩美がせかした。

「ちよつと待つてなさい、これはね・・・」

園子は子供達から姿が見えないように背を向けてしゃがみこみ、ベツドの陰で再びプリントをそつと開き、その題目を探した。

『天使の星屑宝石箱』と題されている。

「『天使の星・・・なんて読むのかしら・・・星・・・星・・・』」

だんだん目が真剣になってくる。・・・読めない。

「なにやってるんですか？」

ビクツとして園子が体を硬くする。そして恐る恐る振り返った。光彦がそのプリントを覗き込んでいる。

「・・・これ、まさか今日の花火大会のスケジュールですかあ？」

光彦が疑いの目を向ければ、園子は思わず作り笑いを浮かべた。

「そ、そうよ。それがなんだっていうの??」

園子は自分を余裕綽々に見せようとするが、声がうらがえってしまっている。どうやら絶体絶命らしい。

「なんだ、園子お姉さんカンニングしてたんだ・・・」

「尊敬して損したぜ」

歩美と元太のがっかりとした言葉に、園子はがっくりうなだれた。

・・・子供達の信用を取り戻すには相当時間がかかりそうだ。園子は冷たい3つの視線を背中に感じながら窓辺に行き、花火の様子を見る。『天使の星屑宝石箱』もうそろそろ終わりそうだ。これが終わると、残りは空中大ナイアガラ、そしてフィナーレを飾る水中花火と灯籠流しのみである。

「もうすぐ終りね・・・」

園子はそうつぶやくと、腕時計を見た。8時43分。

「蘭、新一君に逢えたかな・・・」

「・・・逢えましたよ、きつと」

光彦がにっこり笑い、そうね、と園子は思わず笑みを返した。

それにしても。

光彦はふう、と溜息をついて、眠ったままの哀に視線を送った。こんな綺麗な花火を見せてあげられないのはとても可哀想で。

（たとえば、僕がキスをすれば、彼女は目を覚ましてくれるのでしょうか）

そんなわけがあるわけないのに。

まるで、魔法をかけられた眠り姫のように、彼女は真っ白く美しく。暫し見とれるほどだったから。

たとえば、王子様のキスで元気な姿で目を覚ますことができたとしても、それは自分ではない。

「・・・いつになったら彼は来るんでしょうか」
こんなに機械につながれ、こんなに汗をかいて。苦しそうで。

何もできない自分が悔しかった。

河川敷。新一は蘭がトイレに行っている間、一人花火を見上げていた。ただ、ぼんやり考えていた。

蘭が見せた涙、笑顔、何もかもが自分に向けられていた。『コナン』に対してではなく、『工藤新一』に対する自分として・・・。

「また、戻れたんだな・・・」
ポツリと呟く。

そしてふとズボンのポケットを探ると、空になった小瓶を取り出し、それを手に取って眺めた。

もうすっかり哀の手のぬくもりは消えていた。

しかし、哀がその小瓶を自分に手渡したときの表情が新一は未だに忘れられなかった。ホントはすぐくつらいのに、必死に笑顔を作ったあの時の哀の表情。

「無理しやがって・・・。誰が自分の体犠牲にしろ、なんつったよ」
キリリ、と胸が痛い。ポケットの中に突っ込まれた探偵バッジを、そつと指先で撫でた。

少し前に、歩美から自分へ通信が入っていた。^{コナン}しかしそのとき蘭が隣にいたので応答することができなかったのだ。

新一は、もう片方のポケットから蝶ネクタイ型変声機を取り出すと、江戸川コナンの声に合わせた。そして機械を口に当てたとき、
「何してるの？」

蘭が横から顔をのぞかせた。

「あ、それコナン君のじゃない」

びくっとして新一は変声機をポケットの中に突っ込むと、笑顔を作る。

「あ、ああ。借りたんだ。俺にも似合うかなって・・・」

「子供用なんだから新一には小さいわよ」

クスクス笑いながら蘭は空を仰ぎ、花火を見上げた。

新一は蘭の横顔を見る。

言葉とは裏腹に、彼女の顔はどこか冴えない。そして時折物思いにふけたような顔をしている。

やはり蘭も灰原の様子が気になっているようだった。自分と同じように。

こんな気持ちだったらいつそ2人で灰原のいる病院に行ったほうがいいのではないか、そう新一は思った。

そんなことを迷っているそのとき、突然蘭の携帯電話から着信音が鳴った。軽快なクラシック。きっとこの音楽は園子からだ。『コナン』になって、ずっと彼女の傍で聞いているからすぐわかる。新一は思わずぴっと体を緊張させた。

「あ、ごめん。園子からみたい。もしかして哀ちゃんのことかな」

蘭はあわててバッグから携帯電話を取り出すとすぐに耳に当てた。

「もしもし。もう病院に着いたの？そう、よかった。・・・うん、うん・・・」

蘭は背を向けて話しているので、こっちからは蘭の表情は読み取れない。だから新一はとりあえず事の成り行きを見守ることにした。

「・・・米花総合病院にいるのね。うん、ありがとう。ねえ、本当に哀ちゃんは大丈夫なのね？」

蘭は何度もそれを聞き返した。声が明るい。

（どうやら命に別状はないらしいな）

新一はホッと安堵の息をついた。

「そう。・・・ん、わかった。あ、あと新一に逢えたから。いろいろありがとう。うん、バイバーイ」

蘭は電話を終えて新一の方を向き直ると、開口一番哀の無事を伝えた。

「哀ちゃん、無事だつて。ただ、肺炎にかかってるみたいだからちよつとの間入院するつて、園子が・・・」

「そうか・・・とりあえずよかったな」

蘭の言葉に新一もホッと胸をなでおろした。

「じゃあ、これで安心して・・・」

「ううん、私これから哀ちゃんのところ行こうと思うの」

蘭はそう断言した。新一のことをまっすぐ見ていた。もう迷いはなさそうだ。

蘭ならどつちにしろそう言うだろうな、と新一は予想がついていたので別に驚かなかった。

「そうだ、新一。博士に連絡したの？博士心配してたわよ。コナンくんが連絡してくれたかな？」

「やべつ・・・」

思わず顔を蒼くした。実際これっぽっちも連絡していなかった。あまりにいろんなことがありすぎて、彼のことを考える余裕がなかった。

携帯電話を開けば、着信履歴が『阿笠博士』の名前で埋め尽くされている。新一はあわてて博士のケータイに電話をかけた。もちろん、哀が倒れたこともまだ知らなかった博士は驚嘆し、その重大なことを伝えなかった新一はこっぴどく怒られた。

そんなこんなで、まだ2つの大きな仕掛け花火を残して2人はこの河川敷を後にした。

いざ、彼女の眠る、米花総合病院へ。

第10話 変質者探偵 工藤新一？

米花総合病院 815号室。

新一と蘭がやってきたのは9：00を過ぎたころだった。

面会時間は過ぎているのだが、鈴木財閥の直結の知り合いということとで、新一たちは面会を特別に許されていた。

「アラ！？なんだ、来ちゃったのお？」

ノックを受け、ドアを開けるなり、園子はびっくりした顔で2人をまじまじと見つめる。

「何よ、その言い方。来てほしくなかったような感じに聞こえるけど」

園子の言葉に、思わず苦笑する蘭。

「だってせっかく蘭が待ちわびてた新一君が来たんだもん。デートが病院なんてあまりにも寂しすぎるじゃない。普通のカップルならこれからどこか行こうとか、なんだとか・・・」

あからさまに不服そうな表情をしてから、園子は、まあ、それがあんたたち夫婦らしいっちゃらしいけど、と言葉を付け足した。

「待ちわびてただなんてそんな！私は新一がいなくなつてぜんぜん寂しくなんてなかったわよ。逆に新一がいなくなつたあと、急にお父さんの仕事が増えて、すごい助かってるんだから！」

赤くなつてそう反論する蘭の言葉に、その仕事解決したの全部俺だけだな、と新一は思わず苦笑いを浮かべた。

「・・・あの、こんにちは！」

背中から聞きなれた少女の声が聞こえ、思わず振り返ると、歩美、元太、光彦の3人がすぐ後ろで立っていた。その小さな体に疲れは感じさせられるが、それでも先ほど『コナン』として分かれたときよりも表情が明るく見えて、彼はほっと安堵した。思わず笑みが零

れる。

「・・・お疲れさん。3人とも大変だったな。光彦、タクシーにすぐ捕まえてくれてありがとな。助かったぜ」

「・・・へ?・・・はあ」

きよとん、とした顔で自分の顔を見る光彦に気づかず、新一は言葉を続けた。

「それと歩美ちゃん、お母さんに電話したか? 灰原が心配だからしようにないかも知れねーけど・・・。女の子なんだから、いくらなんでもご両親が心配する。まあ、博士に電話しといたから、大丈夫だとは思っけどよ・・・」

「???」

3人はきよとんとして顔を見合わせた。

「あの・・・新一お兄さん、私たちのことどうしてそんなに詳しく知ってるの? まるでその場にいたようなこと話してる」

歩美が恐る恐る訊ねる。

そのときになって、しまった、と思った。

自分は今は工藤新一で、あの米花センタービル 展望レストランの事件以来ずっと姿を消していた人物。

そして、もちろん、今日、哀が倒れたときにいたのは「江戸川コナン」。

「工藤新一」では知りえないことを、ついいつものクセでペラペラ喋ってしまった。

「オメーあの場所にはいなかったじゃねえか、どこでそんなこと知ったんだよ!」

「まさかあなた、僕たちを狙うストーカーですねっ! 最近僕たちが陰で人気を集めているって聞きつけて、ここまで飛んできたんだっ」

「やだー、少年探偵団の座、取られちゃうー」

「こうなったら高木刑事に言わなくちゃだめだよなっ。俺らのプラ

イベントまで奪われちゃ堪らねーよ」

「元太くん、それを言うなら『プライベート』です。・・・惜しいけど、ちよつと違います」

そんないつもと変わらない他愛のないやり取りを目の前で見せ付けられ、新一はハハ・・・と失笑する。

「で？・・・どうしてだよ」

光彦に揚げ足をとられたのがムツとしたのか、顔を赤らめ、ふて腐れた表情で元太は新一に聞き返した。

「・・・コナンが・・・あのボーズが俺に連絡してくれたんだよ。だから俺はあるとき、お前らが灰原にしてくれたありのままを知ることができた」

「ふうん、オメーの前ではコナンはまるでうるちよろしてる働き蟻みたいだな」

（ほつとけ）

コナンは思わず心の中で突っ込みを入れた。

「でもさ、コナンくんならあり得るかも」

「つか、何でそんなに灰原のこと気にしてるんだよ、大体」

「コナンくんの親戚のお兄さんって言ってたじゃない。・・・だから哀ちゃんとも面識があるんだよ」

「あー。それにあの兄ちゃん、よく博士の家に遊びに行ってた、って前言ってたもんな。博士とも仲いいんだ、あいつ・・・」

「だからきつと灰原さんとも仲良しなんですね・・・。ムムム、これは油断できませんね・・・」

ひそひそと少年探偵団内の会話が横でしばらく聞こえているが、何はともあれ、とりあえず納得したようだった。しかし園子だけが疑惑の目で新一を見つめている。

「・・・ナンだよ、その目・・・。別に間違えたこと言っていないだろ？」

新一がその視線に気づいて一瞬眉を顰めると、園子は不敵な笑みを

浮かべた。

「いや、ストーカーって言葉、あながち間違えじゃないと思って」
「・・・はあ？」

「ほら、蘭。前にあんた、服部くんに、コヤツが自分のことをすぐ近くですつと見ているんじゃないかみたいなこと言われた、って言うてたじゃない？きつとそういうこと、もともとあったのよ！」

「・・・へ？」

「きつとそれが最近子供のほうにも趣味が移っちゃって・・・いやっ、不潔よ！サイテー！蘭ができないのなら、真さんに怒りの上段蹴りをお願いしたいくらいだわ！」

（またコイツの暴走が始まりやがった）

うんざりした顔で新一が蘭のほうをチラリと見ると、蘭は、腹を抱えておかしそうに笑っている。

笑い事じゃねえよ。

そう言おうとして、彼は思い直し、さつと言葉を飲み込んだ。

先ほどまで曇っていた彼女が本当に心から笑っているように見えた。新一との約束を思い、また、哀の病状を気にして、彼女はずっと悩んでいるように見えたから。

ほつと胸を撫で下ろし、彼は黙って視線を下ろした。

「・・・でも、そうね。連絡することすっかり忘れてたわ。みんな、あとは私たちに任せてお家に帰りなさい。今、タクシー呼んでくるから」

蘭の声が聞こえ、新一は再び顔を上げる。彼女の言葉に子供たちは、ぶんぶん大きく首を横に振っていた。

「いやだね！」

元太がキツと蘭をにらむ。歩美も光彦も同じだ。

「僕は灰原さんが気がつくまでずっといます！」

「そうしなきゃ、あたし達後悔するもん！絶対ここから動かない！」

そう言い張って、3人は1歩も動かず、ずっと蘭を真剣な顔で睨んでいた。

そんな3人の姿に、哀への強い思いを感じ、ふっと口許を緩ませていた。

そういえば、彼らはもともとこういうやつらだった。

灰原だけじゃなく、団員みんなのことを想っている彼ら。

一人のメンバーが風邪を引けば全員でお見舞いに行き、

一人のメンバーに危険が迫れば、誰の制止も聞かず、アジトに飛び込み、

一人のメンバーが幸せを感じれば、自分のことではなくても、心から喜び、

一人のメンバーが哀しみを感じれば、メンバー全員で何とかしようと模索する。

メンバー一人一人が大好きで。だからこそ信頼関係が強く結ばれる。
(今日の花火大会、断らなくてよかったな)

彼は心から思った。

蘭も同じ気持ちだったのだろう、クスツと微笑んだ。

「あなたたち、太くて固い絆で結ばれてるのね」

「あつたりまえだろ？どつかの推理だけが取り得の義理も人情もないヤツと一緒にするな！」

元太の言葉に新一はギクリとして体を固まらせた。まさか自分のことではないだろうか。

「コナン君、何してるのかな・・・？連絡もないし」

不安がる歩美に、やっぱりな、とつぶやいた。

「まさか事件でも巻き込まれてるんじゃないのかな・・・」

「そういえばコナン君、博士のところに行っちゃったわよ。哀ちや

んのことについて伝えたいんじゃないかしら」

「ふーん。電話でもいいのにね」

蘭に対して、不思議そうに首をかしげる歩美を見て、

（歩美ちゃん、痛いところをつきやがる）

と、内心ヒヤヒヤしながらその話を黙って聞いていた。

「じゃあ、3人ともとりあえず連絡しなさい」

園子は部屋の外を指差した。公衆電話は階毎に2つある。

しかし、哀のいる815号室はちょうど奥の部屋で、電話のあるところまで遠かった。

「なあ、蘭ねーちゃん。ケータイ貸してくれよ」

元太はにつこり笑って彼女に向かって手を伸ばした。

「ごめんね。病院はケータイとか使っちゃいけないの。怪我した人や病氣の人を助ける機械がね、おかしくなっちゃうから禁止されるのよ」

蘭は子供たちに丁寧に説明すると、ちょうど壁に貼ってある携帯電話禁止のステッカーを指差した。

「そうなんだー・・・」

3人は顔を見合わせる。そんな彼らに新一は素朴な疑問をぶつけた。
「ところで何でおめーら公衆電話使いたがらねーんだ？」

「だ、だって怖いんだもーん」

歩美がモジモジと言った。元太と光彦も顔を見合わせる。

「ああ、なるほど」

新一はつぶやく。確かに消灯時間の過ぎた夜の病院ほど恐ろしいものはない。

（しゃーねえ、俺がついてってやるか）

そう思っただけ新一が口を開きかけたとき

「あの、私も・・・行きたい所が・・・」

蘭が園子の服の端をキュッと掴み、恥ずかしそうに言った。どうやらトイレらしい。

（そういえば蘭もお化けや幽霊の類が大の苦手だったっけ）

新一は思わず苦笑いする。

「わかったわ！トイレも電話も全部この園子様が引き受けた！」

園子はそう言ってポンツと力強く胸をたたいて見せると、

「ついてきなさい！」

とドアノブを引いた。どうやらさっきの失態を挽回したいらしい。
外は真っ暗。

「うぎゃっ!？」

一瞬足がすくむ園子。

（おいおい、そんなにだいじょうぶかよ・・・）

新一は乾いた笑いをしながらその状況を眺めていたのだった。

5人がいなくなると、再び病室内はまるで水を打ったようにしんと静まり返った。

一人になれば、今まで強がっていた表情が、みるみるうちに強張っていき、哀の寝顔を見つめる。

薬のおかげでスヤスヤと眠っている哀。点滴によって栄養剤が彼女の体の中に送られてはいるものの、彼女の薬の効き目はいつまで続くのだろうか。

目覚めたとき、自分はどの姿でいるのだろうか。

工藤新一なのか、それとも江戸川コナンなのか・・・。

「灰原・・・」

新一が彼女のやわらかい緋色の髪を撫でてやる。熱から出た汗のせいでじっとりと湿った彼女の髪。解熱剤のおかげで40度は切ったものの、以前39度から下がる様子はなかった。酸素マスクを付けたまま昏々と眠り続け、気がついても数日は激しい発作や嘔吐が起これるといわれている。これがいつもだったら、新一は高熱でうなされてる哀の横で自分の色恋沙汰なんて考えることもないだろう。

いつもの・・・通常のコナンの姿だったら。

しかし、今の状況は明らかに違った。

新一は迷っていた。

おそらくこの体でいられるのも大体32時間までが限度だろう。それはこの前の文化祭が証明してくれた。

それまでに蘭に自分の想いを伝えるかどうか・・・。

哀のことも気になるが、やはり蘭も大事だった。

一度あきらめたことが、哀の手によってチャンスが生まれた。

今年、新一の姿で蘭と花火を見れるなんて思わなかった。

それを哀自身が実現してくれた。

何故彼女が解毒剤の試作品を今くれたのかはわからない。

しかし彼女が自分の意識が薄れ行く中で解毒剤の試作品をコナンに渡してくれた。そしてコナンは彼女のおかげで「新一」として蘭に再会できた。

（それだけでいいのか？今が蘭に自分の想いを伝えるチャンスじゃねーのか？

そうすれば蘭を今よりずっと安心させることができるんじゃないのか？）

しかし未だ新一はその答えを見出せずにいた。

哀の苦しそうな表情を見たら、この迷いは取れそうもなかった。

彼の生まれながらの優しさがそうさせていた。

「・・・おまえが俺のために苦しんでるのに、一人だけ幸せになることなんて、できねえよな・・・」

せめて意識が戻ってくれれば。

もしかしたら迷いも取れるかもしれないのに・・・。

「・・・だから早く目を覚ましてくれよ」

語りかけても、機械的な音が返事として返ってくるだけで。

彼は蘭たちが帰ってくるまでひたすら、哀の髪の毛を撫でていることしかできなかった。

それから数分もしないうちに蘭たちは帰ってきた。

結局子供達はそれぞれの親に電話を入れ、病院の泊まりを許可されると、安心したように哀のベッドの周りで仲良くスヤスヤと寝息をたてはじめた。

しかし、未だ新一の頭はすっきりすることなく時だけが刻々と過ぎていったのである。

第10話 変質者探偵 工藤新一? (後書き)

こんばんは、こつぷです。

このたびはここまでお読みいただき、どうもありがとうございます。
もうこの第10話は笑いを求める要素としんみりする様子がぶつか
つてて。

どうすればいいのゝゝってな感じで修正しています。

でも、すごく楽しいんだけど、難しい。

ああ、元祖のH A N A B Iを書いたあたしを恨みます。はうー。

それでは、ここまでお読みいただき、ありがとうございます。

第11話 園子、暴走す？

時刻は10時を少しまわるころだった。

米花総合病院815号室。

病室には新一に蘭、園子、ベッドで眠ったままの哀、そして彼女の足元で静かに眠り始めた子供達がいる。スースーと静かな寝息を聞いて蘭は緩やかに微笑むと、椅子から立ち上がり、彼らに病院にあった備え付けのタオルケットをかけてやる。

その横で、園子は小声で新一の名前を呼び、わき腹を肘でつついた。

「ねえ、新一君」

「・・・あん？」

「ちよつとこつち来なさい！」

「え、ちよ・・・何すっ・・・」

むんず、と腕をつかまれ、新一は思わず大きい声を上げそうになって、はつと声のトーンを下げた。もう子供が寝ているのだ、あまり大きな声は出せない。

「え？ちよつと園子どこ行くの？」

蘭が驚いた様子で園子に尋ねる。

「大丈夫、大丈夫。あんたのダンナを誘惑する気なんて全然ないからvv」

園子は振り返り満面の笑みを浮かべると、彼を部屋の隅まで強引に連れ出した。

「よし、ここならいいわね」

蘭から声が聞こえないことを確かめると、園子はようやくその場所で立ち止まる。

彼らがいまいるこの815号室は、相部屋を敢えて個室にしたため6人部屋と同じくらい広い。もちろん鈴木家特別仕様なので、こんなに贅沢ができるのだが。

「・・・ね、新一くん。あなた今日がチャンスだってこと、わかってるわね」

「チャンスって何だよ」

うんざりした顔で新一は園子に聞く。

言わなくなっただけすぐわかる。大体こいつがいうのは・・・

「何すつとぼけてんのよ、これほどよい日はないじゃない！アナタ蘭にどれほど心配かけたかわかってる？」

園子が新一に呆れた様子で軽く睨んだ。

「・・・ああ」

「じゃあ話は早いわ。今すぐ告白しなさい」

やっぱりな。単刀直入に言う園子に、思わず引きつった笑みを浮かべる。決まっただけいつもこのパターンなのだ。

「あのな。一生懸命になってくれるんだけどさ。園子、俺・・・」

「あら。いまさら『俺は蘭のことなんて』って言うつもり？嘘よ。

アナタたちのこと、中学のころから見てきて、沢山知ってるんだから」

ふふん、と得意げに笑って彼女は言葉を続けた。

「蘭はね、今日この日ほど会いたかった日はないはずよ。だってこ

こは、2人の思い出の場所なんですよ？2人だけで来た初めての場所」

「ああ」

「今日の花火大会には絶対来てくれないと思っていたアナタが、突如自分の目の前に現れる・・・。蘭の気持ちは高ぶってるはずよ！」

園子は瞳はキラキラ輝いている。そう、まるで一昔前の漫画の主人公のように。

「だけど蘭の目の前には病気に犯された美少女、哀ちゃんがいた。

『・・・自分のせいで彼女は苦しんでいる・・・』蘭は自分を責め

続けたわ」

気持ちが進められてきたのかだんだん園子の語りが、身振り手振りを交えて激しくなってきた。

「そこでアナタが優しく彼女の肩を抱き、耳元でこうささやくの。

『蘭、俺の胸でお泣き・・・』

『し、新一・・・優しいのね。・・・う、うう』

『違うよ、蘭。お前だからこうしたいんだ』

『ああ、新一・・・新一いいッ・・・vvv』

園子は自分の腕で自分の体をきつく抱きしめて言った。自分のシリオにかなり酔っているようだ。そんな彼女に新一はうんざりした。
「俺、灰原のことが心配だから・・・」

もう耐え切れない。新一がそそくさと蘭たちのほうへ行こうとする、と、

「ちょっと！これからがいいところなんだから！！」

と言って園子はあわてて彼の肩を掴み、自分の許へ再び戻した。

目が合えば、恐ろしいようににっこり微笑む園子。

「まだあるのかよ・・・」

新一はある意味生き地獄を味わっていた。

12分後。

ようやく園子の『新一＆蘭のラブラブロードへの道大作戦』の講義が終盤にさしかかろうとしていた。この12分間、新一が口にしたことといえば、ほんの一言。相槌や突っ込みだけ。それ以外、休みなく彼女の口は、彼女の立てた、略して『ラブロー』のために動いていた。さすがに彼女の方も疲れの色が見えている。・・・と踏んでいたのだが。

「わかった？ 新一君。とにかく今日はアナタと蘭が恋人になる一大イベント盛りだくさんだったんだから！ それに今日は友引。タイムリミットまであと1時間とちょっとしかないわ！ 今がアナタにとっ

ての大チャンスなのよっ！今日じゃなくちゃあいけないのよおおっ！！！」

園子の目は轟々と燃えている。思ったよりまだまだパワーは充填されているようだ。へとへとになっているのは、新一ただ一人。聞きたくもない話を聞かされる身にもなっただけ。

「いいい？蘭をキュツと抱きしめて・・・こう・・・ほらアナタが推理を披露した後、かわいそうな未亡人やっているアレよv v」

「やってねーよ・・・」

新一はもう何も言う気力もなかったが、とりあえずツツコミを入れる。彼の何事にも敏感に察知するという探偵の血がそうさせていた。

「あら、そう？まあそういうことにしといてあげましょ・・・じゃ、これで終わり。もう恋愛の達人、園子さまの口からは何も言うことがないわ」

ようやく終わったようだ。ほっと力を抜いたのもつかの間、園子は意味深な笑みを口元に含めると、蘭達がいる方へ颯爽と歩き出した。計画をすぐさま実行する気にいるらしい。

「ちょ・・・ちよつと待てよ、園子！」

新一はあわてて園子呼び止める。彼女があまりの暴走に、さっきまで彼が考えていたことを彼女に話すタイミングを失っていた。そして、そうこうしているうちに、彼女のペースにぐいぐい引き摺られ、疲れ果て、気がつけば自分の思いを何も言わなかったことに気がついた。

「何よ？」

面倒くさそうに園子は振り返る。が、今まで自分に向けていた表情と今、自分を見つめる彼の表情がガラリと違う、別のものになったのに気がついたのか、園子もすっと顔を引き締めた。

「・・・何、あなた、まさか」

「・・・ああ・・・今日は蘭に告白しない」

「はあ！？何言ってるの！？」

園子はものすごい形相をして新一の両腕を掴んだ。まるで飛び掛かりそうな勢いで。

「ちよつ、何、どうしたの!？」

蘭が向こうで何事かという顔をして椅子を立ったが、新一があわて、なんでもねーよ、と声を立てると、合点がいかない表情をして、それでも大人しく座りなおした。

「・・・どうということ? あなた、さっきあたしがあんなに言ったこと、聞いてなかったの?」

彼の両腕を掴んでいた自分の手を離すと、園子は声を潜め、それでも怒りを抑えきれない様子で彼をねめつけた。

「聞いてたよ」

うんざりするほど。

「でも、・・・やっぱりできねえ。・・・蘭が灰原のことを考えて苦しんでるのはわかる。笑顔で笑っていてほしい。・・・もちろん、俺は蘭が好きだ」

「それじゃ」

新一の口から初めて『好き』という言葉聞くことができ、園子の表情がぱつと明るくなった。けれど、すぐに、じゃあどうして、という表情を浮かべる。

「灰原が・・・。こんな小さい子が苦しんで倒れてる。うんうん、唸って。そんな苦しんでる中、蘭と色恋沙汰なんて話す気にはなれねえ。・・・それぐらいお前にだってわかるだろ?」

それに、きつと蘭だって。

新一はそう言葉を続けようとしたとき、園子があ、と小さく溜息をついた。

「わかってるわよ。蘭だって今の状況で喜ばないくらい。あなた達似たもの夫婦だものね。こんな病気の女の子放っておいてどこか遊びに行く人じゃないくらい。デートなんて、告白なんてできやなことくらい。だけど・・・」

一瞬彼女の瞳が揺れた。

「あなたがまた消えてしまふんじゃないかと思うから」
「え？」

どきん、と左胸が疼いた。

「多分あのコ、哀ちゃんのこと心配してる一方で、自分が捕まえないとアナタがすぐどこかに行っちゃうような不安を、やっぱり感じてるわ。せめて『好き』という気持ちを確かめられればそんな気持ちもなくなると思うから」

そういえば、彼女も京極真と遠距離恋愛をしている。きっと自分と蘭を重ねあわせているのだるお。彼も海外へ留学していて、いつ帰ってくるかわからない状況だ。彼女も沢山の不安を抱えているのだろっ。

（園子・・・）

新一はさっきまで抱いていた園子への偏見が薄らいでいくのを感じた。どうせ、興味本位で自分達をくっつけようとしてもしているのではないか、とずっと思っていた。

「だからお願い。あのコの不安を少しでも楽にしてあげてよ。・・・お願いだから」

園子の肩が小刻みに震えていた。泣いているのだ。気丈な園子が「新一」に見せる初めての涙。

「・・・ああ、わかった」

新一は静かにうなずいた。その言葉にホッとして園子が微笑むのがわかった。

「・・・じゃあ、お願いね」

園子はそつと言うと、涙をハンカチで拭った。それから、蘭に、泣いたということがわからないように手鏡で顔をチェックすると、いつもの『園子の顔』を作って蘭の方へゆっくり

歩き出した。

新一はその後姿を見つめて、それから、フツと思わず顔をほころばせた。

蘭が長く友達を続けているのが、ようやく今わかった気がした。

新一が蘭たちのもとに戻ってくると、すぐに園子はうずうずと体を動かし始める。

どうやら早く2人にしたいらしい。そしてとうとう我慢できなくなつたのか、園子は

「アタシ、コンビニで夜食買ってくる！」

新一にウインクをする。どうやら園子の『ラブロー』は開始のようだ。

（さっきの涙はなんだったんだよ・・・）

そう、園子は確実に楽しんでた。

再び2人きりの病室。新一と蘭の2人だけ。

いや、寝ている子供達（哀も含めたら）4人もいるから正確には2人きりではないのだが――。

シーンとした病室内。子供達のスヤスヤとした寝息と、哀に酸素を送っているマスクの機械的な音だけが不気味に響いていた。

「ねえ、新一。哀ちゃん、早く気がつくといいね」

「そうだな」

「でも、コナン君も心配だろうね、早く戻ってこないかな」

「そうだな・・・」

「・・・」

なんとなく気まずい雰囲気流れる。

言わなきゃいけない。自分が明日か明後日には再び蘭の前からいなくなることを。

それだけは絶対、今、自分の口から。

「・・・な、なあ。蘭」

「え？」

うつむきかけていた蘭の顔が突如上がり、不思議そうに自分を見つめていた。

新一はゴクリと息を飲む。

「俺さ、明後日・・・」

新一が次の言葉を言おうと口を開きかけたとき・・・

どつくん・・・どつくん・・・

体に刻み込まれたあの激しい痛みが新一に襲ってきた。
心臓がつぶれそうなくらい苦しい痛み。

「うつ・・・」

（早い・・・まだ3時間しかたつてないのに、もうかよ）

口では言い表せないような鋭い痛みに思わず胸を押さえる。例えて言うなら、心臓が誰かにもぎ取られでもするかのような痛みといったところか。骨が溶けそうに熱い。

「し、新一！？どうしたの！？ねえ、新一！」

蘭は慌ててナースコールを押そうと、ベッドに寝ている哀の頭上に手を伸ばした。

「いいから！」

新一は苦痛に顔を歪めながらも大声でそれを制す。

どつくん、どつくん、どつくん、どつくん、どつくん、

「だってー!!」

泣きそうな顔の蘭。

（抑えてくれ、俺の体・・・もう少し・・・）

「何でもねー・・・んだ、これは」

ゼエゼエと喘ぎながら、なおも彼は言葉を発す。

「だって文化祭のときもそうだったじゃない！新一どうしちゃったの？悪い病気にかかったの？ねえ、新一！？お医者様に診てもらおうよ！ここの病院のお医者様が嫌いだったら新出先生でもいいから！」

蘭は新一の袖をつかんで、叫んだ。

それでも彼は首を縦に振ろうとはしなかった。

いや、そんな余計な気力は使いたくなかった。

今は早くこの場を去らなくては。

医者なんかに呼ばれたらたまったもんじゃない。

蘭や他の多くの人の目の前でコナン（子供）の姿に戻ってしまったら・・・。

「・・・ねえ、お願い」

彼女の声は掠れていた。振り絞るような彼女の細い声。

どくん、どくん、どくん、どくん、どくん、どくん・・・

心臓の鼓動はどんどんどんどん速くなっていた。

胸の苦しさも、心臓のとろけるくらい、焼けるくらいの熱さもずんずんずんずんひどくなっている。

「う・・・ああ」

（やべえ。このままじゃ俺、今度こそ蘭の前で元に戻っちまう・・・）

新一はドア目指してよろよろと歩き出した。

「新一！？」

そしてドアノブに手がかかったとき、それはついに最頂点に達した。（だめだ・・・ここで戻っちゃったら・・・抑えてくれ、俺の・・・）体からシュウシュウと蒸気が立ち上る。・・・元に戻る兆候だ。目

が霞んでくる。

もう猶予はない。

（くそっ・・・）

新一はもうほとんど残っていない余力を振り絞ってドアノブを回した。

しかし、そこまでが限度だった。

新一は体が斜めになっていくのを感じていた。

目の前がもう廊下なのに。もう少しなのに……。ここまで来たのに。

（蘭に次会ったとき、どういう言い訳すっかな・・・）

最後の最後で考える思いがあまりに普通で思わず笑えた。こんな状況なのに。

意識が薄れ行く中、蘭がナースコールを押して助けを呼んでいるのを聞いていた。彼女の悲鳴に近いような叫び声。その声がだんだんと遠のいていった・・・

第12話 目覚めの朝

「先生！新一は死ぬんですか！？」

（・・・蘭？）

ぼんやり意識の向こうで、誰かが必死に叫んでいる。その声の主は、自分が小さなころから想っていた人物に似ていた。・・・いや、これはおそらくその彼女の声であろう。時間がたつごとに、彼の考えは、「推測」から「確信」に変わっていく。

「新一は、どうして何度も何度もあんな発作ばかり……。新一どこか悪い病気にかかっているんですか！？」

彼女は必死に誰かに向かって叫んでいる。それは新一の心に強く響く声だった。

彼は瞼が重くて目を開けることができなかったが、彼女の言葉で、今では自分がまだ「自分」でいることがわかっていた。

自分がまだ「工藤新一」でいられたということに。

「ねえ、先生！どこか悪いなら私の体の部分あげますから！だから新一を・・・お願い、助けてください！」

泣きじゃくる彼女の声が彼の脳へ直に伝わっていく。

（バー口。お前を置いて、これぐらいで死んでたまるかよ）

必死に目を開け、その言葉を彼女に向けてかけてやろうとする。

・・・が、体がそうさせてくれなかった。無情にも次の瞬間には彼の意識がぶつつりと途絶えていたのである。

12 目覚めの朝

次に目覚めたときはもう外は薄明るかった。

病院のベッドの上で目が覚めたその人物はしばらくぼんやり天井を見つめていたが、突然体を起こすと、まず自分の体を上から下までじっくり確かめた。

その体型はだれがどう見たって高校生の姿だ。

小学1年生のちよつと賢くて運が強い男の子、『江戸川コナン』ではない、マスコミ各社を何ヶ月前まで騒がせていた、『東の高校生探偵 工藤新一』その人だった。

「・・・またか」

「新一」は思わずつぶやいた。

胸に手をあてて、すう、と息を吸う。

さっきまでのあの苦しい胸の痛みは嘘のように消えていた。体のけだるさはまだ少し残っていたが。

彼はキョロキョロと辺りを見渡し、自分がどこにいるのか確かめようとしてふと窓のほうを見ると、隣のベッドで背もたれに体を預け、難しそうな本を読んでいる哀がいる。

「は、灰原!？」

あまりに驚いて、思わずベッドから落っこちそうになった。

「気がついたのか!？」

哀は本を手にしたまま、横目でチラリと彼を見て、

「（あんなに眠らされて、気がつかないほうが不自然よ）」

と、声にならない声でそう言った。

「いつ!？」

「（そうね、15分前くらい・・・かし・・・）」

最後までいい終わらないうちに、哀はゴホゴホと咳をして、外して

いた酸素マスクを再び口に装着する。

「だ、大丈夫かよ」

「（平気よ、これくらい。それより、あなた・・・）」

彼女は逆に気を遣われて迷惑だ、というような顔をあからさまにしで、それからまじまじと新一を見つめた。

「なんだよ・・・」

「（・・・使ったのね、解毒剤の試作品）」

「・・・ああ。花火大会のときにな。・・・この前ン時みたいになンに戻りそうになって・・・で、このザマだ」

「（・・・そう）」

一瞬、ふう、と小さく溜息をつき、哀は目を逸らす。

「・・・どうした？」

彼の問いに、いえ、と軽く言ってから、彼女は言葉を止めた。何かを思案しているような表情で。

「・・・灰原？」

少しの間あと、哀はポツリ、と遠くを見つめたままつぶやいた。

「（・・・やっぱり不安定なのね、その薬）」

「・・・はあ？」

思わず怪訝に思っで彼は顔を顰める。

「（・・・不安定？）」

「（その薬、文化祭のものとは少し成分が違うの。それを投与したら、体の中で自分で風邪の成分と同じモノを誘発させ、化学変化を行う。その後はいつもと一緒よ。だからあなたは風邪を引いてなくても・・・）」

「ちょ、ちょー待て、おめー、その体・・・もしかして」

一瞬、彼女は言葉を切った。が、ふっと笑って、違う、と答える。

「（安心して、これは私の不摂生が祟っただけ。薬でこうなったわけではないわ・・・）」

「・・・そうか」

それ以上、何も言葉が続かなかった。まるでその話を続けることを

拒否しているような感じを受けたから。

現在壁にかかっている時計は6：40を指している。

哀のベッドの足元で歩美、元太、光彦たちはまだスヤスヤ眠っていた。

しばしの沈黙の後、彼女はそつと子供達に目をやって言った。その瞳は、さっきまでの『科学者』のものとは違うものと化していた。とても温かい瞳、その瞳の色を見て、彼はほつと安堵する。

「（・・・みんな、帰らなかったのね）」

哀が発した言葉を聞きながら新一は自分のベッドから降りると、哀のベッドの脇まで来て、子供達の顔を覗き込んだ。

それから、元太の頬つぺたをぶにぶにと突付きながら、おかしそうに笑う。

「こいつら、お前が目覚めるまで家に帰らねーって言い張るんだ」

「（・・・そう）」

哀は穏やかな表情で子供達を順々に見ていく。

よだれをたらして寝ている元太。

紐くじで当てた熊の縫いぐるみを抱いて気持ちよさそうに寝ている歩美。

ただ一人不安そうな表情のまま、眠り続けている光彦。時々うん、と眉を顰め、ぎゅ、と布団を握るあたり、彼だけは悪い夢を見ているのかもしれない。

「（悪いことをしたわね・・・）」

哀はつぶやいた。

「バー口。こういうときは甘えていいんだよ。こいつらだって好きでやってるんだから」

その言葉に顔を上げ、新一を見つめる。

「もちろん、俺にだってな」

新一はニツと白い歯を見せて、彼らしい笑顔を哀に向けた。そのと

き、ふつと哀が安心したように、一瞬だけ表情を緩ませたのを、彼は見逃さなかった。

「ところで、蘭たちは？」

新一はぐるりと辺りを見渡した。

部屋には蘭も園子もない。

「（知らないわ。気がついたら隣にあなたが寝ていただけ。そしてここに本や雑誌が置いてあった・・・）」

哀は棚に積まれた数冊の本をチラリと視線をやった。

イギリスの学者が書いた分厚い医学概論だとか若い女の子が好むファッション雑誌だとか料理の本だとか何だとか。全てが新品である。

「博士か・・・？」

「（そのようね）」

哀はクスリと微笑した。どうやら彼は新一から連絡を受けて、ここに来る前に哀の好きそうなものばかりを選んで買って来てくれたようだ。

「にしても・・・ファッション雑誌やお菓子の本だなんて博士も少女趣味してるよな」

新一は積まれた本を順々に見ていきながら、苦笑を浮かべ、何気なく呟く。

「（あら？私だって読むわよ、これくらい）」

哀は心外だ、という顔をする。

「え？そうなの？」

「（まあ、そう思われても仕方ないわね。私は、あなたが想う彼女とはまるでタイプが違うものね）」

そう言つて、哀はパタリと本を閉じると、新一から背を向けて横になった。

不愉快だ。

彼女の背中がそう語っていた。

「お、おい・・・」

「（あなたがせっかく気がついたのに悪いけれど、私すごく気分が悪いの。お休みさせてもらっわ。」

哀はそれ以来、ぷつつりと言葉をやめた。

「な、なーにそれくらいで怒ってるんだよ、あの・・・」

新一はあわててフオローしようと声を大きくして哀の顔を覗き込んだ時、遠くからパタパタというスリッパの音がだんだん近づいてくる。

そしてドアがバツと開いた。

「新一！？」

大きなスポーツバッグを手に持って、蘭が勢いよく中に入ってきた。目に涙を浮かべて。

「バカアアアッ！！」

蘭は泣きながら新一に抱きついた。

「！？」

驚いた。

「江戸川コナン」としてはよく抱っこされたり手を握られたり、ギョツと抱きしめられたりするけれど、「工藤新一」としては一度もそんなことがなかったからだ。

みるみる頭の中から、耳から、全てが真っ赤になって、まるで棒のように体全身が硬直していった。

「バカバカバカ！どれぐらい心配させれば気が済むのよ！」

泣きじゃくりながら、すごい力で新一の胸板を叩く。

痛かった。

そう、確かに痛かったはずだけど、彼女の泣き顔を見ていたらその痛さは全然感じられなくて。

逆に、痛みなんて神経がないはずの心の中の方が、「懺悔」というモノで締め付けられているようで、すごく痛い気がした。

「・・・ごめん」

「そんなつらいなら、そんな仕事なんてやめて、ずっとここにいなさいよね！」

蘭の瞳からはダムがせきを切ったように止め処なく流れ続けていた。

「・・・ごめん」

「何よ、ごめんって！ごめんじゃ・・・ごめんじゃ何もわかんないわよ！」

蘭は叩く手を止め、新一の胸板に頭を付けた。そして肩を震わせ、すすり泣きをはじめた。泣くのを必死にこらえようと
しているようだ。

その健気さに、新一は思わず蘭のしなやかな体をぎゅっと抱きしめた。その力はだんだん強くなっていく。

愛おしくて、愛おしくてたまらなかった。

だから、このまま抱きしめていたら壊れてしまふんじゃないかと思つて。きゆうにその力を弱めた。

そして、今度は優しい力で。繊細なものを触っているかのようにやわらかい髪を撫で上げた。

小さな体ではできなかった、彼女の細い体を全身で包み込むように、ふわりと包み込む。

腕の中の彼女は、まだその変化に気づいていない。

不安でたまらなかったのだろう、ひっく、ひっくと嗚咽を漏らすだけで。

（ごめんな、蘭）

もう一度、心の中で呟き、彼は何気なく哀の方に視線をやった。

（・・・え？）

哀の、その背中が。自分たちに背を向けていた、その背中が。

まるで泣いているかのように、小刻みに震えているように思えた。今、自分の腕の中にいる彼女と同じように、小刻みに震えていて。

「・・・灰ば・・・」

彼が彼女の名前を思わず口に仕掛けたそのとき。

またバタバタと思い足取りでこちらに向かつて駆けてくる足跡。そしてその足跡は哀たちのいる815室で止まった。ドアが再び勢いよく開く。

「蘭くん、どうしたというんじゃね・・・」

ハアハアと息切れをして、2つの女性モノブランド品らしきポストンバッグを手に、よたよたとやってくる博士。

が、目の前の光景を見た瞬間、

「あ・・・こりゃ失礼」

と顔を赤くしてつぶやき、ドアをパタリと閉めた・・・。

時刻は8:20をまわっていた。

哀はあれからまた眠ってしまったようで、博士が彼女の脇で心配そうな表情で見守っていた。

深夜をとくに過ぎたころ、博士は学会の集まりがあつた県外のホテルから、車を走らせて米花総合病院に到着。

その時に哀が長く入院しても飽きないように、彼女が好みそうなたくさんの本や雑誌を買い込んだ。

そして入院の準備が必要だということで、博士が一旦自宅に戻ろうとした時に蘭たちを彼女たちの自宅まで送ったのだ。

博士は哀の入院用具一式、蘭は新一の入院用具一式と、お弁当をこしらえた。

園子もまた、見舞う側への差し入れとして、鈴木家専属シェフに特製おべんとうを作ってもらった。

全ての準備が整ったころ、また博士の車で7:00過ぎに病院に戻

ってきたのである。

そんなわけで今ようやく起きたばかりの子供達は、三ツ星シェフがこしらえた優雅な朝ごはんをおいしそうに食べていた。

「え、俺も入院!？」

新一は驚いて、持っていた焼き鮭を落としそうになる。

もちろん食べているのは蘭特製お弁当だ。が、元太がキャッチして事なきを得た。

「あつぶねーな、兄ちゃん」

元太は眉をしかめて、それを口に放り込む。しかし、新一はそんな話もまるで聞いていない。聞けるはずもなかった。

「どうということだよ、蘭!？」

新一は声を荒げる。

彼は内心焦っていた。

「だって!」

蘭は心配そうな顔で彼を見つめた。

「……だって……最近の新一、何か、変だもの。……服部君と2人で事件を解決したあの日も、文化祭の時も、そして昨日の夜も……。すごい発作にあなたは苦しんだ。……どこかで悪い病気、もらってきちゃったんじゃないの? トロピカルランドで行方がわからなくなったあの日に」

潤んだ蘭の大きな瞳。その瞳まで零れてきそうで。

「……蘭」

「……だから、お医者様に頼んだの。そしたら、検査に1週間ぐらいかかるからって言われて」

「い、一週間も!？」

新一は思わず目を見開いた。

（そんなに待っていていられねーよ。俺がこの姿でいられるのは、明日の夜明け前ぐらいまでだっつーのに）

せっかく元に戻ったのに、検査づけなんてまっぴらだ。

検査して大変な結果になって新聞とかに取りざたされても不味いし。

それに、自分には蘭がいるから。

告白をするつもりは毛頭ない。

けど、この体で蘭と沢山の思い出を作ってたのも事実。

また、「サヨナラ」を言わなくてはならないわけだし、少しでも高校生らしく2人で遊んでいたかったのも事実。

それは、彼女のあの涙を見て、つよく思った。

けれど。

彼はとなりのベッドで再び眠りについた少女に目をやった。

再び、スヤスヤと眠っている哀。時々、ゴホゴホと強い発作が出て、今でも見るだけでつらくて。起きたら起きたで少々情緒が不安定で。

やっぱり彼女を置いていけない。

(・・・やっぱりギリギリまで灰原のそばにいろってこと、なのかな。これは)

・・・いや、きっとそうじゃない。

花火大会に2人で行けたことで、「約束」を果たしたことで、全て魔法は解けていたのかもしれない。

12時の鐘はもう、鳴っていたのかもしれない。

シンデレラは魔法が解けていたのを気づかなかったのかもしれない。だったらそれでいいじゃないか。

それ以上のことはまた次の機会に。

魔法使いは一生懸命だったから。「シンデレラ」のために体を壊してまで頑張ってくれたから。

もうそれで満足なのだ。

あとは、自分の力で運命を切り開いていけばそれでいいのだ。

そう、それでいいのだ。

新一は、今は静かに眠る哀の寝顔をじっと見つめていた。
そして心の中で「ありがとう」と呟いた。

第13話 ささやかな時間（前編）

米花総合病院815号室。

昨日の夜の静けさとは打って変わって、騒々しいくらいの病室内。
その原因は・・・

「灰原さん、体の調子はどうですか？？苦しくないですか？」

「哀ちゃん、何かほしいものある？何でも歩美に言って？」

「オレはうな重をお勧めするぞ？食えなくなったらいつでオレに・・・」

「元太君のことなんか聞いてない！」

子供達が彼女の周りを囲んで、騒がしいくらいに喋っていた。そんな彼女を彼女は穏やかな表情でじっと眺めていた。

ただ純粹に彼らがそばにいてくれて、嬉しかった。

今からほんの10分前、彼らの目の前で、哀は二度目の病院での目覚めを果たした。

最初の時は、誰も彼女が意識を取り戻したことに気がつかなかった。いや、哀ですら自分の状況に気づいていなかった。なぜ自分がここにいるのかわからなかった。

だから目の前の子供達、そして隣のベッドで昏々と眠る新一に、ただただ驚くばかりだった。しかしだんだん花火大会での記憶が彼女の中で蘇ったことによつて、哀は自分が倒れ、またコナンが自分の作った解毒剤の試作品を使ったことを理解したのだ。

園子と博士はほとんど寝ていなかったの、病院の医者が使う宿直室で仮眠をとつていて、この部屋にはいなかった。チラリと隣のベッドを見れば、新一が蘭の差し入れてくれた英字新聞をボーッと眺めていて、彼のすぐ横には蘭が彼のためにせつせとリングを剥いて

いた。ウサギの形をしたリンゴが可愛らしい。

何だか、まるで付き合い始めた恋人同士のように、初々しく見える。

「哀ちゃん？」

歩美が心配そうに哀の顔を覗き込んだ。はっとして我に返ると、彼女は無理に笑顔を作って、「何？」と聞いた。

「・・・どうしたの？何だかばーっとしてた。・・・大丈夫？やっぱり具合悪い？」

「（そんなことないわ。・・・平気よ）」

「でも・・・」

それでも心配そうな顔で自分を見つめる歩美に対して、もう一度「大丈夫よ」とつぶやき、それから目をさっと逸らした。

ばかりしい。何、気にしてるのかしら。戻ったらこうなることってわかってたのに・・・。

「コナン君のこと？」

歩美が元太や光彦に聞かれないように、そっと耳元で囁いた。

「（え？）」

思わず、鳩が豆鉄砲を食らったような顔をして、哀はこの小さな少女をまじまじと見つめる。

「（どうして）」

彼女の問いに歩美は、だつて、と呟いて、それから一瞬言いよどんだように黙り込み、その後で言葉を続けた。

「コナン君が何にも連絡くれないで消えちゃったから心配だったんだ。博士しかお見舞いに来なかったよね。いつもだったらコナン君だれよりも早く来てくれるよね??」

不安がる歩美ずっと彼女は、コナンが昨日の夜からいないことに気にかけていた。

そんな彼女に、思わず笑みがこぼれる。

「（そうね、そんなところかしらね）」

理由は違かれど、彼のことを考えているのは事実。もっとも彼女はずっと、「江戸川コナン」というレンズを通して「工藤新一」を見ていたわけだが。

「（でも、彼はたぶん明日にでもひょっこり帰ってくるんじゃないかしら）」

哀はそう横目で彼を見ながら言った。

「ほんとに!？」

ぱつと明るくなる歩美の顔。

「（ええ。あなた達を置いて理由もなくどこかに消えちゃうような人じゃないってことは、あなたも知ってるでしょ?）」

「うん!」

哀の言葉に歩美は嬉しそうにうなずいた。

「じゃ、あたし階下^{した}行って、お菓子買ってくる!」

その言葉に反応したように、元太が話に入ってきた。

「オレも!売店のフルーツ牛乳、すッゲーうめえんだ!光彦、お前は・・・っ」

「僕は・・・」

一瞬、ちらり、と自分を心配そうに見つめる視線を感じ、哀は優しく微笑んだ。

「（いいわよ、いってらっしゃい。大丈夫、あなたも疲れたでしょ。気分転換したほうがいいのよ?）」

「はぁ・・・」

「光彦くん・・・行こう?お姉さんが奢^{ちか}ってあげるv今月のお小遣い、まだいっぱい残ってるんだ」

哀の気遣いを見て、蘭はリンゴを剥く手を止めると、にっこり笑って光彦に語りかけた。

「え・・・」

「あ、俺、フルーツ牛乳とサンドイッチ!」

「えー、さっき元太くん、朝ご飯食べたばかりじゃない、まだそんなに食べるのぉ!?そんなに食べたらお相撲さんになっちゃうから

！」

「うつさいなー、いいんだよ、成長期なんだからっ！」

「成長期で縦に伸びても、横に同じように伸びたら意味ないんだからねっ」

「くそっ！わかったよ！フルーツ牛乳だけにしてやるよっ」

半ばいじけ気味の元太に、ふふつと蘭や新一が笑っていた。哀も思わず笑みを零す。相変わらずなんだから、と。子供たちはいつでもこんなに沈んだ自分の気持ち癒してくれる、特效薬なのだ。

「・・・ほら、光彦くんもっ、行こう？」

歩美が優しく笑って彼の手を引いた。

「・・・は、はあ」

「ほらほらっ！行くぞっ！」

もう片方で光彦の手を無理やり引つ張って、二人はまるで引き摺るようにして部屋を出て行く。彼らもまた、気を遣っているのだろう。

「こら、手、そんな引つ張らないのー！取れちゃうよー？」

3人を追いかけるように、パタパタと蘭が追いかけて、部屋を出て行った。

「はあ・・・まったく忙しいやつらだな」

新一は再び静かになった病室内で、まだ廊下で騒いでいる子供達の声聞きながら、クツクツとおかしそうに笑った。

「・・・」

哀はそんな新一の顔を黙って見つめていた。

「どうした？」

新一は彼女の視線に気づき、不思議そうに尋ねる。

哀がいつもの冷たい微笑を浮かべて何か言おうと口を開きかけた時、何を思い立ったのか、彼は自分のベッドから降りると、彼女のすぐ脇まで来て、なにやら徐に彼女のほうへ手を伸ばした。

「（な、なに？）」

思わず体を硬直させる哀。そして目をキュツと閉じた。
ぴとっ・・・

哀はおでこに感じた、その大きなぬくもりに気づくと、ハツとして目を開けた。熱で赤い顔がますます赤くなっていく。

「（え、ちよっと・・・）」

そう、そこには彼の手があった。心配そうな表情で、自分のおでこの体温と比べている。

「なんだ、まだ全然あちーじゃねーか」

新一はため息をついて、軽く哀を睨んだ。

「まだ寝てるよ。あいつらだっておめーが早く元気になればそれに越したことはねーんだからよ。無理すんなって」

” どん、どん、どん・・・ ”

動揺していた。

昨日も蘭に同じことをされた。しかしそれ以上に彼女は動揺していた。

『コナン』の時とは違う、彼の少しごつごつした大きい手に。

それでもなんとか彼女はいつものクールな表情を作り、彼の手をそっと払うと、

「（もう十分でしょ。だいたいそんなところ計って良し悪しの結果が出るなんて、一体誰が証明したのかしら？）」

と言った。

「え？」

きょんとした顔で新一は自分を見つめる。その視線を感じながらも、わざと

「むやみに何人もの女の子の額ばかりさわっていると、終いにはセクハラと勘違いされて、彼女に振られるわよ」

哀はそう冷たく言い放った。

けれど、やっぱりこの胸の高鳴りは押えることができなくて、彼の目を真正面から見られずにいた。

そんな彼女の気持ちを知ってか知らずか、新一はしばらく哀の顔を見ていたが、ぷつと吹き出す。

「・・・ったく。おめーホントそういうところは全然かわいくねーなま、いいけどさ」

それから、蘭に剥いてもらったリンゴの一片を齧った。

「お、甘vvv」

あまりにも幸せそうに、あまりにも自然に微笑むから、哀は暫し彼の表情に見入っていた。

それから、意を決して、躊躇いながらも口を開く。

「（・・・ねえ、一つ聞いていい？）」

彼女がずっと聞きたかった質問をこれからしようとしていた。

「何だよ、改まって」

怪訝そうな顔をして、新一は再び自分のベッドに腰を下ろす。

「（・・・あなた、これからどうするつもり？）」

哀の瞳はまっすぐに彼を捉えていた。

「え？どうって・・・そりゃ・・・」

彼の顔はもちろん、戸惑いの色を隠せないようだった。

「（知ってるのよ。1週間も検査入院なんですよ。タイムリミットは明日の明朝だっていうのに、あなたは何も言っていないよね）」

「そんなこと言っても・・・」

「（わたしのせいだっていうの？不完全なこの解毒剤の試作品を作ったから？）」

咎めるような哀の瞳。彼女の口調も少々早口になっている。

「バ、バ一口。試作品って言うのは不完全だから試作品って言うんじゃないか。それぐらいオメーにだって・・・」

慌てて新一は哀に言った。

「（きれいごとは言わないで）」

哀は彼から目をそらすと、自嘲した笑みを浮かべる。

「（あなた、少しは期待していたんでしょ？私の持っている解毒剤の試作品が、少しでも改良されたものじゃないかって）」

哀はそう言って彼を見上げた。悲しそうな瞳をして。

気丈に見せているが、目だけはごまかせなかった。どんなにごまかそうとしても、目だけは。

それに自分でも気づき、さっと下を向く。

「・・・灰原」

「（・・・残念ながらそうじゃなかった。それどころか逆に粗悪なものを作ってしまった。健康な場合で服用しても効果が出る代わり、数時間で発作を誘発させる副作用を持った薬。32時間と位置づけではいるけれど、無理すればいつでもまた発作が起こるかわからない不安定な薬。・・・ごめんなさいね）」

「・・・そか」

一瞬言葉を失ったかのように見えた。そんな彼を見て、胸がしくしく痛くなる。

文化祭の時、この薬はこれきりにしようって思った。

あんな危険な薬をあなたにもう二度と飲ませるわけにはいかなかったから。

なのに、あるときより危険な薬を、彼は今、服用している。そして、苦しんでいる。

・・・私は、悪魔だ。

「どうもわかんねーんだけど・・・」

新一が躊躇いがちに口を開いた。彼が言いたいことはもちろん、哀にもわかっていた。

「何でその危ない薬をオレにくれたわけ？おめーにとってそれは納得いかない出来だったんだろ？」

哀は彼の問いに、少し俯きながら

「（さあ、どうしてかしら）」

と言った。意味深な笑みを浮かべ、挑戦的に彼を見上げる。

「おい・・・」

「（あなたが死んでもいいと思ったから・・・って言ったらどうする？）」

哀はクスリといつものクールな笑みを彼に向ける。けれども。

「・・・ん、そんなことおめーは言わねーだろ。第一、言ったとしてもそれは嘘っぱちだろ？」

新一は彼女に向かって、口元に白く光る歯を覗かせて軽くウインクする。

その言葉に彼女は一瞬動揺の色を覗かせたが、すぐに平静の表情を作る。そして

「（たいした自信ね）」

と呆れたように深々と溜息をついた。

「・・・まあな」

屈託のない笑顔を新一は浮かべる。

「子供達にわかって、俺にわかんねーからくりなんてねーだろ」

「（あら。あの子たちには私の素性がわかっていても言うのかしら？）」

哀は挑戦的な目つきをして彼に問いたです。

「ああ、とつくの昔にな」

新一はそういうと、ごろりと仰向けになって再び英字新聞を読み始める。哀はもうそれ以上何も言えなくなって、彼をただじっと眺めていた。

自分を信じきっているバカな男。自分は組織に身を置いていた女。裏切ってもおかしくないのに。

でも、彼にそう言ってもらって、こんなに嬉しいのはどうしてだろう。

こんなに救われた気持ちになるのは、どうしてだろう。

しばらく、彼の顔をただただじっと見つめていたが、その時になつて、哀はずつと聞きたかった質問の答えをまだ彼に聞いていないことを思い出した。

第13話 ささやかな時間（前編）（後書き）

こんばんはっ！今回もカキカキ書き直させていただきましたっ。

どうしてだろう、元祖の新ちゃんは、優柔不断です。

今回の新ちゃんは結構かつこいいです。・・・ていうか、哀ちゃんのことを気にかけてくれる、というか。

やっぱり優柔不断新ちゃんよりも、一つの思いに一生懸命な彼が私は好きです。

ここまでお読みいただいて、ありがとうございます。

第14話 ささやかな時間（後編）

「（それより、さつき聞きかけたことだけど・・・）」

米花総合病院 815号室。

病室の外では、アブラゼミやヒグラシなどの蝉が朝の眠りから覚め、忙しく鳴き始めていた。

今、この病室の中には新一と哀、二人しかない。彼女が新一にこの質問を聞くチャンスは今しかなかった。

しかしこれからするつもり質問は、科学者としてのものではなく、一人の女性としてのものだった。

「（これからどうするつもりなの？あなたがこの薬を飲んだくらいだから、なにかその姿でやっておきたいことがあるんでしょ？）」

「それは・・・」

静寂な病室。

蝉の声、アイスやスイカを売りに来たトラックのスピーカーの音がやけに大きく感じられた。

わかっていた。彼が何をしたかったのか。

だけど、彼の口から聞かすにはいられなかったし、聞いておきたかった。けれども、

「それは、もういいんだ」

彼が突然つぶやいた発言に、哀は思わず耳を疑った。

『もいい』確かに彼はそうだったのだ。

「（じゃあ、・・・告白をしたのね）」

震える喉の揺れを、どうにか押し殺して彼に尋ねる。

昨日の花火大会で、貴方たちは『恋人』になったのね？

言いながら、先ほど目の前で見たあの2人の仲睦まじい様子を思い

返していた。『恋人のような』ではなく、まさに2人は『恋人』であつたのだ。そう思えば納得がいく。

けれども、哀の問いに、新一は首を横に振り、思わぬ発言をした。ちよつと首をかしげ、呆れるように自分を見つめ、たった一言。

「いや、していないよ。・・・第一、俺は蘭に告白するつもりはもととなかつたんだぜ？」

「（・・・え？）」

思わず言葉を失つた。そんな自分が今どんな気持ちでいるのか知つてか知らずか、彼はさらに言葉を続ける。

「・・・俺は、あいつと『約束』を守るためにこの姿になつた。そしておまえは、それを手伝うためにあの解毒剤を渡した。ただそれだけのはずだつたんだ。・・・そうだろ？」

そう、確かにそうだつた。

けど、今となつては。約束を果たした今となつては、それ以上のことをしようと思わないのだろうか。

あんなに自分を想い、その度に泣いたり安堵したりしている彼女を見て、何とも思わないのだろうか。

いや、きつと思つているはずだ。なのに、それを行動に移せないのはきつと、この体。

・・・ああ。私はことごとく彼の幸せの邪魔をする。

「（じゃあ、どうするの？あなたはただ、この2日間、何もしないで終わらせる気？）」

責める様な悲哀を含んだ瞳で、哀は新一を睨んでいた。

「（あなたの登場で、今のあの人は喜び反面、それと同じくらい大きな不安を抱えてるはずよ。帰ってきた彼は、病気持ちで検査待ち。いつまた消えるか判らない、自分勝手なとんでもない推理オタク）」

「おい・・・」

彼は思わずその言葉に苦笑いする。が、ふっとその口先が真っ直ぐ横に引き締まった。それから、「わかってるよ」とつぶやく。

「でも、あいつなら待っててくれるから」

ずきり、と心臓が痛んだ。

「（たいした自信ね）」

ふ、と思わず口許を引きつらせた。

「ん、自信なんてもんはもともとねーけどさ。でも、あいつならずつと待っててくれそうな気がするんだ」

「そんな不確かな……。なんで、今あるチャンスをみすみす逃すの!？」

「だって」

彼が口を開いた。思わず、ごくり、と哀は言いかけた言葉を唾と一緒に飲み込んだ。

「告白なんて今してもうまくできねえような気がするから」

「え？」

「おまえが苦しんでたから」

彼の言葉に、哀は思わず言葉を失った。

やっぱりだ。

でも、それをあからさまに彼から言われると、――いや、彼は少しも皮肉をいうつもりはないのだろうが――それでもつらく痛みが心にぎゅうぎゅう押し掛かる。

「オメーが倒れたときはマジでこっちが心臓止まるかと思ったんだぜ？」

その言葉に、哀は驚いて彼を見た。彼の自分を見つめる瞳は本当に優しい色をしていた。

「オメーが倒れる前に俺にあの薬渡しただろ？それが形見の品になるんじゃないか、ってずっと不安だった。あんな苦しそうにしてる

から・・・どうにかなっちまうんじゃないか、って思ってた・・・」

怒ったような表情で、新一がつぶやくのを聞きながら、哀はあの日、意識の遠のくとき、みんなが自分の名前を何度も何度も、必死に呼んでいたことを思い出していた。

そして自分の髪を、何度も撫でてくれた彼の手のぬくもりも。感じることが出来るはずもないのに。

「一緒にいたいんだよ、俺も、蘭も、おまえの傍に。・・・わかるだろ？」

だから、と彼が言った。

「もう、無茶するなよ」

彼の手が、優しく彼女の肩に置かれる。大きい彼の手。その手の中に全てのエネルギーを与えてくれるような気がして、鼻の奥がじんとなった。

しかしすぐに彼女はフツと自嘲の笑みを浮かべると、出てきそうになった涙と鼻水を体の中へ押し込めた。

「（バカね、そのくらいで死んだら苦労しないわよ）」

それに、と彼女は言葉を続ける。

「（例えば死にたくても神様が絶対死なせてくれないわ）」

その言葉は重く、沈んでいた。

「あれ？オメー、クリスチャンだったっけ？」

新一はきょとんとして彼女に訊ねる。

「（そうじゃないわ。けど、それもありうるってことよ）」

哀はそう言って視線を下に落とした。

組織に騙されていたとはいえ、あんな恐ろしい薬を作り、今も私の薬で大勢の人が亡くなっている。

そんな私を誰が簡単に死なせてくれるというのだろう。

既に神様は私に罰を与えているのだ。

自分が死ねばよかったのに、何にも知らないお姉ちゃんまで巻き込んで・・・

お姉ちゃんを死なせたのはだれのせいでもない、私なのだ。私がお姉ちゃんを殺したんだ・・・

永遠に苦しみ続ける罰を受けるために、私は生きている。

それは、大勢の人を、そして身内まで自分のために殺してしまった私に与えられた罰。

「おい、一体何を考えているんだ？そんな顔して。」

心配そうに哀に呼びかける新一。

「（え・・・）」

いつのまにか哀の瞳から涙がもつすぐそこまであふれていた。彼女はあわてて彼に見られないように、サツと涙を拭いた。

「まさか、またくだらねえことでも考えてたんじゃねえだろうな？」

新一は怪訝そうに哀の顔を覗き込む。ほらよ、と彼はポケットからハンカチを差し出した。

「いらないわ」

つき返し、彼から背中を向ける。

「（ま、あなたにしてみれば、くだらないことかもしれないわね）」

「あのなあ。そうやって悪い方向ばっか考えるのやめたほうがいいぞ。そんなんばっか考えてたらなー・・・」

新一はそこまで言っつて、コホンと咳払いをした。何をいうつもりなのだろうか、と哀は身構える。

「博士みたいに禿げるぞ」

「（・・・）」

長い沈黙。

「（・・・私、女よ）」

とうとうその沈黙を破り、彼女は呆れた様子で言った。

何を言い出すのだ、この男は。あからさまに嫌悪感を出しながら、哀は思わず溜息をつく。

「わかってるさ。だけどそれもありうるってことだ。そうだろう？」
先ほどの彼女の口調を真似して新一は言ってみせる。

そんな無邪気な彼に対して、哀はその変わった気遣いに閉口していたが、ぷっと思わず噴出した。

「あ、ようやくわらった」

ほっとしたように新一も微笑む。

彼は優しすぎる。

どうして、こんなに自分の心の変化が、手に取るようにわかるというのだろう。

彼が優しくするのは一人で十分だ。私は彼の体を小さくした科学者であり、殺人者であり、今は、組織を裏切り、逆に「灰原哀」として、同じように子供を演じている女。組織を追う仲間。秘密を共有する仲間。・・・それでいいじゃないか。なぜ、それ以上に優しい言葉をかけるのだろう。自分が本当に愛する女性への気持ちを抑えてまで、傷つく私を気遣ってくれるのだろう。

だから、私はその優しさに甘えたいくなるのだ。
ここにいて、と言いたくなるのだ。

けれど。

哀は彼に気づかれないように小さく深く息を吸い込むと、新一の前に向き直った。

「・・・どうした？」

「（一度しか言わないわよ。早く彼女連れてどこかへ消えなさい。行って自分の想いを伝えなさい）」

「え？」

その言葉に驚いた様子で新一はまじまじと哀を見つめた。まさか彼女がそんな言葉を言うとは思ってもみなかったのだろう。

「だから、俺はあいつに告白なんか・・・」

「（彼女は待つてるわよ。あなたの言うように、私を気遣ってそんなことを思わないように、自ら蓋を閉めて無理やり押し込んでる）」

哀は、昨日の夜のことを思い出していた。着付けをしてくれながら、震える手で帯を締めながら。

気づいてた？あの帯、少しゆるかったのよ。

でも、あの人、泣いてたから、大目に許してあげたけれど。

『新一の代用は利かないんだ』

『いつでもやっぱり心のどこかで新一に頼ってるんだ』

『一方的に電話してきて、一方的に現れて、いつ会えるかどうかもわからないアイツにさ・・・』

一つ一つの言葉を吐き出す彼女の瞳は彼に会えぬ悲しみと切なさを映していた。

あの涙をつくらせたのは私。

『私のせいで彼はあなたのもとから消えたの』

そう言ったら、彼女どんな顔するかしら。

あの人なら・・・笑って許してくれそうな気がする。

『哀ちゃんのせいじゃないわよ』

とかなんとか言っちゃって。

誰かが聞いたら、いい風に考えすぎて思われるかもしれないけど、でもやっぱり彼女はそんな人。

だから辛いの・・・

「（そして、あなたももちろん、彼女に今すぐ告いたい。・・・彼

女の不安を取り除いてあげたい。・・・そして、何より、自分だつて・・・。自分のものにしたいって思っているんじゃないかしら？ 本当やそうやって、自分の鎖に繋ぎとめておきたいって気持ちも・・・」

「ああ、確かにあるよ」

ふつと彼があきらめのような複雑な表情で笑ってから、そう答えた。「(だったら。あなたの思うとおりになさい。私のせいで諦めないで。あなたは余計に私を罪の意識に追い詰める気？これ以上苦しめてどうしようというの・・・?)」

できるだけ明るく言って、哀はまっすぐ新一の顔を見上げた。

「灰原・・・」

申し訳なさそうに自分の顔をただただ見つめる彼に対して、再び瞳の色を強くする。それから、彼と彼女のベッドを挟むように置かれる棚の上の腕時計を彼の手の上に、はい、と渡した。

「(行きなさい。タイムリミットはあと19時間よ。それ以上はどうあがいても無理なんだから・・・)」

哀はそういうと、彼から背を向けた。

「サンキュ・・・」

背中を響く、彼の優しく甘い声。

哀はキュッと目を閉じた。

バッグのチャックを開ける音、服の磨れる音。どうやら着替えているらしい。この音が終わった時は、彼が自分から離れてしまふ、そう思うとよけいに彼女の小さな胸が苦しかった。

「・・・じゃあ、行つてくつから」

そんな新一の少し低い声が、哀の心を騒がせる。

『行きなさい』

行力ナイデ・・・

『急ぎなさい』

ココニイテ・・・

2つの気持ちだが、彼女の胸の中で対立していた。

しかし、それを敢えて聞かぬことにした。それを聞いてしまったら、あの決意が無駄になってしまう気がしたから。

パタリ・・・

静かにドアが閉まる音を聞きながら、哀はつぶやいた。

「（これでよかったのよ）」

そう思えば、全てうまくいく。彼も彼女も、周りもみんな。もとを辿れば、自分のせいで彼をあんな姿にしたのだ。

自分が周りを苦しめているのだ、自分が幸せになろうなんて思わない。今、こうしているのはほんのささやかな時間。

このひと時があれば、もうそれでいいのだ。

・・・そう考えることにした。そう、自分を納得させようとした。

しかし、流すものかと思っていたものは、自然に彼女の大きな瞳からポロポロこぼれていった。

「哀くん・・・」

その声に、哀はハツとして振り返った。

そこにいたのは博士。心配そうな顔で彼女を見つめている。

「（いつからそこに？）」

哀はいつもの表情を作る。凜とした表情。

が、目に光るものに彼にはとくに気づかれていた。

「『博士みたいに禿げるぞ』ってところぐらいじゃな。あまりに腹が立っただんで、どう彼にお仕置きをしようか考えておっただんじゃが・・・」

なるほど、出るに出られなくなってしまったわけだ。うつむく彼に哀は力なく笑った。

「（そう。全部聞かれちゃったわけね）」

「・・・哀くんはそれでいいんじゃない？」

博士はそれでも心配そうな顔で言った。

「（ええ、もちろんよ・・・まあ、少しおせっかいだとは思われるかもしれないけど）」

憎まれ口を叩いてみる。しかし、そんなことで彼女の気持ちが晴れるはずもなかった。そのことがすぐに自分でもわかり、彼女は思わず自嘲の笑みを浮かべる。それから、

「（ねえ、博士・・・）」

哀はうつむきながら言った。

「（今だけ・・・一緒にいてくれるかしら？）」

「もちろんじゃよ」

博士は優しく微笑んだ。

哀はくしゃつと泣き笑いの表情を浮かべ、ゆっくりと彼の大きな体にもたれかかった。

再び涙があふれてきた。

「ホントに優しい子じゃのう、哀くんは」

博士のしわくちゃで大きな手が、自分の頭を撫でる。

父のような存在。

でも、父より近い存在。

そんな彼に今は甘えていたかった。

第14話 ささやかな時間（後編）（後書き）

こつぶです。ほぼ書き直しちゃいました。

彼の決断を変えたのは、やっぱり、彼女しかいないでしょう、みたいな。

・・・つらかった><！

でも、前回より纏まっていたいいお話ができたと思います。

本当にここまでお読みいただき、ありがとうございました。

第15話 運命の分岐点

米花総合病院。

工藤新一は蘭が子供達といるはずの1階に向かって周りを気にしながら急ぎ足で歩いていった。

髪をくしゃくしゃにセツトし、その上にデパートで買っておいた野球帽を深くかぶり、薄い色のサングラスを付け、昨日着ていた服とは違う、新一の自宅から蘭が持ってきた服を着て、自分が工藤新一であることをばれないようにした。

もちろん、医師や看護師に気づかれないように。

何人かの看護師が振り返って訝しげにこっちを見ていたが、その視線にわざと気づかない振りをする。それから、平常心を心がけながら8階のナースステーションの前を知らぬ顔で素通りすると、彼は非常階段に向かって一気に走り出した。

愛しい彼女の許へ行くために。

そしてここから、旅立つために。

この病院には、工藤新一としてはこのまま戻ってくるつもりはなかった。

残りの時間はすべて愛しい一人の女性のために費やすつもりでいた。そして、その決意を固めさせてくれたのは、ほかならぬ灰原哀だった。自分が今まで迷っていた原因であるその人が、あるうことか、自分の背中をポンと押してくれた。

それは思いもかけないことだったが、とても嬉しかった。だから・

非常階段にたどり着くと、彼は8階から1階まで全速力で駆け下り

る。『江戸川コナン』の姿であつたならば、どんなに時間かつたであろうこの階段も、工藤新一の体となつた今では1階につくまで2分もかからなかつた。

満ち溢れるエネルギーに自分でも驚いた。思わず口許でにやり、と微笑んだ。

「さ、早いうちに蘭を捕まえねえと」

きつと蘭も子供たちもこの階にいるはずだから。蘭にフルーツ牛乳やアンパンなどお菓子を買ってもらい、きつと外やロビーにいるに違いない。

のんびりとパンをほおばる子供たちの姿が目に見えた。

しかし、彼の読みはずれ、売店にもロビーにも、庭にも蘭たちの姿を見ることができなかった。

気持ちには焦る一方だ。ここまでずっと走ってきた。

「・・・たたく。どこ、行っちゃったんだよ」

新一は肩で息をしつつ、辺りを見渡しながらつぶやいた。玉のように噴き出る汗をシャツの袖で拭きながら。

「あとは蘭がいそうなところは・・・」

そこまで言つて彼は、はたと言葉を止めた。

思いあたる節があつたのだ。それは。

・・・宿直室。

博士と園子は先ほどから宿直室で仮眠を取っている。さつき博士とすれ違つたが、園子の姿はなかつた。それならば彼女はまだそこにいるのではないだろうか。もしそうならば、きつと蘭はその様子を見に行つたに違いない。

新一は今来た廊下を振り返り、それから一番奥にある宿直室に向かつて、再び一気に走り出したのである。

宿直室前。

彼はようやくそこにたどり着いた。行き交う人、行き交う人、廊下を走る彼の姿に怪訝そうな顔で見つめていたけれど、そんなことはどうでもよかった。彼は見舞い客で、この院内にきつと緊急の患者がいる。だからこんなに焦ってるのだ、そう思われたのか、看護師や医師からは怒られたりすることはなかった。それとも、自分が気づかないだけで、怒ろう、注意しよう、というときには既にその場所にいなかった、ただそれだけなのかもしれないけど。

きつと、蘭はここにいる。

新一はほぼ確信に近い状況で、肩でハアハアと激しい呼吸をしながらその場所に立っていた。

流れ出る汗も拭かず、震える手でドアノブに触れたちやうどそのとき、ドアの向こうで聞こえる声に気づき、そつと耳を澄ました。

「それでさー・・・このまえの文化祭で蘭ッたら新一君とホントラブだったのよ。もう周りが2人の愛の炎で焦がされちゃうくらい」

「ちよつと、園子！何でたらめ言ってるのよ！子供達の前で」

「だってホントのことじゃない。今さら何照れてるのよー！」

蘭と園子の会話。いつものくだらない会話。

やっぱりここだった。

安堵し、膝に手を置いて、乱れた呼吸を整えようとしたとたん、体にやとつていた力がみるみるなくなり、彼はペタリとそこに座りこんだ。

さすがに胸が苦しい。この数分の間、彼はずっと全速力で走り続けていたのだ。当たり前といつては当たり前なのだが。

しかしそれは昨日の、あの苦しさとは全然違う、心地よいものだった。ドアの前で息を整える。数回深呼吸をしていくうちに、次第に落ち着いていく呼吸。

「・・・どなたですか??」

彼の気配に気づいたようである。蘭の声がこちらに向かって呼びかける声が聞こえた。

「・・・俺」

新一はドアの前に体を向けると、ゆつくりと立ち上がり、声をかける。

「え?」

畳を擦る足音がこっちへ向かってくる。そしてその音は目の前で止まると、ゆつくりとドアノブが回った。

ドアが開くと、チェーンロックの隙間から蘭がチラリと顔を覗かせた。その瞳が新一を捉えると、しばらくきよとした顔で彼を見ていたが、それから、

「新一・・・?」

と聞き返した。信じられない。その先を言わなくとも、その瞳がそう語っていた。

「ああ・・・」

新一はサングラスを少し外して彼女に確認させる。まだ信じられないのか、蘭は言葉を失ったまま、ただ、ぼんやりと彼の顔を見つめていた。

「どうしたの、その格好。まさかまた・・・」

蘭が次の言葉を言いだす前に、新一は素早く彼女の細い腕を掴んで、強い力で自分の方へ引き寄せる。

「え!??」

驚いたような、戸惑ったような、何ともいえない表情。

新一はそんな彼女に構わず、長い廊下を一気に走り出した。彼女の手を掴んだまま。

「ちよつと。新一!??どこ行くの!??」

「黙つてろ、舌噛むぞ!」

半ば強引だったかもしれない。しかし、いくら『東の高校生探偵』ほどの人物でも、今の状況ではもうこれしか方法が考えられなかつ

た。

それだけ切羽詰っていた。

タイムリミットはあと僅かしかないのだ。

これからしばらくは『工藤新一』としては彼女と生身で接することはなくなるだろう。

だから、今このひと時をその瞬間が来るまで彼女と過ごしかった。コナン（子供）の姿では決して言えなかった甘い言葉を、彼女にたくさんかけてやりたかった。彼女の幸せに満ち足りた表情を横で見つめていたかった。・・・何より、もう、彼女の涙は見たくなかった。

「蘭、誰だったのお？・・・あれ、蘭？」

園子が奥からひよいと顔を出し、キョロキョロといるはずの親友の姿を廊下を見渡した。それから、既に廊下の角を曲がる若いカップルを目撃した時、園子はフツと笑みを浮かべる。

「『新一＆蘭のラブラブロードへの道大作戦』遂行されたり、か」

「何ですか、それ」

光彦が隣で彼女を見上げる。それに気づき、園子は満面の笑みをする。

「通称『ラブロー』。あまーくてどろどろおーな恋の大作戦よ。あなたたちにはまだちょーっと早いかしらね・・・」

「へえ、ラブロー・・・」

光彦はとりあえず頷いて見せるが、まだあまり意味がわからない様子で首を傾げた。まあ、実際のところ、小学校1年でわかれという方が無理なのだが。

「甘くてどろどろ、だなんて、まるでチョコレートみたいだな」

部屋中を食べ物を探して荒らしていた元太が、棚の中に入っていた板チョコを見つけて、嬉しそうな顔で言った。口に指をくわえて。

「あ、それ、宿直のお医者さんのじゃないの？」

歩美が言った時には既に遅かった。元太はチョコレートを包んでいたアルミ箔を器用にはがして、板のまま割らずに齧りついていた。「元太くん。それじゃ泥棒だよ？コナン君に言いつけちゃうんだから」

歩美が怒ったように彼をにらむと、元太は口をもごもごさせながら、「いいじゃん。チョコの1枚や2枚なくなつて・・・」と抗議した。光彦はそんな元太の言葉に小馬鹿にしたようにクックツと小さく笑う。

「甘いですねえ。甘党のお医者さんかもしれないじゃないですか。もしばれたら元太くんが次に来たとき、そのお医者さんに余計に注射針刺されるかもしれませんよ」

「あつ、それとも、甘い食べなくちゃ死んじゃうとか！だって大人のくせしてチョコレート好きなんておかしいもんっ！きつと、そういう病気なんだよ、だから全部食べちゃったらきつと幽霊になつて『祟つてやる』ってでてくるよー！注射お化けになつて」

うらめしや、と胸の前で両手をたらし、べろを出し・・・即席歩美ちゃん幽霊の誕生だ。

「マジかよ！」

彼らの言葉に、みるみる顔を青くする元太。あわててぺっぺつと吐き出すが、解き既に遅しで、半分はお腹の中。そして残りの板チョコ部分には彼の歯型が残っていた。乳歯が2本抜けている部分までくつきりとチョコに浮き出ている。

「あーあ。元太君、よい犯人になれませんよ。こんな証拠残しちゃ」「『よい犯人』つつたつてよ・・・」

呆れる光彦の言葉に、元太はしょんぼりとうな垂れた。それから彼は大きなため息をつく、何気なくポケットに手をつ込んだ。何か固くて金属のような冷たい質感に、彼は何かを感じ、ハツとして握り締める。そしてその感触を確かめたとたん、彼の顔はパツと明るくなった。

「どうしたの？元太君、変なお」

コロコロ変わる元太の表情に、歩美はケラケラと笑いながら尋ねた。彼は満面の笑みを浮かべ、握り締めた手を彼女の前で徐に開いていく。少しずつ見える中身。それは金色に光る500円玉だった。少しくすんだ色をしている金貨に、元太の顔も輝いているように見えた。

「これで・・・買えるよな」

元太は振り返って、嬉しそうに園子に尋ねる。

「4枚くらいは余裕だわね」

園子は元太の食べかけの板チョコの端を手でポキリと折って、一口に放り込み、それからにこつと微笑んで見せた。

元太はホッとした顔で息を吐くと、それをポケットに再び突っ込んで、部屋を飛び出す。どこ行くの!？との蘭の声に、踵を返すときらきらと瞳を輝かせながらこう言った。

「今から買いに言ってくる!」

「じゃあ、私もついてく!」

「・・・え!？ちよつと待ってくださいよお」

歩美と光彦はあわてて彼の後を追いかけて部屋を出て行く。園子はそんな彼らを見届けると、

「若いわね・・・」

と遠い目をしてつぶやいた。それから、大きく伸びして、

「さ、アタシももう一眠りしましょつかねえ・・・」

と部屋の奥までのそのもと戻っていったのである。

しん・・・とする宿直室。この部屋に平穏な時間が再び戻ったようである。しかしそんな平和な時間も、すぐに断ち切られることになるだろう。一人の患者が脱走したという暗黙の放送が院内に鳴り響いたその時に。

一方、蘭と新一は手と手を取り合ったまま、病院の裏の道を全速力で走っていた。

そして路地裏を見つけると、彼はそこに身を隠した。蘭もそれに続

き、さつと身を隠す。彼が守るように自分をふわりと包み、そつと道の奥の方に押された。すぐ、外に出られるように。

「へへっ。ずいぶん走っちまったな」

新一はそこでようやく彼女の手を解くと、はあはあと喘ぎながら額から伝い落ちる汗をさつと拭う。

あー、汗くさくなりそうだな、なんてぶつぶつとぼやく彼のその横で、蘭は呆れた顔を浮かべた。

最近の新一の行動はどうも理解できない。それが彼女にはさびしかった。

「なんで、こんなことしたのよ。・・・どこに、行くつもり？」

蘭は壁に体をもたれかけ、同じく乱れる呼吸を何とか抑えようと胸を押えながら訊ねる。

「どこがいい？」

その言葉に、蘭はキツと横にいる彼を睨みすえ、『ふざけないでよ！』と言うつもりで口を開きかけた。しかし彼の顔を見たたん、彼女はその行為をやめていた。

彼の目は真剣だった。ただ、まっすぐ彼女を見つめていた。

蘭にはその瞳がどうしてもふざけているようには見えなかったのだ。

「オメーの好きなところでいいんだぞ」

彼の優しい瞳とその言葉。

それがどこもなく不自然で、蘭は訝しげに彼の顔を見つめる。沸き起こる不安に耐え切れなくなつて、蘭は彼を見上げた。

「ねえ、新一・・・もしかして」

「ん？」

「・・・うつん、なんでもない」

蘭はあわてて作り笑いをすると、うつむいた。この先は自分からは聞けなかった。聞くのが怖かったのだ。

「・・・そうね。じゃあトロピカルランド、がいいかな」

蘭は静かにその言葉を口にする。ちろり、と自分の顔を見て。

「え??」

その言葉に、びっくりした面持ちで彼は蘭の顔をまじまじと見つめる。

トロピカルランド、それは工藤新一の運命の分岐点である場所だった。そして蘭にとっても……。

あの日、2人がトロピカルランドでデートをしなかったら、

あの日、ジェットコースターで殺人事件が起こらなかったら、

あの日、ジンとウオツカがトロピカルランドで拳銃密輸の取引をしなかったら、

あの日、新一がジンとウオツカの姿を追わなかったら、彼らを見失っていたら、

あの日、ジンとウオツカがAPTX4689を持っていなかったら、

あの日、蘭が追いかけようとする新一を止めていたら……

いずれにせよ、こんなことは起こらなかった。

江戸川コナンなんていう人物は生まれなかった。

黒の組織の存在も知ることもなかった。

広田雅美こと宮野明美の死の真相すら知ることなかった。

少年探偵団とも出会うこともなかったし、灰原哀とも接点がなかったはずだろう。

彼女の苦しみもわかってやることもできなかった。

この小さな体になって、失ったこともあるけれど手に入れた物のほうが大きかった。知らなかったことが見えてくるようになった。

……だから、後悔はしていない。

しかし、逆に見えてしまったことがゆえに新たな心配が生まれた。それは蘭のことだった。

小さくなったがゆえに自分は彼女に気持ちに気づいてしまった。

蘭は幼馴染の家で出会ったばかりの小さな少年の無邪気（？）な質問に、頬をちよつと赤らめて、「私、新一のことがだいすきVV」と言っただけから、少しずつ。

まさか、本当にあのときまで、蘭も自分のことを好きだったなんて彼は思いもしなかった。恋愛感情に疎い彼のことだから。

工藤新一のときにはそんなこと、微塵も感じなかったから、最初は冗談を言ってるのかさえ思った。

しかし日が経つごとに彼女が自分に漏らす、弱音。

そして工藤新一として彼女と話すときに電話越しに聞こえる彼女のすすり泣き。

それを見て改めて、彼女の気持ちと自分の気持ちは一緒だったんだ、と実感した。

だから彼女に本当の気持ちをこの工藤新一の姿で言っておきたかった。工藤新一であるうちに。

しかし。

そんな彼女の口から『トピカルランド』という言葉が出てくるとは思わなかった。なぜなら2人が離れ離れになった場所であるから・

新一だってそれがわかっていたからその言葉は絶対出さないようにしていたのに……。

まさか、彼女は何か気づいているのだろうか。

そんな不安が彼の中で渦を巻いていた。

「新一？ちよーつと！またホームズのこと考えてるんじゃないでしょうね」

蘭に怒ったように軽く背中をたたかれ、新一はハッとわれに返る。

「いや、そんなんじゃないけど……」

新一は少しぎこちない笑みを彼女に見せた。もつと自然な表情を作るつもりでいたのだけれども、あんまり気づかれないようにしなく

ては、いつもどおり接しなくてはと思うと余計できないもので、結局この笑顔になってしまう。

そんな彼の僅かな後悔に気づくこともなく、蘭は満面の笑顔に向けて新一に言った。

「じゃあ、早く行こう。あたし、今度できた新しいアトラクションに2回は乗りたいんだから！」

「・・・へ？」

早く、と、蘭は急かすように彼の手をぐいぐいと引っ張る。その表情に蔭りはない。

（なーんだ、深読みしすぎか）

彼は思わず苦笑すると、いつもの笑顔に戻って、今度は自分のほうから彼女のやわらかい手を握り返した。

そして二人は路地裏を人の目を気にしながらそつと出て行くと、お互いを気遣いながら、米花駅に向かって一気に駆け出した。

走りながら、蘭はチラリと彼の横顔を見た。そして哀しそうに微笑むと、また目線を前に戻し、こぼれそうな涙を振り切って走り続けた。

力が出る限り、ずっと走り続けようと思っていた。ここで止まったら涙が止め処なく流れて、止まらないような気がしたから。

彼をもうこれ以上、困らせたくなかったから。

ずっと、走り続けたかった。

彼が気づく前に、涙がかれるまで。ずっと・・・

第15話 運命の分岐点（後書き）

・・・チヨコ好きな大人がありえないって・・・。

フフフ、大人もみんな大好きですぞ、歩美ちゃん。だって作者であるこつぶだって、ほらこんなに・・・（笑）。

なんて自分で書いたキャラに突っ込みをいれつつ・・・。歩美ちゃんがそんなことを言ったらかわいいなあと思いながら加筆修正しました。

・・・だって修正するところがあまりなかったんだもの・・・><！次回はあるかな、どうかな。

ここまでお読みいただき、ありがとうございます！

第16話 望まれた見舞い客

新一たちが病院を抜け出して米花駅に向かっていたところ、その米花総合病院では、ロビーの辺りをまだぐるぐるうろついている児童3人がいた。歩美、光彦、元太である。

元太の手には売店で買ったばかりの板チョコ4つ。1つは宿直医師の分、1つは哀の分。そして残り2つは元太の分。

「やべー・・・トイレ行つてたら宿直室わかんなくなっちゃったよ」
「だからクッキー落としていこうっていったのに」

ヘンゼルとグレーテルにヒントを得たのか、歩美の言葉に、元太はムキになって珍しく歩美に怒った。

「それじゃ食べられなくなるだろ！食べ物茶碗にあるご飯一粒でも残さず食べなくちゃいけないってかーちゃん言ってたぞ！」

「あとで拾いながら食べればいいじゃない」

「ああ、そうか」

歩美の言葉に納得する元太に、光彦は呆れた顔で突っ込みを入れた。
「おばかさんですねえ、2人とも。そのまえに看護婦さんたちに拾われちゃいますって」

「そっか・・・そうだよな・・・」

がっかりした顔で元太は息をついた。そしてぼりぼりと刈り上げたばかりの坊主頭を撫でながら、

「はあ、もうここどこだよ・・・」

とげんなりした顔で床にしゃがみこんだ。

「ボウヤ、どうしたん？」

その優しく甘い声に、元太はふと顔を上げる。そこには髪をポニテールにまとめた、蘭と同年齢くらいの関西弁の綺麗な女の人が彼を見下ろしていた。

どきん、とする元太。小さい胸（6歳児にしては大きい）が高鳴る。

「あのっ」

「うん？」

彼女の顔が自分の目の前に来て、さらにどきどきと胸の鼓動が早まった。腰をしゃがめ、彼らと同じ目線にしてくれたのだ。

「あ、あのっ・・・しゅ、宿直室に行きたいんだけど」

元太は思わず早口になっていた。顔からしゅうしゅう湯気が出そうである。

「宿直室？・・・アタシもここ、初めてやからなあ・・・」

困ったように彼女は振り返ると、近くを歩いている女性看護師を見つけて、「おい」と手を振った。

「はい、何でしょう？」

女性看護師はこちらに気づき、にこやかな顔で近づいてくる。

「あ、すみません、あの・・・宿直室ってどこあんのんですか？」

「宿直室・・・？」

普段そんな質問をされたことない場所なので、怪訝そうな顔をして看護師はそのポニーテールの女性を見た。

が、彼女の隣で不安げに自分達を見つめている子供達に目をやると、すぐ納得した顔をして、「ああ」とつぶやいた。

「昨日、来てた子達ね。鈴木財閥のご令嬢の・・・」

「はい」光彦は大きくうなずいた。

女性は、へえ、ご令嬢・・・と、感心した顔で子供達を順々に見ていく。その視線を感じ、元太は嬉しさと気恥ずかしさで思わずぶると身震いをした。

「宿直室はね、この廊下を突き当たったところで左に曲がって・・・」

看護師は、ゆつくりと丁寧に場所を教えてくれた。それから、光彦がそれをメモにおさめ終わるのを確かめると、彼女はまた仕事に戻っていった。

看護師が見えなくなるのを確かめると、ポニーテールの女性は感嘆の声をあげ、3人を見つめる。

「へえええ……。ご令嬢と知り合いなん。アンタ等、ちつこく見えて結構大物なんやなあ……」

彼の低い鼻も一気に高くなる。

「そう、俺、友達。昨日だってそいつと花火大会見に行ったんだから！そいつ、自分の花火上げられるんだぜ！しかも、しょぼいのじゃないんだ。でっかいの」

元太はいつにも増して声を荒げ、手を大きく広げ、鼻の穴を膨らませて言った。

「わあ、すごいやん、キミ」

彼女が元太の坊主頭を撫でながら、優しくささやくように言うと、

元太は鼻の下を伸ばしてでれでれと照れ笑いを浮かべた。完全に彼女の虜である元太を尻目に、

「……『友達』？」

「『ともだち』？」

光彦と歩美は怪訝そうに顔を見合わせる。

「正確に言えば友達の居候先のお姉さんの『友達』……ですよね」

そつと耳打ちをする光彦。その言葉に、歩美はうんうん、とうなずきかけるが、ふと顔を曇らせた。

「……そいえばコナン君、どうしてるかな」

「……歩美ちゃん……」

どうしよう、と光彦が何かいい言葉はないかと考えたとき、

「『コナン君』？」

ポニーテールの女性はえっという顔で振り返った。

「……アンタら、まさかコナン君のお友達なん？」

「あ、ハイ。そうですけど」

光彦は反射的に答えた後で少し驚いた顔をする。

「……お姉さん、コナン君のことご存知なんですか？」

「ああ、知つとるんもなんも・・・」

彼女が何か言おうと口を開きかけた時、頭上から、「くおらっ」と少し怒った声と共に、彼女の頭を軽くはたかれた。

「痛っ！な、何！？」

あまりに突然のことで驚いたのか、彼女は今までに聞いた事のないほどの大きな悲鳴を上げると、さっと顔を上げた。もちろん子供たちも。今まで話に夢中になって誰かがこんな近くにいることすら気がつかなかった。

「そんなとこで何道草食つとるんや、このアホ。ったく、探したで」阪神の野球帽をかぶった、彼女と同年代の青年。色黒で眉毛が太く、鼻は高く、目は大きく、嫌味のない顔立ち。それは工藤新一とは異なるタイプの美青年だった。

「何や、平次か・・・。痛いなあ、何すんの！？」

女性は先ほどまで優しく子供達に話しかけていたのとは同じ人物と思えないほどの口調と表情でその青年に噛み付いた。まるで般若のような顔である。あまりにその表情の変化に驚いて、元太はしばらく言葉を失っていた。

「女の子にアホなんて言葉言っちゃいけないだよ！それに、このおねーちゃん、全然アホじゃないもん！蘭お姉さんみたいに優しくったもん！」

歩美が怒ったように彼を睨みつける。

「ありがとなー。せやでー、平次。アホなんて女の子に言うたらあかん。・・・『蘭ちゃんみたいに』はちよつと言いすぎやけど・・・」

「でれでれと女性は顔をほころばせる。そんな女性に、再び「アホか」と頭を叩くと、じろり、と3人の子供を見下ろした。

「何や、コイツら・・・あのねーちゃんの知り合いか？・・・ってことは。」

「せや。コナン君のお友達やて。な、こんなとこでばったり逢え

るなんて、すごい偶然やろ？」

和葉と呼ばれたその女性はちよつと嬉しそうに青年に言った。

「く……ナンの？」

関西弁を喋るその色黒の青年は驚いた様子で彼等を見る。その視線は、光彦、元太、歩美と順々に移っていく。

「クナンじゃなくてコナンなのに」

プツと頬を膨らませて不機嫌になる歩美。

「もつとも彼は『江戸川苦難』と改名したほうがいいかもしれませんよ。6歳児であれほど殺人事件に関わってるなんてふつつ、ありえませんよ」

光彦が横で難しい顔をする。ここにもし、高木刑事がいたら、「それは君たちもだと思っただけど……」と苦笑して言うような気がするが。

「アハハハ……、こりや傑作やな」

子供達2人がそんな会話をしている時、彼はおかしそうに腹をえて笑いだした。周りの患者や看護師らが何だろうというような顔で青年を遠巻きに見ながら、通り過ぎる。その視線を感じ、彼女は頬を赤らめ、華奢な体を余計に小さくした。

「何やの？平次。きも悪いわ。一人で笑わんといて。アンタと一緒にいるアタシらがはずかしゅーてかなわんわ」

女性は一緒になって顔を赤らめ、眉をひそめて青年を睨む。

「スマン、スマン。いや、こんな子供らと授業受けたり、お手手繋いで遠足行ったり、ままごとや探検ごっこしてると思うとおかしゅーておかしゅーて腹がひん曲がりそうやっ」

「当たり前やん。子供なんやから……」

彼は必死に笑いをこらえようとしたが、それはまだ無理のようだった。ひいひいと笑う彼の横で、子供たちの不愉快な気持ちは、その小さな体にみるみる充満していく。

「失礼なっ！僕たちをバカにしないでください！」

「暗号ものだけじゃなく、殺人事件や誘拐事件とか、いっぱいいっぱい解決してるんだぞ！」

「歩美たち、米花少年探偵団なんだから！」

探偵バッジを誇らしげにかざす3人に、女性は感心したように、へえ、と目を丸くする。

「あー、そんなん確かに言ってたなあ、蘭ちゃん。すごいやん、アントラ」

女性の柔らかな手が、3人の頭を撫でると、子供たちは嬉しそうに顔をほころばせた。

「どーせあのボーズが全部解決したんやろ？」

むっとする子供らを尻目に、彼の笑いがようやく落ち着くと、彼はあわてて時計を見た。

「やば、こんなことしとる場合やないぞ。ほな、和葉。8階や、8階」

急かすようにいうと、彼は早足で奥にあるエレベーターのところへ向かった。

「あ、待ってえな、平次」

あわてて女性は走り出す。が、ふと立ち止まって振り返ると、子供達に向かって手を振った。

「ほんなら後でな。アントラも工藤君のお見舞いに来てんねやろ？」

「いや、俺等は灰原の・・・」

「はいば・・・？」

元太が言うつと、女性は首をかしげる。

「ああ、そのちっさい姉ちゃんも同じ部屋や。一緒に見舞ってやろうや」

青年はそう早口で言った。そして

「もう来たで、エレベーター。早よ、早よっ！」

と叫ぶ。あわてて彼女は彼の待つエレベーターに乗ると、その扉は二人を乗せてゆっくり閉まっていった。

それを見送っていた児童3人。

光彦が思い出したように「あ」といった。

「新一お兄さん達、そういえばもうここにはいないんですた」

その言葉に元太と歩美も思わずあつ、と顔を見合わせる。

そう、青年たちの見舞う工藤新一はとづくにこの病院を去っていたのだった。

米花総合病院 815号室。

先ほどの野球帽をかぶった色黒の関西弁の青年はもちろん、西の高校生名探偵 服部平次。そしてさっきのポニーテールの似合う彼女は、その幼馴染遠山和葉である。

何故二人が都合よくこの病院にいるかというと、昨夜遅くに、平次が博士から連絡を受けたからだ。新一から連絡を受け、すぐに平次に知らせたらしい。彼は一連の事件を聞いて驚いた。

まさか、また彼が元に戻っているというとは。

「哀くんのこともあるし、少し手伝ってくれんか」

という博士の言葉に彼は当然のように快諾し、和葉とともに今日の始発の新幹線でここまでやってきたというのだ。

「何やと！？工藤が姉ちゃん連れて脱走したやとお！？そんな大それたことやりおったんかいな、アイツは」

815室に入り、病室に新一の姿がないのを不審がつて博士に事情を聞き、平次は思わず驚嘆した。相部屋じゃなくてよかった。彼の声がびんびんと、ガラス窓に反響する。

「工藤君、かつこいいいわぁ。蘭ちゃん、ようやく幸せになったんやね・・・」

うらやましそうに頬を赤く染め、和葉は何度もつぶやいた。

そんな彼女の横で、平次はチラリと哀の様子に目をやった。彼女は背を彼から背を向けていて、その表情は読み取れない。寝ているのか、寝ていないのかさえわからない。

「・・・ホンマ、何考えとんや、アイツは」
彼はそうつぶやくと、同情するような目で哀の小さな背中を見つめた。

平次は少なくとも新一よりは色恋沙汰の知識について知っているつもりでいる。

彼女とそんなに会う機会もないが、話を聞くだけでも灰原哀が工藤新一に対する感情が仲間意識だけではないことは察することができた。

そしてそれが確信に変わったのは文化祭の時だった。

新一が毛利蘭に正体がほとんどばれているという事を聞き、彼女はそれを覆すために彼に解毒剤の試作品を与えた。

しかし別に蘭に正体がばれても、彼女に危険が生じても、哀自身は何も支障はないのだ。

なぜなら蘭と顔をあわせたのはたった2回。これは後に和葉から又聞きしたことなのだが、文化祭の前に、コナンと蘭がお風呂を借りに来た時とコナンが犯人に銃で撃たれ、病院に運ばれた時だけだ。しかもどちらも会話さえしなかったそうだ。だから何の愛着もわいていないはずだ。それなのに、なぜ灰原哀は彼に解毒剤の試作品を渡したのだろう。

そこまで考えると必然的に答えは出ていた。

『灰原哀は、毛利蘭を想う彼のためにA P T X 4 8 6 9の解毒剤の試作品を渡した』という答えが。

だから博士から知らせを聞いたとき、今回のこともきつと新一が哀に泣きついたであろう、という考えがすぐに浮かんできた。

もしそれが事実だとすれば、彼女はどんな気持ちでそれを聞いていただろう。

もちろん、平次は蘭と新一がうまくいけばいいとは思っている。しかし今、哀が苦しんでいる時に蘭を連れ出して告白・・・というの

は、彼にとって疑問が生じた。せめて彼女が知らないうちにことを運んでいればよかったのではなからうか。そうしたら彼女が辛い思いをしなくてすむのに。

しかし、彼の背中を押したのは他でもない、哀本人だという。

「あああああつ！もう！」

平次はくしゃくしゃと髪を掻きまわした。

（ホンマ、女心ってわからへんなあ）

どんな難問な事件や暗号は得意な彼でも、やはり新一同様、女心についてはまだまだ謎だらけだ。

「何やの、平次。さつきからうるさいで」

「ああ、スマン、スマン」

和葉にたしなめられて平次は平常心を心がける。一呼吸をして、彼は時計をチラリと見てつぶやいた。

「今頃アイツ、どこで何しとんねやる・・・」

時刻は11時を少し回っていた。

トロピカルランドに向かう電車の中で、新一と蘭は絶えず他愛のない会話を続けていた。

その会話は途切れることのなかった。

その話は幼少のころから現在のことまで幅広いものだった。もちろん、その話題のほとんどは蘭が持ちかけている。新一も何か喋ろうとは思うのだが、彼が口を開きかけると、なぜか彼女があわてたように話し始めるのだ。彼が口を挟む隙間もないくらいに。

「はああ、疲れた」

電車に揺られ、彼女は喋りすぎて乾いた喉を乗車する前に買ったペットボトルのお茶で潤す。呆れたように新一は蘭を見ながら、

「そりやずーっと引つ切り無しに喋ってれば疲れるだろ・・・」

「うん・・・だって・・・」

蘭が大きな息とともにその言葉を吐き出した。

「・・・あん？何だよ？」

不思議そうな顔で彼女を見つめる。その彼を横目でちらり、と見て、蘭はさびしそうに笑った。

「うん・・・なんでもない」

「・・・はあ？」

新一は訝しげに蘭を見ていたが、すぐにぐつと彼女の手を握ると、体ごと彼女に向けた。

「何が言いてーんだよ。言えよ。何でもすっから」

彼の顔は真剣だった。

もう、時間はないのだ。

もし、自分と蘭の間に境界線というものがあるとするならば、今のうちに、このホンモノの姿のうちに断ち切りたかった。

少しでも長く、彼女と何もない真っ白な気持ちで一緒にいたかった・・・。

自分と蘭以外何も考えられないような・・・。

「優しいね、新一」

「え？」

思いもよらない言葉に、新一は戸惑いながら彼女を見た。

「どうしてそんなに優しくしてくれるの？」

彼女の口元は笑っているが、目は笑っていないかった。

（まさか、オメー・・・）

新一はあの推測がまた浮かんできた。

『もしかしたら、蘭は工藤新一が自分のもとから再びいなくなるということを気づいているのかもしれない』

というあまり喜ばしくない考えがいつの間にか彼の頭の中を纏わり付いていた。

「つぎは杯戸・・・杯戸・・・」

電車内の車掌のアナウンスの声で、新一はハッとわれに返る。

何もなかったかのように窓外の風景を見ている彼女の横で、新一は大きく息をつくくと、告白のシチュエーションのシナリオを考え始めた。そう、『新一&蘭のラブブロードへの道大作戦』（略して『ラブロー』）はゆっくりゆっくり加速されていたのである。

再び米花総合病院 815号室。

哀のベッドの前で平次はむすっとした顔で座っていた。さっきからこつちをふりかえろうともせずに背中を向けたままの哀。

寝ているような気もするが、寝息は聞こえず、また、彼女の前の丸椅子に座ってちらちらと彼女の様子を見ている博士の姿もなんだかわざと

らしい。

そしてなんとといっても、哀が時々平次たちが話す内容に、反応するように体を固まらせることもある。

（何なんや、この姉ちゃん。オレたちと話したないんか？工藤がいてへんから拗ねてるんか？ホンマ、こつっう感じ悪いわ・・・）

平次は買ってきた花を花瓶に生けようとしている和葉にそっと目配せをした。

「何なん？平次」

和葉が小声で彼に聞いた。

「あの灰原つつうちっさい姉ちゃんも寝てまってるようやし、工藤もおらへんし、見舞うのやめて東京見物でもせえへん？」

「・・・でも」

和葉はチラリと隣のベッドの少女を見つめた。この子のことが心配だ、彼女の目はそう語っていた。

「あの子、起きた時に博士しかおらへんかったらさびしい思いするんとちやうかなあ・・・」

その言葉に、哀を見ていた博士は顔を上げ、彼らしい人のよさそうな満面の笑みを浮かべる。

「平気じゃよ。あともう少ししたら園子君達も戻ってくるし。それにわしだけじゃ哀くんが不満だと言いたいのかね？」

「そ、そんなとちやいます！」

和葉はあわてて言うつと、恥ずかしさで顔を赤らめた。博士はホッホと笑うつと、すぐにその笑みを止めて、再び哀の方へ視線を落とした。
「・・・」

平次はそんな2人を黙って見ていたが、入り口に向けてゆっくり歩き出した。

「平次」

「ほな、行くで。和葉」

「う、うん・・・」

和葉はあわてて平次のあとを追う。

「あ、ちよつと・・・和葉くん、待ってくれんかの」

その言葉に2人は振り返ると、博士はあわてた顔で椅子から立ち上がり、彼女によたよたと近づいた。

「そ、園子君が君に話があるというんじゃが」

「園子君・・・？て誰やん」

きょんとした顔で和葉は博士に聞きかえす。その横で平次は財布から取り出したオートバイのキーをチャラチャラと人差し指にかけて回していた。

「蘭くんのお友達じゃよ。一度会ったことあるじゃろ。鈴木財閥のご令嬢で・・・」

「ああ、さつき三角頭のボウヤが言ってた人やね。何やろ・・・」
和葉は首をかしげる。

「宿直室にいたと思ったんじゃが・・・」

平次は博士の目が泳いでいることに気づき、そして隣で背を向けて横になっている少女の背中が再びピクツと動いたのを見て、一瞬彼は眼光を鋭くした。

「わかったわ。ほんなら、平次先口ビーで待ってて。すぐ行くから」
そう行つて足取り軽やかに病室を出て行つた。彼女が完全にこの場

から離れたのを見計らって、平次は彼に訊ねる。

「で、ジイさん。話は何なんや。そのちっさい姉ちゃんもさっきから寝たふりして一体何のつもりや。ホンマきしょ悪うてかなわんで」

そんな彼の話に驚いて、博士は思わず目を見開いた。そして

「哀くん」

とあたふたとした様子で彼女を振り返る。

「（わかつてるわよ・・・）」

その声とともに、哀はムクリとその小さな体を起こして彼のほうを向いた。

「ね、姉ちゃん・・・」

平次はその予想を反することが起きて、思わず彼女から目が離せなくなっていた。彼女の目元は赤く腫れていた。まるでさっきまで大泣きをしていたかのように。そしてその涙のわけはきっと・・・

「（わかつてるだろうけど・・・このことは誰にも言わないで）」

「工藤にもやな？」

平次はまっすぐその小さな少女の瞳を見据えて言った。こくり。彼女がうなずいたのを確かめて、彼は体を緊張させる。

おそらく哀にとって新一は、このことを一番伝えてほしくない人物であろう。きっと彼女は新一に余計な心配をかけたくないと思っっているのだろう。速やかにことを遂行させようと思っっているのだろう。何故彼女がここまで2人をくつつけたがっているのは平次にはわからなかったが。

「それで、何の用や？和葉を遠ざけてまでオレに言いたいことなんか？」

平次が両腕を組み、目の前にいる哀にゆっくりたずねた。さっきまで抱いていた印象がどこかに消え、もう彼女に警戒の色も見せなく

なっていた。

「（・・・あなたに頼みがあるの）」

哀はゆっくり、そして少し言葉を上ずらせて彼を見上げた。

「頼み、やと？」

平次がそのことばの重さに思わず顔をぴりり、と強張らせた。

第16話 望まれた見舞い客（後書き）

こんばんは！。やっぱりこちら辺になると話がだんだん長くなるのね・・・（笑）。

これは、大体中身を変えていません。ただ、平ちゃん＆和葉ちゃんvs少年探偵団。この台詞を少しね

それから、平ちゃんが「コナン」と聞いて、なぜ子供たちを見て笑い出したのか。あれをもうちよつと詳しく書かないといけないと、面白くないかな、と。そこはちよつと改訂させていただきました

ふふふ！。では、ここまでお読みいただきまして、ありがとうございます！

第17話 灰原哀の依頼

米花総合病院815号室。そこにいるのは、彼の高校生探偵としてのライバルで、親友である工藤新一を見舞うためにきていた服部平次と、現在入院中の灰原哀、そして彼女に付き添っている父親代わりの男、阿笠博士だけ。一体どうしてこういうことになったのか。この3人になったとたん、いつのまにか緊張した空気がこの部屋に広がっていた。

「頼み、やと？」

平次は緊張で乾いた喉を潤すためにコクリと唾を飲み込んだ。そんな平次から一瞬でも逸らさずに、哀がじつ、と平次の顔を見つめて、それから「ええ」とうなずく。

「（彼を、追跡してほしいの。彼は明日には戻ってしまう身だから。……もちろん2人に、……特に工藤くんには気づかれないように。探偵のあなたなら、それぐらい容易いはずでしょ？）」

その頼みを聞いて、平次は思わず飲み込んだ唾で咽込んだ。

「あ、アンタ、このオレに工藤のストーカーせえゆうとるんのか！？」

「ス、ストーカー？」

一瞬、目を白黒させる灰原と博士。

「い、いくらこの姉ちゃんが工藤のことが好いとつたって、それはオレにはできへん依頼やぞ！？ストーカーなんて、立派な犯罪やないか！」

平次は興奮して言葉を張り上げる。少し声を上擦らせながら、彼は叫んでいた。

（2人がものつそいええ雰囲気になって、チューしてんのを草むらに隠れてじつと見てろつちゅうんか？関西ではちよつと道歩いとるだけで『きゃあー』平次様とちやうん？』『サインもらわな』『

東の名探偵より全然かつこええのんとちゃう？』とか女子高生に言われまくつとるこのオレが！？）

平次はそれこそ口には出さなかったが、喉から出かかっているその言葉を必死に飲み込んでいた。

「これ、平次君。キミはなんだか誤解しているようじゃが・・・」博士があわてて口を挟んだとき、哀がボソリと横から呟いた。

「（ストーカー・・・いえ、案外当たってるかもしれないわ。探偵もストーカーも目的の人物や何かを得るために固執して追い続けるのだから）」

「アホ！！探偵とストーカーを一緒にすな！」

平次は思わず突っ込みを入れた。それから疲れたように大きく息を吐く。

（この姉ちゃん、和葉や毛利の姉ちゃんとは別のタイプやけど、えらい絡みにくい女やな。あんま怒らせんとこ・・・）

一人、そんな決意を固めている彼の横で彼女はゴソゴソと柵の引き出しを漁っていた。そんな彼女に気づき、平次が振り返ったその時、哀はそつと彼の大きい掌上に乗せた。

「これって・・・」

思わず平次は大きい目をさらに大きくした。

それはまさしく江戸川コナンがよく犯人を追う時に使う『犯人追跡メガネ』。そういえば、以前彼から、哀が予備の犯人追跡メガネを持っているという話を聞いたことがあったなあ、とふと考えてみる。（気合、入っとんねやな、この姉ちゃん・・・。）

そうまでして彼女は、新一を渡したくないのだろうか・・・女の執念は恐ろしい。

物珍しそうにジロジロと彼女を眺めていく。そんな彼の視線にも物怖じすることもなく、哀はまだ何か作業を続けようとしていた。

「（あと・・・そうね、これも今書いたほうがいいわね）」

哀はそう思案気につぶやくと、ちょうど柵の上にあったメモ帳とペ

ンを使い、彼女の小さなひざの上でサラサラとなにやら書き始める。
「何なん？まさか工藤とあの探偵事務所の姉ちゃんの行動をとった
スケジュールなん？何やそんなもん俺にはいらへんぞ？」

平次はからからかうような口ぶりでそういうと、哀の表情をひよい
と覗き込んだ。けれどもそんな彼を無視して、彼女は何か難しい単
語や文章を書き続ける。平次はそんな彼女の様子を見て、何を言っ
ても（ボケても）無駄だとあきらめると、フウツと一息ついた。

・・・相変わらず女の扱いは難しい。

気がつけばそれから10分経っていた。

和葉の様子も気になっていたし、さっさと依頼を受けて早く帰ろう
と思い始めたそのとき、哀はようやく書き終えた見え、書いてい
た手を止めてゆっくり顔を上げた。そして徐に彼に黙って差し出す。
「何や、これ・・・」

訝しげに彼はそれを手に取り、しばらく眺めていたが、みるみる彼
の表情が変わっていった。視線をあげ、メモ帳から目の前でじっと
自分の様子を伺っている哀にうつしていく。

「これって・・・まさか」

再び喉が緊張で渴いていく感覚を彼は感じていた。

「（そう。解毒剤の副作用緩和するための処置方法よ。できるだけ
簡単な言葉にしてあげたから、あなたにでもわかるでしょ）」

そう淡々と言う彼女に対して、平次はほんの一瞬だけ動揺する。彼
女の口か結構失礼な言葉を言っているのに、あまりにその話の内容
が重大すぎて、もはや言い返すことも忘れていた。

「（これで、あの人を助けてほしいの）」

平次はその言葉にハツとして彼女のほうを見た。彼女の大きい瞳が
哀しい色を映していた。

「助けるてどういうことや？工藤の身にまた何かあったんか？」

服部平次は静かに尋ねた。もう、いつもの服部平次の顔に戻ってい

た。

（ていうかトラブルありすぎやる・・・）

それがその薬の怖さであることは、まだ平次には気づいていないのだ。体験したことないのだから当然といえば当然のことなのだが。

「こんな難しそうな処置をしないと、アイツは助かれへんのか？」

彼の純粋な問いに、哀はすぐには即答できなかった。

「（そうね・・・）」

何故かためらっている様子で、彼女は思案気に顎に人差し指を当てた。その表情は、小学１年生には出すことのできない大人びた表情。そう、１８歳の女性だから出せる表情である。

「（そうね、あなたがもし私の言った処置を一つでも間違えてしまえば、あの人は死んでしまうかもしれないわね」

一瞬、時が止まった気がした。

「それって・・・」

次の言葉が浮かんでこなかった。そう、しばらく、哀の顔を見ることしかできなくて。

窓の外でイチヨウの木に止まっていた数羽の小鳥が一斉に飛び立つばさばさっという羽音に、ようやく我に返る。

「・・・さよか。元に戻るんも命がけなんやな・・・」

やっとのことですぶやいた平次の言葉に、哀はさも当たり前だというような口ぶりで吐き捨てるようにつぶやいた。

「（ＡＰＴＸ４６８９が死ぬ確率が高い薬なんだもの、解毒剤が楽であるわけないでしょ」

確かに。

服部は考える。

ＡＰＴＸ４６８９。アレは「死ぬ確率が高い」だけであって、本来人を殺すための薬ではない。

ならば、一体何をするための薬なのだろうか。

若返りの薬、本当にそんな単純なモノなのだろうか。

たとえば。

はじめは毒薬でしかないその薬。

その薬を飲んで人が死ぬことによって、そのエネルギーを、またはそのとき死体の体内にできた化合物を成分として、新たな薬に混ぜ込む。

次飲む人がその死んだ人のエネルギーの詰め込んだ、あるいは化合物の混ぜ込んだ薬を飲み、若返る。

（はっ、アホらし。・・・少年漫画の見すぎや・・・）

金色の髪で、「マメ」と言われれば怒る、体の小さい「エド」という名の錬金術師。そこまで考えて、平次はぶつと噴出した。しかし、実際若返りだとか、生き返りだとか。そんなものは簡単にできるはずがないのだ。実際若返っている男女をこの目で見てきたけれども、それこそがおかしいのだ。非常理なのだ。

そして、若返りの薬を作ってしまった科学者が一人、こうして、自分のために人生を狂わせてしまった男を救おうと模索している。まるで、テレビドラマや映画のワンシーンを見てるかのよう。それが現実、目の前に起きている。

（何や自分は世紀でめったにありえない奇跡の場に立ち合わせているんやなあ）

大袈裟かもしれない。けれど、そんな考えが彼の頭の中、胸の中、つばい広がっていった。

「（・・・ちよつと、まじめに聞いている？）」

呆れた顔で自分を睨んでいる哀に、平次はあわててうなずいた。本当か、というように哀はじろり、と彼の顔をもう一度睨んでから、言葉を続けた。

「（その上、あの薬は本当に試作品段階で、何も安全が確認されていないもの。見てのとおり、彼の肉体的ダメージはかなり大きいわ。文化祭のときに使った薬にも増して．．．もし、私が渡した薬を飲まなかったり、投与するタイミングを失ったら間違いなく死ぬわだからあなたに頼んでるの．．．私は動けないから）」

「死ぬ！？．．．死ぬってねーちゃん、アンタ．．．」

『死ぬかもしれない』ではなく、『間違いなく死ぬ』。彼女がそう断言したことで、平次は驚いて声を上げた。哀はクールな笑みを浮かべたまま、ええ、とうなずいた。

「（怖い？そんな大役、貴方にできない？）」

「．．．そんなっ．．．そんなことはあらへんけど．．．」

「親友を生きたらせるか死なせるか、その鍵を握っているのが自分、って考えると怖いよね」

「ちやうつて言ってるやろ！！！」

怒号した彼の言葉が広い病室に響き渡り、今にも哀に殴りかかりそうな勢いだったので、博士があわてて平次の腕を掴んだ。

「これ、服部君！哀くんは病人じゃぞ！もちよつと静かに．．．」

「わかつてるわ、ぼけ！」

鼻息荒く、彼は博士から腕を振り切ると、怒った顔のまま、パイプ椅子に座りなおした。

「．．．アンタになんか、任せておけるか」

まだ怒りがおさまらないのか、平次はばしつ、と自分の膝を叩くと、うつむいたままそう言った。

「工藤は俺の親友や。アンタが死ぬのは勝手やけど、工藤を殺されたらかなわんからな．．．」

その言葉を聞いても、彼女は表情一つ変えなかった。

「（．．．じゃあ、やってくれるのね）」

もちろんや、と彼はうなずいた。

「（依頼料はいくらで満足？昔のお金ならいくらが残っているはずだから．．．）」

アホか、と平次が遮った。

「（これは仕事であって仕事やあらへん。金はいらんわ）」

もともと、彼は探偵を本業としていない。まだ高校生だから。だからもともと金は受け取らないモットーだった。

しかし、もし彼が大人で、探偵を仕事としていたとしても、きっと同じことを言っていただろう。

「（そう……。あなたならそう答えると思ったわ）」

そのときになって、哀はにこり、と微笑んだ。

彼女の脇で心配そうに2人の会話を聞いていた博士は、話が一段落ついたのを確認すると、フウツと安堵の息をついた。

そして先ほどから尿意を催していたのを思い出し、いそいそと向かいのトイレに行くために部屋を出たのである。

パタリとドアが閉まった音を聞くと同時に、平次は再びゆっくりと口を開いた。

「なあ、姉ちゃん。アンタに1つ、聞きたいことがあるんやけど・

・」

それは彼が先ほどの哀の話を聞いて、ずっと頭の中で引っかかっていたこと。

「（何？）」

哀はそう答えながら、手元にあつた手鏡で顔を映していた。そして、ただ顔色がすぐれない自分の表情をじっと見ているようだった。

「ちっさい工藤から、おっきい工藤に戻ったあの薬、この前の文化祭の残りをまた改良した薬や、ゆうてたよな、アンタ」

そんな彼女に平次は静かにその疑問をぶつけようとしていた。

「（改良じゃなくて、改悪ね、正確にいうと）」

哀は手鏡を見ながら、手櫛で髪を整える。

「はあ？」

平次の言葉に彼女は一瞥した視線を彼に向け、うんざりした顔をす

る。

「（だからさつきも言ったでしょ。あのときは『死ぬかもしれない薬』。これは、『処置をしなければ間違いなく死ぬ薬』。・・・いつでもどこでも元に戻る反面、死ぬ確率が増えた。ただそれだけのこと）」

あのときもかなりヤバかったけどね、と彼女は何でもないような表情で付け足した。

「あのとき？」

「（文化祭のときよ）」

冷やかな笑みを浮かべて、哀は答える。

「（懐かしいわね、まだそんなに時間は経ってないというのに）」
そして彼女は棚に置いてある写真立てに目をやった。元太達が置いて行った、このまえのキャンプの写真である。光彦、歩美、コナン、哀、元太、そして彼らの後ろに立っているのが博士。

それは1度目の解毒剤の試作品を渡したほんの数日前の写真だ。道行くカップルに撮ってもらった写真。みんな幸せそうに笑っていて。

それから数時間もしないうちに、彼らは事件に遭遇し、コナンが犯人に撃たれ、重症を負うなんて、そしてまたその後何日もしないうちに、『彼』が『工藤新一』として再びこの世界に姿を見せることになったなんて、誰もこのときは思いもしなかった。

きつとそんなことを彼女は考えているのだろう。平次には今の彼女の気持ちがまるで手にとるようにわかっていた。

しかしあのとき、彼女は何を思っていたのだろうか。何故あのとき、急いで彼を元の姿に戻そうとした？

そのとき、ふと平次の脳裡にコナンの姿をした工藤新一の言葉を思い出した。

この2つ隣の813号室で聞いた彼の親友の、思いつめたような顔

でつぶやいたその言葉。

あんまり人のことのためにするなんて考えないこの自分でさえ、親友のために動こうとしたその言葉。

『バー口、人の苦勞をしょいこんで、自分のことのように心配して泣いちゃうようなお人よしに・・・んな事言えるわけねーだろ?・・・かといってあんなはりつめたような蘭をこのまま欺き通す自信はない・・・ホントは早く全てを話して楽にしてやりてーんだ。・・・なあ、服部・・・オメーならどっちだ?どっちが正解だと思う?』

――どっちが正解だと思う?

あんな泣きそうな顔の彼女を見たのは初めてだった。自分でさえ、心動かされた彼の言葉。

きつと彼女もまた聞かされたのであろう。あのような言葉を、彼の口から。
だから。

「せつないなあ、ねーちゃんは」

「(何かいった?)」

「いや・・・?」

あわててにんまり顔を作ると、ぶんぶんと首を左右に振って否定した。

しかしながら、まだまだ考えることがある。

「・・・もし、その処置がまちがった、いや、合っても間に合わなかったら、姉ちゃんどないするつもりやったんや・・・?」
大切な人を失うんやぞ?思わず喉まで出掛かっていた言葉を彼はあわてて飲み込んだ。そんな彼に対して、哀はフツと嘲笑し、静かに

ゆつくりとした口調で言った。

「（それが工藤君の運命。そしてまた一人殺してしまった私の運命・
・そう考えるしかないわね）」

違う。．．．いや、あるいは本心なのだろうか。本気でそう考えているのだろうか。その言葉に、平次は思わずカツとして身を乗り出した。

「姉ちゃん。アンタ、氣い狂つとるんとちゃうか？アンタが与えた薬で、一人の人間が死んでしまうんやど！？それを『運命』ちゅう言葉でアンタは片付けるんか！？」

その言葉に、哀はクスクスとおかしそうに笑った。その表情に、平次は思わずぞつとして身震いをした。一瞬、彼女が悪魔の化身でないか、と思うくらいに。

「（氣が狂っている．．．。そうね、そうかもしれないわ。

でもね、もう誰にも止めようがないの。私は殺人犯には変わらない。組織は私が作ったAPT×4869を何個も持っているわ。もしかしたら、今、この瞬間誰かがあの薬を飲ませられているのかもしれない。私や、彼みたいに体が幼児化して命拾いすることなんて、ま
ずないわ。．．．だからもう、私は．．．）」

目を伏せ、彼女は言葉を飲み込んだ。彼女の小さい肩が小刻みに揺れていた。

「ねえちゃん．．．」

平次は悪魔と思ってしまったことを後悔していた。

そう、彼女は既に生きながらにして罪を償っていた。『後悔』という重い鎖につながれていたのだ。

殺人集団の組織に所属し、自分もまた人を殺す薬を作ってしまった、結果的には人殺しとなってしまった。何千回神に懺悔しても許されない罪．．．。

しかし、それだからこそどうしても彼にはその事実が信じられなかった。

「何でや？何でアンタは工藤にそんな薬を敢えて・・・」

平次はいつもの自信ありげな表情を少しも見せず、眉間にしわを寄せたまま、つぶやくように言った。

文化祭は仕方ないにしろ。

改良品でない、改悪品のそれを何故飲ませた？

彼を死なせたくないと思うのは、彼の幼馴染だけではないはず。なぜなら、彼女は・・・

「（何故、あなたはそう思うの？）」

哀がクールな表情を崩すこともなく、彼の目を見据えた。

「いや、だって・・・」

平次はある言葉を言いかけて、あわてて口をつぐんだ。そんな彼の様子に気づいたか気づかなかったか、彼女はふっと目線を落としてつぶやく。

「（工藤君も同じことを言ったわ。そんなに意外？あなたは彼や博士に聞いてそう思ったかもしれないけれど。・・・でも、みんな私を買いかぶりすぎてるわ）」

「買いかぶり、やと？」

平次は思わず聞き返した。

「（そうよ。縁は切ったといっても一度は組織にいた人間なのよ、私は。組織の色に染められているの。黒という色にね・・・。）」

彼女の瞳が宙を見る。今、哀が何を考えているのか、それは平次にはわからなかった。

しかし新一が言うように、哀が暗い運命を今でも引きずっていることが容易に確認することができた。平次が思うに、今の彼女の環境はとても幸せである。

人の良い科学者。自分を頼ってくれる子供達、年下のはずなのに、時々姉の幻影を思わせる女子高生。そして自分が一番心のよりどころ

ろにしている少年の着ぐるみを着た青年……。そんな人々が今の彼女の心を満たしているかのように、平次には思えていた。しかしそれでもまだ彼女は『黒の組織』なる影に怯えている……。

「しかしやなあ、姉ちゃん。アンタ工藤やジイさんやちっさいボウズたちに出会ってずいぶん丸くなったんやないんか？工藤も言うてたぞ」

あわてて平次は彼なりにフォローしてみる。しかし、彼女の表情は晴れることはなかった。

「（そうね、確かに彼らというて安らぎはずいぶん多くもらったわ。彼らという、生きていることがどんなにすばらしいことが、再認識できた。未来が見えた。だけどね、悔しいけどもう私は白に戻れないの。彼ら『組織』の色に染まったその時から）」

そこまで言って、彼女は自嘲の笑いを口元に浮かべ、ゆっくり顔を上げた。

「（いくら水で薄めたとしても、別の色を加えたとしても……。あなたにそれがわかるかしら？）」

「（……）」

平次は何も言えず、思わず黙り込んでしまった。組織のことを触りしか知らない自分は重すぎる課題。

彼なら、どんな気の利いた（いや、彼はその言葉が『気の利いた言葉である』と気づいてさえいないかもしれないが）言葉を返すだろうか。

しかしだからこそ、彼はそんな暗いことを考えている彼女に腹が立っていた。苛々していた。だからついに彼はその言葉を口にしてしまったのである。

「じゃあ結局アンタは工藤のことどう思っとなるんや？」

「（どうって……？）」

平次は先ほど我慢した言葉を、勢いで口に出してしまったことに気づき、後悔したが後の祭りだった。しかし彼女は動揺した様子もな

く、クスリと不敵な笑みを彼に見せる。

「（そうね。・・・じゃあ、一緒に組織を倒していく仲間、とでもいったらあなたは満足かし・・・）」

「ちやうやろ」

平次はその言葉を遮った。ドキリ、として哀は目を見開いた。

「アンタの答えは・・・ホンマにアンタがアイツに思つとるんは・・・」

「（やめて）」

今度は哀が遮る番だった。

「（だったら何だつて言うの。今はそんなことを言ってる場合じゃないわ、そんなこともわからないの？）」

一見落ち着いているように見えて、彼女の言葉のアクセントが少し上ずっているのが平次は感じ取れた。

「せやな、スマンかった」

素直に謝ってから、彼はゆっくり息を吐いた。

言っではいけないことを言ってしまった自分に後悔していた。

そんな哀は何も言わず、じっと黙って下を向いていた。

「・・・ほんじゃ、姉ちゃん。安静にしとるんやぞ！」

平次は上ずった声で早口でそういうと、あわてて病室を後にした。

バタリ・・・

ドアが閉まった音で、哀はフツと自嘲の笑いを浮かべた。

そしてその笑みはしだいと苦悶の表情に崩れていった。急に体中が苦しくなったのだ。どういうわけか、あんなに今までおさまっていたのに、酸素マスクをつけているのに、それが口から外れるくらいの勢いだ。肺が萎縮しているような気さえした。胸が苦しい。背中が痛い。体が熱い。

誰か、助けて・・・

「（うつ・・・うつ・・・）」

ゴホゴホ、咳が止まらない。・・・死ぬかもしれない。助けを呼ぼうにも呼べない状況に彼女は置かれていた。

「（・・・）」

彼女は哀は最後の力を振り絞るような声で何かをつぶやいた。その声は誰に届くこともない。そして、自分以外誰もいない病室に響くことすらなかった。けれども、その言葉を口にしたらとたん、ホッとした表情を浮かべて、それからゆっくりと静かに目を閉じたのである。

息苦しさ、苦痛などが、彼女の肺を支配しているというのに、それでも彼女の顔は穏やかな表情になっていて、意識がしたいと薄らいでいく。

そして彼女は、白い世界に。

・・・あるいは黒い世界に旅立っていったのである。

こことは違う世界へ向けて。

米花総合病院　ロビー。

平次がそこへ着いたときには既に和葉が一人長椅子に座って、自動販売機から買ってきたばかりの冷たいアップルティーを飲んでいた。

「何や、早いお帰りやな」

「園子ちゃん、寝てたんやもん」

和葉は不機嫌そうに頬を膨らませる。

「で、起きた思たらきよとした顔をして『和葉ちゃん、東京にいつ来たの？』・・・やて。寝ぼけてたんやるか」

「・・・さあ」

平次はボーっとした顔をした顔で彼女の横に腰を下ろす。

「平次こそ遅かったやん。何の用やったん？」

「ああ、ちよつと便所行つてたんや、便所。朝から腹の調子が悪う

て我慢しててん」

彼女の問いに、平次はそう言って笑って弁解し、廊下の奥の方を指差してみせた。

「ちよつと、大丈夫なん？」

心配そうに和葉が平次の顔を覗き込む。

「そっぴやさつきから顔色悪いんちゃう？」

「大丈夫や、大丈夫」

平次はそう言って引きつり笑いをして見せた。

「ホンマやの？」

その笑いに疑問を感じ、和葉は幼馴染の顔をじろじろと眺めていた。

「ホンマや、ホンマ」

その笑いは腹痛を隠そうとしている笑いには和葉はどうしても思えなかった。

アタシがいないときに、あの病室で何かあったんやろか、と思った。そういえば博士に言われたのも何か作意的なものがあつたような気がする。しかし和葉は敢えて彼に聞かないことにした。いつもの平次ならたいていのことは包み隠さず話してくれるから。それを隠そうとしているのなら、それほど重大なことに違いない。

和葉は平次を信じていた。

「で、これからどないするん？」

ふつと笑顔に戻って彼女は話題を変えた。

「あ？ああ・・・そっぴやな。行き先は・・・天の神さんのいうとおりや」

平次は少々音程の狂った歌声で一節歌いながら和葉から缶ジュースを横取りする。

「あ、何すんの！」

和葉は怒って彼からジュースを取り返そうとするが彼の俊敏な動作ではどうすることもできない。

「もう、平次！」

まだ一口しか飲んでいないので、あきらめきれずに和葉は頬を膨らませて抗議した。

「ま、ええやん。オレ、今えらい喉乾いとんねやから」

そう言つて彼はゴクリゴクリと喉に音を立てて飲んでいく。

「ちょ、ちよつと平次！」

和葉はあわててそれ以上飲まれないように止めようとしてあることに気づき、彼女の頬がみるみる赤くなってくる。

か、間接キスや・・・）

「ん、何や？そんな変な顔して・・・最後の120円だったんか？」
平次はそんな彼女の様子に誤解して、あわてて財布から120円を取り出すと、彼女の手の上に乗せた。

手の平に乗せられた120円の感触にハッと我に返ると、既に平次の姿は隣にはなく。

いつのまにか平次は缶ジュースを和葉の手に置いて彼女を残し、さつさと玄關に向かつて歩いていたのである。

「平次??」

和葉が呼び止めると、平次は立ち止まって振って、呆れた顔でこう言つた。

「早よそれでジュース買いい？まったくろいやつちなあ、和葉は。時間はあまりないんやから。もたもたしてたら置いてくぞ！」
そう言つて平次はせかせかと再び歩き出す。

「ちょ、平次！待つてえな！」

和葉はあわてて120円をポケットに突っ込むと、平次の後をついていったのであつた。

第17話 灰原哀の依頼（後書き）

祝！半分とつぱー あと半分っ あと半分っ あ、予想では32話までなので（改訂前がそうだったから多分・・・）、最後までお付き合いおねがいしまーすっ。

ながーくなっております。今の文章、必要以上にながーくなっております。おめでとうございまーすっ。（違うと思う。）

書きたいこと書いてたら、収まりきれませんでした。

そして、消したいと思ったけれど、前の文に惹かれてしまったため、全然削除できませんでした（笑）。

・・・そのため、ありえなく長くてごめんなさい・・・。

それでは、ここまでお読みいただき、ありがとうございます！

追伸。

・・・平ちゃんの考えの中で出てきた某少年漫画。・・・こつぶも好きです（ぽっ）。コナン好きで、この漫画好きな人、結構多いのよね。

・・・いい年して好きです（ぽっ）。漫画、借りてます（ぽっ）
買えよ。

ではでは

第18話 名探偵たちの休息

関東圏の中の一角にある、夢の町 トロピカルリゾート。

そこには誰もが子供に返れる夢の世界。一度駅を出ればそこはまさにパラダイス。東にはトロピカルランド、西にはトロピカルマリナランドというそれぞれの遊びのテーマパークが迎えてくれる。疲れたらリゾート内のホテルで休憩することもできるし、おながすいたら最上級の料理を食べられるレストランだってある。予約をすればトロピカルキャラクターがもてなし、自分達が主役になれる誕生日パーティや結婚式もできるのだ。

そう、まさにそこは夢や希望を忘れた現代人にとっての癒しの町。

工藤新一と毛利蘭がその場所にやってきたのは正午を過ぎたころだった。

まず、ゲートをくぐると彼女はきよろきよろと辺りを見回す。ちょうどそのとき、トロピカルランドが10周年を記念するイベントの真っ最中だったので、いろんな装飾品がゲートを飾っていた。

「あ、これ、すごく可愛いっ！ねえ、新一そう思わない！？ちよつとこれ、写真撮ろうよ！」

トロピカルキャラクター『マンゴー坊や』の形をした植木を見つけ、蘭はまるで幼い子供のようににはしゃぐ。

（これじゃ元太たちと変わんねーじゃねえか）

まあ、童心に返るのがこのテーマパークの主題ではあるのだが。それでも毎回毎回、まんまとその策略に乗っている蘭に、思わず文句を言いたくなる。こんなにはしゃぐヤツだったっけ？なんてちよつ

と首を傾げたくなってみたりして。けれど、そんな彼女を見て、今はほっとしているのが事実。

もしかしたら、今の喜びはうわべだけなのかもしれないけれど。少ししか時間がないことにもし彼女が気づいているのならば。

そして気づいていないのであっても、自分には少ししか今の時間を過ごす猶予はない。

だから心から笑ってくれることがほんの少しでもあるように。自分の力で笑顔が増えるように。彼は願っていた。

「ほら！新一、早く早く！」

「おう！ちよつと、待ってろ、おねーさんっ！」

通りがかりの4人の女子大生のグループに声をかける。彼女たちも今日は夏休み。思いつき楽しんでいるのだろ。工藤新一と見えないように、サングラスもかけているし、野球帽もかけてるので、見破られはしないが、ちよつと怪訝そうな感じでそそくさと素通りされた。

「怪しすぎるのよ、その変装。ちよつとイケてないよ？」

ぷつと吹き出して蘭が笑った。うっせー、と新一は口を尖らせる。

「ほら、こっちの方が新一らしい、よ？」

きゅ、と蘭が帽子の向きをかえ、深々と下げた。それから、ひょいとサングラスを取り上げられる。

「らしくされちゃ、困るんだけど・・・」

思わずぼやいてしまうが、それでも蘭がにっこり笑うから、まあ、いつか、なんて考えて。

穏やかな空気が2人を包んだ。・・・が。その次の瞬間。

「あゝっっ！！！！あそこにマッキーがいるよーっ！！！！マニーとモ

ナルドもっ！すごいよー、あのメンバー！ね、新一、いこつ！」
「え、おい！」

遠くにいるトロピカルキャラクターに反応し、蘭は新一の手を引いて走り出す。・・・いい雰囲気だったのに。

「ちょ、待てたら、そんな急ぐと転ぶぞ！？・・・つて、おい！」
蘭があまりに急ぐから、新一はバランスを崩してどてん、としりもちをつく。

「・・・何やってるのよ、大丈夫？・・・んもうつ、ドジなんだから」

呆れたように自分を見つめる蘭。そして通りを行き交う人たちも次々とこちらを見て、くすくすと笑っている。そんな状況に彼は思わず顔を赤くして体を縮こませたのだった。

それはそうと、平次と和葉は一体どこに行つたのだろう。それは若者の街、渋谷・原宿付近を散策していた。

そしてそこで彼らはなんと日売テレビの取材を受けていたのである。

「オレ、西の名探偵服部平次って言っんやけどな」

「平次、自分の名前、もう言わんでええって・・・今入れて4回目やて」

「ええねん、ええねん。オレは服部平次やど。どっかの誰かさんが服部平太郎とか平助とか平太とか間違えるかもしれんからな。一応言うとするだけや。ちょお、そのテレビ前でもんじゃ焼き食つとるキミ、きちんと覚えとき！服部平次やぞ、『はつとりへいじ』『はつ』は、洋服の服、『とり』は空飛ぶ鳥の『鳥』やないぞ、部室の『部』ちゅう字やぞ、平次の『へい』は・・・」

延々、カメラの前で歩きながら演説する平次。カメラマンも引き気味に、しかし少しでもカメラをずらせば平次の般若のような睨みをカメラ目線でこられるから、カメラは彼を撮るしかなかった。

（ああ、こんな、幼馴染とさえ思われとうないわ・・・はずかしゅうて街、歩かれへん・・・）

頬を赤らめる和葉の横で、平次はカメラ目線を保ち続けながら、意気揚々と街を歩いていたのである……。

・・・それは今からほんの10分ぐらいさかのぼる。

2人はクレープをほお張りながら竹下通りを歩いていた、そんなときである。

「ちよつと、キミキミ」

「え？アタシ？」

きょとんとして和葉は振りかえった。イマドキ金色がかった茶髪を肩まで伸ばした30代の男。

「そうだよ。そのポニーテールのキミだよ」

男はそこまで言って、後ろに向かって手を大きく振った。その合図とともに、そろそろと3、4人くらいの集団がやってくる。いずれも20代後半から30代前半くらいの男だ。彼らの手には撮影用のカメラや音を集めるマイクなど重たそうなものを肩に担いでいた。

平次は思わず目を鋭くして、和葉を自分の後ろに隠すと、ぎろりと男たちを睨み、一蹴した。

「何やねん、オマエら。オレの和葉になにさらすつもりや」

その鋭い眼光に、一瞬たじろぐ男達。ドキリ、として和葉は平次を見つめる。

（『オレの和葉』やて・・・？）

ポワン・・・と、和葉のピンク色の頬がさらに紅く染まっていく。

「へえ、キミの彼女なの？関西弁しゃべってるけど観光か何かかい？」

しかし、そんな平次の迫力にもめげずに、一番年上に見える男が、平次に向けて営業スマイルをして彼に聞いた。

「オレの彼女やない！なんつも関係あらへん、よくオレの後、金魚のフンみたいにくっついてくる、ホンマやかましゅーてしゃーないぜんぜんかわいくあらへんただの幼馴染や！」

平次は断固否定する。

（平次……。アンタそれしか口利けんのか……。しかもどっかパワーアップしたのはアタシの気のせいやるか……。？）

むかつとした気持ちを通り越して、呆れはてた気持ちで和葉は隣の幼馴染を見ていた。

「それよりオマエら一体何モンやって聞いているんや。さっさとオレの質問に答えろや！」

凄い形相で平次は10才以上も年上の男達を睨みつけた。男を取巻く周りの男達はまた一步後ずさる。

そこできつやく一番前の年配男はYシャツの胸ポケットから名刺を取り出すと、

「あ、僕は日売テレビの本間といいます」

と言つて平次に差し出した。それから、振り返り、彼は後ろの男たちに向けて何か合図をしたようだった。残りの男達も渋々バッグから、Yシャツからと名刺を次々と彼の手に掌に乗せていく。じろじろとそれを見ながら、平次は名刺と男達の顔を見比べた。それからやつと納得したという顔をする。

「で、その日売テレビさんが何の用や？」

「あ、今ね『ジャイコ』という奥様向けの番組でやってるコーナーで……。ほら知ってるよね。オカマタレントのペー子さん。その人のコーナーでね……。」

「知らん！」

ムツとした顔で平次は和葉の細い手首をぎゅっと掴むと、早足で山下通りを駆け抜けようとする。

「ちつ……」

男があきらめ、別の力モを探そうとしていたところ、

「あ、あれ……。西の高校生探偵じゃありませんか？」

と若いスタッフの一人がつぶやくように言った。

「え？あの……。眠りの小五郎と大食い対決をした……。？」

男がぎよつとして振り返る。

「そ、そうですよ。ほら、何ヶ月前までいたじゃないですか。平成のホームズと謳われたあの東の高校生探偵 工藤新一の対抗馬ですよ・・・確か・・・服部平太郎・・・いや、平助・・・平蔵、平太だったかな？」

「・・・よしつ。変更だ！『西の高校生探偵 服部平太、原宿ぶり旅！』西の名探偵くーん！服部平助くーん」

「・・・何や平次、あんた見て後ろでさっきのオツチャンたち、叫んでへん？」

50メートルぐらい走っただろうか、和葉は平次に手を引かれ、クレープを口にはお張りながら怪訝そうに後ろを何度も振り返った。

「気のせいや、気のせい。それにオレの名前は服部平次、やろ。あんな名前やあらへんやん」

「そうやけど・・・」

それでも和葉は気になるようで、何度も後ろを振り返った。

「でも、どう見てもあのオツチャン、あんたに向かって手をふつとるで??」

「ええんや！そんなん、あるわけないやろ！西の名探偵言われとるこのオレが・・・」

「でも、アンタ人気あるんは、関西のほうだけやろ。こっちは

工藤くんか、眠りの小五郎がダントツやん・・・。アンタのこと知っとる方がめずらしいて」

「うそや！そんなんありえへん！」

ムキになって平次は和葉の言っていることを否定し続けた。

「服部平蔵くーん！！」

「ほら、平次。アンタ追っかけてんやん・・・」

平次のイライラは既に爆発する寸前だった。

それはおとんの名前やから。

・・・それに、あの男たちが今呼んでいた『服部平蔵』すらどんな

人物が知らないであろう。ただ、適当に呼んでいるだけ。それがわかつているだけにさらに苛々が増幅する。

（西の名探偵がよりにもよって名前を間違えられるやと！？しかも、かの有名な作品・・・野村胡堂の書いたあの名作『銭形平次捕物控』の、主人公 銭形平次からもらったこの名前を・・・！！許されへん・・・もう一度言ったら絶対許したらへんぞ・・・）

彼のぎよろりとした瞳は既に憎悪の炎で青く光っていた。

「西の名探偵くーん！服部平太くーん！」

とうとう彼にも我慢の限界が来た様だ。

「せやからちやうつてゆうとんねやろ！自分ら殺されたいんか！？」
平次は再び和葉の手を引いて、全速力で彼らのもとまで走っていったのである・・・

そう、それはまさに闘牛士の手にした真つ赤な布を目指して突進する、死期が近くなった闘牛のように。

一方、米花総合病院815号室。

哀を囲むのは、博士、園子、そして3人の子供達の5人だ。哀は一時的な発作で、その症状としては危険性はないという。

しかし、未だ彼女の熱は41度を回っていた。

そして彼女が意識がなくなった原因は、熱の急激な上昇である。なぜ、あの短時間で彼女の熱が上昇したのかは不明だが・・・。

とにかく、このまま高熱が下がらなければ、彼女の体が弱って死の危険さえ考えられるというのが担当医師の見解だった。

解熱剤を投与しても、一向に下がらない彼女の熱・・・。

子供達はおろおろと眠り続ける哀を見守ることしかできなかった。

昨日、彼女が最初に倒れた時とまるつきり同じような重い空気が病室に立ち込める。

しかし、この空気は昨日よりさらに重いような気がした。

「灰原さん、死んじやいやです・・・」

「哀ちゃん、今度おそろいのワンピース、ママに作ってもらうんだよね！」

「今度給食でうな丼が出たら、うな丼の上のウナギ、全部分けてやるからよ！だから・・・早く起きろよ！」

子供達はその瞳から大粒の涙をポロポロ流していた。

そして、彼らは、彼女の熱く、汗で湿った小さな手を6つの手でぎゅっと握っていた。

「ちよつと待ちなさいよ、アンタ達」

園子の明るい声が、重苦しい空気を外に押しやるかのように、病室に響き渡った。

「バカね。もう死んじやうような雰囲気よ、これ。大丈夫よ、まだ下がらないといっているわけではないわ。だってまだ24時間も経っていないのよ」

園子はそう言って優しく子供達の頭を撫でていく。

そしてチラリと前でうなだれている博士に目をやった。

「博士。何ボーっとしてるのよ、子供達に不安を与えるつもり？アナタがそんなんでどうするのよ」

「あ、ああ、そうじゃな・・・」

博士は力なく笑うと、あふれそうな涙を乱暴に手でぬぐった。

時刻は2時を回っていた。

到着してすぐ園内のレストランで食事し、いっぱいになったおなかを休ませるために、トロピカルリゾートを運行する遊覧船に乗り、リゾート内を散策し、お土産などを見て回った。そして各地で、おのおののキャラクター達に遭遇してはスタッフの人に写真を撮るよう頼んでいた。

トロピカルランドにあるイキテレラ城の前。その前に笑顔で手を振

るイキテレラ姫を見つけ、蘭は大きな瞳を輝かせて新一の手を強く引つ張った。

「新一！あそこにイキテレラがいるよ！すっごく綺麗！ねえ、一緒に撮ろう！」

もう、カメラフィルムは29枚を過ぎようとしていた。あと5回で新しいカメラを買わなくてはならない。

しかもそのときはそう遠くないような気がした。さすがにぐったりした彼は思わずちょっと待ってくれ、と言って立ち止まる。

おかしい。

どこかぜえぜえ苦しくて、呼吸が乱れている。

けれど、それもずっと休むこともなく、いろんなところを回ったせいだろう、と心の中で納得させた。

「大丈夫？疲れた？」

そつと彼女がハンカチを差し出して、それから彼の汗を優しく拭いた。その表情は本当に心配そうに自分を見つめていて。

「ああ・・・心配すんな。ちょっと走り回って疲れただけだから。・・・久しぶりにはしゃぎすぎだな」

「そっか」

心からほつとした顔で微笑むから、新一は思わず胸が痛くなる。今回、蘭の前で倒れたとき、ぼんやりとした意識の向こうで蘭が泣きそうな声で叫んでいたのを聞いていた。

『新一は、どうして何度も何度もあんな発作ばかり・・・。新一どこか悪い病気にかかっているんですか！？』

きつとずっと彼女の中で、辛い思いをしていたのだらう。だからこそ、彼女の目の前でつらいなんていう表情はできない。彼女に気持ちを伝えて、それから彼女の知らないところで元に戻らなければ。

いつ、また発作が出るかもしれないこの体。早く言わなければ。そして、彼女の前から消えなければ。一緒にいたいのに。工藤新一として、毛利蘭とずっと一緒にいたいのに。

でも、彼女を泣かせるのは辛いから。彼女を苦しめるのは怖いから。今、言わなくては。

「あのさ、蘭」

「うん？」

自分を見つめる蘭が不思議そうに微笑む。

「俺・・・」

「うん？」

言葉が浮かんでこなかった。何を言っているのかわからなくて。血が上っていた。

「俺、あの・・・そ・・・その」

「うん・・・トイレ？」

「ちがつ・・・」

「・・・じゃあ、『ありがとう』？はい、どういたしましてv」

「違う」

「何だ、やっぱりトイレじゃない。多分トイレなら向こうにあると思うんだけどな？ちょっと見てくるね」

相変わらずだ。彼女は勝手に勘違いして、いらぬ気遣いをして一人自分を残して行ってしまった。

「ったく・・・もう！」

新一は思わず声を張り上げた。

『意気地がないのね』

「え？」

突然、どこかで聞き覚えのある声言われたような気がして新一は思わず振り返る。誰だろう、振り返れども、知り合いはそこにいるはずもなく。

「・・・？」

首をかしげ、彼は新一のためにトイレを探している彼女を追いかけて、足を一步踏み込んだ。

『何を躊躇っているの？』

その声は確かに彼の耳元で聞こえたような気がした。

「・・・まさか」

いるとしたら、彼にその言葉を投げかけるとしたらその相手は・・・

「・・・灰・・・原？」

緋色の髪を持つ、大人びた表情をした一人の少女が彼の脳裏に浮かぶ。

なんとなく、胸騒ぎがした。

新一は、無造作にポケットに手を突っ込んだ。探偵バッジがまだそこに。

昨日、使おうと思って結局使えなかったバッジ。彼はそれをぎゅっと手で握り締めた。

そのとたん・・・pipipipi・・・という通信音が入って。

『・・・ナンくん、コナンくん・・・どこにいるのオ・・・いたら返事してよオ・・・お願い、哀ちゃんを助けて・・・お願いだから・・・』

幼い女の子の消えるような、か細い声がそこから聞こえてきた。

ぎくり、として彼は手元を見つめた。それはコナン（自分）を呼ぶ歩美の声だった。

第18話 名探偵たちの休息（後書き）

これもかなり変えました

デート部分が。ちょっと新ちゃん、いやな新ちゃんになってました。元祖の新ちゃん、嫌いです（おい）

なので、結構書き換えました。そして少しラブ部分を（笑）。

ちなみに、トロピカルランドの元祖は千葉の某所にある某ランド。
・マッキーは、榎原敬之・・・ではありません（笑）。いや、あたしの頭の中ではそうなんだけど。

以上、ミッキーファンで、マッキーファンのこつぶでしたっ ー
までお読みいただきまして、ありがとうございました！

第19話 遺言 ー新一の涙ー

米花総合病院 815号室前の廊下に一人、吉田歩美は立っていた。光彦、元太、園子、博士の4人は病室で、苦しんでいる哀の周りを囲んでいる。

そんな中、歩美だけはたった一人、彼らとは離れて。

なぜ歩美だけが廊下にいるのか。

それは彼女がある人物にSOSを求めているからだ。博士に作ってもらった探偵バツジを使って。

その人物とはもちろん、江戸川コナン。彼なら大切な一人の友達を救えるかもしれないと思った。いや、彼なら絶対哀ちゃんを助けてくれる、そう信じていた。けれどその問題の彼の所在は、昨夜花火大会の土手で離れたきり、一切わかっていない。

今朝、哀の言葉で慰められたものの、『もしかしたらコナン君はとんでもない事件に巻き込まれているのかもしれない。』という一抹の不安は、まだ彼女の中で完全に拭い去ることはできなかった。

しかし、それでも歩美は彼に助けを呼びたかった。どこかでこの通信を聞いてくれていると思ったかった。生きていると思ったかった。

『歩美・・・歩美、どうした？泣いてるのか？？』

何度目かの通信。歩美はハツとして両手で握り締めていた探偵バツジを見つめた。

「・・・コ・・・ナンくん??」

『ああ・・・どうした？灰原に何かあったのか』

そのとたん、蛇口を力いっぱいひねったように、彼女の瞳からボロボロ涙が溢れていく。探偵バツジに顔をくつつけるように、「あつたよ!」と大声で叫んだ。ここが病院であることすら彼女は忘れていた。続けて、

「コナンくんのバカっ！」

思わずバツチに向かって叫んでいた。

『え、おい・・・？歩美ちゃ・・・』

「今どこにいるの！？すぐ帰ってきて、帰ってきてよ！！お願いだからっ・・・お願い・・・」

言葉にならなかった。涙が喉につまり、うまく言葉が出なくて。

今、彼が何をしているのか、何ですぐに来てくれないのか。

いつもの彼なら彼女がピンチになったらすぐに飛んできてくれるというのに。

『灰原は今・・・どんな状態なんだ？』

震えるような彼の声。少し、上擦った彼の声。

『元氣、なんだろ？』

元氣？元氣なわけない。コナンくんは何も知らないから。

そう。彼は何も知らないんだ。哀ちゃんがどれだけ苦しんでるか全然わかってあげてないんだ。

哀ちゃんの苦しみなんで、コナンくんはどうでもいいんだ。

哀ちゃんはあるなにも苦しんでるのに・・・。

考えれば考えるほど胸が痛くなってくる。きりきり、痛くなってくる。

『あゆ・・・』

「元氣じゃないよ、全然！」

思わず叫んでいた。もう涙声になっていて、そう言葉として口から出ていることすら、自分自身にはわからなかった。

「コナンくんがいない間に・・・哀ちゃん、大変なことになっちゃってるんだよ！意識がなくなってる・・・それで。うんうん、唸つて。起こそうとしても起きてくれない・・・どうしよう・・・哀ちゃんが死んじゃったら・・・どうしよう！！ねえ、コナンくん、どうし・・・どうしたらっ、ねえ！？コナンく・・・」

『落ち着け、歩美!』

コナンの激しいその声に、歩美はハッと正気に戻り、顔を上げた。
「うん・・・」

歩美は素直にうなずいた。なんとなく、コナンの声に異様な力が感じられた。いつものコナンではないような・・・。

なんていうか、すごく動揺しているようで・・・。だから自分が彼を困らせてはいけない。と幼いながら歩美は決意したのだ。好きな人をこれ以上困らせてはいけない。自分がしっかりしなくては・・・。自分が動揺していることに、コナン自体も気づいたのか、小さくごめん、とつぶやく。そして、

『・・・俺がいなくなっただけのあいつの様子、詳しく聞かせてくれないか・・・?』

いつものトーンに声を落として彼女に聞いた。

「・・・うん」

歩美はコナンと土手で離れてから今までのことをできるだけ丁寧に話した。「・・・そっか」とつぶやくコナンの声は、少し重く聞こえた。

「・・・コナンくん?」

心配になって歩美は彼に呼びかける。その呼びかけに、ゆっくりと、諭すような彼の言葉が返ってくる。

『・・・大丈夫。灰原は死にやあしねえよ』

「どうして?」

思わず間髪いれずに歩美は尋ねる。

『どうして?・・・』

コナンはちよつと困ったように言葉を詰まらせた後で、いつもの優しい口調になる。

『アイツはお前達を残してサッサと死ぬようなそんな自分勝手な奴じゃねえからさ』

そう。いつもならそれで彼女も納得するはずだろう。しかし今の彼女はそれで納得する気分にはなれなかった。

震える声で、「うそだ・・・」とつぶやいていた。

『・・・え？』

案の定、彼の戸惑っている様子がすぐに伝わったが、それでも歩美は言おうとしていた言葉を飲み込むことはできなかった。

「コナンくんは今の哀ちゃんを見てないからわからないんだよ。ホント、死にそうなんだよ。すごい苦しそうなんだから！コナンの言うとおり、哀ちゃんはいつでも私達を大切にしてくれてるってことはわかってる。でも・・・」

歩美はとめどなく頬に伝い落ちる涙を手でぬぐうと、再びバッジに向かって口を当てる。

「哀ちゃんは・・・このままじゃ死んじゃう。コナンくんが来てくれないと絶対・・・」

『バ、バー口。オレがアイツの許に行ったらって、アイツがよくなるなんてことは・・・』

「なるよ。だって・・・だって哀ちゃんは・・・」

そこまで言って、コクリと唾を飲み込んだ。

「哀ちゃんはコナンくんのが好きだから。歩美と同じくらい・・・」

・歩美がコナンくんのこと思ってるのとおんなじくらい」

『！？』

「歩美たちじゃ哀ちゃんは助けられないよ！コナンくんじゃないと・・・」

・・だめなの！」

『え、あ・・・』

歩美はそこまで言って、きゅつと目をつぶり、相手が何か言つのを聞く前にバッジをOFFにした。

ときどき、ときどき。胸の鼓動が止まらなくて。

ぎゅつとバッジを握り締め、天を見上げて、再びあふれ出しそうな涙をぐつと飲み込んだ。

「ごめんね、哀ちゃん・・・。歩美、とうとう言っちゃったよ」

一方、トロピカルランドのイキテレラ城近くの公衆便所の男子専用

の個室内。蘭が見つ付けてくれた場所だ。コナンもとい工藤新一はぼんやりと通信不能になった探偵バッジを見つめていた。

「・・・灰原がオレのことを・・・???ハハ、まさか」

蝶ネクタイ型変声機で変えられたコナンの声のままで、新一は乾いた笑いをした。

ありえない。そう言おうとして、はたと言葉を止める。

思い当たる節がないわけでもなかった。そういえば、以前、母である工藤有希子にも同じようなことを言われていた覚えがある。あのころは全然本気になんてしようとは思わなかったけれど。

『お願い・・・哀ちゃんを助けて』

『哀ちゃんは・・・このままじゃ死んじゃう・・・』

『あたしたちじゃ哀ちゃんを助けられないよ!』

歩美の痛烈な言葉がまだ、彼の心の中に深く突き刺さったままだった。

「さて・・・どうすっかな・・・」

新一は変声機と探偵バッジをポケットに詰め込むと、個室を後にした。そして蘭の待つ、イキテレラ城前のベンチまで駆け足で走り出そうとした、そのとき・・・。

どつくん・・・どつくん・・・

急に心臓の痛みが彼を襲い、彼は思わずその場所にへたり込んだ。

「また・・・???」

苦悶で歪む。

体が熱い。焼けるように、体中が焦げるように熱い。

（やっぱり来ちゃったか・・・）

灰原の言葉が頭に浮かぶ。

『健康な場合で服用しても効果が出る代わり、数時間で発作を誘発させる副作用を持った薬。32時間と位置づけてはいるけれど、無理すればいつでもまた発作が起こるかわからない不安定な薬』

無理はしていた。文化祭のとき以上に。だから、発作が出やすいのはわかっていた。

けれども、まだ蘭に何も伝えてないのだ。何も。

このままでは、彼女に何もいえないまま、コナンの姿になってしまふというのに。これでは文化祭のときの二の舞だ。

そして、今回自分がいる場所はトロピカルランド。

蘭と出かけ、何年間も一緒に過ごした彼女を残して、突如自分が姿を消したいわくのあるこの地で、再び彼女を置いて消えてしまうことは極力避けたかった。

きっと、彼女に思いも寄らぬほどの心傷を残すに違いないから。

また苦しむ彼女を見たくないから。

（お願いだから、元に戻らないでくれよ）

蘭の前で告白するまで、持ちこたえて欲しかった。

けれど、無情にも時は残酷で。

痛さの中で、細胞が収縮しているのが彼にもわかっていた。リズムカルに、心臓の音と同じテンポでそれは行われていた。

どくん・・・どくん・・・どくん・・・

「う・・・がぁ・・・」

心臓がもぎ取られる・・・そんな感覚に襲われ、新一は必死に自分

の胸を掻き毟る。

いつもの気の遠くなるような痛み。いや、それ以上かもしれない。何度体験しても慣れないであろうこの感覚。体が切られるような、伸ばされるような、挟まれるような、骨がとろけるような、砕けるような。熱さと寒さと……。全てが一度に来る、体験し得ないと、想像も絶するであろうほどの痛み。

きつとこの痛みは何度体験してもなれない。多分、この先もずっと・。。

「くお・・・」

そのとき、フツと誰かの手が差し出されたような気がした。小さくて、白い綺麗な手。子供の手のようだ。新一は痛む胸を押さえながら、手の持ち主を見ようと必死に顔を上げた。そこで彼は驚きのあまり思わずカツと目を見開いた。その少女は・・・。

・・・哀だった。

「・・・は、灰・・・」

彼女の体は白く透き通っていた。そして哀しそうに新一の顔を見つめていた。

「おま・・・その体・・・」

彼女が新一の胸に手を当てたその瞬間、冷たい感触がずっと胸のあたりを覆った。不思議な感じ。

「はいば・・・ら？」

『すまないことをしたわね。こんなどうしようもない試作品を作ったばかりに・・・』

彼女の言葉が頭の中で響く。

新一は痛みの中で思わず苦笑いした。なぜか笑えた。目の前の光景が幻想なのか、それとも本物なのか、新一にはわからなかった。で

も、そんなことは今はどうでもよかった。

（やけに素直じゃねえか・・・）

頭の中で自然と語りかけていた。いわゆるテレパシーというやつだ。いつの間にか脳内で変換していた。

今、考えても不思議だった。彼女が触れたとたんに、胸の痛みはゆつくりと引いていつている。

いや、それだけではない。体の熱さ、骨が溶けるような痛みもすべて・・・。まるで嘘だったみたいに。

『あなたと話すのもこれで最後かもしれないから・・・』

哀はそういつとフツツといったもの大人びた笑いを浮かべる。

（んな言葉、むやみに言うもんじゃねーぞ）

新一は思わず語調を強めた。

『・・・私ね、あなたに言っておきたい言葉があるの』

（・・・オレに？）

新一はある予感を感じながら、哀に尋ねた。歩美の言葉が頭の中に浮かんだ。

『まず、博士ね。・・・あの人、最近糖尿病の気が見られるわ。健康管理はしていたつもりだけど・・・』

（・・・おい）

新一は思わず乾いた笑いを浮かべる。

『真面目に聞いて。私は本気よ』

哀は少し言葉を鋭くした。

『これからのことを言うわ。・・・解毒剤、今は試作品しか作ることはできなかったけど、組織を倒せば完璧な薬のデータは必ず手に入る。だから、あなた達の手で解毒剤完成品を作りなさい。大丈夫、私が初心者でもわかるようにいろいろ書いたメモを引き出しの中に入れて置いたから・・・。ただ、今回の試作品の作り方は燃やしておいたわ、もちろんあれは今回の一つだけ。2個目はない。』

（・・・え？）

新一は驚いて少女を見上げた。

『あなたの苦しみを見るの、もうこれでたくさんだから・・・』
少女は哀しそうにつぶやいた。そしてうつすら口元に自嘲の笑いを浮かべた。

『そうは言っても・・・化学の知識のないあなた達があのような難しい薬を完璧に作りこなすとは・・・思えないけど。だからもし完璧に元に戻りたいのなら、薬のデータを入手したその後に、信頼における誰かを探すことね・・・。』

彼女はそう言ってからようやく彼の胸に当てていた手を離れた。いつのまにか胸の痛みは完全に引いていた。

（なあ・・・）

『大丈夫、心配しないで。世界には私よりも優れた科学者は沢山いる。そしてこの解毒剤に興味を覚えた・・・飢えた科学者といった方がいいかしら、彼らはきつと喜んで引き受けてくれるから』

（そうじゃなくて・・・）

『それから・・・』

哀は彼が言う全てを上から遮った。しかし、優しい表情を浮かべて彼を見下ろす。

新一はだんだん視界が滲んで見えなくなるのを感じていた。

『・・・元に戻っても、あの子達を大切にしなさいよ。彼らはあなたのことを本当に・・・特に吉田さんは・・・』

（バー口。お前に言われなくてもわかってるよ。オレは、お前よりアイツらとつきあいが長いんだぜ）

いつの間にか目頭が熱くなっていた。水分が下に向かって落ちていく。それを涙だ、いうことを彼は認めざるを得なかった。「泣く」という行為をしたのは一体、何年ぶりだろう。哀に泣いている姿を見られたくなくて、新一は思わず下を向いて、両目を袖口でこしごとくこすった。そして彼が再び顔を上げたとき、目の前の哀の体がさつきよりずいぶん透き通っているのがわかった。

『それから・・・蘭さんを大切にしてくね・・・彼女、失ったらあな

た、後悔するわよ』

（だからおめー・・・何で・・・そう、いつつと言わねえことばかりいうんだよ・・・）

こんなのは今、聞きたくない。それを聞くのは今じゃない。こんな状況のときじゃない。お互い笑って、心から笑ったり、怒ったりして。顔と顔をつき合わせて。

今、こんなときに言うことじゃないのに。

どうして、灰原はそんなことを言うのだろう。

『だって・・・最後くらい素直になりたいじゃない』

哀はそう言って泣き笑いのような表情を浮かべた。そして、『さようなら・・・』と言う言葉とともに、彼女の体はみるみる薄くなり、風が攫って行ったかのように、消えてしまったのである。

「・・・灰原・・・」

彼女の名前を呼んだあとで、彼は再び自分の意識が少しずつ潮が引いていくように、遠のいていくのを感じた。

ここで眠ってはいけない。目を開けたその瞬間、哀しい言葉を聞かされるような気がして・・・。

だから必死に起きていたかった。寝てはいけないと思った。

はいばら。

彼女の名前を呼ぶ。

死ぬなよ、灰原。

薄れいく意識の中で、彼の思考が活動する限り、何度も何度も彼女

の名前を呼んだ。

彼女をどうにかして、自分の許へ、手繰り寄せたかった。
するするとどこかへ逃げてしまうようなそんな気持ちで彼を支配していた。だから、何度も、何度も。

思考が生きている限り、彼女の名前を呼んだ。

絶対助けに行くから……。だからそれまで。

「……待つてろ……。よ」

「……!!!!」

遠くで、誰かの声がした。

第19話 遺言 〱新一の涙〱（後書き）

ふふふ、加筆修正加筆修正っ 何だか楽しい加筆修正っ

前よりかなり重くなりました（笑）。

歩美ちゃんの言葉とか、いっぱい書き加えてみました。もっともっと、歩美ちゃんには言ってもらいたかったんです。

何だかホント、このシーン楽しい。

いやいや、哀ちゃんすごく辛いめにあわせてるのにね。うふふ、いじめっ子こつぶです。

それでは、ここまでお読みいただき、ありがとうございました！こつぶでした！

第20話 救いの手？

気が付けば彼女ははるか彼方へ続く道を歩いていた。
先が見えない。何も見えない。

見えるのは闇。

見えるのは自分が歩く道のみだった……。

20 救いの手（前編）

米花総合病院 815号室。

そこに並ばれた2つのベッド。その所有者それぞれの意識は戻らぬ
ままである。彼らの名前は、灰原哀。……そして、工藤新一……。

彼は2時間前にトロピカルランドから蘭の付き添いによつて救急車
で搬送されていた。

彼の帰りが遅いことに心配して、近くのベンチに腰掛け、彼の帰りを
待っていた蘭が公衆便所の近くまで足を運んだとき、彼が倒れて
いくのを発見した。

そう、今回の第一発見者は彼女、毛利蘭だった。

「どうしてこうなっちまったんだよ……」

「まさかまた新一お兄さんも倒れるなんて……」

元太も、光彦もまだ今の状況についていけないようで、青白い顔で
じっと2人の状態を見つめていた。

どうしてこんなにも身近な人が、こんなにも短期間に辛い目にあわ
なくてはいけないんだろ。誰もがそう思っていた。

第一発見者だった蘭は、ただ彼のごつごつした手を握り、何度も「
新一……新一」と小さな声で彼の名前を呼んだ。園子がそんな彼
女の様子を心配し、力強く彼女の肩を抱く。今まで以上に感じられ

る重い雰囲気。一体これからどうなってしまうのだろう、自然とそんな考えがほぼ全員の頭に取り巻いていた。

しかしそんな空気を破ったのはある一人の少女の言葉だった。

「大丈夫。・・・大丈夫だよ」

歩美だ。歩美がきりつとした顔で周りを見渡した。10の瞳が一斉に歩美に向けられる。今の状況がウソみたいに、しつかりとした顔で、足取りで歩美はその床を踏んでいた。

「だって・・・コナンくんが助けてくれるもん。コナンくんが来てくれたら、きっと2人を救ってくれる。コナンくんはヒーローなんだから！」

歩美はそうはつきりとした声で言った。

大丈夫だ、彼なら。だって。

「哀ちゃん」

蘭が震える声で遮った。

「・・・それでも、たとえコナンくんがみんなを救うヒーローだったり、救世主だったとしても。・・・世の中には救えないものもあるのよ?・・・新一だってそうじゃない。あんなに苦しんで」

うう・・・と嗚咽を漏らし、泣く蘭に園子はあわてて彼女の手をそっと掴み、別の部屋へと連れていこうと席をたつ。今の蘭は少し疲れている。そう誰もが思った。痛々しくて、見てられない。思わず皆の顔が悲しそうに歪んだ。

きい、とドアが開くとき、歩美は大きな声で言った。

「・・・信じてて。きっとコナンくんは哀ちゃんも新一お兄さんも助けてくれる。・・・私は信じてる。・・・だから、おねーさんも信じてて。疑わないで!」

驚いたように自分を、歩美を見つめていた。

けれども、歩美はそのしつかりとした表情を崩さなかった。

誰が、何を言っただって、自分だけは信じていた。

「・・・そうね、・・・信じることにするね、ね、蘭？」

園子が蘭の肩をぽんと再び叩くと、蘭がうつすら微笑んだ。それを見届けると、園子が一旦歩美の方に振り返り、小さく「ありがとう」とつぶやいた。それは本当に声にもならなかったけれど、歩美に十分届いていた。ばたり、とドアが閉まり、3人だけが取り残される。まるで張り詰められた空気が一瞬にして解放された。

「・・・歩美ちゃん、強いですね」

光彦がそうつぶやいて、歩美の顔を見上げた。

「こんな状況でよく・・・」

「うん、オレには耐えられねえよ・・・。コナンから連絡はねえしよー・・・」

「あつたよ」

「「!？」」

その言葉に驚いて光彦も元太も歩美の顔を凝視した。

「すぐ帰ってくるかは判らないけど、でも無事だったことはわかったから・・・。だから、大丈夫だよ。・・・ね、元太くんたちも信じようよ？それが米花少年探偵団でしょ？」

「ああ、そうだな！」

「・・・歩美ちゃん」

心から喜ぶ元太に対して、光彦はただ黙って自分を見つめていた。そんな視線を感じてはいたけれども、歩美の言葉はけして強がりではなかったから。あえて、にっこり微笑み返した。

（だって・・・私、きちんと哀ちゃんのキモチ伝えたもん。コナンくんなら、絶対裏切ったりしないんだから・・・）

それは確かなことではなかった。

しかし歩美は絶対コナンが2人を救い出すことができると思っていた。

そう、それが彼女の思う『江戸川コナン』だから。

「ここは・・・何処かしら」

哀はいぶかしげに辺りを見渡しながらつぶやいた。

どれくらい歩いたのだろう。何時間同じ道を歩いていた気がしていた。こんなになっすぐ続く暗い道なんてこの辺にあっただろうか・・・。

あつたとしてもなぜ自分はここにいるのだろう。確か自分は熱を出して病院に運ばれたではないか。

そして気が付けば遊園地に行つて新一に自分の言いたかつたことを伝えたはずだつた。本当に大切なことは言えるはずもなかつたが・・・。

おや、と彼女は思った。

・・・『遊園地』・・・？

なぜ自分は遊園地なんかに行ったのだろう。病院にいたはずではなかつたか・・・？？？

そこまで考えてから、ハツとした。

「私、死んだの・・・？？？」

そういえば。

彼女は意識が薄れていくとき、ふわりふわりと軽くなっていく感覚を覚えていた。

そして、自分はベッドに寝ている『自分』を眺めていた。『自分にそっくりな人形』のような気持ちでただぼんやりそれ（自分）を見ていた。

あれは人形じゃなかった。人形ではなく、抜け殻になった自分。

（自分が死んだことも知らないなんて、私も相当間が抜けているわね。あの子達と出会つたからかしら・・・）

哀は思わず苦笑いを浮かべてから、ふうっと大きく息をついた。

こんなにも死を目の前にして落ち着けるとは思わなかった。この日が来ることをずっと心待ちにしてたといえ・

「ほんとに、そう??」

哀はその声に振り返った。50メートルほど離れたところに、哀と同じくらいの年齢の女の子が立っていた。

肩まで届くか届かないかのサラサラの黒髪で、くりくり丸い大きい瞳を持ち、かわいらしい笑顔が印象的な女の子。

叫んでいるわけではないのに、彼女の声はよく聞こえる。まるでお風呂の中にいるように辺りに反響し、エコーが心地よく耳に入っていた。

「あなた、誰？」

自分たちはどこにいるのか。自分の声も反響していることに気づき、哀は新鮮な驚きを感じた。

となれば、ここが『死後の世界』というものが。

どこかで見たような顔で、なんとなく親しみやすい雰囲気を持っていたせいか、思わず哀の口元が綻んでいる。

「私、哀ちゃんのお友達だよ」

「お友達??」

哀は聞き返した。

「うん、そう!!」

女の子はいつの間にか哀のすぐ横にいる。いつのまに移動したのだろう。あんなに遠く離れていたのに。

「私ね、哀ちゃんのずーっとそばでいつも見守ってたの」

女の子はそっと哀の頬を撫でた。そのとたん、思わず哀は一瞬身震いして後ずさった。

・・・すごく、冷たかった。氷のように冷たい手。まるで死体に触られているかのように・・・。

いや、彼女は『死んでいる』。そのことはわかっている。しかし現実には彼女はこうして目の前で自分と話しているのだ。

そしてそのことはやはり哀自身にとって受け入れ難いことだった。そんな哀の様子をよそに、女の子はなおも楽しそうに彼女の周りをくるくると歩き回った。消えては現れ、また消えては現れの繰り返し。

（幽霊なんていないと思っていただけで・・・目の前で見せられたら受け入れざるを得ないわね・・・）

そう思った後になって、哀は自分の考えに思わず苦笑する。

「そういえば、私も、もう死んでいるんだっけ・・・」

「死んでないよ！」

その声に哀は振り返った。女の子はいつの間にかまた哀の目の前100メートル先の方に立っている。

「哀ちゃん死んでない。まだ、生きてるよ！」

「生きているの・・・？」

哀は思わず少女に聞き返した。

やっぱり簡単に死なせてはくれない、このことで彼女は自分の運命を確信した。

彼に言ったことはウソではなかった、と自分自身が証明した。

・・・早く楽になりたいのに、楽にさせてくれない。

「うん！・・・でも、この道を早く戻らないと、哀ちゃん本当に死んじゃう！だから・・・早く今のうちに・・・」

少女はぐつと彼女の手を掴み、もと来た道を引き返そうとしたが、哀は掴まれたまま、その場をじっと動こうとはしなかった。ハッとした顔で少女は哀を見上げる。

「どうして・・・??？」

「この道を進めば、私は確実に死ねるのね」

「え？」

「・・・私は戻らない。そっちには行かないわ」

ごめんなさいね、哀はクールに笑った。そして前に進もうとした、そのとき。

「哀ちゃん!!」

少女は再び彼女の手を掴むと、叫んだ。

「だめええええええ!!」

その言葉に哀は思わずびっくりして体を硬直させる。少女は目に涙をいっぱいためて哀を睨んでいた。

「哀ちゃんは今、死んじゃいけない人なの!死んじやったらせつかく掴んだ幸せ、みんななくしちゃうんだよ。大好きだったみんなとも・・・逢えなくなるんだよ。それでも、いいの!？」

その言葉に、哀はクスリと自嘲の笑いをうかべ、うつむいた。

「確かにそう・・・私は今、失いたくない人がたくさんいる。もう、逢えないなんて辛いことよ。だけどね、現実に関わった人みんな、いつ死ぬかわからない運命にさらされているの。だから・・・私がいなくなれば・・・」

「哀ちゃん!!」

「もう、懲り懲りなのよ・・・自分のために大切な人を失うなんて・・・」

哀はそう言つて少女に掴まれていた手を解くと、彼女の脇をすり抜け、ゆっくりと歩き出した。

「志保!!」

そう叫ばれた瞬間、哀は思わず立ち止まった。そして、恐る恐る振り向いた。

が、もうその時には既に少女の気配は消えていた。

（さすがにあきらめたようね・・・）

哀はふうつと小さくため息をつく。それから、また一步一步足を前に進めた。

（それにしても、こんな自分をあんな一生懸命に死から救い出そうとしていたのだから、案外ご先祖様かもしれないわね・・・私の名前、何も言わないのに両方知っていたし）

そこまで考えて、哀ははたと、その考えを停止した。今の少女……まさか。

「お、姉ちゃん……???」

振りかえったそのとき、既に少女の姿はなかった。

そう、確かに今の人物は宮野明美の幼少時代の姿だった。

哀は当時の姉の姿なんてあまり記憶がない。家族に逢うことを組織が禁じていたから当たり前ではあるのだが、それでも彼女はあの少女が姉であることを

既に確信していた。

なぜ、さっき気が付かなかったのかという後悔で胸がいっぱいになっていた。涙がボロボロ止め処なくあふれていた。

「お姉ちゃん!! お姉ちゃんなんですよ! ?お願い。もう一度……私の目の前に……出てきて……1度だけでいいから……。お姉ちゃん!!」

そう叫んだ瞬間。目の前の闇がまるで扉が開くようにゆっくりと白い光に変わっていった。

眩しい……

突然射るような光に目がくらみ、哀はその場に立ちすくんでいた。しばらくして目を開けると、一面に綺麗な花畑が広がっていた。色とりどりのチューリップ、コスモス、パンジー、ガーベラ、スイートピー、カスミソウ、ユリ……四季に関係なく、さまざまな花が咲き乱れている。

「うわあ……」

思わず声をあげる。こんなにたくさんの花が一度に咲いているところを、彼女は見たことがなかった。

どこまで続いているのかもわからない。とても芳しい香りが鼻孔をくすぐる。

しかしそこで彼女はわれに返ると、花畑を見渡しながらゆつくりと花を掻き分け、前へ前へと進み始めた。

どれくらい歩き続けただろう。花を掻き分け、掻き分け、手には気が付けば刺をさしたのか、葉っぱで手を切ったのか、無数の小さな傷ができていた。

「いつまで歩けばいいのかしら・・・」

だんだん変わらない景色に飽きてきたころ、突然目の前の視界が開けたのだ。

これまでに見たこともない綺麗な川が哀の目の前に現れた。

広い、広い綺麗な川。

川の色は虹色に輝き、見る角度を変えればまた違う色にも思える。透きとおっていて、とても綺麗な・・・

「これが・・・三途の川」

哀は思わずコクリと息を飲みこんだ。

（この川を渡れば、お姉ちゃんにまた逢えたり、もしかしたらお父さんにも、お母さんにも逢えることができるのかしら）

そんな微かな期待を胸に、哀は足をそつと川の水に入れてみた。

ちやぷり・・・

「冷たい・・・」

彼女は思わずつぶやいた。しかし、それは体をすつきりさせてくれる冷たさ。あまりの気持ちよさに哀は胸を躍らせ、さらに足をなおも進めた。

いつか歩美が言っていた言葉が頭に浮かんでは消え、また浮かんでは消えてゆく。あのときはばからしい、と思つて気にも留めなかったけれど。

『三途の川はあの世とこの世の境界線なんだって』

『三途の川はね、とても綺麗なところで、向こう岸で、その人に深

く関係している人が手を振ってくれるの。そして、こっちへおいで・
・。って誘うんだって」

その声が頭に浮かんだとたん、彼女はうつむきがちだった顔を上げ、
そこで立ち止まった。そして向こう岸にいるべき人物を探した。

・。だれもない。

哀は思わず苦笑をした。そしてまた視線を下に戻すと、再びゆっくり前へ歩き出した。前へ進むごとにだんだん深くなってくる。

足が届かなくなると、彼女はゆっくりと泳ぎ始めた。

そんなに遠くない距離。溺れることもないし、溺れたとしても何も問題ない。

だって私は黄泉の国に行くのだから・。2度死んだ人なんてめったにいないだろうから、恥をかくのは嫌だけど・。

そんなことを考えながら、哀は気持ちよさそうに前へ前へ泳ぎ進めた。・。そのときである。

・。足を誰かにすごい力で掴まれたのだ。

「だ、だれ!？」

思わずばしゃばしゃと足をばたつかせて抵抗した。

「い、いや!!!!!!!」

「志保ちゃん・。志保ちゃん・。」

轟くようなその声を聞き、哀は思わず凍てつくような恐怖で意識が遠のきそうになった。

いつか聞いたあの声。杯戸シティホテルのあの酒臭い部屋で聞いた、あのしゃがれた低い声・。

「君だけを幸せにしないよ・。」

水の底からその声は響いていた。

（下を見てはいけない・。見るものか・。）

哀は必死に前へ前へ進もうとした。

「志保ちゃん! そっちへ行っってはいけない!」

その瞬間、太い腕が哀の両足を掴んだ。そして哀の体が水面からすごい力で引き上げられる。

「きゃあ・・・！！」

・・・その瞬間、彼女は見てしまった。
自分の足を掴んだその男の顔を・・・。

あの忌まわしい場所、杯戸シティホテルの旧館の酒臭い物置に閉じ込められ、あやうく彼によって命を奪われかけた・・・。

そう、自分を殺そうとしたその男の名は、柘山憲三。

哀、いや、宮野志保の両親とは古くから付き合いがあった、組織の古株だ。『ピスコ』・・・内部ではそう呼ばれていた。

彼は組織の命令によって、呑口議員をパーティ会場でサイレンサーつきの拳銃を使って、射殺する。しかし犯行後のミスにより、コナンに事件の真相を暴かれ、さらにジンに暗殺された。そう、その男が今、哀の足を掴んでいる。

不気味な笑みを浮かべて・・・。

「いやああああっ・・・！！！！」

哀は足をつかまれ、宙ぶらりんになった格好で、それでももがいてもがいて、懸命に彼から逃げようとした。

（助けて、工藤君・・・！！！！）

ピスコは不気味な笑顔を浮かべ、彼女の青い顔を覗き込んだ。

（嫌・・・助けて・・・来ないで！！！！）

死ぬことは怖くないはずだった。しかし哀には既に組織に対して拒否反応が出ていた。・・・これ以上、彼らに近づきたくなかった。

『死』を選んだのは、組織から逃げたいという弱い気持ちもあったのかもしれない。

（工藤くん・・・！！！！）

来るはずなんてなかった。それでもやはり頭に浮かんでくるのは彼だけ。・・・彼しか頭に浮かんでこなかった。

期待なんてしても無駄なことなのに・・・

ピスコはもうそこまで近づいていた。手がそこまで伸びていた。思

わずぎゅつと目を瞑ったそのとき。

「灰原ア!!!!」

その声が聞こえた。

聞こえるはずもない、その少年の声が彼女の小さな耳に届いた。

（まさか・・・そんなはずは・・・）

哀は僅かな期待が心の中で疼く。

「誰だ・・・??」

ピスコは低くつぶやくと、彼女の細い足を持ったまま、振り返る。

彼女は体は逆さになり、頭に血が上りはじめたのと、薄まらない恐怖の気持ちで半ば頭が混乱したままだったが、それでも彼女は必死にその声の主を探した。

・・・いた。

哀がやってきた花畑の真ん中に、彼は立っていた。工藤新一ではなく、江戸川コナンがそこに・・・。はあはあ、と肩を上下させ、自分だけを見つめ。

「灰原!!!今、そっちへ向かうから!待ってる!!!」

少年は彼女の姿を見つけると、こっちへ向かって走り出した。

哀は、目頭から熱いものがこみ上げてくるのを感じていた。

奇跡は、起きた。

第20話 救いの手？（後書き）

どもー！こつぶですっ　ここまで読んでいただき、ありがとうございます！

元祖のときから、ここらへんが皆さん好きって言ってくれる話で、もちろん、あたしも此処に思い入れがあつて。三途の川とかそういうネタが大好きだったから。そして、三途の川なら、彼女に逢わせてあげられる、と思つてこのシーンを登場させてしまいました。

だからあまり修正かけないつもりだったのですが、楽しくて、楽しくて。結局書いてしまいました。面白かった！

それでは次回も頑張りたいと思います。これからもよろしく願います！本当にありがとうございました！

第21話 救いの手？

「灰原！！今、そっちへ向かうから！待ってる！！」

彼の瞳が自分を捕らえていた。

彼はただこっちへ向かうとしていた。目の前にある草を必死に掻き分けて。

岸辺の向こうには、腰の高い、笹のような丈の草。

あんな道を自分にはたして通っただろうか、前へ進もう進もうとしているようだが、その草はまるで生き物のようになくねくと、彼の体に纏わりつく。

それでも、彼は何とかそれを振り払いながら前へ進んでいた。自分の許に向かうと一生懸命だった。

その様子をただ、灰原哀は信じられない思いで凝視する。

ピスコに足を掴まれたまま、宙ぶらりんになれたまま、その姿勢のまま、今日の前にある状態が何であるかを必死に考える。

どうして・・・？

未だ、目の前の光景が信じられない。

何故、彼がここにいるのだろうか。

これは、現実だろうか、それとも、空想だろうか、幻だろうか。

自分が彼に来てほしい、と思って作り上げたイメージなのだろうか。

死後の世界なのだ、そういうこともあり得るのかもしれない。

けれど、もし本当だとしたら。

彼がこの死後の世界に足を踏み入れているのだとしたら。

「・・・あの薬の所為・・・？」

そんな不安な思いが彼女の中で渦巻いた。

また、あの人を苦しめているの？

気がつけば彼はもうすぐそこまで来ていて。

・・・あともう少いでこの水辺までたどり着く。

「来ちゃダメ！」

「なっ・・・」

「お願いだから・・・今すぐ引き返しなさい！」

思わず叫んでいた。できる限りの声で、足をばたつかせ、彼に向かって叫んでいた。

「早く戻って！・・・じゃないと・・・」

じゃないと、あなたまで・・・

「・・・うつせーっ！おめーを連れてくまで帰るわけにはいかねーんだよ！」

怒ったようにコナンがそう叫ぶと、最後の草を振り切り、ようやく岸辺にたどり着いた。そんな2人の会話に、ピスコはくっくくくと低い笑いを浮かべる。

「何がおかしい・・・の？」

震える声で哀は自分を抱き上げる頭上の人物に訊ねる。

「まさか彼まで来るとは思わなかったからな。・・・さすがよく似てる」

（彼？・・・誰のことを言ってるの？）

そのときになって初め、哀は彼に組織特有のあの匂いが微塵も感じられないことに気がついた。そのことに不審に感じ、頭に血が上った状況で、それでも何とかして彼の顔を確かめようと顔を上げる。

「ん？どうしたんだい、志保ちゃん・・・」

そう低く笑ってピスコが哀の顔を覗き込んだとたん、

「・・・嫌!!」

瞬間的に彼の顔を蹴り上げていた。

捕らえどころのない恐怖。

バスッ・・・

その小さな足は彼の顔の真ん中に見事命中する。

「うつ・・・」

ピスコはその衝撃に思わず前のめりになった。その瞬間、自分の足首を持つ彼の手が緩み、彼女の体は水の中にするすると落ちていく。

「はいば・・・!!」

自分を呼ぶ彼の声が遠くのほうで聞こえた。

ばしゃん、と水の中に叩きつけられるように、彼女のその小さい体は落ちていった。

あまり深くないはずだったのに、気がつけば川底はまるで生き物のように常に変化していた。地面がまるで大きな魚がパクパク口を開けて獲物を待っているかのように、開いたり、閉じたり。

そして、その『口』の底は赤いマグマが見える。ぼこ、ぼこ、と熱い蒸気がそこから湧き出ていた。

（・・・食べられる!?!）

そんな奇妙な錯覚を覚えて、思わず目をつぶったそのとき、力強い力が彼女を支えた。太い大人の腕の感触であることは目を開けなくてもすぐに感じ取れた。その人物の力によって、彼女の体は水上にみるみる引き上げられていく。

（まさか・・・）

哀はおそろおそろ目を開けると、そこには案の定ピスコの姿があった。

「やれやれ、計画通りにはうまくはいかないもんだ。こんなに元気な子だとは聞いていないぞ・・・」

そういつて笑うその笑みはどこか温和な見えた。

その笑みを見て、彼女の全身を渦巻いていた恐怖は波が引くように静かに薄れはじめた。

この人は私を殺そうとしているのではないのではないかという考えが彼女の中で芽生えていく。

そんなことはあるはずはないのに。

生前、組織を裏切った自分を殺そうとした男。

そんな彼が自分を今捕まえて殺人以外に何をするというのだろう。生きているときの考えが死んでから急に変わるはずもない。

だって、現に私は・・・。

ピスコは、怪訝顔で自分を見上げる彼女を、その太い腕で抱き上げると、今来た岸を振り返った。そして苦笑を交えて、こう呟く。

「本当に今日は予想外のことだらけだな」

彼の視線の先には、花畑からこちら側の岸にたどり着いたばかりの江戸川コナンが肩で激しく呼吸をしながら立っている。

哀はピスコの腕に抱かれ、その陰からコナンの表情を見つめていた。

「灰原を離せ、ピスコ！」

コナンが時計型麻醉銃を構えて、じっとピスコを捉えていた。

ピスコの顔をそっと見上げれば、彼の顔は先ほどのリラックスした優しい表情ではなく、人の悪そうな顔に戻っていた。再び体をぎゅっと固くさせ、身を縮こめる。

「いい加減に目を冷ませ！お前は何かしたいんだ！？もう組織に従わなくてもいい筈だ。なのにこいつを追い詰めて、お前にとって何の意味がある？自己満足か？それとも・・・」

「クッククク・・・」

ピスコは肩を揺すって笑った。

「確かに。しかしわたしにはまだ仕事があるんだよ。ある人に頼ま

れててね・・・志保ちゃんをかわいがってやるように、と」

ピスコはそう言っ、哀に目をやっ。哀は再び身を固くさせる。

ある人。

一体誰のことを言っているのだろう。組織で自分に恨みを持つて死んでいった人間は沢山いる。そう考えて、哀は寒気を覚えた。

そう、自分は、生きていても、死んでいても、組織からは逃げられないのだ。

そついう運命だったのだ。

自分はどこにいても、何をしていても、組織の手から逃げ出せない。

「・・・お前、死んでもまだそんなことする気かよ」

コナンのぎり、という強い齒軋りの音が聞こえたような気がした。

彼の憤りが伝わっていた。

「ああ。だって、楽しいからね」

ピスコは再びクククと小さく笑った。

「狂ってやがる・・・」

「そつ言ってもらえるとは光栄だよ」

そんなやり取りを、固唾を呑む思いで見守りながらも、その一方で彼女は先ほどから感じる違和感を頭の中から拭い去ることはできなかった。

自分を狙う組織は必ずここにいるだろう。

しかし、この人物は本当に自分を狙っているのだろうか。

そもそも、この人は本当に『ピスコ』本人なのだろうか。

『そついえば・・・』と考える。

彼からあの組織特有の『匂い』というものが全然感じられなかった。

それよりも、別の匂い。どこかで嗅いだような匂いが彼女の鼻腔をずっと擦っていた。それが何の、誰の匂いだかもわからなかったけれど、絶対嗅いだことのある匂い。

それは、組織のように『恐怖』や『嫌悪』を感じる匂いではなく、寧ろ……。

「ねえ、あなた、一体……」

“誰？” そう訊ねようとして彼女は口を開いた。

「気づいてしまったのか……」

彼が苦笑いを浮かべると、小声で呟いた。『ピスコ』がにこりと微笑む。その笑みは本当に紳士的で。そして少し悪戯っぽくて。

「でも、もうちょっと面白いからこのままにしておいてくれないか？」

「面白いって……何が……!？」

しっ、と彼は哀に優しい笑みを浮かべたまま、口先に人差し指を立て、ウインクをした。

そして、表情を凶悪な『ピスコ』の顔に戻し、ゆっくりと顔を上げ、コナンを見ながら、『せせら笑った』。

「生前できなかったことがこうして死んでから実現できるなんて……。すばらしく気持ちいいことだと思わないか？ なあ？ 志保ちゃんの震える顔。……ふふふ……何度見ても綺麗だ……」

くい、と顎先を乱暴に上げられ、ピスコはにやり、と笑った。

わけがわからなかった。自分を見つめる彼の様子はまるで天と地のように逆さで。

これが現実なのか、それともあれが自分を油断させている『罠』なのか。

彼のあたたかい息が顔に吹きかかりそうになりそうでも、それでも彼女はしばらく呆然とピスコを見上げるしかできないでいた。

「くそっ・・・その腐った脳天叩き壊してやるっ！」

その言葉と共に彼女は我にかえると、コナンがボール射出ベルトのダイヤルを一気に回しているのを哀は目撃した。そして彼は瞬時にサッカーボールを創り出すと、キック力増強シューズのパワーを最大にして、ボールを蹴り上げた。

「伏せる！灰原！！ぶつかるぞ！」

その言葉と共に、彼女は身を縮めた。

ズドドド・・・

ボールは彼の足からものすごい勢いで離れていき、うねりを上げて前へ突き進んでいった。

（ぶつかる・・・！！）

おそらく彼のボールは自分には当たらないように計算されている筈だ。予告どおり確実に彼の脳天を直撃し、自分には微塵も被害を被ることはないだろう。それでもあまりの威力が彼に当たることを予測し、哀は思わず目を瞑った。

・・・が。パチンと指を鳴らした音が聞こえたのとほぼ同時にバサバサという、たくさんの羽音。

「！？」

その音に驚き、瞑っていた眼を開けると、目の前のサッカーボールの割れ目から次から次へと白い鳩が出てきて、2人の周りを飛び交っていたのが見えた。

「きゃっ！？」

哀は驚いてピスコにしがみつきかけたが、すぐそれに気がついてあわてて川の中に逃げ込もうと身を振る。が、ピスコはそんな彼女の様子をすぐに察し、彼女の軽い体を抱きおこした。そして笑顔でさやく。

「大丈夫だよ、志保ちゃん。この子達は私の友達であり、長い間、共に戦った戦友だ・・・。キミを襲うことはしないよ」

「・・・”戦友”??」

哀はピスコの顔を見上げる。その目にはまだ警戒の色が強かった。そしてチラリとその視線に彼は思わず苦笑する。

「ああ。私にも君にも、それに目の前の彼にだって危害を加えない。この子達は優しく頭の良い子達だからね」

ピスコは肩に止まった鳩の首に頬擦りした。鳩は気持ちよさそうに、『クルックー、クルックー』と鳴いている。そんな彼に対して、哀はもうこの質問を聞かずにいられなくなった。

今度は顔を見て、はつきりと口を開いて。彼にこう尋ねる。

「・・・あなた、誰？」

哀の静かな質問に、ピスコは紳士的な笑みを浮かべ、何か言おうと口を開きかけた。しかしちょうどそのとき、何かプスッという小さな音が彼女のすぐ近くで聞こえた。

「!？」

彼女は驚いてその音の根源を探す。

・・・あった。

ピスコの首筋に針が一本刺さっていた。時計型麻醉銃でコナンが発射したあの鋭い麻醉針。

「・・・何だ・・・急にねむ・・・」

彼はふつと瞼を閉じると、彼女を抱いたまま崩れるように水面に沈みかけた。

「え、ちよつと!！」

あわてて彼の瞼をこじ開けさせるが、うんともすんとも言わない。どうやら完全に寝ている。

静かな寝息が聞こえ、

「ちょ、工藤くん!こんな水の中で眠らせてどうする気!？」

哀はこちら側の岸で時計型麻醉銃をまだ構えている彼に向かって、慌てて叫ぶ。

「いいから、その人に捕まってる!」

コナンが岸で彼女に向かって大声で叫び返す。

「え？捕まるって・・・」

哀が戸惑いながら彼の言うとおりに、ピスコの腕をつかんだその手に力を込めた。それを見届けると、コナンはズボンを支えていた黒いサスペンダーをパチンとはずした。

「・・・何をする気？まさか泳いで迎えに来る気じゃ・・・」

しかし彼はサスペンダーをはずした後はズボンを脱ぐこともシャツを脱ぐこともしなかった。どうやら泳ぐ気はないらしい。

「・・・？」

哀は怪訝そうに事の成り行きを見ていた。コナンはサスペンダーについているボタンを押すと、投げ縄をする要領でこっちに向かって投げつけた。コナンの投げたサスペンダーはすぐにぐんぐん伸びてピスコの体をぐるぐると縛り付けていく。もちろん、哀の体は器用に避けて。

「しっかり捕まってるよ！」

彼がそう叫ぶと共に、それはみるみるうちに彼の待つこちら側の岸まで寄せられていった。ピスコの体はまるでいかだのように彼女をそれ以上濡らすことなく地上に送ってくれたのである。

哀と彼を地上に引き上げた後、哀は開口一番彼に聞いた。

「なんなの？それ・・・」

「伸縮サスペンダーって言って、結構便利な道具なんだぜ。前に博士に作ってもらったんだよ」

コナンが再びボタンを押すと、またもとのサスペンダーの形にみるみる戻っていく。哀は感心したように眺めていた。彼の体からもサスペンダーでできた綱はするするとほどけていく。

「この人を解いちゃって本当にいいのね？」

心配になってコナンにおずおずと確認した。

今さら、この男が本当にピスコだったらどうしようという気になっ
てしまう。

ただ自分の組織の匂いを感じる能力がなくなっただけで、時折哀に見せた優しさは、自分を油断させるためにした演技であったのかも
しれない、と思ったから。

「ん・・・こっちに来て今さらどうする気にもなれねえし。大体こ
っちには警察ねえだろう、だからほつとけばいいさ」

間延びした様子で彼はそういうと、「それにしても暖かいな、ここ」
とつぶやき、大きな欠伸をした。

『警察』・・・やっぱり、彼はピスコなんだ。そう思うと、再び
体を固まらせた。

今は彼が横にいてくれるけれど。彼がいなかったら、自分はどんな
つていたのか。そう考えても怖かった。

「ほつとけば、つて。あなたはそれでいいの？」

ああ、と彼は頷く。

「まあ、天国にいられるかつつとわからねえけど、だからといっ
て地獄に落とすような人でもなさそうだし」

「”地獄に落とす人じゃない”？・・・だって、この人、人殺した
のよ！？大勢も・・・携わってきたのよ、それなのに、あなた・・・」

「
哀は意味もわからず動揺して素っ頓狂な声を上げたまま、彼を責め
立てた。が。」

まあまあ、落ち着けよ。なんてホントに暢気に彼は笑った。

「灰原、俺たちはな、まんまと一杯食わされたんだよ・・・。それ
に気づかない俺も俺だけだな」

コナンはそう苦笑して、目をつぶったままのピスコを覗き込む。
そのとき花畑の陰で、誰かが「計画失敗？」とつぶやくのを彼女は
聞いたような気がした。

「・・・一杯食わされたってどういうことよ」

こちら側の岸にのんびりと座り、二人は寝ところがあったままのピスコを眺めていた。哀としては彼を置いて早く逃げなくてはならない状況ではないのかと一人ハラハラしていたのだが。

「この人な、ピスコじゃないんだぜ」

一瞬の間をおいて、彼女はやっぱり、と呟いた。

そう思えば全て納得がいく。

「・・・そう、だったの」

哀のさほど驚かないその様子を見て、コナンは目を丸くしていた。

「知ってたのか？」

「ピスコじゃないってことは薄々ね。もしかしたらって思ってた」
そう言くと、哀は確かめるように身を乗り出して、彼の顔を覗き込んだ。

・・・しかし、彼はどこからどう見てもピスコのものであつて。

「・・・整形でもしたの？」

「そうじゃねーよ。そんな手の込んだもんじゃなくて」

「じゃあ双子？」

「んなわけねーだろ」

そう苦笑いをしつつ、コナンは彼の顎の辺りに爪を当てた。

「え？」

哀が見ている前で、彼はビリビリと音を立ててそれをはがしていく。それはピスコの顔をしたマスクだった。そしてその下から出てきたのは。

「このひと・・・」

哀はつぶやいた。思わず唾を飲んで、コクリと喉が鳴った。

どこかで見た人物だと思った。昔、姉がファンだったという奇術師。名前が思い出せず、哀はこの人物が誰だか思い出そうとしていた。その答えを見出す前に、コナンが口を開いた。

「世界的マジシャン、黒羽盗一。8年前にショーの爆発事故で死ん

じまつたけどな。母さんが昔、教わったことがあるんだよ。変装の達人だとか何とか……。それが縁で何度か母さんに連れられて楽屋も覗いたこともあるんだぜ？俺と同じ年の子がいるって話だけど・
・結局会えなかったなあ」

コナンは寝ているそのマジシャンを見ながら、懐かしそうにその言葉の口にした。

相変わらず彼の交友関係は広い。

「……。でもそんな人が今更なんでこんなところで・・・」

哀は未だ信じられない様子でコナンと黒羽盗一を見比べた。

「……。それはな」

コナンはそこで哀の顔をじっと見つめた。どきり、として哀は体を硬くする。

「何？」

「おまえを助けるためなんだ。おまえが姉の明美さんを追ってそちら側の岸に行かねえように。お前をんでも何も楽しくねえってわからせてやるために・・・。だから彼は敢えてピスコのフリなんかつんだ」

コナンの言葉に、哀は首をかしげる。

「・・・だってこの人、私知らないわ。話したこともないし。

テレビだって見たことない。おねえちゃんの話は聞いたことはあるけど」

そこまで言っただけと言葉を止めた。な、わかつたろ？コナンはそう言いたげに、白い歯を見せて悪戯っぽく笑う。

「まさか・・・」

「そのまさかだよ、灰原。お前が会いたがっていたその彼女が頼んだんだ。・・・。ね、そうでしょ？宮野明美さん」

「！？」

哀はコナンが向けた視線を追いかけた。彼の視線は花畑に向けられていた。

まさか。

・・・まさか。

「・・・そこに、いるの？おねえちゃん」

哀は思わず声を震わせた。

スイセンが風の囁きに体を揺らしていた。

「まったく、彼には何もかもお見通しね」

諦めを含んだ笑みを浮かべながら、その人物は現れた。

真っ直ぐ伸びた、綺麗な黒髪を持つ、白く美しい女性がそこに。

灰原哀は呆然とその女性を眺めていた。

「・・・久しぶりね、志保」

「・・・おねえちゃん・・・」

小さく姉の名を呼んだ。

先ほど見た黒髪の少女も、今見ている姉も、同じ人物であることは彼女にはわかっていて。

「おねえちゃん・・・おねえちゃん、おねえちゃん・・・」

哀は何度も口の中でつぶやいた。

そしてついにはこらえきれなくなつて、目からボロボロと涙を零しながら、彼女は花畑の中で立っている姉に向かって走り出した。

コナンはそんな彼女の様子をただ黙って、優しげな顔をして見守っていたのだった。

話は下界に戻つて、こちらは米花総合病院 815号室。

時刻は夜8時をまわっていた。

子供たちは2日も病院に泊まりきりということで、激しく抵抗する子供たちを無理やり、半ば追い出すような形で帰宅させた。

そして蘭もまた少し気が滅入っている様子なので、精神安定剤を投与され、別室で眠っている。

本来ならば面会時間も終わっている時間なので、病室だけでなく廊下もしーんと静まり返っている。

聞こえるのは時々思い出したように、ジジジと鳴く蝉の声。
もちろん、その声は昼とは違い、すぐに聞こえなくなるのだが。

そんなこんなで今、この病室にいるのは眠り続けている2人を残して博士と園子の2人になっていた。

「ねえ、博士・・・」

「何じゃ？園子くん」

園子の呼びかけに、博士はうつむいていた頭を上げ、彼女の方を見上げる。

しかし、園子の視線は博士に向けられていたのではなく、虚ろな目で自分の足をぼんやりと眺めていた。

今園子は疲れているのだ。

彼女は、子供たちや蘭に対して、そして先ほどは自分にまで叱咤激励をしてくれた。この2日間、自分が誰かに弱音を吐く時間なんて彼女にはなかったのかもしれない。

だから博士は何も言わず、黙って聞いてやることにした。できるだけ力になってやろうと思った。

なぜなら、彼女はまだ17歳の少女。

全てを支えて挙げられるほど、強くはないから。

強がっていても、本当は脆くて小さなモノだから。

だけど、彼だって。

本当はもう、限界だった。だから・・・。

「・・・小さいときにね。パパに聞いたことがあるの。博士も三途の川ぐらい聞いたことあるでしょ？」

「ああ。この世とあの世をつなぐ川じゃろ。こっち側の岸までがこの世。あっち側に続くのがあの世」

博士の言葉に、園子は静かにうなづく。

「そう。だけど死にそうな人がね、こちら側の岸の手前の道で必ず誰かに出会ったって。その誰かは親であったり先祖であったり。

時には知らない人も出てくるらしいわ」

園子はそこでわずかにため息を漏らし、再び話を続ける。

「その人は『霊界案内人』になって、死にそんな人の手を引き、元来た道か、三途の川へ続く道か、どちらかに連れてくの。死にそんな人が元来た道を帰ろうと戻りかけても、その案内人が先へ行こうと決めたら絶対従わなくちゃだめなんだって。いくら離そうとしてもそれはまるで鎖でつながれたようにしつかりと離れることはないんだって」

その話を聞いて、博士はベッドの上でまだ意識が戻らないままの新一と哀を交互に目をやった。

「君は何を言いたいんじゃない？」

博士は不安げに彼女の顔を見た。園子は、そんな彼の言葉に力なく笑って首を横に振った。

「ううん。新一君たちを引っ張る『手』はどっちかな、って思ってた。園子は視線を再び上に上げて言った。しかしその瞳はどこかピントが合っていないようだった。そして、

「そういえば、コナンくんまだ病院にこないわね・・・」
とつぶやいた。

「・・・」

博士は何も言わなかった。しかし彼女は彼の応答など、最初から求めていなかった様子で、言葉を続けた。

「・・・歩美ちゃんがさっき私たちに『コナンくんはきつと助けてくれる』みたいなこと、言ったじゃない？あの時思ってたんだけど、あの子ってどうしようもない生意気ボウズだけど、でも蘭やあの子達が言うとおり、どこか頼りがいがあるんだよね・・・」

「・・・」

「あの子だったら・・・コナン君なら、『第2の工藤新一』になれるかな・・・なんて」

バチン！

園子の青白い頬が、その部分だけうつすら赤くなっていく。

ハッとした顔で、園子は頬を押さえて博士を見つめた。

「・・・やめるんじゃない・・・。こんなときにそんなことを言うのは」
園子を強く睨んだままで、博士の目は再びうつすら涙で滲んでいた。
彼の手はジンジン痛かったのだから、きつと園子も痛いはずだろう。
しかし園子も泣きもわめきもせず、ただじつと博士を見つめていた。
博士は言葉を続けた。

「言ったじゃないか、園子君。君が。『アナタがそんなんでどうするの?』って。そうワシに言ってくれたじゃないか」

博士は涙で言葉を詰まらせながらも、彼女の肩をぐっとつかみ、叫び続ける。

「お願いだから・・・そんなことを言わんでくれ。・・・言わんでくれよ!・・・」

彼は泣きながら彼女の肩を揺すり続けた。

「ごめんなさい・・・ごめんなさい・・・」

揺すられながら、園子はつぶやくように小さい声で謝り続けた。
そんな光景は見回りに来た看護婦が止めに入るまで、延々と続いた。
病室には博士と園子の泣く声がしばらく止まなかったのである。

第21話 救いの手？（後書き）

ふふふ。思わぬ人物がーvvv

うーん、あまりこれは変えなかったかな 文章を少し加筆修正させていたきながら。

それでは、ここまでお読みいただき、ありがとうございました！

第22話 救いの手？

夢でもいいと思った。

今、このときがあれば、何もいらなかった。

永遠に覚めない夢。これが死の世界。

姉の胸の中。ずっと焦がれていた人物に自分は再びめぐり合うことができ、そして今、彼女に触れている。抱きしめてもらっている。温かくもなく、氷のように冷たくても、それでも、姉に触れられている。この上ようもない喜び。

「お姉ちゃん……」

もう、どこにもいかないで。私もここにいますから……。お姉ちゃんの傍にいるから……。どこにも、行かないから。

……。ずっと、ここにいます。一緒に暮らそう。

「おねえちゃん」

もう、離れないよ。

22 救いの手（後編）

霊界・三途の川こちら岸 お花畑にて。

コナンは一人河原に座り、宮野姉妹の再会を穏やかな表情で眺めていた。

ずっと会いたくて会えなかった姉に会えて、哀はさぞかし幸せだっただろう。彼女の顔は今まで見たことのないほど笑顔に満ちていた。これが彼女の本来の表情なのだろう。光彦たちに見せた笑顔はいつでも『お姉さん』的な笑顔だった。

彼らに見せる笑顔は、7歳児にしては大人びすぎていた。しかし、今見せている笑顔はあきらかにそれとは違った甘えきった穏やかな笑顔。ちょうど今の彼女の姿（＝7歳児の姿）に明らかに合っていた。

けれどこんな幸せがいつまでも続くはずなどなかった。続いてくると困るのだ。

なぜなら、灰原哀（宮野志保）は生きていて、そして宮野明美は死んでいる。

・・・それは、変えようのない事実。

姉の登場で俄か哀はこの世界に留まるというであろうことは彼はわかっていた。

しかしだからといって、コナンは自分から何をしようとする気はなかった。ちゃんと彼女のために言ってくれる人が目の前にいるから彼女の慕う姉がいるから。

自分が何も言わなくても、ちゃんと明美が彼女を自分と共にこの世に戻してくれることはわかっていたから。

彼は何を言うわけでもなく、2人の傍をそつと離れた。何も言わず、気づかれないように。

ちらつと明美がコナンを見たが、「後でまた迎えに来ます」というと、了解、というように小さく頷いた。

「志保。そろそろ時間よ」

コナンが2人から背を向け、そつと歩き出したそのとき、明美は彼が思っていたとおりにその話を切り出した。

「・・・彼と。工藤くんと一緒にこの道、戻りなさい」

明美が指差した方向は、もちろんこの世へ続く道。花畑が延々と続いているようにも思えたが・・・。

「・・・嫌よ。私はここにいる。おねえちゃんと一緒にいる」

哀はふるふると首を横に振って拒絶を俄かに示した。

「志保」

明美は小さい少女を叱るような表情で妹を嗜める。

「あなたは生きなければならぬの。さつきも言っただわよね」

「・・・さつき??」

「そう。あなたがここに来る前に会った女の子。あれ、私よ?」

「・・・そう、やっぱりそうだったの」

あの闇の中にいた黒髪の少女。哀と同年かそれよりちょっと上の年齢の女の子。目のくりつとしたその表情は今ではこの目にしっかりと焼きついていて。

「あなたに気づかれないようにするため、あんなカッコして、ずっと上から見てたのよ。もしこっちにやってきたらどうにかして止めようと思ってた。貴方たちは気づかなかったかもしれないけど。工藤くんが志保が意識をなくした直後にまるで追いかけるようにやってきたときはびっくりしたわ」

「・・・工藤くんが?」

「・・・そう。まるでそうなることが必然だったかのように・・・この場所にいることを全て受け止めているかのように、あなた、本当に彼に守られてるのね」

「・・・」

何も言葉がでなかった。

言葉を失くして、ただ黙って姉を見ることしかできなかった。

私が彼に守られてる?ここにいて、こんな姿をしても?彼がここにきたのは私を助けるためだというの?

疑問が頭の中に瞬時に振りまいた。が。

「違うわ！そんないいモノじゃない。私は工藤くんに薬を飲ませた。そしてその薬を飲んで彼は死にかけた。ただそれだけ」

「本当にそれだけ？じゃあ何故、彼は貴方を助けにここまで来たの？」

「・・・それは偶然であって・・・きつと通り道に私がいただけであって」

そう、たまたま私がいたから、彼は助けにきてくれたのだ。

きつと早く元に帰ろうとしていたはず。彼女がきつと待ってるから。きつと急いでいたはず。

なのに、その通り道にたまたま私がその場所にいたから。

(・・・?)

そこまで考えて、哀は何かひつかかるものを感じた。
落ち着いて最初から考えてみる。

彼はこつち側から私を呼び止めた。私は水辺に体を沈め、彼はこちらへ向かい必死に走ってきた。

三途の川の向こう側に行こうとする私を必死に引き止めた。
それなら。彼はあえて前へ進もうとした？

・・・私を救うために。

「彼がここにどうして来たのか。それは本当に偶然で・・・もしかしたら本当に志保のせいで彼が死にかけたのだとしても。彼は絶対生きるわ。そして、あなたと一緒に連れて行くつもりでいる。どんなことをしても・・・それが志保の思う『工藤くん』なんですよ？」

『・・・うつせーっ！おめーを連れてくまで帰るわけにはいかなーんだよ！』

先ほど自分に向けた彼の怒号を哀は不意に思い出した。

「ホント、バカなんだから・・・」

思わず零れた溜息。笑顔なんて一欠片もなかった。

守ってくれなくてもいいのに。

私のことなんて考えないで。彼女のことを思ってくれればいいのに。

「早く、私なんて置いて帰ればいいのに」

そうすれば、どんなにか気が楽だろう。

わざと危険な道に進まなければいい。

彼女の許に戻ればいい。

私なんて放っておけばいいのだ。

「それが貴方の本音？」

「え？」

「彼といるのが怖いのか？あの子と・・・。蘭さんという工藤くんを見ているのが辛いのか？あなたがこんなに死に急ぎたがってる理由」

姉の目が妹を見据えた。真剣な眼差し。哀はその瞳に射竦められていた。

そう、なのだろうか。

姉の前でそう認めてしまえばいいのだろうけど、なぜか認めることができてなくて。

「それだけ、じゃないかもしれないわ」

「そうでしょうね」

明美はそう言つて小さく溜息をついた。

「他にもあるわ、きつと。だからどうにかしなきゃって思ったの。こうでもしなきゃ止められなかった。彼に、あなたが一番恐れる組織の人物に変装してもらつたのはそのためだった。そうじゃなければあなたの決意は変わらないから。・・・もともと強情っぽいだったものね、志保は。・・・そして全てを背負い込むクセがある」

「それはおねーちゃんだって同じじゃない。・・・勝手に事件なんて起こしてっ。私のために死んで！」

お姉ちゃんはわからないんだ。

私がどんなにお姉ちゃんを大切に思っていたのか。どんなにか愛していたか。

置いていかれた人の気持ちなんて・・・。

続けて姉に向けてそう詰ろつとしたそのとき、はつと哀は我に感じ、うつむきかけた顔を上げた。

自分も、今、それと同じことをしている。

「そう、・・・遺された人の気持ち。考えなくちゃいけないわよね。今なら戻れる道を敢えて戻らないのは自殺と一緒よ。あなたを思う人は誰？そんな人たちを置いてあなたは行ってしまうの？辛い思いをさせるの？」

『哀くん』

『哀ちゃん』

『灰原さん・・・』

『哀ちゃん』

自分呼び慕う子供たちや博士の顔が浮かんできたような気がした。自分が肺炎で倒れ、次の日目を覚ましたとき、涙を浮かべて喜んで

くれた。

あのとき、その笑顔を見て生きててよかった、とココロの中で思ったのも事実。

・・・でも。

「おねーちゃんは、戻れる道を戻らなかったの？」

不意に口に出たその質問に、明美は一瞬驚いた顔をして、それから悲しそうに首を横に振った。

「私はね、手遅れだったの。どんなにか行きたくても、戻れなかった」

その言葉を聴いて、きゆう、と胸が痛くなる。

思わずうつむけば、そつと明美の手が伸びて、姉に抱き寄せられていた。

「だから・・・。あなたにはこれからの人生で、おねえちゃんのできなかったこと、志保にいつぱいしてほしい。生きてれば楽しいことがこれから本当に出てくるから。今よりももっと楽しくなるから・・・それを肌で感じて欲しい。証明してほしい・・・」

突如現れたその意外な言葉に、哀は驚いて姉を凝視した。

「お姉ちゃんの、できなかったこと・・・？そんなの、あるの？」

宮野志保でいる限り、「sherry」でいる限り、普通の学校へ行き、普通の勉強をし。

そんな普通のことのできなかった自分と比べ、姉は監視つきではあるけれど、人並みの暮らしを、普通の暮らしをしてきた。

友人と卒業旅行を楽しみ、お土産をたんまり持って待ち合わせ場所に現れたことがあった、そんな姉。

普通に恋愛だつてしてきたはず。そんな姉ができなかったことは何だというのだろうか。

早く彼女の答えが聞きたかった。

「それはね・・・」と安らかに明美は微笑んだ。

「人を愛し、愛され、結ばれて・・・そしてその人の子供を幸せな気持ちで産み、育てることよ」

「え・・・」

哀の驚いた顔に、明美ははにかんだ笑いを見せた。

「あなたにはまだ、早いかしらね。でも、生きてればきっとその幸せに巡り合える時が来るんだから・・・」

「おねえちゃん・・・」

哀はハツとした。明美の表情は物悲しさでいっぱいだった。

「お姉ちゃん、もしかして・・・好きな人、いたの？」

妹のその言葉に、姉はさびしそうに微笑んだ。

「まあ・・・ね。でも、死んじゃったら全て終わり。何もできない。たとえ手を伸ばせば届くほどそばにいても、抱きしめてあげること、庇うこともできない。

嬉しいことも、悲しいことも・・・。何も分かち合えない。・・・

こういうのって、すごく苦しいんだから・・・」

「・・・おねえちゃん・・・」

哀は何も言えなくなつて、寂しげな表情を浮かべる姉の横顔をめていた。『大切な人』、いろいろな人物が彼女の頭の中を駆け巡る。

ハカセ、少年探偵団、毛利蘭、高木刑事に佐藤刑事、・・・それに、

『江戸川コナン』こと、工藤新一・・・。

「死んで全てを終わりにするんじゃないで、あなたはこれから未来を作りなさい」

「え？」

「生きることには逃げないで。前を見て。死んで責任を全うするんじゃないで。生きながら、あなたはあなたの責任を負うの。組織から仲間を守りながら、組織と戦いながら。組織の危険の可能性が全てなくなるその日まで、全力で守りなさい。いつかは組織は倒されるから。・・・彼によって、絶対倒される日が来る。・・・だから信じて」

ああ、お姉ちゃんは何もかも知っている。

常々、死にたいと考えていたことも。

自分が起こそうとしていたことも。それから、それを実行できずにムダに死に掛けてしまったことも。彼にしてしまった所業の理由さえも。

ここに来て、この場所に来て、「死の世界」が見えた瞬間、何もかも忘れて、責任を果たさず逃げようとしていたことも。

そして、頭ごなしに責めることもせず、自分の背中を押してくれている。

「でも、・・・彼は死ぬかもしれない」

「信じて」

「でも、組織は大きいのよ。おねーちゃんが知ってるよりも多分もつともつと」

「信じて。彼はあなたのスーパーマン、でしょ？」

「え？」

きよんととして、哀は明美を見つめた。にっこり明美は笑う。

「彼と一緒に戦いなさい。そして、幸せを勝ち取りなさい。それに、あなたにはもう幸せを掴んでいるんじゃないかしら。それをみすみす捨てるなんてもつたいないじゃない」

そう言つて笑う明美を哀はただぼんやり見つめていることしかできなかった。

「大丈夫、お姉ちゃんが守ってあげるから。・・・身内の力って強いんだよ」

ぼんつと軽く自分の胸を叩く姉を見つめ、思わずぶつと噴出した。あまりに自信ありげに笑うから。もう、大丈夫だと思った。

「私、生きるわ」

自分は一人じゃないから。

守らなくてはいけない人がいて、また守ってくれる人がいて。自分を遠くで見ってくれる人がいて。生きなくてはならない。けど、決して嫌なことではなくて。

・・・もつと生きたい。彼らと共に。

彼らを守りながら、そして彼らに包まれながら幸せを感じていたい。

「お姉ちゃん・・・」

「・・・うん？」

「・・・ありがとう」

こんな気持ちにさせてくれて。

生きる力を与えてくれて。

そして、もう一度自分の前に現れてくれて。

本当にありがとう。

再び姉に抱きついて。姉の匂いを嗅いで。冷たいぬくもりに触れて。哀は最後の時間を味わっていた。とても幸せな時間。

もう、寂しくない。

それなのに、彼女の胸に抱かれ、哀の瞳から静かな嗚咽と共に流れる涙は、どうしても止まることができなかった。

第22話 救いの手？（後書き）

こつぶですー。長くなってきたので、一旦話を切りました。ここに来て初めてタイトルが変わります。このままだと32話を超えちゃうわー！どうしましょ！

では、こつぶでした！本当に本当にここまでお読みいただき、ありがとうございました！

第23話 救いの手？

米花総合病院815号室。

時刻は夜9時を回っていた。博士は園子ともめた後、気まづくなつたのか夜風にあたり部屋を出て行った。そう、残っているのは園子ただ一人で。

「『三途の川』・・・か」

力なく呟き、園子は一人、2人の寝顔をじつと眺めていた。

三途の川の存在を本気で信じてたわけでもない。実際、『三途の川』なんて、ただの絵空事かもしれないと思うのはココロの中の大半であつたはずだ。なぜなら園子自身、その場所へ行つた事すらないのだから。

「それなのにあの状況で博士に真面目に言っちゃうなんて、あたしもそうとうキてるわね・・・」

何々教の信者だなんて思われてもおかしくないわ、なんてふと考えて、園子は一人苦笑した。それから、ひりひりとした頬をそつと撫ぜる。

「あーあ、バカなこと言っちゃったなあ・・・」

博士からお見舞いされたピンタは本当に痛くて。限界に来ていた自分を、ぎりぎりの淵までいた自分を、彼によって引つ張り出されたような気がした。

「そうだよね・・・。第2の工藤くんとか、そういうのは関係ないんだよね」

彼は『彼』にしかできないことだから。いくら同じような救世主が現れても、彼は彼だから。

「工藤新一」は「工藤新一」。そして、「江戸川コナン」は「江戸川コナン」だから。

彼らの帰りを切に待っている人はそれぞれに沢山いて。

どちらが欠けてもいけない、そういうの、わかっていたはずなのに。なのに、どうしてそんなことを言ってしまったのだろう。

「蘭に言ったらビンタどころじゃ済まされなかったな・・・」

なんて冗談を一つ言って、そして力なく笑った。

「ごめんね、蘭・・・」

眠らされる二人の病人を見つめながら、園子はつぶやいた。それから、昨日の夜から姿を見せない少年の顔を思い出す。蘭ではなく、少年探偵団の仲間だけに連絡をした、という生意気な彼の顔。

そしてその帰りをじっと待っている小さな少女のなんと頼もしい顔もまた浮かんできて、思わずふっと笑った。

あの少女のように、自分も落ち着いて彼らの、工藤新一や灰原哀の帰りを待ってみよう。そう思い始めたちようどそのとき。

ドアをノックする音がして園子ははっと振り返った。

「だれ？」

「私・・・」

蘭だ。園子は驚き、あわててドアに駆け寄ると、ドアノブを勢いよく捻った。蘭が青白い顔をして佇んでいた。

「・・・蘭、アンタ大丈夫なの？」

園子の言葉に、蘭は力なく笑った。

「平気よ。ちよっと寝て楽になった。ありがとう」

蘭は微量の精神安定剤の効き目はあったのだろうか。園子は心配そうに蘭の細い体を支えた。

支えなければ倒れてしまう・・・。そう思えたのだ。

「新一と、哀ちゃんの様子はどうか？」

蘭は親友の厚意を受け、園子の肩を借りながら二人のベッドの方ま

で足を運ぶ。

「・・・うん、未だ意識の回復は・・・」

『見られない』そう言いかけて、園子はハッとして眠ったままの哀を凝視する。・・・哀は泣いていた。静かに涙をこぼしていた。目を瞑ったまま、眠ったまま零した涙は一滴・・・。

「哀・・・ちゃん？」

2人は驚いて彼女の顔を覗き込んだ。

「なんて幸せそうな顔・・・」

蘭が呟いた。園子もその言葉に静かにうなづく。そして蘭が彼女の涙をそっと拭いてやろうとしたが、次の瞬間・・・

「・・・ちゃん」

と哀は微かに口を動かした。

「え？」

2人は思わず目を見張る。

「この子、今、何か言わなかった？」

園子が蘭に確かめると、蘭もうなずき返した。そして彼女が何か言おうと口を開きかけたとき、

「よか・・・たな」

「え？」

その声に、蘭と園子は振り返った。確かに背後から声が聞こえた。蘭にとつては耳に心地よいあの声。そして園子にとつてはちよつと気障っぽく聞こえるあの声。・・・しかし2人が今は待ち望んでいたあの声であるには変わりなかった。

「しん・・・いち？」

振り返れば、彼の表情は確かに笑顔があつて。眠ったままなのに、本当にその表情だけははつきりしていて。

まるで今まで苦しそうに寝ていたのが信じられないくらい、彼は笑っていた。

「新一！起きてるの？ねえ、新一！？」

蘭は思わず悲鳴に近いような声で彼の許に駆け寄った。しかし、それ以降、何も反応がなかった。

ただ、「よかったな」と彼が口にしてから、見るからに表情が和らいでいた。

死ぬ危険性と背中合わせにしていることすら忘れそうな綺麗な表情で。

「・・・やっぱり新一君、あの子と一緒に向こうにいるのかしら・・・？」

「『向こう』？」

「・・・え、ううん。何でもないわ」

訝しげに自分を見る蘭の様子に、園子はあわてて誤魔化した。

消えかけた「三途の川」妄想がまた彼女の中で復活していた。そしてまた口に出そうとしてあわてて自分の口を押えた。こう何でも思ったことを口にする性格は自分でも辟易していた。

これ以上彼女の心配を増やすこともないと思ったから。

気がつけば瞬間的に笑顔を作って言葉を続けていた。

「なんでもないわ。彼、元に戻るかもしれないわね。そうやって笑ってるんだから。意識が戻る兆候かもしれないわ、あとで先生に報告ね」

「・・・そうかな。期待していいのかな」

蘭は生気のないような顔で、しかしそれでも口元を綻ばせ、親友に聞き返した。園子は力なく蘭に微笑み返し、頷いた。

「そうよ。だから、もうちょっと寝てなさい。あなたの肌、ボロボロよ？綺麗な顔が台無し。新一君が目覚めたら綺麗な顔でいたいでしょう？」

「・・・うん」

素直に彼女はうなずいた。園子はふふつと笑って優しく彼女の頭を軽くぼんぼんと撫でると、その手を握り、彼女を奥にある簡易ベッ

ドに寝かせた。そして、彼女の寝息が聞こえ始めると、園子は疲れたように体の底から溜息をつき、椅子に崩れるように座った。

今尚穏やかに笑う新一の寝顔を見て、涙を流した後の哀の幸せそうな顔を見て、「もう、何なのよ・・・」と呟いてしまう。

「暢気に三途の川観光なんてしてる時間なんてアンタにはないんだからね。」

そう怒りながら、涙が零れて仕方なかった。

哀の涙を見て、新一の「よかったな」という言葉を聴いて、園子は全てを悟ってしまった。

哀は、彼女の死に別れた身内に逢うことができたのだ。・・・そして、それを見て、新一は「よかったな」という表情を浮かべている。2人は同じ場所に立っているのだ。園子たちがいるところと同じように、彼らは普段どおりに過ごしている。そして、笑っている。

「人の気もしらないで・・・」

涙がぼたぼた彼の枕元に涙の雫が落ちていた。

「早く、帰ってきなさいよ・・・。そんな暢気にしていると、蘭に無理やり男作らせちゃうから。『ラブロー』あんたじゃなくて、別の誰かに代役させちゃうから！」

・・・そんなことをしたって無理だとわかっていても。

それでも、こんなに穏やかな表情を浮かべてすやすやと眠っている彼が悔しくて、親友をここまで傷つけた彼が憎らしくて、思いつきり彼の頬を抓ったのである。

嗚咽を漏らしながら、ただ、言葉を漏らさずに、捻っていた。

純粹に、ココロから憎らしかった。そして、早く彼に目覚めてほしかった。

「おう、やっと来たな」

哀が話を終え、コナンのいる花畑へやってくると、彼は頬を押さえ

ながらニツと微笑む。そんな彼の様子に、哀は思わず呆れた顔をした。

「どうしたの？」

「いや、なんか頬を誰かに抓られている気がして・・・」

「蘭さんじゃない？あなたがあまりに彼女を心配させるから」

「・・・そうかなあ・・・？」

コナンは首をひねりながら、まだ納得行かないと言う顔で頬を撫でていた。

「んで？明美さんと別れの挨拶してきたのか？」

「・・・ええ。また80年後に逢いましょうってね」

「そうか・・・よかった」

コナンの安堵の息が漏れる。そんな彼の姿を哀はただ、じっと見つめていた。

「・・・工藤くん」

「あん？」

「あなたがここに来たのは、必然？それとも偶然？」

彼が『必然さ』なんて気障なことを言うことくらいわかっていただけ。何となく彼の言葉で聞いてみたくて。

「偶然、かな」

ふ、と笑ってコナンは答えた。

「え・・・？」

意表をつかれ、コナンの顔をまじまじと見た。・・・話が違つ。そんなちよつとした恨みを軽く姉に抱きながら。

「けど、こういうのってあるんだよな。って思つて。思いは必ず届くから。・・・俺はおまえを心から助けたい、と思つた。こんな思いであいつを死なせるかよ、って。そしたらおまえを見つけることができた。・・・しかも絶体絶命の大ピンチのときにな」

かつこよかったろ？と彼は笑う。

「それって自己満足の極みじゃない？結局はピンチじゃなかったじゃない、全然。あの人はピスコじゃなかったんだし。私はお姉ちゃ

んと彼の策略によつて、どう転んでも助かる運命だったんでしょ？
その配役があなたのせいで大幅に変わっただけ。いわば飛び入り、
ううん、もつと言えばお客乱入・・・営業妨害、ってところかしら・
・どっちにしろそれを演じきろうとしていたスタッフにしてみれば
かなりの迷惑よね・・・」

「なっ・・・」

あまりの言われように言葉を失くして自分をしばらく見つめていた。
それから、ボソリ、と彼がつぶやく。

「・・・ホント全然かわいくねーな」

「悪かったわね」

こんなことなら迎えに来なきゃよかったよ、なんてぶつぶつぶや
くコナンに向けて、哀はふつと思わず口許を綻ばせた。それから、
「・・・でも、ありがとう」

そう呟く哀に、コナンは驚いて顔を上げて、彼女のことを暫し見つ
めた。そして、ああ、と頷くと、嬉しそうに小さく笑ったのだった。

「それじゃぼちぼち、帰るとすつか」

当たり前のように哀の手を握るから、哀は思わずその手を無理やり
離れた。

「ちよつ、一人で歩けるわよ。何のつもりか知らないけど、逃げる
つもりだってないし、お姉ちゃんの後を追つて、もうここに残ると
は言わないわ。だから・・・」

「それでも繋いでいたいんだ。おまえが・・・」

彼がそこで一瞬言葉を止めたから、どきり、と胸が高鳴った。
何を言うつもりでいるのだろう。

まさか、お前が好きだから。なんて言葉を聞くとは思わなければいけ
れど。

「生きてるってこと、確かめたいんだよ」
「え？」

ぎゅっと彼の手が再び握られた。温かいぬくもりにさらに穏やかな気持ちになっていく。

その手が彼の手の導きによって左胸に当てられる。

どく、どく、どく、と正常に血液が波打って心臓に送られている。温かい体温。

響き渡る胸の鼓動。

そう、私たちは、生きている。

生きているのだ。

「もう、危ないマネはするなよ？」

「わかってる・・・わ」

彼のその悲痛な叫びを聞きながら、彼の小さな手を見ながら、喉の奥から涙が再びこみ上げてくるのを感じていた。此处に来てから、自分は沢山の手によって救われた。

自分を抱き上げた力強いごつごつした冷たい手。自分を抱きしめた優しい柔らかな冷たい手。

そして、現世に一緒に行こうと差し出すその温かい手。血の通った手。

「俺な、黒闇に放り出されたとき・・・見たような気がしたんだ」

「え？」

「その、明美さんの姿。いや、見てなかったんだろうけどそんな気がした。『こっちにおいで』って誘われた気がした。その変な感覚はこの花畑に差し掛かってもまだあって。こっちに行けばあいつに会えるんじゃないかな、って」

「そう・・・」

もう一つ。救いの手は存在した。

「愛されてるんだな」

「・・・似たようなことを言うのね、お姉ちゃん」と
思わず笑みが零れる。

結局のところ、本当はどっちだったのかわからないが。

・・・それとも、両方ひきつける何かがあったのだろうか。

そんな哀に対して、コナンは怪訝そうな顔をしたまま訊ねた。

「・・・は？俺が灰原を愛してる、って？」

「・・・置いてくわよ」

「えっ！？何、・・・何だよっ、ちよっ。・・・待てよ！」

彼の手を無理やり振り払うと、哀はツカツカと前へ進む。コナンは慌ててその後に続いた。が、突如哀が何も意言わずに止まったので、彼も慌てて足を止めた。

「・・・っ！？何だよ、いきなり止まるなよ！」

「ねえ・・・」

「・・・あん？」

うつむきながら、さっきとは違うトーンの高さで話す哀に気づき、

コナンの表情も自然と引き締まる。

「組織、倒してくれるのよね」

「・・・何だ、いきなり」

「答えて」

真剣な眼差しで振り返るから、コナンは一瞬驚いた顔をしたが、力強くうなずいた。

「安心しろ。全部まとめて地獄より先に怖い警察の監獄にぶち込んでやつから」

「・・・そう、じゃあ。・・・私も全力で戦うわ」

そんな哀の決意に、明美さん一体何を言ったんだ、なんて彼は複雑な顔をしてみせた。

「一緒に戦いましょう。そして生きましょう」

ここにはもうしばらくは戻らぬように。

戻ったときは天寿を全うしたときで。笑顔でこの道を渡れるように。この川を泳げるように。

生きていた世に、悔いを何一つ残すこともないように。

「そうだな」

俺はもともそのつもりだけだな。そうつぶやいて、彼は笑った。

「行こうぜ」

再び彼の左手が哀の目の前に伸ばされた。

哀はしばらく彼の顔を見ていたが、おずおずと、伸ばされた手を掴み、二つの手は繋がれた。

それをしっかり確かめると、彼は、にっと小さく笑って、ゆっくりと前を向いた。

手を繋ぎ、元来た道を引き返していく。一步一步足を踏みしめながらしっかりと。

きつとこの先、すぐに道が開けるだろう。この世に続く一筋の道が・・。

2人はそれを信じ、前へ進み、歩いていた。

第23話 救いの手？（後書き）

こつぶですー。ふふふ。ちょっと病院の話や三途の川の話長くしてしまいました。いかがかしら。

ていうか、ここら辺ほぼ違うー><！

結構改訂しまくりなこつぶでした。・・・かなり難しかった（けほけほ）

ではでは此処までお読みいただき、ありがとうございました！

第24話 救いの手？

米花総合病院 815号室。

第2の変化、所謂その前兆に気がついたのは、誰あろう博士だった。

彼が病院の屋上から帰ってきたとき、そこには園子の姿はもちろん、眠っている本人たちしかなかった。

ドアを少し開け、中を何気なく覗けば、機械的な音だけが聞こえている。あまりの静けさに、彼は溜息をつく、ゆっくりと残りのドアを開けた。

のそのそと病室に入り、手にかけていたコンビニの袋を2人が眠る棚の上に置く。そしてコンビニのビニール袋からリンゴを一つ出すと、それを服の袖でさつと拭き、無表情で齧った。

シャリリという新鮮な音。彼は立ったまま、ただ黙々とそれを食し続けた。眠っている二人から目を逸らすこともできずに。

「どっこいしょ・・・」

リンゴを丸ごと一個食べきった後、彼はようやく2人の間に置いてあった椅子に腰を下ろした。

別にリンゴが食べたかったわけでもない。今はホントは何も喉が通らなかつたし、何が食べたいというわけではない。ただ、食べられるものであつたら何でもよかった。

ここで倒れるわけにはいかなかった。自分まで倒れて、2人が目覚めたときに悲しい顔をされたくないから。

ぶらぶらとコンビニの陳列棚を見ていたら、そこにたまたまあつたリンゴに手が伸びた。ただそれだけのこと。

他にはペットボトルの冷たいウーロン茶2本と、彼女が好きなフルーツのふんだんに入ったゼリー。

哀が再び目覚めたら、これを彼女に食べさせてやりたかつた。昨日

は買つのを忘れてしまったから。

彼はゼリーを冷蔵庫に入れようと再びゆっくりと腰を上げ、二人の顔を交互に見ていく。穏やかな寝顔。そして口角は上げられていて、どこか笑っているように見えた。

その笑顔に力なく微笑み、それから「ああ」という言葉を溜息と共に、拭うように両手で顔を覆う。

・・・疲れが全体に出ていた。

「・・・こんな場所で一人というのも、辛いもんじゃな・・・」

博士はふつと苦笑する。園子とはあの一件以来、気まずい雰囲気を保ったまま。

彼女に言い過ぎたということは、自分自身わかっていた。

そして人を叩いたことのない博士が、興奮していたとはいえ、うら若き女性を叩いてしまうとは。

その後悔が、先ほどから彼の頭の中でぐるぐる回っている。博士はじつと自分の大きくてしわくちなな手を見つめていた。

まだあのときの嫌な感触が、気持ちが残っている。

あのときの手のひりひりとした痛さ、叩かれた後の、彼女の驚いたような表情が今でもぱつと浮かんでくる。

彼女も限界だった、単純に言えば、ただそれだけのことだったというのに。

それを包み込んであげられなかった自分はなんて非力なのだろう。

弱いのだろう。

「悪いことをしたのオ・・・」

博士はうつむいたまま、再び大きくほおつと溜息をついた。そんなとき。

ごそつ

何かの音に、彼は体をびくつとさせて瞬時に顔を上げる。

「・・・何じゃ？」

聞こえたはずのその場所には、ベッドの上で眠ったままの新一だけ。
「・・・気のせいかな・・・疲れとるからかな」

博士は禿げたその頭を撫でながら呟くと、そこではたと園子のことを思い、席を立った。

きっと園子は、この階の奥の廊下で自販機で買ったばかりの冷たいジュースでも飲んでいることだろう。

行つて園子さんに素直に謝ろう、そう思ったのである。しかし・・・
ごそつ、ごそつ・・・。

再びその音がして、彼はぎくりとして体を固まらせた。

確かにすぐ後ろで音がした。博士はおそろおそろ後ろを振り返る。

それは、彼が目を瞑ったままでゆっくりと布団から左手を出している音だった。

「し、新一！！」

あわてて博士は彼のベッドに戻ると、彼を凝視した。

今、彼の目の前で、新一の左腕は布団から既に出ていて、横で眠ったままの哀の方へ少しずつ伸びていく。

「・・・新一？」

ぽかんと博士はその光景を見つめていた。

「一体な、何をする気じゃ？」

そしてそれに連動されるように哀の右手も布団から出されていく。

「あ、哀くん・・・」

驚愕する博士をよそに、2人の手は、ゆっくりと、ゆっくりと近づいていき、そしてその手は博士を挟んで、しっかりと繋がれた。

まるで手に『意識』があるように。

まるで、彼らのその手が、一つの生き物であるかのように。
二つのモノは繋がれた。

「あああ・・・」

口から出た言葉は『言葉』の意味を成さず、彼はただ、意味のない声を発することしかできなかった。

しばらく博士は放心したようにそこで体を固まらせたまま動かなかった。いや、動けなかったのだ。

「博士・・・入るわよ」

ノックと共に聞こえるその声に、博士はようやく我に返った。

そこには、園子がおずおずとドアから半身だけ出してこちらを伺うように見つめていた。謝るつもりで部屋を覗いたのだろう。

しかし、博士の真つ青なその表情を見た瞬間、驚いたようにまじまじと彼を見つめた。

「どうしたの？・・・何か悪い夢から醒めた後のような顔してる」

「いや・・・あの・・・」

「何か変化でもあった？」

「・・・え？」

その言葉に今度は博士が驚く番だった。

「いや・・・あの。し、新一が・・・」

「彼が、どうしたの？」

彼が発した言葉に園子は勢いよく残りのドアを開けると、部屋の中で腰を抜かしかけている博士の許に駆け寄った。

それから、彼が指さす方向に目をやると、しっかりと2人が手を繋いでいる様子を認め、彼女はふつと微笑んだ。

「・・・ねえ、博士」

「なん、じゃ？」

「もうすぐ彼、意識戻るわよ」

確信したように笑う園子の表情を、博士はただ信じられない思いで見つめていた。

「どうして・・・」

「安心して。哀ちゃんもきつと一緒に起きるから」

そう言つて博士に笑いかけた後で、やっぱり彼はただでは起きないわね、と園子のつぶやく声が彼には聞こえた。

その意味によろやく察したのか、博士の表情がぱつと明るくなった。そして繋がれた二つの手に、そうじゃったのか、とつぶやくと、自分の両手をそつと重ねた。

少しでも2人の力になりたくて。

彼らが一生懸命になつてゐるのに、その行動に怯えてしまった自分がちよつぴり情けなくて。

「あたし、蘭呼んでくるね。宿直室で、きつともう起きていると思うから」

遠慮がちに園子が口を開き、それから再び慌てたように部屋から出て行つた。

ぱたぱた、と遠ざかるスリッパの音を聞きながら、彼の2人の手を握るその手に少し力がこもる。

「なあ、新一くん。哀くんの手を、しっかり繋いでおいてくれよ・・・」

もう、その手を離さないでくれよ。

彼が零した涙が、ポツリ、2人の繋いだ手の甲に1つ、2つ落ちていった。

ほんの20分前、病室の簡易ベッドで寝ていた蘭であつたが、園子が飲み物を買いにロビーまで降りようとしたとき、ちよつと目が覚めた。

だから2人で一緒にロビーまで降り、冷たい缶ジュースを飲んでいるときに、見回りの看護師に出会った。

そして、話を聞いた看護師の、いつ目覚めるかどうか知らない患者といふより、少し彼らから離れて休んだほうがいいのでは、という配慮により、彼女たちは宿直室に寝床を移した。

先ほど口にすることができた精神安定剤のおかげでとっぷり眠ることができた蘭は、しばらく医師の横で布団を敷いてもらい横になって、園子や休憩中の看護師や医師の話を聞いていた。

そんな彼女の横でほんとと安堵の溜息をついてから、園子は蘭を医師に任せ、部屋を出る。

博士に謝りたくて、そして、いち早く彼に新一と哀の思いがけない変化を伝えたくて、園子は高鳴る気持ちを抑えながら、2人が眠る病室に足を速めたのだった。

けれども、今また彼らに変化が現れた。

――そう、彼が戻る時は、きっともうすぐそこだ。

園子は再び戻ってきた宿直室のドアを勢いよく開ける。

「蘭！・・・新一くんが・・・新一くんが・・・帰って来るわよ！」

園子が蘭を連れて病室に戻ると、博士は手を2つの手の上に重ねたまま、じつと眠ったままのコンナと哀を交互に眺めていた。

まるで2人の息子と娘を見ているように本当に愛おしそうな、優しい父親のような表情で。

そんな彼を見つめ、園子は思わずふっと微笑んだ。

「・・・博士・・・」

園子が呼ぶと、初めて気づいた、というように彼はゆっくりと振り返る。それから視線を移し、蘭の姿を認めると、うつすら笑みを浮かべた。

「やあ、来たか。・・・体の方は大丈夫なのか？」

「はい・・・」

蘭は小さくうなずき、それから心配かけてごめんなさい、と謝った。そんな博士と蘭の様子を横で見ながら、園子はベッドで眠っている2人の顔を覗き込む。

先ほどよりずいぶん穏やかに見えて、ほっと息をつく。カウントダウン、と言ったところだろうか。

本当に意識を取り戻す、なんて全然確証があるはずはないのに、それでも彼女は信じていた。きつと今では、博士も同じ気持ちだろうし、蘭もそのつもりでいるだろう。

蘭にも薬のせい、それとも希望の言葉のせい、先ほどより顔色がよくなったような気がする。

「先生、呼ぶ？」

「いや、今はやめておこう。・・・医師が来たらこんなゆったりとしていられないじゃろって」

「そうね」

ふっと笑って園子は蘭の肩をポン、と押した。

「ほら、蘭」

その言葉に促されるように、蘭は遠慮がちに、眠っている彼の傍に座り込むと、その寝顔を覗き込む。

園子の目には、とつても優しい表情をしている蘭が映っていた。涙も浮かべず、ただ、じつと彼の寝顔を見つめている。

「ねえ、園子」

「うん？」

「新一、どうやったら早く目覚めるかな？」

「・・・ん、あんたがキスすればイチコロだとは思うけど、・・・思わずびっくりして、哀ちゃん残して一人だけ意識取り戻されてもしょうがないしね」

アハハ、と豪快に笑って見せたあとで、園子はふっと表情をやわらかく崩すと、ま・・・と再び言葉を続けた。

「あんたの声で、2人を呼んでみれば？」

「・・・え？」

「『早く戻っておいで』って。そしたら、きっと2人はその声に惹かれてすぐに目覚めるって」

「そうかな・・・」

「そうだよ」

園子にはっこり笑って、

「蘭の声は天使の声なんだからね」

そう親友の耳元で囁けば、蘭は嬉しそうにはにかんだ。

第24話 救いの手？（後書き）

ちよつと分割してみました、パート5vv

どんな感じでしょう。園子視点で書いて見ました。今日の園子ちゃんも素敵ですvvvvぐー！

・・・と自画自賛（苦笑）。

物語は32話付近で終了するかと思いますが、超えるかどうかは今
はわかりません。変なところを切っちゃうかもしれないし、それと
もまたいろんな話をシツコイくらいに書き足しちゃって、40話ま
でいっちゃうかもしれない。

でも、もうこだわりを捨てて。

自分の今、書きたいものを書いていこうと思ってます。

そしてこの思いが自然とみんなに伝わる事ができれば、と考えて
ます。

それでは、此処までお読みいただきまして、ありがとうございました！

第25話 生還、そして・・・

出口はすぐそこまで来ていた。

白い光に包まれながら、コナンと哀は手を繋いで突き進む。

しつかりとその手を離さぬように、そして2人が逸れぬように。

遠くに見えたのは一つのドアだった。

コナンにも、哀にも見覚えのあるソレの形。

2人は一瞬、立ち止まって信じられない、という表情でそれを凝視した。

「ねえ、あれって」

「・・・まさか」

「蘭の「博士の」」

2人の声が被った。思わず顔を見合わせる。

「な、何言ってるんだよ、アレはどう見ても毛利探偵事務所のきつたねードアじゃねえか」

「何言ってるの、あのドアは博士の家のドアよ。あなた、十数年も行き来してたくせして、それすらもわからないの？」

「バー口、博士のうちのドアなんて一目見ればわかるよ。第一あんな特徴のある色形。間違えようもねえって！」

「でも現に間違えてるじゃない」

「間違えてねえって。・・・だって見てみるよ、この茶色の」

「・・・茶色？」

そのときになって、今までジト目で見ていた哀が驚いたような表情をした。

「そうだよ。それに見てみるよ、この傷。これ、去年蘭がつけた傷だぜ?」

彼が指差したそのドアの真ん中に小さい凹みがある。

去年の、学校でささやかに開かれたハローウィンパーティーの余興でクラスメートが数名、被り物をして毛利探偵事務所に出向いた。それは園子がしかけたことなのだけれども。

結局のところ、タイミングがはずれてしまったわけで。

チャイムを押して出てきたのは毛利探偵。

慌てふためくクラスメート。そしてもつと驚いたのが彼であつて。

「ひいひい・・・!」

その声を聴いて飛んできたのが、ちょうど学校から帰ってきた蘭と、何も知らないで園子とやってきた新一。

腰を抜かした毛利探偵を囲むのは数人の被り物を被った不審者。

「はあああああつ!!!」

「ひっ」

「きゃー!」

「や、やめてくれっ」

「蘭! その子、河合くんに堺くんに、亜里沙ちゃんよっ!」

「・・・えっ!?!」

園子のその言葉により、間一髪彼は助かったが、彼女の蹴りの勢い

は急に止めることもできず、そのドアにちょっとした凹みを作ってしまったのである。

新一はその状況をもはや笑って傍観することしかできなくなっていた……。

そんな忘れようとしても忘れることのできない思い出と、そしてこのドアの表面にある大きな傷。

こんな特徴のあるモノ、間違えるわけがないじゃないか。

彼はそういう自信があったから、どうだ、という顔を哀に向けた。

「ちょっと待って、傷なんてどこにもないし。……それに、このドア、茶色くない。白よ?」

「へっ? な、何言ってるんだよ? おめー、熱のせいで目がおかしくなってるじゃねーか?? これ、どう見たって」

そこまで言って、彼ははたと言葉を止めた。

「もしかしてさ、このドア、一番帰りたいと思う場所のドア、なんじゃねーか」

「え?」

「俺は今、蘭のところに帰りたいって思うから。……そして、おまえは」

「……なるほどね」

ふっと哀は微笑んだ。彼女の帰りたいと思う場所は、今は姉のこ

るでも、もちろん、組織のところでもなくて。
博士の待つ、あの場所だから。

「今の私たちの気持ちを象徴しているってわけね」

「そういうこと。そしてきつとこの先は俺たちのいた・・・」

彼はそう答えると、そのドアに近づき、よつ、とそのノブに手をかける。

が、鍵が掛けられているのか、それともなんらかの作用があるのか、ノブは右に左に回れど、開くことはなかった。

「・・・どうしてだ？」

一瞬焦ったように彼が呟いた。

「まだここにいろつてことか？」

「そんな・・・」

哀は思わず青ざめ、地べたにぺたん、と座り込む。

「やっぱり、あなたは来るべきところじゃなかったのよ・・・」

待つべき人がいるのに。

愛しい人がこのドアの向こうににいるというのに。

きつと手を伸ばせば届くというのに。

こんな・・・。

こんな悲しい思いをさせるのは、私一人でいい。

「ごめんなさい」

「バー口。こんなんであきらめられつかよ。・・・オメーが謝る必要なんて、全然ないんだからな」

怒ったように、ぶつきらばうに「ナンは哀から目を逸らす。

「それに、言つたる？『守つてやつから』って。・・・あの約束はまだ、終わっちゃねーよ」

「約束なんて・・・」

「帰ろうぜ？何が何でも・・・このドアが向こうに通じなければ、別のドアを探せばいい。・・・そうだろ？」

「・・・・・・・・・・ええ」

哀は遠慮がちにこくり、とうなずく。

ああ、自分は彼の優しさに何度救われたことだろう。

そして、私はこれからも幾度となく彼に救われることだろう。悔しいけれど、とても嬉しくて。

涙がまた、零れそうだった。

「・・・・・・・・灰原、行くぞ」

彼が再び彼女に手を伸ばし、それからまた別の方角・・・・。東に向けて歩き出そうとしたちょうどそのとき。

『哀ちゃん、新一・・・・・・・・早くおいで。美味しいご飯、作って待ってるから。・・・もう起きて・・・学校遅刻しちゃうよ』

どこかで誰かの声がした。

その声はとても聞き覚えがある、甘い、優しい声。

2人は驚いて、振り返る。

聞こえるのは、ドアの向こう。

ドアがきいい、と大きな音をたてて、ゆっくりと開かれていく。
あんなに左右にまわしても開かなかったあのドアが。

『早く、おいで』

2人は、その声に導かれ、覚悟を決めたように足をドアの方に再度向けた。

誰の声か、2人にはもうわかっていた。

自然と笑みが零れていた。

「行こう。蘭が、・・・みんなが待ってる」

「ええ」

彼の言葉に哀は小さく、けれどもしっかりとうなずくと、ドアの方に向けてゆっくりと歩き出した。
大地を踏みしめるようにゆっくりと。

ドアの敷居の手前でどちらともなく、2人は足を止めた。
そして、再び、今きた場所を振り返る。

白い、ただ真っ白い世界。

闇もあつたはずだし、花畑も、笹のような高い植物も。それに、川もあつたはずだった。人もいた。

しかし、今そこには何もない。ただ、真っ白い空間に、見慣れたドアと、自分たちが2人いるだけ。

もう、自分たちが此処に来ることはしばらくないだろう。
いや、来ないつもりだった。

「さよなら」

哀はぼつりと呟いた。そして、彼を見上げる。コナンも黙って果てしなく続く白い世界を見つめていたが、哀が自分を見つめていたことに気がつくと、小さく笑ってみせた。きっと彼もいろんなことを考えていたのだろう。

「じゃ、せーのっ、で踏み入れるか？」

俄か明るい声で彼が笑いかける。先ほどとは全然違う声のトーンで。
「え？」

突然の子供じみた提案に哀は思わず眉を顰めた。

「いいから。ずーっと『行こう行こう』で結局前にあんま進めてねーからさ、気分転換だよ、気分転換」

「・・・そう・・・別にいいけど」

明らかに不服そうに顔を顰めれば、コナンはそんなあからさまに否定しなくても・・・と、苦笑いを浮かべた。

「んじゃ、行くぞつ。・・・せうのつ！」

2人はそのかけ声で敷居を跨ぎ、ドアの向こうに一歩足を踏み入れた。

米花総合病院815号室。

何度目かの蘭の彼らに向けての呼びかけがあったときだった。

何度も、何度も、彼女は一生懸命愛する幼馴染とそして小さい少女の名前を呼んでいた。

やわらかい声で、一生懸命。

もう、2人が生きて帰ると誰もが信じていたから。

「・・・う・・・」

ピクリと彼の体が動いた。そして、微かに瞼が動き始める。
必然的に皆の視線は一つに集まっていた。

コクリ・・・と誰かの喉が鳴る音が聞こえた。

「ら・・・ん」

とうとうその言葉を彼は発した。そしてその言葉と共に少しずつ目を開ける。

歓喜の音が自然と病室内に沸いていた。

「・・・しん・・・いち・・・」

目を開ければ、自分を心配そうに、そして涙目で見つめる幼馴染の顔がそこにあった。

（・・・蘭？）

「・・・ここは・・・」

病院だ。

白い世界ではない。川もないし、花もない。

自分が倒れて眠らされていた場所。そして、灰原哀の言葉により、再び幼馴染との思い出を作るため抜け出した場所。

そこに自分はまた、眠らされていた。

体は江戸川コナンではなく、工藤新一の姿で。

「・・・戻って、きたんだ」

思わず安堵してほっと息をつこうとして、彼ははたとあることに気がついた。

「・・・灰原は・・・？」

そのときになって、自分の左手が何かにふさがれているような気がして、彼は思わずその手の方に目を向けた。

灰原がそこにいた。

思わず、ほっ、と息をつく。

小さく、まだ幼く、みずみずしいその手は、先ほどまで感じていたその手の大きさとはあまりにもかけ離れているように見えた。

あのときは、まだ自分も『江戸川コナン』の姿であったから。

「灰原・・・？」

しかし、彼女は。

まだ、昏々と眠り続けているようで、ぴくりとも動くことはなかった。

まさか。

「は、・・・灰原！？」

彼は大声で叫んだ。

哀はその声に促されるように、静かに、静かに目を開ける。

そして蛍光灯にまぶしそうに目を細めると、それから自分を見下ろす園子、博士、蘭の姿に気がついた。

「哀ちゃん！」

「哀くん！」

病室一杯に響く声。それは消灯時間が過ぎている今では、かなり迷惑行為だったかもしれない。みんなの笑顔を順々に見ながら、哀はぼんやりした気持ちでいた。

「（・・・わた・・・し・・・）」

そんなとき、右手を誰かにつかまれている気がして、彼女はゆっくりとその方向に目をやった。

それはごつごつした手……。

今まで体験していたあの子供の手ではなかった。

大人の手。……大きくてしわくちゃな博士の手でもなくて、若々しい青年のような……

「（誰……？）」

哀は視線を少し先にやると、そこには同じように酸素マスクをつけてられて眠っていた工藤新一がベッドに横になっていて。

「（……工藤……くん？）」

「びつくり、させるなよ……」

彼は驚く哀を横目に、力なくだが、確かにニツと笑った。

そしてそのごつごつとした手は、哀の小さな手を遅い速度だが、確実にすっぽり包み込んでいった。哀は彼から視線を外せずにいた。しばらく彼だけを見ていた。

……彼は、生きていた。そして、私も生きて帰ってくることできた。

彼の。

彼らの手を借りて。

……私は、帰ってこれたのだ。彼と共に。

哀はふわり、と口許をほころばせた。

「……心配させおって！まったく、困った子供らじゃ」

博士が2つのベッドの間で、思わず声を詰まらせ、オイオイと泣きはじめ。

「博士……」

哀は困ったように笑うと彼から手を解き、棚にあったティッシュ箱

を数枚取り、彼に渡した。

「す、すまんのう・・・」

そう言つて哀からティッシュを受け取ると、博士は思いつきりチーンと鼻をかむ。哀は微笑みながらそんな様子を見ていた。

「哀ちゃん・・・」

その声に、哀はハツとして顔を上げる。やっぱり蘭だった。

新一のすぐ横に立っていた彼女は、涙をハンカチでぬぐい、彼女のベッドの方に向きを変えた。

そして彼女の近くに一步足を踏み込んだ。それを見て哀は大きく息を吸い込む。そして、

「（・・・私・・・）」

何かを言おうと口を開きかけたが、蘭がそれを遮って優しい表情で言つた。

「・・・おかえりなさい」

「（・・・ただ、いま・・・）」

自然とその声が出ていた。

「呼んでくれて、ありがとう。・・・助けてくれて、ありがとう」

「・・・え？」

きよとん、とした蘭の顔に、哀はもう一度はつきりした声で答えた。

「あなたがいたから。・・・私たちは戻ってこられた」

どうしてだろう。今の自分はとても素直で、何だか少しおかしい。何でこんなに素直になれるのだろう。思った言葉が出てくるのだろう。

ぼろりぼろり、と涙が出てきて。

生きているつてことがすばらしく思えて。

「哀ちゃん・・・」

体を起こして蘭を見つめていた哀は、きゅっと彼女に抱きしめられ

た。

その抱擁のぬくもりは、姉の先ほどのそれに似ていて、もちろん、姉の氷のような冷たいぬくもりではなく、蘭の抱擁は暖かい血の通ったものではあったけれど。

それでも、それに似た要素のものが感じられた。

ふとした視線に気づくと、新一がこちらを見て、ニッと笑っている。思わず頬を赤くして、哀はさっと彼女から離れた。

「ねーえ。・・・2人のその女同士の熱い抱擁はいいんだけどさ」
不服そうに呟くのは園子。

「蘭と新一君との熱い抱擁はどうなったわけ？」

「・・・へ？」

「だ〜か〜ら〜」

『新一！バカ！何度心配させたら気が済むのよッ！』

『・・・ごめん』

『そんな謝られたって・・・許さないんだからっ。キスしなきゃ、許さないんだから！』

『・・・わ、わかったよ。・・・蘭・・・ごめんな』

『熱いキスじゃないとゆるさ』

「はい、そこでカットー！」

新一はあわててそこで話を切った。思わずふてくされる園子に、新一は苦笑いを浮かべる。

こんなことを繰り返されても溜まったもんじゃないから。

・・・それに、もう覚悟は決まっている。

園子のレールに敷かれなくなっただって、自分は前に進める。

蘭に言いたい言葉は、沢山あるから。今聞いてもらいたい言葉は、沢山あるから。

「よし」と呟き、そのまま両手をベッドの淵を掴み、勢いよく体を起こした。

それは本当に軽やかだった。誰がどう見ても、目の前の彼が今まで意識を失っていたのがまるで嘘のように思えた。

「新一くん？」

園子はその様子に、信じられない思いで彼を見つめていた。

「え？」

蘭が新一のベッドのほうを振り返る。そこで彼はしっかりと笑みを蘭だけに向けた。

「・・・待たせたな、心配かけてゴメンな・・・もう、大丈夫だから。・・・だから」

「・・・ッ！！」

蘭は何も言わずに、ただ新一の体にもたれかかる。

「ら・・・ん」

新一は思わず彼女を見つめた。しかし、蘭は自分の顔を見ようとしなかった。ただ、静かに泣き出した。

「う、ううう・・・」

彼女の震える泣き声が病室に響き渡る。

彼女の嗚咽が、切なさ、嬉しさが、彼の体に響き伝わってくる。

新一はその2日間で痩せたように見えるその華奢な体をそっと抱きしめた。あまり強く抱きしめたら壊れてしまう気がして力など込められるはずがなかった。

「・・・蘭」

園子はそんな2人の様子に、鼻を噤り、手元のハンカチで目頭を押さえていた。無二の親友である彼女の喜びが、自分のように嬉しかった。

「若いモンに任せて、オバチャンはちょっとここでおいとましましょっかね」

まるでお見合いの席にいる仲介人のような言葉の表現を使い、園子

は同じく泣き出しそうな顔の博士のその太い腕をつかむと、無理やり椅子から引き剥がした。

「ちよつと・・・どこへ連れて行く気じゃ！？わ、ワシはもうちよつとここで・・・」

「邪魔者は消えるのよ！ね、今は二人にしとくいいチャンスなんだから。哀ちゃん子供なんだから目をつぶって耳を塞いで寝ちやいなさい！！」

「・・・え？」

泣くのをやめて、きよんとした顔で蘭は親友を眺めていた。

「明日もまた来るからね！バハハハハ！！」

半ば強引に彼女の倍近くある博士の体を引きずりながら病室を後にする。ドアを閉める直前、新一に投げキッスをした。

「・・・ハハ」

新一は笑うしかなかった。

目覚めに悪いものを見てしまったようである。

が、すぐにその笑いも止んだ。何か強い視線を感じたのだ。

その視線の先には案の定、蘭がじつと新一の顔を見つめていた。その顔は明らかに怒っていて。

「・・・蘭？」

新一はそんな彼女を心配して、恐る恐る彼女の頬に触れようとした。しかし、その手をぱちん！と振り払われる。

「てっ・・・」

彼は思わずその手を引つ込めた。

「何か言いたいこと、あるんじゃないの？」

「え？」

ぎくりとして新一は聞き返す。その様子に、蘭は尚も怒りを露わにする。

「どうして？どうしていつもあなたは自分ひとりで何でも抱え込も

うとするの？そんなに私が頼りない？役に立たない？ねえ、新一！」
蘭の目頭から再びとめどない涙があふれてきていた。

「蘭……」

そのいとおしさに、その細い彼女の体をきゅうつと再び抱きしめる。体に伝わるのは、『コナン』だったときに感じていた感触とは違う、彼女のやわらかさ。

子供の姿だったときは、あんなに求めていたのに。

今はそんなことすら考える余裕もなくて。

どうすればいいのだろう。

自分はこの『好きだ』という思いを伝えればいいとばかり思っていた。

けれど、それだけじゃ彼女の笑みは消えない気がした。

全てを話すべきか。……それともさらりとかわすべきか。

そんなことを考えていたとき、強い別の種の視線を感じ、彼は思わず振り返った。

ベッドに体を仰向けにさせたまま、哀がこちらを見ていた。悲しそうな表情で。

それは罪の意識に苛まれる科学者の目とも違う、また別の色を映していた。

切なさを含んだ、『女性』を強く感じさせる瞳。

「……え？」

どきり、と胸が疼いた。

何でそんな顔をするんだ？？

新一がこつちを見たことがわかったのか、彼女はあわてて彼から背を向けた。

そのとき、急に昼間の歩美の言葉が彼の脳裏に浮かんできた。

『哀ちゃんはコナンくんのが好きだから』

いまさらのように、その言葉は彼の頭を何回も、何回も木霊した。まるで何者かに自分の脳をのっつけられているかのように。

灰原が俺を・・・？いつから？？

彼の視線はいつの間にか灰原の背中を見つめていた。

そういえば、昨日自分が目覚めて、蘭を抱きしめたあのときも、こんな感じではなかっただろうか。まさかあのときも・・・。

新一は蘭を抱きしめたまま、目線だけはじっと哀の背中を見ていた。小刻みに揺れたその小さくて細くて触ったら崩れてしまう、例えて言うならば『砂の城』のような。

「・・・馬鹿！」

「！！！」

その声にハツとして新一は我に返った。

目の前で潤んだまなざしで自分をにらみつける蘭の顔がそこにあった。

「ら・・・」

その瞬間、強い衝撃が彼の体を襲う。彼女は新一を突き飛ばすと、消灯が過ぎた暗い廊下に飛び出していった。

「ら、蘭・・・！」

あわてて新一は彼女を追おうと駆け足で病室を出て行ったが、一旦踵を返すと、思い直したように自分の頬を強くパチンと叩いた。そして、再び彼女の姿を追って走り出したのである。

今は、こうするしかなかったから。

「・・・やっぱり笑顔はまだ無理のようね・・・」

蘭と新一が去った病室。仰向けになって、真っ白い天井を見つめて哀は一人呟いた。

昨日、この場所で新一と蘭が抱き合っているのを見た。

あるときすごく動揺して、自分が動けるのならば、その場から逃げ出したい気持ちで一杯だった。

今日の朝、新一が蘭を追うのを送り出すとき、『行かないで』と言いたい気持ちをこらえていた。『待つて！』と言って彼の腕を掴むのをこらえていた。

自分で彼にチャンスを与えていたくせして、発破をかけていたくせして、気持ちの中では動揺ばかりしていた。

・・・今度こそは、笑って送り出せると思ってたのに。

一度死を覚悟して三途の川まで行っておねえちゃんと会って、変わった気がしていたのに。

『幸せになるために生きる』っておねえちゃんが言ってくれたあの言葉を聞いて、全て吹っ切れた気がしたのに……………。

蘭さんの声があのだアから聞こえてきたとき。本当に嬉しかったのに。

目覚めて蘭さんが私を抱きしめてくれたとき、やっぱり私がやったことは間違ってたんだって思えたのに。

だって……………

だって、私は……………。

「私って欲張りね……………」

そう言っただけは自嘲すると、タオルケットを頭までかけて静かに目を閉じた。

眠れるはずはなかった。しかしできるだけ早く新しい朝を迎えたかった。

・・・次の朝になれば何もかも解決する。

もう工藤新一は江戸川コナンには戻ってしまっているけれど、きつと毛利蘭との関係は明らかに変わっていることだろう。

それはきつと朝になればわかることだ。彼が自分から話すだろう。できれば聞きたくない話だけれど。

それに、一番の問題であるあの解毒剤の試作品の副作用もまた、あの西の名探偵に任せてあるから心配いらないし。

そこまで考えて哀はふと呟いた。

「・・・あのヒト、一体どこにいるのかしら・・・」

第25話 生還、そして・・・（後書き）

うふふ。ドア。ドア。くすくすvvv

最初は、「扉」にしようと思ったのです。一つの扉。アンティークな洋館みたいな。

でももしたら、ハガネみたいになっちゃうでしょ。いくらなんでもそしたらイヤだなあ、って思っ。変えました。

この話も結構気に入ってます。哀ちゃんの救いの手、もう終わっちゃったけど。

書いててめちゃくちゃ楽しかったなー。ああ、もうコレ、書くことないんだ。

・・・また、倒れさせましょうか？死なせちゃおうか・・・（こらこら。

今度は、最終話あたりで平ちゃんを車に轢かれさせて・・・。

「・・・ここは、どこや・・・まっくらで何も見えん」

『平次く・・・』

「誰や、俺を呼ぶんは・・・」

ってな感じに（笑）。

てか、平次の知り合いで死んだ人、こつぶ、知らないーくー！！じっちゃんあたり登場してもらおか・・・。てかじっちゃんどんな人かわからないーくー！！

それでは、ここまで読んでいただき、本当にありがとございましたー！！

第26話 東西名探偵の再会

「蘭！」

新一は米花総合病院の暗い不気味な廊下をただひたすら走っていた。愛しいただ一人の女性の姿を追って。

パタパタと走る音が廊下に響き渡っている。

いつもなら追いつけるはずのその距離も、今の彼にとっては長すぎた。

彼の体力、精神力はこの短い期間で何回も倒れたことによって、そして薬の副作用によって大幅に萎えていたのだ。

「蘭！！待てたら！」

もう一度だけ叫び、その速度を限界以上に引き上げようとしたとき、彼の足が絡み、派手にその場に突っ伏すように転がった。

「・・・ッ！」

ハッとして顔だけ上げて前を見ると、彼女の姿はみるみる彼の視界から遠ざかっていく。

「蘭！・・・らーーーーーん！！！」

声の続く限り叫び続けた。

彼の声は、8階の廊下いつぱいに広がっていた。

「おーおー。やかましいやつちゃんあ。ホンマ、耳が痛うてかなわんわ。8階のご近所さんに迷惑とちゃうか？」

耳に残る関西弁。その声に思い当たる節があり、新一は嫌な予感を感じながら恐る恐る振り返った。

「は、服部・・・と、和葉ちゃん？」

案の定、そこには西の名探偵 服部平次が両腕を組み、廊下の壁に寄りかかって自分を見下ろしている。ニヤニヤと笑みを浮かべて。

そしてその陰からひよっこり可愛い顔を覗かせているのが彼の幼馴染で、自称「平次のお姉さん役」の遠山和葉。

まさかこの2人がこんなところに来ているとは。慌てて上半身起き上がり、彼は思わず顔をしかめた。

「どうしてここにいるんだよ・・・」

嫌なところを見られてしまった。

そのひんやりした固い床の上で胡坐をかき、2人から視線を逸らして、訊ねる。ばつが悪くて顔を合わせられなかった。

「いや、それは・・・」

「それはこっちの台詞や。こんなところで何してるん？」

平次を遮るようにして、和葉はちよつとがっかりしたように新一を見下ろした。

「工藤くん、蘭ちゃんと昼過ぎに病院出たんとちゃうの？平次がまたここに帰ってくるゆうたから半信半疑で後ついてきたんやけど、まさかホンマに帰ってくるとは思わなかったわ」

ロミジュリみたいってホンマ思ってたのになあ、と落胆したように和葉が呟く。

「ほんで蘭ちゃんは？・・・蘭ちゃんはどこにおるん？」

「・・・いや、あの・・・」

「まさか蘭ちゃん置いて新一くん一人病院に戻ってきたん！？」

「いや・・・」

新一が彼女の勢いに圧倒され、言葉に詰まっていたとき、平次が見かねたように、和葉の頭を軽く小突いた。

「痛！何すんの！？」

大げさに頭を抑えて、講義する和葉。そんな幼馴染に、平次はため息をついた。

「アホ。この状態見て何も思わんか？工藤は今、あの姉ちゃんと喧嘩しとるんに決まっとるやないか」

「・・・え？喧嘩？」

驚いたように和葉は新一を見た。新一はやれやれというように苦笑

いを浮かべて、

「まあ、喧嘩っていうのはちょっと違うな。俺が勝手にあいつを怒らせたんだから・・・」

と、平次の言葉を訂正し、それから再び視線を奥の廊下にやった。もちろん蘭の姿はとつくになく、彼は大きくため息をついた。

そんな彼の様子に、和葉は首をかしげる。

「あんな蘭ちゃんみたいないええ娘を怒らすなんて・・・。工藤くん、一体何したん？」

「何って・・・」

新一は思わず言葉に詰まった。何といたらいいかわからなかった。しかしその様子に、和葉はハツとした顔をしてこう声を張り上げる。
「も、もしかして工藤くん、嫌がる蘭ちゃんを草むらに連れ込み、無理やり押し倒して・・・嫌や、そんな、蘭ちゃんがかわいそうや！！工藤くんがそんな男やとは思わなかった。不潔や不潔。鬼や！悪魔や！」

みるみる顔を青くして、何回も何回も頭を激しく横に振った。まったく感情の起伏が激しい娘だ。そしてそのありえないほどの妄想を膨らます癖は、蘭や園子と似ている。女というものは全てそうなのだろうか。

（服部も大変だな・・・）

そう同情するように平次を見上げれば、彼もその意味に気づいたのか、苦笑した。それからため息をついて平次は幼馴染に向けて大阪人にしては遅いツツコミを入れる。

「ちやうちやう、その反対や。何もせえへんかったから、あの姉ちゃんに嫌われたんや。せやろ、なあ、工藤？」

「いや・・・多分そんなじゃねえと思う」

新一はさつと彼の考えを否定した。

「あいつが怒ったのは。俺が本当のことを言わなかったから」

「え、本当のことって・・・まさかくどー・・・あのねーちゃん」

驚いたように平次が自分を見つめているのを感じながら、彼はあえ

て目を合わせようとはしなかった。

「さあ、そこまではわからねえけどな」

ポツリ、と呟き、前を見据える。

『何か言うことがあるんじゃないの？』

『どうして？どうしていつもあなたは自分ひとりで何でも抱え込もうとするの？』

あのととき、彼女が求めていたのは何だったのか。

『新一は、どうして何度も何度もあんな発作ばかり……。新一どこか悪い病気にかかっているんですか！？』

今回あの薬を服用してから、一度目の発作で気を失ったとき、自分は蘭の叫ぶ声を聴いていた気がする。

きつとあいつは待ってるんだ。告白よりも、何よりも。俺が、抱えている運命に。

今のあいつに『告白』の二文字はきつと頭になくて。

俺が自分を頼ってくれることを待っている。力になれば、と思っている。

それなのに。何も答えようとしないう俺に対して、あいつは絶望したんだ。

「……ったく。相変わらずのお人よしだよ、あいつは」

ぼそり、と新一は呟く。そんな自分に気づき、彼は和葉に聞こえないようにと声を潜めた。

「……喋るんか、お前の運命を？」

「……さあ、どうすっかな」

「どうすっかな、てお前……」

言葉を失ったのか、平次はただ大きい目を更に大きくさせ、彼を見つめていた。

今のところは言うつもりはなかった。彼女に迷惑をかけられない。ただ、あいつに泣きつかれたら。

・・・俺はそれでも黙っていられるだろうか。

「せやかて、くど・・・」

「・・・なあ。さつきから何の話をしとるん？」

背中で申し訳なさそうに聞こえるその言葉に、2人ははっとして振り返った。

そうだった、和葉がここにまだいたのだ。はっとしてまだ喋りたそうだった平次は言葉を飲み込んでいた。

「2人でこそこそ。・・・そんな怖い顔して・・・まさかまた危ないことに首突っ込んでるんじゃないの？・・・なあ、平次」

「大丈夫や、和葉は何も心配すんなや」

「そやかて・・・」

それでも心配そうに和葉は2人を見つめていた。が、「まあしゃーないか」と溜息をついて見せた。

「・・・んじゃ、もう行かなきゃ。あいつ、これ以上悲しい思いさせたまま放っておくことなんてできねーし」

自分が彼女の許に行くことで、逆に辛い思いをさせてしまうことがあるかもしれないけど。

このまま、何もしないで、タイムリミットを終えることができなかったから。

彼女に不安を抱えさせたまま、何もしないで手をこまねいていることなんてできるはずがなかったから。

「さやか」

ふっと平次が笑って見せた。ほな、頑張り。とぼんと背中を叩く。

その親友の激励の言葉に、新一はふっと口許を緩ませた。

「じゃーな、また後でっ」

新一はそう言い残すと、また走り出した。

「ああ、『また』あとでな」

次逢うときはきっと別の姿になってるだろうと思っていたが、『また』と言ったときの平次の口調が妙にクセがあって、ひっかかった。もう走り出していたため、どんな表情をしていたのかはわからなかったけど。

「あ、そうだ！」

彼は走るのをやめ、突然立ち止まって踵を返すと、平次に向かって

「・・・服部！」と大声で叫んだ。

「・・・な、何や!？」

びつくりしたのか、平次の声の上擦っている。隣で和葉も不思議そうな顔をして新一を見ていた。新一はそこでは答えず、再び平次の許へ駆け寄ると、そっと耳打ちをする。

「今日、灰原の傍についててやってくれねえか？」

「・・・は？何でや？」

きよとんとした平次に対して、新一は言いにくそうに目を逸らした。
「いや・・・」

いいにくそうにしている親友に対して、平次はピン、と来るものを感じた。ははあ、と彼は思う。

「・・・何かあったやろ？あのちっさいねーちゃんと」

「いや、その・・・」

「わかった！あのねーちゃんの心のアフターフォローはこの恋愛の達人、服部平次様に任しとき！」

「どこが恋愛の達人だよ・・・。自分の恋愛すらマトモにできてねえくせして」

新一が思わず乾いた笑いを浮かべた。その言葉に思わず頭に血が上っていく。

「・・・ななな、何をうつ。ケンカ売つとるんか！？」

「平次っ！」

慌てて和葉が平次と新一の間に止めに入った。もう、何やつとんねや、と呆れた表情で彼女は呟く。

「人に頼んでるのにその態度は何やつちゅうねん」

和葉によつて何とか彼の胸倉を掴むなどの行為は避けられたが、平次は苛々を止められずに平次は言葉を新一に向けて吐き捨てるように言った。

「よけーなことは言わなくていいからよ。ただ傍についててやって欲しいんだ。博士も休ませてあげたいし。だからといってあんな状況で一人にさせるのも寂しいと思うから」

「あんな状況、ね」

一体どんな状況をこいつは作つたんやろ。ふとそんなことを考えて、平次は目の前の親友をただじつと見詰めた。

しかし、それ以前に。

（工藤はあのちっさいねーちゃんの気持ちにいつ気づいたんや・・・？）

あんなに鈍い男やて思ってたのに。

「くどーも大変やな」

「・・・え？」

「あまりにモテ過ぎてても大変やつちゅうんや。・・・それに優しすぎて、や」

平次はそういうと、にやり、と笑った。

「そしてその頼みを嫌な顔一つせんと受けようつちゅうオレかて相当なお人よしや。・・・せやろ？」

その彼が発した言葉に、新一もまあな、と口許をふんわりとほころばせた。

「じゃ、頼むぞ」

「おお。・・・工藤も、気をつけていくんやぞ？途中で倒れんようにな」

「バー口、そんな柔じゃねえよ」

彼はにっと笑って再び走り出す。全速力で、廊下を一人走っていく。あつという間に消えていくその後姿を、平次と和葉はただぼんやり見つめていた。

「ほな。いこか」

平次の言葉に、和葉ははっとして我に返った。既に新一の姿は廊下には影すらなかった。うん、とうなずき、和葉は平次の後をつく。消灯時間になり、まっくらな廊下を2人で歩く。

平次のＴシャツの裾をしっかりと握りながら、灰原哀の眠る部屋に。

「なあ、工藤くんのことば、もうええの？」

「え？」

驚いて平次が自分のことをまじまじと見つめるから、和葉は萎縮し

たように体をもじもじと縮こめた。

「そやかて、朝から工藤工藤って気にしてたみたいやし。何かあるんかな思て」

そんな和葉の言葉に、あちゃあ、と彼が大袈裟に顔を両手で覆った。
「・・・素人に気づかれるようじゃ、探偵失格やな・・・」

聞こえるばやきに、和葉は更に首を傾げる。

それから彼は観念したように時計をちらりと見てから、「ああ」とうなずいた。

「まだもうちょお時間があるから・・・オレはあのちっさいねーちゃんところに少しでも傍にいてやるつもりやけど」

「まだもうちょお？・・・なあ、平次、それって」

「・・・さ、早よ行くで！」

和葉の目からは、平次が慌てたように早口で遮ったように見えた。彼にぎゅっと手を掴まれて、再び歩き出す。

あ。

和葉はそのとき気づいた。

彼の手の痛々しさに。肉刺の割れた痛々しいその傷に、和葉は思わずそつと手でなげてやる。

剣道をしているせいでできた傷。ただそれだけなのに、自分が変わってあげたいと思わず心から思ってしまったていて。

病気でもないのに、こんなにシクシク胸が痛むから。

あんなに苦しい思いをしている工藤君見て、蘭ちゃん、一体どんなに辛かったやろう。

そして、きつとそんな彼がまた重い病気を抱えて、どこかに自分を残して行ってしまうとしたら。

「・・・なあ、平次」

「・・・ああ？」

彼のそのごつごつした手の感触を感じながら、和葉は敢えて平次の顔を見なかった。彼が自分を見る視線は感じていたけれど。

「蘭ちゃん、つらいなあ」

「・・・せやなあ・・・って・・・か、和葉ああっ！？」

びっくりしたように平次が自分を凝視していた。

「ちよっ、おまつ・・・何泣いとるんや！」

ぼろぼろ、涙が知らず知らずに溢れて、目の端から零れていた。

何や、どうしたんや？腹でも壊したか？おろおろとした表情で平次が聞くから、余計に涙が出てきて。

なんでもあらへん、と和葉は答えて、必死に笑ってみせた。

「ったくもお・・・」

持っていたスポーツタオルを急に目に押し付けられ、和葉はびっくりして顔をあげる。

困ったような表情で、平次は自分から目を逸らし、それを無言で差し出していた。使え、という意味なんだろう。

けれど、そのタオルから少々汗くさい彼の匂いを感じ、和葉はふつと吹き出した。

「もう、平次、最低や」

「なっ、何やとっ！？」

むっとして声を荒げて自分を見るが、和葉がくすくすとおかしそうに笑っていたからか、もう、何やねん・・・と、ぼそり、と呟いた。口調は怒ってるのに、その口の端が笑っているように和葉には思えて、不思議でならなかった。

「なあ、平次」

「・・・何や？」

さつきとは違う、心配そうな表情で彼は和葉の顔を覗き込む。

「アタシ、蘭ちゃんと工藤くんのために何かできることあるやろか」
「せやなあ・・・」

平次はその言葉に、ちよつと眉間にしわを寄せた。そんな幼馴染の顔を見て、考える。

何もできない自分が悔しかったから。

何も知らないで、部外者みたくのほほんと過ごすことがイヤだった。少しでも親友の力になりたかった。

「・・・おまえはありのままにしてるこつちやな」

「・・・え？」

「和葉は和葉らしく。・・・下手に気を遣ってもまたおかしいことになりそやる。・・・おまえはわろてるだけでええんや」

「何やの、それ。アタシ、アホなコみたいやん」

「あはは、せやな」

カラカラと笑う平次に対して、ぷう、と頬を膨らませて抗議してから、それでも、そうなんかなあ、とちよつと思つてみたりして。

普通にしていることなんて一番難しいことなのかもしれない。

でも、早く蘭が、幸せになつて欲しかった。

彼女の本当の笑顔が見たかった。

つくり笑いではなく、強がりでもなく、彼のことを話すとき、心からアハハと大きく口を笑えるような、そんな笑顔が見たかった。

「ほら、早よ」

「うん・・・」

平次に急かされ和葉は小さくうなずくと、消灯時間の過ぎたこのまっくらな廊下を彼の後に続く。

歩きながら、和葉は心の中でこの暗い病棟のどこかで一人でいる蘭のことを思い、胸がしくしく痛かった。せめて、早く、彼に見つけてもらいたかった。

そうしてまた、泣き出しそうな気持ちをこらえて和葉は幼馴染の手を握る力を強めた。

第26話 東西名探偵の再会（後書き）

おはようございます！いつもありがとうございます！

今回は平和の話をかなり大部分変えました。

ちよつと蘭ちゃんのこと何も考えずにいちゃいちゃする2人は考えられなかったのだ。

そして、哀ちゃんのことを触れない新ちゃんも。

でも、今日も楽しかったな。

それでは、ここまでお読みいただき、ありがとうございました！

第27話 ただ一つの感情

米花総合病院 8階廊下。

新一はひたすら走り続けていた。きっとこの階のどこかに彼女がいると思っていた。

人一倍怖がりの彼女が、一人でこの真っ暗い病院を歩き回れるわけがなかったから。

しかし、公衆電話の前、女子トイレの、給湯室、ナースセンター、エレベーター……。どこを探しても彼女の姿はなかった。

もうこの階には探す場所はない。

「ったく……。どこにいるんだよ」

新一はハアハアと喘ぎながら、流れ出る汗を手で拭う。それから、エレベーターを乗ると足を向ける。

告白しないでこのまま元のコナンに戻るのだけは絶対したくなかった。しかし……

新一はそつと一歩足を踏み出してみた。そのとたん、自分の体がぐらり、と大きくふらついていた。

「……やっぱりな」

思わずその言葉が口に出ていた。

もうそろそろ限界らしい。

この体ではもう、そんな遠くへは行けないだろう。十分に歩くこともできない。どうやら、体力を十分に回復できないうちに使いすぎたようだ。

何時間も意識を失ったあと、起きてすぐ休息もせずに全速力で走ったのだから、そうなることは必然だった。

しかし、もう心配をかけなくなかった。この弱った姿を見せるわけにはいかなかった。蘭にも……。そして、哀にも。

彼はあああ喘ぎながらその場に倒れるように座り込んだ。そして

柱に背中を凭れかける。

走りたいのに、どうしてこの足は動かないのだろう。

薬のせいだとはいえ、よわっちい自分にほとほと情けなくなる。

このままじゃ、このままじゃいけない。どうにもならないのに。
どうしてこんなに・・・オレは・・・

『哀ちゃんはコナンくんのが好きだから。歩美と同じくらい・
・歩美がコナンくんのこと思ってるのとおんなじくらい』
歩美の言葉が再び聞こえてきたような気がした。

「わかってるよ、歩美」

このままじゃ、あいつの気持ちが報われない。否、もしかしたら報われるとか報われないとか関係ないのかもしれないけど。
それでも。

新一は天井を仰いだ。

哀の泣きそうな顔が浮かんでくる。

出逢った当初は何も思えなかった。いや、正確に言えば、憎んでいた。彼女のことを。

自分をこんな風にさせてしまった、平穏な日常を奪ってしまった女。客観的に見ても、人殺しの道具を作った女、そして、組織の仲間。組織を裏切って死に切れず、自分を頼りにここに来たという話を聞いても、自分の知ったこっちゃない、と思った。

ただ、彼女をそのままここに置いたのは、彼女への優しさよりも、自分の損得のため。

もし正体がばれたら、博士や蘭のことなどバレるのも時間の問題だし、なにより彼女がここにいれば組織の動向がつかめると思ったから。

彼女が本当に組織を裏切ってたにしても、そうじゃなかったとして

も。彼女が組織の内部の事情を詳しく知っていたのは事実だから。
なのに。

どうしてだろう。彼女の涙を見たときから自分の中で何かが変わっていたような気がする。

彼女に対して疑っていたモノが、渦巻いていた疑惑や概念がするすると取り払われていくような。

『組織の女』じゃなくて、『一人の人間』として見る事ができたような気がする。

姉を思う、彼女の涙を見ただけで。

自分は組織がどんなモノか知っているから。組織がどんなに残酷で、卑劣で、醜いものだとか知っているから。

何かのためなら、平気で『心』をなくしているものだとか知っているから。人を平気で、心から笑って殺せるやつらだっただけで知ってるから。だから、あんなに姉を思い、心の叫びをぶつけられたとき、彼女のことを信じられるような気がした。

少なくとも、彼女は『人を想う、愛する』という心を持っているから。『優しさ』を持っているから。

それなら、彼女を守りたい、守ってやらなくちゃと思ったのはいつからだった？

杯戸シティビル・・・凍えた雪の夜、組織に怯える彼女の姿を見たときだろうか。

強がっていても、いつもその影に怯え、震えて泣いている。

睡眠という一時のリラックスできるはずの行為でさえも、苦しめられる。

そんな彼女の本音を聞いた夜からだろうか。

強がっていても、彼女の弱さを垣間見て、そのたびに守ってやらな

きやって思った。

目が離せなくなっていた。

今回も。

いや、今回だって。

人のことを心配して、体を壊してまでクスリを作って。そして勝手に倒れて。そして勝手に・・・

「死ぬ、なんて言いだしやがって」

ぼそり、と言葉に出ていた。自分が助けに行けたからいいものを。

（お前のんとこまで行くのだって命懸けだったんだぜ？）

遊園地で、哀が自分の前に現れたとき、助けなくちゃと思った。このまま手を離してしまえば、本当にもう逢えなくなるような気がした。

それだけは嫌だった。だから願いつけた。あいつを捕まえなくちゃ、引き止めなくちゃ、と思った。そうしたら願いは叶えられた。

暗闇が現れて、その向こうに誰かに呼ばれているような気がして。走り続けた。そしたら、哀の後姿が見えて。自分は・・・

一歩間違えれば本当に2人とも死ぬかもしれないなかった。それでも自分は帰ってこれると自信があつた。強がりじゃなくて。

待っている人がいれば、願っている人がいればきっと生きて帰ってこれると思っていた。

そして、その人物が幼馴染の毛利蘭だった。

「・・・けど、・・・灰原だって大事なんだよな」

失いたくなくて。死なせたくなくて。

この思いだけでアイツの許にいけるなんて、自分だって信じられな

かったから。

きっと、思いが強かったんだと思う。そう、きっと大事なんだ。クラスメートや、高木刑事や、目暮警部、少年探偵団よりも大事な存在。

『仲間』とか『同志』とかよりもっと深い関係。できれば心から笑って欲しくて。素直になって欲しくて。無理なんてしてほしくなくて。

時には彼女に好きな女の弱音・不満をぶつけ、あるいは冷やかされ、そして心配してくれる。

・・・きっと、この思いは。

「家族、なんだろうな。あいつはもう俺の中で」

姉みたいな、・・・そして妹みたいな存在。

もしかしたら違う表現の方が適切なのかもしれない。けれど、今の自分にはそれしか説明できないから。

恋愛でもなく、友情、仲間意識よりももっと親密で、愛する存在だから。

「・・・でも、灰原とキスする場面とかはどうも浮かんでこねえんだよな・・・」

思わず苦笑する。

「ごめんな、灰原・・・」

気づいてやれなくて。

お前の前でデリカシーのないことばかり言っただけ。それでお前を追い詰めて。

『（一度しか言わないわよ。早く彼女連れてどこかへ消えなさい。』

行つて自分の想いを伝えなさい』

『（彼女は待つてるわよ。あなたの言うように、私を氣遣つてそんなことを思わないように、自ら蓋を閉めて無理やり押し込んでる）』

『だったら。あなたの思うとおりにしなさい。私のせいで諦めないで。あなたは余計に私を罪の意識に追い詰める氣？これ以上苦しめてどうしようというの・・・？』

『（行きなさい。タイムリミットはあと19時間よ。それ以上はどうあがいても無理なんだから・・・）』

哀の言葉が頭について離れない。

どの言葉も、きつと泣きそうな想いで言つたに違いないのに。

「ありがとな、灰原・・・。必ず見つけてくつから。あいつを探すから。そして笑つて帰つてくるから」

だから、もうそんなに泣きそうな顔をしないで欲しい。もう、自身を苦しめないでほしい。あのとき、向こうで・・・。三途の川で姉に会つたときみたいに、心から笑っていてほしい。

・・・それが俺の願いだから。

新一はようやく体を起こすと、ゆっくりと立ち上がった。前を見据えて、再び歩き出す。

きつと一人で蘭が泣いているから。

お化けや幽霊に人一倍苦手な蘭が震えて泣いているから。俺を想つて泣いてくれているから。

早く見つけてやらなくちゃ。そして、あいつに告おう。

自分の想いを、そして・・・。

そのとき。

カツ、カツ、カツ、カツ、というヒールの音に、彼は思わず足を止めた。

その靴音はこっちに向かってゆっくりと、しかし確実に向かってきていた。

第27話 ただ一つの感情（後書き）

いやー、この話は大幅カットになりました。そして内容もだいぶ変更です。蘭ちゃんへの想いはカットに。いや、これから蘭ちゃんへの告白を多くするからね。ねちっこくにはしたくなくって。けど、哀ちゃんの想いは語ってほしかったから……。ふ、ふ、ふーvvvv

それでは、ここまでお読みいただき、ありがとうございました！

第28話 深夜24時の告白

カツ・・・カツ・・・カツ・・・

何かの奥のほうから誰かの足音が聞こえる。新一は訝しげに目を細め、耳を澄ませた。

（こんな時間にだれが・・・？）

おとといのラジオ体操で、元太がその前日に見た「日本の心霊スポット特集」とかいうテレビのことを目にくまをつけたその表情で身を震わせながら喋っていたのを思い出す。

たしか、『病院で夜、若いうちに重い病気で死んだ少女の霊が深夜12時になると決まって現れ、死期の近い病人の枕元に立ち、

その人をじつと見つめるらしい。そしてその病人はかならず次の日に死んでしまう・・・』という類の話。

そのおかげで、元太は一睡も寝られなかったと言っわけだ。

「まさか・・・な」

新一は苦笑いした。幽霊なんて信じない。・・・いや。信じていなかった。けれども、実際今日の昼間、遊園地に佇んだ哀を見たことも確かだ。

・・・もちろん、哀は死んではいないし、もしかしたら幻だったのかもしれないし、夢だったのかもしれない。

しかし、この一件で幽霊という存在を頭から否定もできなくなっていった。

カツ・・・カツ・・・カツ・・・

「・・・??」

その足跡は少しずつ、こつちへ向かつていた。やはり思い過ぎではないらしい。

「あれ？待てよ・・・幽霊って足あったっけ・・・？」

ふとそんな疑問が沸き、彼は思わず呟いた。

お岩さん、お菊さん、確か昔の怪談話の主人公は、全て足がなかったような・・・足音が聞こえるってことは・・・。

「ハッ・・・くだらねえ・・・」

新一は思わず苦笑した。

「ナースに決まってるじゃねえか」

よく考えればそれが一番筋にあつてゐるもの。実際、それが幽霊でも人間でも、今の彼には関係のないことだった。今は蘭を探すことが先決だ。そんな悠長なことは考えている状況でもない。

新一は苦笑いして、再びゆっくり歩き出した。

一步一步、弱った足を引きずるように彼は前に進む。向こうの足跡もゆっくりゆっくり、進んでくる。

多分、この角の向こうに居るのだ。きつと看護師の見回りが妥当だろう。ここはひとまず逃げたほうがよいのだろうか・・・。

そんなことを思いながら彼がゆっくりと廊下の角を曲がったとき、新一はその足音が誰のものかようやくわかった。

眩しい光が彼を照らす。その眩しさに一瞬目が眩み、再び目を開いた瞬間、彼は驚いて思わず呟いた。

「・・・・・・蘭？」

驚いている新一を前に、蘭はぎこちなく笑った。

「良かった、新一、まだここにいた」

あまりの驚きで何も言えずにただじつと彼女のことを見つめていた。もしかしたらすごく間の抜けた顔をしていたかもしれない。

突然自分の探していた彼女が目の前に現れていたからこんなに驚いていたわけではない。

あの怖がりな蘭が、こんな病院というたださえ不気味な空間に、消灯時間もとくに過ぎた深夜零時、灯りの消えた廊下を懐中電灯一つを手に、歩いてここまでやってくるなんて、それが信じられなかったただけだ。

何も言わない自分に失望し、彼女は泣きながら飛び出した。しかし、何も考えずに走り続けてふと我に返ったとき、この不気味な空間に取り残され、きっと彼女は恐怖で足が竦み、その場を動けない・・・そういう考えがずっと新一の中であつた。

蘭はきつとどこかで震えて、泣きながら誰かの助けを待っている・・・そんなイメージが彼の頭に強く残っていた。だから彼は急いでいた。

それなのに、彼女は力なくだが、笑みさえ浮かべて、ほっとした表情で自分のことを見つめている。

「・・・蘭、だよな」

まさか幽霊にでものつとられてるのか、なんて非科学的なことをまた考えてしまう自分がいる。

あとで考えてみればそれはかなりおかしいことなのだけれども、今の彼にとつてはかなり真面目な考えだった。

「何それ、私じゃなかったら誰だつていうのよ」

蘭はくすくす笑って言った。その表情はいつもの蘭の顔。それでも半信半疑で新一は彼女に質問をぶつける。

「・・・今まで、どこにいたんだ？」

「ナースセンターで看護婦さんの傍でお茶ご馳走になつてきたvv シュークリームもらったのよ。太っちゃう・・・かな。いいよね？ お駄賃お駄賃vv」

彼女はくすくす嬉しそうに笑う。

「ナースセンター・・・」

新一はそう唸るように呟いてから、大きくため息をついた。そういえばそこはあんまり見なかったかもしれない。看護師に捕まると何言われるかわかったもんじやないと思つたからだ。懐中電灯もそこ

で貸してもらったのだろう。

「・・・怒ってたんじゃないかったのか？」

ようやく見つけれられた、という安心感。その一方で、彼はもう一つの疑問を彼女に投げかける。その言葉に、蘭は拗ねたように新一の顔を一瞥すると、「そりゃ・・・」と呟いた。

「・・・今でも怒ってるわよ。あなたが何も言ってくれないんだもん。私がこんな心配してるのに・・・って」

「・・・じゃあ、何で帰ってきた？」

「え？帰ってきちゃだめだったの??」

蘭がその青白い顔を上げ、きょとんとした顔をする。

「バ一口・・・んなわけねーだろ」

むすっとした表情。何か馬鹿にされてるという感じだ。どうも今の蘭は調子が狂う。そう思っていた。

「傍に看護師もいなくなかったように見えたから。それでも一人でよく帰ってこれたな、って感心してたんだよ。ちっこいころからいつも俺のケツばかり追ってたおめーが」

まさか幽霊に送ってもらってた、とか言うんじゃないだろうな？そんな、イヤミっぷり交えた表情をして彼女に切り返した。

「だって・・・」

そのとたん一瞬にして彼女の表情が崩れていた。

「・・・だって、帰らなきゃ、って思ったから・・・」

蘭は再び目を伏せた。しかし、その表情から笑みは消えていた。

「え・・・?」

「・・・怖かったけど・・・。そんなんで負けてちゃだめだって思ったから・・・。もし、帰ってきたときに新一の姿がなくなったらって思ったら、帰らないわけにはいかなかった。だって、何も言わないでいつちゃったら・・・。引き止めることも、『いつてらっしゃい』をいうことも・・・何もできないもの・・・」

「蘭・・・」

言葉を失った。

やっぱり、蘭は知っていた。そして、きっと……。

「……屋上、いこつか……。こんなところで話してたら患者さん起きちゃうし……。やっぱり何か出そうで怖いもの」

蘭は振り返ると、新一に向かって照れ笑いを浮かべながらその言葉を言う。新一は動揺を抑えきれずに小さい声で「ああ」と呟くと、屋上に続く階段に向かい歩き出す蘭の後を追いかけた。

米花総合病院 屋上。

「……ねえ、すごく綺麗!!」

蘭は屋上のフェンスから身を乗り出すようにして夜景を見つめていた。ここから見えるのは繁華街のブルーや紫に光るネオン、高速道路をオレンジ色に照らす灯り、真っ赤なライトアップされた東都タワー……。

蘭がうつとりするのは十分わかるけれど、彼女の様子は誰がどう見ても危なかった。

「おいおい、そんな危ないことすんなよ!おまえ、疲れてるんだから……」

あわてて新一が後ろから抱きかかえるようにして彼女を支えてやる。

「きや、どこ触ってんのよ、エッチ!」

「どこって……」

思わずその言葉に頬を染めながら、新一はあわてて弁解した。

「バ、バーロー。何人聞きの悪いことを言ってるだよ。仕方ねーだろ、オメーが危ねーことすつから」

フェンスから彼女の身を引き剥がすようにして移動させる。が、その行為をしたとき、一瞬ぐらり、と体がよろけフェンスにぶつかった。

「ちょ、新一!?!」

「……ふは……。蘭、しばらく見ねえうちに太ったか?」

慌てふためく蘭を前に、彼はゆっくりと顔を上げ、肩で一つ大きく息をしながら、その言葉を漏らした。

「・・・な、何よ。失礼ね」

蘭は顔を赤くして抗議する。新一はそんな彼女に黙って微笑み、それから彼女に気づかれないよう自分の腕をちらりと見た。

彼の筋肉はすっかり萎えていた。病み上がりの体でありながら、さつきからろくに休みもとらず、彼女を探すために走りまわっていたせいで

彼の体はボロボロだった。彼女を抱きかかえながら、よろけないように必死にバランスをとるのに集中していたというのに。けれど、それでも限界で。

「・・・ねえ、新一。本当に大丈夫なの？」

心配そうに蘭は幼馴染の彼を見上げた。

「・・・大丈夫だ。何でもねえよ」

新一は笑顔で答える。

「嘘。顔色がまた悪くなった・・・」

蘭は心配そうに彼に言った。

「おめーもな・・・」

新一はそう言うってから心配そうに蘭の顔を覗きこむ。

そう、蘭もこの2日でぐんとやつれたように見える。彼女の赤みを帯びたそのふっくらとした頬も、こけたように見えた。澄んだ瞳も濁っているように見える。そのすべてはおそらく心労であろう。美人の顔が台無しだ。

そしてそれを起こさせたのは他にもない自分。自分のせいで、彼女をこんなにもさせた。

「・・・悪かったな。俺のせいでいつも心配ばかりさせちゃって・・・」

「・・・そんなのはもういいよ・・・だからお願い」

そこで言葉を切って、蘭は一瞬俯いて冷たいコンクリートの床を見た。

「・・・答えてよ・・・」

と震える声で言った。

「さっきの質問、答えて・・・」

「質問？」

「そう。・・・あなたが私に言わなくちゃいけない言葉。・・・あのとき。『待つててくれ』なんて言葉コナンくんに託けさせて勝手に事件追っかけて消えちゃって・・・すごくショックだったんだよ？・・・そんなあなたが・・・また自分で抱え込んで、何も言わないで行くなんてと、ないわよね？・・・せめて、いつ旅立つくらい教えてくれてもいいんじゃないの？」

生ぬるい風が二人の間を駆け抜けた。

「ああ・・・そうだな」

新一は静かにうなずき、大きく一呼吸をしてからこう言った。

「俺は・・・あと約2時間後にはここから出て行く」

「に、2時間後！？」

あまりに突然のことに、蘭は無造作にポケットからケータイを取り出すと、それについている時計で時間を確認する。現在時計は0時46分を指していた。

「・・・そんな早く行っちゃうの？」

「ああ・・・」

「・・・ひどい。じゃあ何でもっと早く言ってくれなかったの！？」
蘭の悲痛な叫びが新一の心に突き刺さる。新一は何も言い返せず、下を向くだけだった。まったくその通りだった。

結局ギリギリまで言いたいことを言えずに、ここまで来てしまった自分が再び蘭の元からいなくなってしまうことを、彼女が感づいていることがわかっていたのにも関わらず、何も言い出せなかった。

「ひどいよ、新一。いつもいつも勝手に現れて勝手に消えて・・・。私がどんなキモチでいるのかあなた知ってる？」

彼女の大粒の涙はポロポロ頬を伝わって流れていき、雨のようにコ

ンクリートの床を濡らす。

今の彼女の涙は、人魚が流すと言われる真珠の涙よりも何百倍も美しかった。

「・・・私は・・・新一のこと、こんなに想ってるのに。私がこんなに新一のこと・・・」

彼女の唇が『す』という言葉成形する前に、新一は彼女のやわらかい唇に人差し指をあてがった。そして、シッと口にする。

「え・・・？」

きよとん、とした表情で、蘭が自分を見つめていた。

「それぐらい、俺に言わせてくれよ。情けないけど、ずっと口に出せなかった言葉なんだからさ。言いたくて仕方なかったのに、大切すぎて、恥ずかしくて口に出せなかった」

「・・・新一？」

「・・・蘭、お前が好きだ」

やつとだ。・・・やつと告えた。思わずほっと息が漏れる。

彼女の瞳孔がぐぐつと大きくなった。やっぱり驚いているようで。

「・・・新一が・・・私のことを??」

蘭はまだ信じられないと言う様子で、もう一度聞き返した。

「ああ。・・・ずっと、好きだった。・・・小さいころから、ずっと。・・・だから俺は・・・お前に『待っててくれ』だなんてあのとき言えたんだ。おまえが待っていてくれればそれで・・・」

「・・・なこ・・・言わな・・・でよ」

突然遮られるその言葉に、新一はわが耳を疑った。蚊のなくような小さな声。けれども、その言葉ははつきり彼の耳に届いた。

「何言ってるんだよ、聞こえねえよ」

何を言っているのかわからずに新一はもう一度聞き返す。まさかそんなことを言い出すはずない、って思っていたから。そのとたん、彼女は顔を上げ、キツと鋭い目で新一を睨んだ。

「勝手なこと言わないで！新一が私を好きなんて、そんなわけあるはずないじゃない！」

「・・・ら、蘭？」

驚いて彼は目の前の彼女を見つめて言葉を失っていた。

「じゃあ・・・どうして？何でどっか行っちゃったの！？私を置いて！あの日・・・あなたがあのトロピカルランドでいなくなっただの日・・・」すぐ追いつくからよー！」って・・・結局帰ってこなかったじゃない！あの日、ずっと寝ないで待ってたんだよ？あったかいご飯作って待ってただよ？なのに、連絡一つよこさないで・・・。結局電話くれたのはそれから1週間も先のことじゃない！その間私がどんな気持ちであなたの帰りを待ってたか、あなた、わかってた???私を好きだなんて嘘！だったらあんな酷いことするわけないよ！」

蘭はその間ずっと新一の顔を睨んでいた。流れ出る涙も構わずに、それでも彼を睨んでいた。・・・この2日間で何度蘭を泣かせているだろう。

「やっと逢えたと思ったのに・・・。それなのにまたどこか行こうとして・・・。好きだったらどうしてここにしようとしてくれないの？私の気持ち、考えてくれないの？ねえ、どうして!？」

蘭はそう訴えるように涙目で新一のシャツの袖を掴んだ。

「・・・それは・・・」

新一は思わずうつむいた。なんて言えばいいかわからなかった。しばし沈黙が流れた。

「・・・ここにいて」

呟くような微かな声で、蘭がそう言った。新一はその言葉を聞いてハッと顔を上げる。そして辛そうに彼女を見つめた。

「お願い・・・私のそばに・・・」

聞こえるか聞こえないかの微かな声。でもその言葉は彼の心の中へ深く入ってきた。

このことを話せばぜったいこの言葉を聞くだらうと思っていた。そ

れなのに、実際に好きな女が放つ言葉を耳で聞くのは想像以上に辛いものだった。

もちろん、その言葉を言っている本人が一番辛いのはわかっているのだけれど。

「お願いだから・・・ずっとここにいて」

新一は何も言えず、彼女の体をきつく抱きしめた。

蘭は彼の胸の中で泣き声一つ漏らさずに静かに泣いた。

辛すぎる言葉を言わなくてはならない。

哀の薬が計算違いであと1日ぐらい延びないものかと願っていた。あと2時間じゃ足りなかった。もちろん自分のせいでこうなったのは十分すぎるほど承知している。だが、せめてあと1日欲しかった。灰原はもう一つぐらい解毒剤の試作品を持っていないだろうか、なんていう考えさえも浮かんだ。

しかしそんな都合のいいことはあるわけない。

それにこんなハードな伸縮作業を連続して繰り返していればさすがに次では死ぬだろう。今回だって死ぬかもしれないという覚悟のもとで服用したのだから。

『死ぬ』ということ・・・。それでは蘭を余計に悲しませることになる。

そして何よりも、自分が一番、蘭やみんなといたかった。このままで終わらせたくなかった。一時の気持ちで自分の人生を終わりにしたくなかった。

そこまで考えて、新一はようやく覚悟を決め、重々しい気持ちでゆっくりと口を開いた。

「・・・蘭、あのさ・・・」

新一は一瞬目を伏せ、両手で自分の体に身を預けている彼女を優しく引き離した。しかしそのとき、彼は思わぬ光景を目にしたのである。それは・・・。

顔を上げた蘭の口元が緩んでいるように見えたのだ。

新一は思わず目を強く擦った。幻かと思ったのだ。けれども、擦っても擦ってもその光景は変わらなかった。蘭は、確かに笑っていた。クスクスとさもおかしそうに……

「ら、蘭？」

新一は心配になって思わず彼女の顔を覗き込んだ。確か先ほどまで蘭は医者から微量の精神安定剤をもらって別室で寝ていたという、博士に聞いたその話を思い出し、一種の不安が彼の中に取り巻いた。「どうした？何がおかしい？」

「だって新一の顔、すっごくおかしいんだもん。眉間に皺なんか寄っちゃって……。騙されてるとも知らずにさ」

新一は今までその話を神妙な面持ちで黙って聞いていたが、最後の一言に耳を疑った。だから思わず、「へ……？」という気の抜けた言葉として口から出てきたのである。

「俺が、騙されてる……。？」

新一はその一言を聞き間違えたのかと思って、もう一度彼女に聞き返した。

「そだよ……。言ったでしょ？私はあなたに『いつてらっしゃい』を笑顔で言うために戻ってきた、って。そんな我侭なんていう気、私には最初からないよ。どうせいくら私が止めてもあなたは振り切っても行くでしょうからね」

蘭は大きくため息をついてから、くすつと笑ってみせた。しっかりと優しい表情。

ああ、こいつはたいした女だ。自分にはもったいないくらいの。

心からそう思った。「それに……。蘭はちよつと、言葉を飲み込む。」

「私、くやしいけどそんな新一が大好きだから……。何かに夢中で・

・サッカーでも推理でも、一生懸命な新一が大好きだもん。キラキラしてて、もうそこがとてもかっこよくて……。それを私の手で無理やり壊すことなんて、そんなもつたいないこと、私はしない」
彼女は強く言い切った。

「『もつたいないこと』……?」

新一は驚いて蘭を見た。蘭の涙はすっかり乾いていた。目の前の彼女は優しい笑顔で微笑んでくれている。

彼女が漏らした『ずっとここにいて』は彼女の本心だと思った。そして今言ったことは全てウソ。彼女の強がり、自分のために笑って送り出そうとする健気さだと知っていた。自分の我侭を許してくれるようとしてくれる。蘭に申し訳なかった。でも、今はこうするしかなかった。黙って彼女の好意に甘えることしかできなかった。

彼女のその気持ちに気づかないでいるフリをするしかなかった。なぜなら、『どこにも行かねえよ、ずっとここにいて』なんて言葉を、言えるはずがないのだから。

「……サンキュー」

新一は笑顔を作ると、蘭のしだいに温かくなってきた彼女の手を握ってそう言った。

蘭は笑顔のまま無言で首を横に振って見せてから、その後で何か言うのを躊躇したように一瞬唇をきゅっと結んだ。それから、思い直したように口をゆっくり開く。

「ただ……気がかりが一つだけ」

「え……?」

新一は目を伏せた蘭を見下ろした。何を気にしているのか彼にはもう充分すぎるほどわかっていた。

「……病気、……いつから?」

その言葉に、彼は溜息をついた。

聞かれるとは思っていたけれど……。逃れることはできない、と心の中で感じていた。

「いつから隠してたの? 中学校? ううん、そんな昔じゃないわよね。」

高校になつて・・・ううん。もつと最近のことよね」

蘭の声は震えていたようだった。しかし気丈にも彼女の声は強くはつきりしていた。何かを強く決意しているようだった。

「・・・風邪、なんてものじゃないんでしょ」

「・・・あ、ああ」

新一はぎこちなくうなずきながら、彼女にどう答えていいものか悩んでいた。

「もしかしたら・・・あの事件に関係しているの・・・？」

そんなとき、突然蘭がその言葉を口にした。

「え？・・・あの事件・・・って」

ぎくりとして新一は蘭を見る。言葉の端が震えていた。蘭はどこからどこまで知っているのだろうか。

「新一とトロピカルランドに行ったあの日よ・・・」

「！！」

新一は驚きの色を隠せなかった。大きく目を開き、蘭を見つめる。

「蘭・・・」

「・・・わかつてるわ。そんなことぐらい。・・・私を馬鹿にしないでよ。これでも法曹界のクイーンと呼ばれた妃英理と眠りの小五郎の娘よ？・・・それに、新一のそばにいて、ずーつとあなただけを見てたんだから、それぐらいわかって当然・・・よ」

蘭の最後の言葉あたりはもう言葉になつていなかった。ポロポロと涙の粒がこぼれてくる。

「・・・おい」

「そうなんだ・・・やっぱあの日・・・新一は・・・」

新一は言葉を失い、ただじつと彼女の涙を見つめながら考えていた。蘭は大体のことを感づいている。

そんな予感少しは気づいていたけれど、彼女の口から決定的な言葉を聞くと、正直キツくて。

どうする・・・？

どうする、新一。

蘭に全てを話しちまっていいのか？

蘭に組織という重石を背負わせちまっていいのか。

それをお前は守ってやれるのか・・・？

そんな思いがしばし彼の頭を渦巻いた。

新一はしばらく目を瞑り、まるで瞑想するように考えていた。

「新一・・・？」

蘭が心配そうに彼の名前を呼ぶ。

新一はそこでゆっくりと目を開け、目の前の愛しの女性をただじっと見つめた。

答えは、出た。

第28話 深夜24時の告白（後書き）

ふふー こつぶですつ。ようやく新蘭ですつ。告白タイムですな
っ これはあんまり編集しなかったかな。

ただ、ちよつと平和の方を書いてたら熱を入れすぎて、矛盾が。．．
・そこは頑張つて、こつちの話を訂正させていただいたのですが。．
・読めるかな。読みにくいかな。．．ちよつと反応が怖いです．
．．><！

ではでは、ここまでお読みいただき、ありがとうございました！．．
・これから後編書きます！蘭ちゃんと新ちゃんのらぶらぶタイムを
しばらくお楽しみ（？）ください！

第29話 誓いの言葉

米花総合病院 屋上。

工藤新一と蘭はそこにいた。

先ほど昨日から思い悩んでいた告白をようやく終えたあと、彼には別の悩みができた。

それは自分の秘密を蘭に話すか否かであった……。

「新一……？」

蘭が心配そうに新一の名前を呼ぶ。

目をつぶっていた彼はそこでゆっくりと目を開けた。ようやく答えが出たのだ。蘭に対しての答えが……。

新一はその言葉を言うために、ゆっくり口を開いた。

「すまねえ……。何も言えねえ。これだけは……」

そう話す彼の唇は震え、深夜ではあるが夏だというのに彼の唇は力サカサに渴いていた。

そう、蘭にすべてを話すという行為……。それはしてはいけないことだと思った。

自分がこれ以上彼女に黙っていられないと言う理由で、包み隠さず話したところで彼女は救われるだろうか。

また新たな不安・恐怖を植えつけるだけではないのだろうか。新一はこれまで、組織に関わった人がどんな最期を遂げたかを何件か知っている。

そして迫り来る組織の影に怯えている少女も知っている。これ以上、蘭を巻き込みたくない。蘭を怖がらせたくない……。蘭を失いたくない。

彼女を永遠に失うのならば、彼女に嫌われたり、忘れ去られたりした方がマシだった。

だから、今はそれを話すことはしない。けれども、嘘は言わないつもりだった。

もうこれ以上、彼女の前で嘘はつきたくなかったから。自分自身が辛かったから……。

「……どうして？」

思った通り、蘭は悲しげな瞳で尋ねた。

しかし、次に蘭が口にしたその言葉は、既に新一が予期していたものとは違っていた。

「もしかしたら新一、今すごく危険な事件に巻き込まれてるの？それだったらお父さんやお母さん、服部君だっているじゃない。それに目暮警部にも相談しなさいよ。私が頼りないんだったら、私には黙っていてくれていいから」

彼女のその言葉は、何も言わない自分を責める非難の言葉でもなんでもなかった。ただ、心配そうに自分だけを見つめていた。

「……すまねえ。今の段階じゃ本当に何も言えねえんだ。ただ、俺は今オメーが言った通り、過去に扱ったことのねえひどく厄介な事件を追っかけてる。……今はそれだけしか言えねえんだ」

申し訳なさそうに言う彼を、蘭はただ黙って見つめていたが、そこで突然ふっと力なく微笑む。しかたないなあ、という言葉添えて

「え……？」

蘭がどういう意味で『仕方ない』と言ったのか、彼には見当がつかなかった。だから蘭が次に言う言葉は何か、気になって彼女の口許ばかり見ていた。

「じゃあもうそれ以上聞かないよ。事件の内容をペラペラ話す人なんて刑事や探偵に向いてないってわかってるしね」

そう笑ってから、それに、と一瞬目を伏せて言葉を続けた。

「それに……あなたのその病気、1週間の検査や治療で治るよう

なものでもないんでしょ？」

「ああ。だけど心配すんな。こんな発作、たまたま立て続けに起こっただけで、いつも起こるようなもんじゃねえ。何でこんな発作が起きているのかも自分では十分わかってるし・・・」

新一はフェンスに寄りかかると、自分の心臓にあたる場所をポンツと叩いてみせた。それから、尚も不安気に自分を見つめる蘭にできるだけ明るくこう言った。

「大丈夫だって。絶対戻ってくつから。俺は、好きな女を残して死ぬようなマネはしねえから」

「・・・し、んいち・・・」

蘭は涙ぐんで新一の手をぎゅっと握った。その手は細かく震えていた。新一はその手を優しく包み込む。それから。

「・・・約束よ？絶対生きて帰ってきてね。私、何年でも何十年も待つてるから・・・私の元に・・・必ず」

「・・・ああ、もちろんだ・・・」

「約束よ・・・？」

「約束だ・・・」

潤んだ瞳に、新一は抱きしめなくなる衝動を今だけ抑えて、徐に小指を彼女の目の前に差し出した。

「・・・？」

蘭はその涙でくしゃくしゃになった顔を上げる。

「・・・指きり」

彼女は彼のその言葉にうなずき、ゆっくりと彼とは反対の小指を差し出しかけた。・・・しかし、何を思ったのか、途中でその手を下ろした。

そのあと、彼女は彼から背を向けて「やーめた」とだけ言ったのである。

「へ・・・？」

そんな思いの寄らぬ行動に、新一は間抜けな声を出して目の前の彼女を見つめた。

彼女は今、どんな表情でそう言っているのだろうか。自分はかなり戸惑い、また、困惑していた。予期していない出来事だった。

「・・・こんな約束なんて無意味だよ」

「・・・何でだよ」

新一は混乱したその気持ちを抑えきれずに、荒々しく彼女の肩を掴み、自分の方に彼女の体を向けた。

「だって・・・」

蘭はそこで言葉を止め、寂しそうに微笑する。

「・・・そういうものでお互いの気持ち、束縛したくないから」

「・・・何だよ、それ、どういうことだよ！」

新一は思わず口調を荒くする。いつもの冷静さを失っていた。

「お互いの気持ちが変わるかも知れねえからか？それとも叶わない約束はしないべきだって言いたいのか？花火大会に来るのが遅くなつたから、とか言いたいのか？」

「・・・いつもの自分ではなかった。後になってそう思う。確かに新
一は彼女の言葉や行動に混乱していた。

だから一方的に彼女を責めた。彼女のことがわからなくなっていた。

「・・・違うよ、新一。そんなじゃない」

蘭は落ち着いた表情でそう言った。そして彼を宥めるように優しい表情を浮かべて微笑する。さっきと明らかに役回りが違っている。

「私、昨日の花火大会でのこと、すつごく感謝してる。あなたが約束を守るために必死になって私の元に来てくれたの、十分わかったよ。だけど・・・」

蘭はそこで彼の顔を真正面から見つめた。

「あなたは私の知らない間に病気を抱えていた。それでもそのことを隠してあなたは必死になって私を不安がらせないようにしてくれた。・・・私の知らないところで、あなたは苦しんでいた。その間私はあなたの苦しみも何にも知らないで能天気にな・・・」

「・・・違う、蘭。それは誤解だ！」

新一が強い口調で遮った。

彼は心の中では混乱していたとは言え、こんな心優しい彼女を一時でも責めたことを悔いていた。そしてそれと同時に自分と蘭の今の関係をそんな風に考える彼女が悲しかった。

「・・・言つたろ？この病気は本当に何ともねえんだ」

「嘘！何でもない人が心臓が痛くなる？熱を出す？何度も倒れる？何時間も昏睡状態になる？そんなことあるわけないじゃない！」

「・・・！！」

新一は言葉を失った。

さつきまで彼女を安心させることに躍起になっていた。

どうしてわかつてくれないんだ、という苛立ちさえ彼にはあった。なぜなら自分は彼女を少しでも楽にさせてやれるという自信があったから。

しかし、彼は今の彼女の叫びを聞いて悟ってしまった。今の自分は、何を言つても彼女を追い詰めるだけだった。安心させるどころか、光のあるところから暗闇へ暗闇へと

押しやっているだけにすぎなかった。自分には、彼女を安心させる適切な言葉も何も浮かんでこなかった。

新一はそんな自分に不甲斐なさを感じ、きゅつと唇を固く結んだ。

悔しかった。

「ねえ、新一・・・」

俯く新一の横で蘭は静かに言った。

「私はね、あなたの重みになりたくないの。私のせいであなただけを追いかけているその事件を放り投げて来てほしくなんてないし、治療する時間を惜しんでまで、私という時間を大切にしようなんて思っ
て欲しくない・・・あなたが苦しむのは嫌なのよ」

そう言つて、蘭はゆっくりゆっくり2人から3メートルほど離れたフェンスに向かって歩き出した。そしてそこに着くと、漆黒の闇の中でキラキラ輝く光の海を早速眺める。

「・・・綺麗だねえ、新一。こんな夜景、めったに2人で見られないよ？昨日の花火といい、今日の遊園地といい、夜景といい・・・もう新一といっぱい思い出作れたよね・・・」

「え・・・？」

新一は顔を上げる。

「私は幸せだよ？あなたが元気にこの地球のどこかで元気に過ごせているなら。こうやって同じ空を見上げることができるなら。月や星を眺めていられるなら。もう、同じ遊園地や花火を見ることはできないかもしれない。でも、あなたは生きている。そう思えたら・・・私は喜んで身を引くよ？・・・だから、あなたは治療に専念して、もう、私のことは忘れてください。私もあなたのこと、忘れるから・・・自分の仕事に尽くしなさいよ。それで満足したら戻ってくればいいじゃない。あなたの病気もゆっくり癒すこともできるし・・・」

「

「な、何言ってるんだよ、蘭」

新一は震える声で言った。

「・・・私は十分満足だよ？こうやって久しぶりにあなたと会えて、こうして2人きりで花火見られて夜景見れて・・・。『好きだ』なんて言ってもらって・・・」

十分・・・十分満足・・・なんだから」

いつのまにか彼女の声も震えていた。新一から背を向けたままで、声を押し殺して泣いていた。

「・・・もう、待ちません・・・ごめんね。ここでサヨナラだね」

「バー口・・・」

震えた声がのどの奥から出ていた。かすれたような震えたような。そんな声だった。

「・・・しん・・・いち？」

「・・・俺はおまえがいるから頑張れるんだよ」

「え？」

「・・・蘭がプレッシャーになることはねえんだ。悪いなんて考え

なくていい。『俺が』蘭の顔が見たいからここにいるんだ。おまえが笑っている俺も幸せなんだ。

スゲー苦しい時が逢ったとしても、嫌な事件があって落ち込んだとしても、オメーの笑顔を思い浮かべたらやる気が出るんだ。おまえが待ってくれると思うから

頑張れる、それなのにもしオメーと逢えないうえに、連絡さえ取れなくなっちゃったら俺はどうすればいい？きつとどつかでくたばっちゃまうよ・・・」

本当に我侬でよわつちくて、情けない男だ、と自分でも思っていた。でも、蘭にそんなことを言われたら自分の思っていること全て言わなくちゃいけない気がして。
おまえはちつとも悪くないんだよ、ということ伝えてたくて。

「新一・・・」

蘭は潤んだ瞳で新一を見つめた。

「だから、頼むからそんなこと言わねえでくれ。頼むから・・・」

「うん・・・」

蘭が静かにうなずいてくれる。そして、彼は彼女のやわらかい体を抱きしめていたその手をゆっくりと解いた。

蘭が自分の方に向き直る。絡み合う視線。

「新一・・・？」

「・・・ん？」

蘭は穏やかな顔で微笑んでいた。そして、「大好きだよ・・・」そう言っ、ちゅつと彼の唇に自分の唇を重ねた。

ほんの一時のキス。

触れるか触れないかのキス。

しばらく放心していたように宙を見ていた彼だが、事態をようやく呑み込んだそのとき、彼の顔はみるみる真っ赤に染まっていった。

「ら、蘭・・・？」

素っ頓狂な声をあげ、新一はしばらく目の前の蘭を見つめることしかできなかった。えへへっ、といたずらっこのような表情をして笑うと、蘭は口を開いた。

「・・・今度はいつ帰ってくるかわからないでしょ？だからファーストキスあげたの。新一以外の誰かに奪われちゃ、嫌だから」

「・・・奪われる予定、あんのかよ？」

思わずむすつとして新一は蘭を軽く睨んだ。所謂ヤキモチ。それがわかっていいのか、蘭はおかしそうにくすくすと笑った。

「そうだねえ。新一がいつまでたっても帰ってこなかったら・・・あたしもお婆ちゃんになるまで独身は嫌だからね」

「安心しろ、責任持つてもらってやつから」

「何が責任持つて、よ！・・・ウェディングドレスは若いうちに着たいんですう！」

拗ねたように蘭がぶいっつと視線を逸らすから、新一はおかしくなつてその腕をこっちに引き寄せた。

そして、フェンス側に蘭を凭れかけさせると、今度は自分から唇を押し付ける。

「っ・・・」

やわらかい感触を楽しみ、唇をそつと離すと、潤んだ瞳で蘭が自分を見つめる。ちよつと困った顔をして、頬を赤らめて、「いきなり、何すんのよ」と抗議した。

「・・・誓いのキス。2人がずっと恋人でいられるように。そしてお互いのことを想っていられるように」

「え？」

きよとん、とした表情で蘭が自分を見るから、新一がオホン、と一つかしこまったように空咳をした。

「I, Shinnichi Kudo, take you R

an Mori, to be my a girl friend
, to have and to hold from th
is day forward, for better or
for worse, for richer, for po
rer, in sickness and in health,
to love and to cherish; and I
promise to be faithful to you
until death parts us.”

「…………何のつもり？」

突然英語を話された蘭は目を白黒させる。

「だから、誓いの言葉。……『約束』が嫌だつて蘭、言つただろ
？だからこうやってお互いを思つていれば」

「ふうん、そーやってお互いのこと束縛したいんだ？新一は」

「ちがつ……」

からかうように蘭が笑つた。

「それに。……いくら神の前で誓う『誓いの言葉』だつて、離婚
するカップルが年間世界にどれくらいいると思う??」

「へっ？」

今度は新一が目を白黒する番だ。

「ば、バーク、それ言つたらおしまいじゃねえか。……それに、
この誓いの言葉が破られる前に絶対帰つてくつから」

「破るの?……あなたが?それとも私が？」

「~~~~~」

ちよつと意地悪っぽく、子供っぽく蘭が笑つていて。それから、

「はい」

突然目の前に真っ白な紙と鉛筆を渡され、新一は驚いて目を大きく
開いた。

「英語、早すぎてわからなかったから、紙に書いてよ。……ね、
花婿様？」

「はなっ……?」

動揺して思わず顔を赤らめた。にっこり笑って蘭はしたり顔をした。
「それと、誓いのキスは、『誓いの言葉』を言ってからじゃないと『誓い』にはならないでしょ。今のは勝手にキスしたんだから無効よ、無効」

「・・・そりゃそうだけだよ・・・」

さつきから、完全に尻に敷かれている。・・・新一は将来のことを思っ
て思わずげんなりした。ほら、と紙にさらさらと書いてメモを渡す。ありがとう、蘭はにっこり微笑んだ。

「I, Ran Mori, take you Shinichi Kudo, to be my boyfriend, to have and to hold from this day forward, for better or for worse, for richer, for poorer, in sickness and in health, to love and to cherish; and I promise to be faithful to you until death parts us.”」

蘭の流暢な英語が音楽のように耳に流れ込んでくる。驚く新一に、
「伊達に学校毎日サボらずに行ってるわけじゃないんだからね」
蘭が笑ってそう言った。

「それで？」

「え？」

「『本当の』誓いのキスはどうなさりましょう、ご主人様？」

にっこり笑って蘭が微笑むから、再び言葉を失くして
いて。新一は再び蘭を抱き寄せると、そつとウェディングベールを上げる
しぐさをする。

それを感じたのか、蘭がふふつと小さく笑って瞳を瞑る。

そして新一は、彼女のそのふつくらとした唇に唇を重ねた。

幸せな時間が2人を流れた。
こんな時間がいつまでも続けばいいと、二人は願って止まなかった。

第29話 誓いの言葉（後書き）

ふふう……。誓いの言葉です。

ねー、宣言どおりでしょ、何かラブラブでしょ（笑）？あ、こつぶですー。こんばんはー。

やつぱりこれも元祖と少し違って。らびゅーになりつつも、そこま
でねちっこくないように仕上げたつもりです。

……。ていうか3回もしちゃったか！？……。過去初だぞ、これは
っ（あせあせっ）。

……。よし、次は「またあした……。」の改訂版でコ哀のちゅー4
回を目指すぞ、おー！（こらこら）。

次回はタイムリミット。彼が元に戻ります。是非お楽しみにしてい
ただければ嬉しいです。

ここまでお読みいただいて、ありがとうございます！

第30話 タイムリミット（前編）

米花総合病院 屋上。

彼、工藤新一は未だその場所にいる。

彼は、病院の屋上の備え付けのベンチに座り、彼の肩に凭れ掛かってスヤスヤ寝息をたてている毛利蘭を穏やかな表情で眺めていた。幼馴染から恋人の関係へ。

彼にとってはそれは大きな変化だった。

あのあと 誓いのキスをしたあと、2人は甘い甘いひと時を送ると思いきや、意外と平凡な話に戻っていた。

夏休みの終わりにジョーディ先生と園子と3人で小旅行に行くこと、園子が最近空手を習い始めたこと（少しでも京極さんと対等になりたいらしい）などあらゆる情報を彼女から聞いた。彼女は息を吸うのも惜しむほどにたくさん、喋り続けた。その内容は彼が『江戸川コナン』として彼女から知り得た情報とさほど変わりはなかったが・・・。

そんな状況に業を煮やした新一が無理やりあのムードを取り戻そうとしたときには、既に彼女は新一の隣でぐっすり眠っていた、というわけで。

「 ったく。もっと恋人らしいことしたかったのに・・・。これ逃したら、いつ元に戻るかわからないんだぜ?」

新一は苦笑いして蘭の顔を突つく。彼女はもちろん気づくこともなく、熟睡していて。口許を綻ばせて、気持ちよさそうに・・・体が疲れているのだろう。

ずっと新一のことばかり考えていたのでその想いが自分と同じであることを確認し、ようやく安心できたのだろう。

そして自分がずっと思っていたことを彼が真正面から答えてくれたことが嬉しかったのだろう。

彼女の表情は一つも曇りがなく、晴れわたった晴天のように輝いていた。

ただ、彼女はいつのまにかぎゅっと握ったその手をひと時も離そうとはせずに……。

そんな愛しい彼女に思わずやるせなさを感じ、そつとその長く綺麗な黒髪を撫でてやった。

それにしても。

「あちいな……」

そう、外は異様に蒸し暑かった。新一は流れ出る汗をハンカチで拭いながら何気なく蘭に目をやる。

不思議なことに、彼女は汗一つかいていなかった。

「蘭は……暑くない、のか？」

ならばこの異様な暑さは何なのだろう。夜だというのに、例えて言うなら灼熱の炎天下のアスファルトの上に放り出されたようなこの暑さは……。

（まさか……）

彼は荒々しく時計を見た。時刻は2時03分。制限時間まであと1時間を切っていた。

彼の脳裏に嫌がおうにもあの日のことが浮かんた。

……今の状態は、前回の解毒剤の試作品使用時に工藤新一が江戸川コナンに戻る兆候とまったく同じだった。

前回はこの異様な暑さを感じてからすぐにあの発作はやってきた。……しかし今は幸運にもその発作自体は起こっていない。胸の息苦しさは感じ始めてはいたが……。

「だとしても……そろそろつてとこだよな」

そう彼は呟くとケータイをポケットから取り出した。そしてある場所へと電話をかける。

t r r r . . .

「蘭か!？」

2回目の通話音を待たずに、すぐに相手が出た。この人物がこんなすぐに、しかもこんな時間に電話を出るなんて珍しい。

新一は一度大きく息を吸い込んでそれからチラリと眠っている彼女を見た。

「・・・あの・・・お久しぶりです。工藤です」

相変わらず、蘭は彼の隣で、穏やかに眠っていた。

米花総合病院 815号室。

新一のベッドに腰を下ろし、服部平次は落ち着かない様子で棚の置き時計をちらちらと、見ていた。

タイムリミットは、あと一時間を切っていた。

深夜2時を過ぎた今、彼はやらなければいけない仕事のために眠ることをしなかった。解毒剤の副作用の緩和剤を工藤新一に投与する重要な役目である。いつもなら彼はこの時間、朝5時から始まる部活の朝練のためにぐっすり眠っているはずの時間で、彼はかなりの眠気に襲われるはずだった。しかし意外なことにあくび一つしなかった。これから人の命に関わる仕事をするということに、無意識のうちに緊張しているのだろうか。

「工藤がおつきい工藤でいられるのも、あとちょっとやな・・・」
そこまで言ってハッとして振り返った。

ここにいるのは一人ではない。もう一人。簡易ベッドですやすやと寝息をたてている少女。彼の幼馴染である遠山和葉。

彼は彼女が完全に熟睡していることがわかった、ホッと安堵の息をついた。とりあえず今の言葉は聞こえていないようだ。

「何も知らんで、すやすや寝てよる・・・」

平次は苦笑して、和葉の柔らかな髪を撫でた。穏やかな寝顔だ。・
・優しく、そして無防備な表情を浮かべている。

自分がこんなに緊張しているとは、彼女は微塵も思っていないだろう。

いつでも自信過剰な男だと思っているから。何に対しても強く臨む怖いものしらずの男だと思っっているだろうから。

和葉の前では弱いところなんて見せたことはないつもりではあったし。そんなものを見られたら男が廃るというものだ。

「へい・・・じ・・・」

「・・・かず、は？」

不意に聞こえたその声に、驚いて平次は和葉を凝視する。

寝言だろうか。むにやむにやと口を動かし、目も開けずに呟く言葉。

「・・・頑張りい・・・がんばりい、平次・・・」

「・・・はっ」

思わずぷつと噴出した。

「何じゃそら」

どうしてこいつはこうタイミングがええんやろう。

こんなに自分が弱なつてるときに、パワーをくれるんやろう。

「何や・・・おもしろいな」

平次は思わず笑みが止まらなかった。くつくくと笑いをこらえるのが必死で。

「ホンマ、おもしろいやっちな・・・」

やわらかい髪をそつとかきあげ、そのみずみずしそうな頬を思わず突付こうとしたそのとき。

「（・・・まさか寝ている最中に襲おうだなんて考えてるんじゃないでしょうね・・・）」

「・・・ッ!?」

平次はこれ以上はないというほど、肩を一瞬のうちにいからせ、その声の方に振り返った。もちろんそこにいるのは哀。彼女はベッドに体を横たわらせ、こっちを平たい目をして見つめていた。

「お、起きてたんかい!?」

平次は慌ててその手を後ろに隠す。・・・明らかに動揺していた。

「あなたが隣でぶつぶつ言うから、起こされたんじゃない」

「そら悪かったな・・・」

そういいながら、きつとそれより以前に、長い間彼女は起きていたような気がしてならなかった。

『よけーなことは言わなくていいからよ。ただ傍についててやって欲しいんだ。博士も休ませてあげたいし。だからといってあんな状況で一人にさせるのも寂しいと思うから』

先ほど親友が漏らした言葉が頭に残る。

「なあ、ちっさいねーちゃん」

「その呼び方・・・。灰原、って呼んでくれた方が早いと思うけど?」

「・・・ええやん、そんなこと・・・。」

思わず苦笑いを浮かべる。

「・・・それで、何?」

「・・・。。。。いや、何でもあらへん」

きよとん、とした顔で哀はしばし、自分を見つめていた。それから「変な人」と小さく笑った。それにづられて、平次もハハハと笑って誤魔化した。

本当は、聞きたいこと、言いたいこと、沢山あったけれども、新一の言う『よけーなこと』が、自分が口にするこのどこかで、少しでも触れているかもしれないから、ほんの少しのことでも、今ここで再び彼女を傷つけないから。彼はそこで言葉を止めた。

「・・・（それより）」

彼女の顔がさつとテレビのチャンネルを変えたときのように突然真剣な表情に変わる。

「（あなたのほうの準備はできているんでしょうね）」

「・・・ああ、もちろんや」

平次は小さくうなずくと、ごそごとバッグからペットボトルを取り出す。その中身は水色なのか黄色なのか白なのか・・・白濁した液体の中にいろいろな色が混ざったものが満タンに入っていた。

「和葉のおらんときを見計らって作ったんやで。ホンマ苦労したで」

「（・・・ちゃんと調合したんでしょうね）」

疑い深げに自分をじろり、と見上げる哀に、

「アンタ俺のこと信じてへんやろ？俺は仮にも西の名探偵やで？」
むつとした顔で平次は彼女を睨む。

「（あら、そうだったわね。ごめんなさい）」

哀はくすつと笑って言った。しかしやはりその笑いはどこかバカにしたもので。涼やかな微笑み。

「アンタ明らかに俺のことアホや思てるやろ？」

さらに機嫌をそこね、平次はいじけたようにぶつぶつ呟く。そして思い出したように時計をチラリと見た。時刻は深夜2時20分を回っていた。彼が元に戻るのは深夜3時前後を予定している。

「そろそろやな・・・」

彼の顔がさつと仕事の顔に戻った。

「（そうね・・・）」

哀も視線を時計に目をやる。3時はあくまでも予定の時刻なので前後30分を見ないと、彼の命の危険性さえ考えられた。

「ほな、行ってくるわ」

平次はさつと立ち上がり、早足でドアまで行くと、廊下へ出て行く。哀はただ黙ってその後姿を見つめていた。そして

「（頼んだわよ、もう一人の名探偵さん・・・）」

とゆっくりと呟いたのである。

米花総合病院 屋上。

工藤新一は、備え付けのベンチに蘭を寝かせ、ぼんやり夜空を見上げていた。先ほどから続いている体の暑さと胸の息苦しさは少しずつだが、確実に強くなっていった。

ハア・・・ハア・・・

彼は流れ出る汗を拭いながら、その人物が現れるであろうドアを見つめる。

待ち人は未だ現れず。しかし、時は残酷で・・・。

どっ・・・くん・・・

「・・・ぐは・・・っ」

突然胸部に絶えられない痛みを感じ、彼は胸をぐっと片手で掴むように押えた。

いつのまにか焼け付くような胸の痛みがその場所を支配していた。今日、昨日とは明らかに質の違う痛み。

そう、米花センタービルの事件の最中で感じたときのような・・・。

どっくん・・・どっくん・・・どっくん・・・

（・・・とうとう来ちまいやがった・・・）

新一は反射的に時計を見た。予定時間まであと25分。

どっくん・・・どっくん・・・どっくん・・・

「くうっ・・・」

新一は胸を押さえて苦悶の表情を浮かべる。

隣ではスヤスヤと穏やかな表情で眠ったままの蘭。

（・・・こんなところを蘭に見られたらまた余計な心配させちまうとこだったな・・・）

そんな状況でも、心からほっとしてしまう。

彼女は一度寝てしまふとめったなことでは起きないことがいつぞやの事件で証明されている。

新一は心臓が締め付けられるような痛みを感じながらも、あまり彼女を刺激する言葉を出さないようにしてひたすらもうすぐこの場所に来るべき人物を待ちつつづけていた。

キイイ・・・ボタン

屋上のドアの開く音に、はっとして新一は立ち上がった。

「・・・夜遅くに・・・お呼び立てしてすみません」

丁寧に頭を下げるその瞬間、彼は。痛みが波が引いていくように治まっているのを体で感じていた。

「・・・蘭はどこにいる？」

その人物は開口一番こう訊ねる。威厳のある低い声のトーンで。

「・・・ここに」

新一は今まで自分が座っていた場所を指差した。男の立っているその場所からこのベンチは死角だったらしい。男はせかせかとベンチに行くと、蘭を両手で抱き上げる。そして確認するように新一を見た。¹

「・・・ちよつと瘦せたか？」

はい。と彼は無言でうなずいた。

「ここ2日、僕につきつきりでしたから。たくさん迷惑かけたと思います・・・すみませんでしたっ。」

頭を下げる新一に、男はその言葉を聞くと、抱き上げた彼女の体を、いったんもとのベンチの上に寝かせた。そして顔を上げ、新一をただジロリと睨む。

「認めるんだな・・・？」

「はい・・・」

いつも見ているその顔、いつもは厳格なんて微塵も感じないその顔なのに、今日は違うように見えた。

それは今までのただの幼馴染ではなく、愛しい恋人に変わった蘭の『父』として見たから緊張しているのだろうか。

それとも、蘭をこんなにもやつれさせてしまったことに申し訳なさを感じているからだろうか。

そう、その人物の名は、彼が待っていたその男とは・・・

江戸川コナンとしては居候先の主人、そして工藤新一としては恋人である（今までは気になる幼馴染であつた）毛利蘭の父親　眠りの小五郎こと毛利小五郎であつた。

「あの・・・」

唾で渴いた喉を潤し、新一は2度目のその言葉を口にしようとしたが、その前に

「悪い・・・」

小五郎は静かに低い声でそう言うと、突然拳を大きく振り上げる。

「！？」

バスッ

小五郎が振り上げた拳は一発、新一の腹に鋭く命中した。

「・・・つつ・・・」

鈍い痛みを感じ、彼はぐらりと思わずよろけた。

「・・・悪いな。一発殴っておかねえと気が済まねえんだよ。・・・17年手塩をかけて育てた一人娘の父親としてな・・・」

小五郎は彼の横で跪き、苦しんでいる姿を、表情一つ変えずに見つめていた。そして淡々と言葉を続ける。

「・・・連絡くれたことには感謝している。昨日、蘭から連絡が一度あつたきりだったから安心したよ」

「・・・は・・・い」

男は新一がそう言ったのを聞いたすぐあと、小五郎は彼女を彼の片方の肩に担ぎ上げた。

「こんな時間に俺を呼び出したってことは、お前はもうこいつを見てやれねえってことか……」

「……え？」

「またどっか行っちまうんだろ？この時間がオメーのいられるギリギリの時間なんだろ」

新一はハッとして彼を凝視した。

意外とこの男は鋭い……。

……いや、2日も娘のことを考えていたらそういうことに鋭くなるのかもしれない。

先ほどの電話でも、彼は相手の名を確認する前に、蘭の名前を呼んだ。よほど心配していたのだ。新一の予想では、酒やマージャンに浸って、

娘のことを忘れていたんではないのだろうかと思っていたから。

実際、新一が蘭を迎えに来てもらうと決めたとき、いるかいなかかわからない（しかもこの時間、酒に酔って寝ているかもしれない）父親よりも、明らかに有能で、きつと今の時間まだ仕事に励んでいるであろうあの母親を呼ぶつもりでいた。ただ、彼女は近く行われる裁判を抱えているため、邪魔はしたくなかった。だから電話を控えたのだ。

そして頼りにならない父親に 賭けた。

「で？どうなんだ？」

小五郎は低い声で新一に尋ねた。

どっ……くん

「くっ……」

そのとき……再びあの異変が訪れた。
また落ち着いたように見えたのに……。

「……え？」

新一は胸の苦しさ、心臓の痛さを耐えながら小五郎に聞き返す。

「だから蘭に言ったのかと聞いてるんだよ！」

彼は業を煮やしたように叫んだ。

「それは……」

どっ……くん……どっ……くん……

「くオ……」

新一が口を開きかけたとき、再びあの堪えきれない痛みが襲った。
思わず肩ひざをつく。絶えられないこの痛み。

それは昨日や今日のように速いスピードではなかったが、ゆっくり、
ゆっくり確実に痛さや衝動に重みを増していた。

（静まれ……もうちょっと静まってくれ……俺の体……）

彼は大きく深呼吸をし、呼吸の乱れを少しでも取り戻そうとしていた。

「どうした……？ボウズ」

娘のことで精一杯だった小五郎も、ようやく彼の異変に気づいたようだ。彼は苦しみに堪えながら、眩暈を覚えながら、それでも小五郎の顔をしっかりと見据えた。

「大丈夫。……ちよつと……おじさんのパンチが効いただけで
すよ」

彼は苦悶の表情を必死に隠し、笑顔を作った。

「だが、さっきは平気そうな顔をしてたじゃねーか、どうして今に
なって……」

心配そうに小五郎は蘭を担いだまま、新一に片方の手を貸してやる。
「……ありがとう……ございます」

彼はできるだけ苦しさを見せないようにしながら、彼の厚意をありがたくいただき、彼の手を取った。

骨の溶けるような感覚。

全身を覆う焼けるような熱さ。

痺れるような感覚……。

タイムリミットは確実に迫っていた。

第30話 タイムリミット（前編）（後書き）

とうとうこのタイトルが出てきてしまいました！新ちゃん次回で元に戻ります

今回はあまり手直ししていません。結構この話は修正する前から気に入ってるから。一番うまくいった場所かもしれない・・・ふふ。

ただ、ちょっとラブなのかちょっとしたお笑いなのか、そういうシーンが抜けました。ちょっと寂しい人がいるかも^^

そのときは、元祖を読み直してやってくださいまし（宣伝宣伝。

では、ここまでお読みいただき、本当にありがとうございます！こつぷでしたっ。

残り多分あと4話くらいっ。がんばるぞー！！！！最後まで皆さんお付き合いお願いしますー！。

第31話 タイムリミット（後編）

骨の溶けるような感覚、焼けるような熱さ、痺れるような感覚、心臓を直接驚掴みにされ、引きちぎられるような痛み……。それらの痛みはスローではあったが、一步一步、確実に彼の体を少しずつ、少しずつ壊していった……。

31 タイムリミット（後編）

米花総合病院 屋上。

「……大丈夫か、ボウズ」

その言葉とは裏腹に、小五郎は手持ち無沙汰に屋上の周りを行ったり来たりしていた。

「……ええ。おじさんのおかげです」

そう言つて、笑みを浮かべる。

「誤解するな。おまえのためじゃねえよ。蘭が起きたとき、おまえが野垂れ死んでたらあいつがどうなるか……。それが心配だっただけだよ」

小五郎はそう言つて、新一から目を逸らす。

そんな彼に新一は思わず微笑して、手に持っていたペットボトルの水を一気に飲み干した。

小五郎が先ほど蘭を自分のレンタカーに寝かしつけ、そのときコンビニで500mlの水を3本ほど買ってきてくれたのである。

体の異変は続いていたが、喉を潤し、体を冷やすことでどうにか落ち着いていた。

しかし、彼にはおそらくその効き目はすぐに切れてしまうことはわかっていた。なぜなら、どうあがいても彼が彼でいられる時間はあと僅かしが残っていないのだから……。

「それで、さっきの質問なんだが・・・」

言いにくそうに小五郎はその言葉を口にした。こんな状況で聞くことが、さすがに躊躇われたのだろう。しかし彼はその答えを早く聞きたいようだった。

「・・・蘭に、お前がもうすぐどこかへ行っちまうということ、もちろん言っただろうな」

その言葉に新一はゆっくり頷く。

「・・・ええ。情けないですけど、最後の最後まで言えなくて、別れる間際になってようやく。蘭は、蘭さんは知ってたようですけど・・・」

新一はその言葉を口にしながら、シクシクと再び心臓が痛み出すのを感じていた。それを必死に隠し、笑顔を作る。

「そうか・・・」

小五郎は眉間に皺を寄せて、しばらく黙って何かを考え込んだあと、ポツリと呟いた。

「俺のいない間に何があったか知らんが、さっき車に乗せるときになつてあいつの顔をゆっくり見たら、あいつ、すげえ幸せそうな寝顔をしていたんだ。一点の曇りもない顔だ。あんな顔、久しぶりに見た」

「・・・おじさん」

「あんな顔を見なくなったのは、お前がどっかへ消えた直後だったよ」

「・・・」

新一は、蘭にも小五郎にも、申し訳ない気持ちになつて思わず強く唇を噛んだ。

「だからあんな顔をすんのは、眠る直前までお前と一緒に居れた幸福感、ただそれだけだと思つてた。お前がまた消えちまうという事実も知らないで・・・。それなのにお前はあいつに言つたと言つ。」

お前のその表情見てつと、どうやら嘘でもないらしい」

小五郎はそこまで一気に言つて、ちよつと待てというふうに新一に

向けて片手を挙げると、胸ポケットからタバコとシガーライターを取り出し、火をつけて一服した。

「・・・じゃあ、一体お前はあいつにとって、どんないい言葉をかけてやったんだろうな」

小五郎はタバコをふかしながら、ゆっくりと夜空を見上げる。

新一は何も言えなくなつて、彼の背中を見つめていた。と頭を掻いた。彼が不機嫌になっているのが一目でわかる。

「俺はお前が嫌いだ」

急に、吐き捨てるように彼が言った。何も答えられなくて。新一はただ、目の前の『彼女の父親』を見つめる。

「・・・蘭をこんなにもさせる男が・・・こいつを幸せにできるとは思わない」

「・・・」

痛いところをつかれてしまう。けれど、相槌も打たず、反論もせず。ただじつと聞いていた。

「それでも・・・。蘭はお前のことを相当好きらしい。・・・俺は認めんがな」

「僕も・・・好きです」

新一は遠慮がちに、しかしそれでも彼から視線をそらすことはせず、はつきりとその言葉を口にした。さっき、あんなに思いを確かめあったから。彼の言葉を聞いてもちろん、驚きはしなかった。

そして小五郎は、新一の言葉からそのことを察したのか、一瞬まじまじと彼を見ると、みるみるさらに不機嫌な顔になつて、再びタバコを一息吹かし、目の前の彼から視線を逸らす。しかし、その後で、「・・・ボウズ」と彼の名前を呼んだときは、既にじろり、と新一の瞳を見据えていた。怖いくらいに。

「はい」

新一もまっすぐ彼の顔を見つめていた。

「恋愛するのは個人の自由だ。今回のことはアレで許してやる。・・・だが、これ以上こいつを苦しめてみる、あいつをこれ以上泣かせ

てみる。そうだったら、・・・お前を殺す」

その眼は鋭く、新一の顔を睨んでいた。

「・・・ッ!？」

「わかったな」

「・・・はい」

新一は静かに頷いた。それを待たずに小五郎は背を向けて、院内へと続くドアに向かってゆつくり歩き出した。

その後姿を、新一はじっと見つめていた。と、突然彼が足を止めて小五郎は「・・・新一」と言った。

「・・・はいッ」

突然『新一』と呼ばれて驚き、彼は返事をするのが遅れた。

「さっきのは訂正だ」

「は？」

狐につままれた表情をすてその後姿を見つめる。そんな彼に対して、小五郎は背中を向けたまま、振り返ることもしなかった。

「俺は、蘭のために殺人だろうが何だろうができる。だが、俺の手でおまえだけは殺すことはできない。おまえが死ぬことはあいつにとって一番苦しむ方法だからな」

「・・・そう、ですね」

新一はゆつくり頷く。

そう、俺は死なない・・・。蘭と約束したのだから。

誓いの言葉をして、蘭をこれからもずっと大切にしよう、一緒に共に生きようって決めたのだから

「・・・死ぬなよ」

「ええ」

新一はしっかりと頷いた。その言葉を確認してから、小五郎は再び歩き出した。そしてドアが開けられる。重いドアを開き、彼は娘をしまったまま、ゆつくりとした足取りで屋上を後にした。

新一はドアが閉まって小五郎の影すら見えなくなったことを確認してから、ぽつり、と呟いた。

「オツちゃん、見直したよ」

思わず口元に笑みがこぼれる。そして再びペットボトルに口をつけようとしたとき……。

どっ……くん……

「くっ……ごほっ……ごほっ……」

あの衝撃が走り、彼はその水を思わず吐き出した。

どっ……くん、どっ……くん、どっ……くん

再びシュウシュウと熱い湯気のような蒸気が体から出て来る。

今、自分の体を誰かが触ると火傷するのではないか、と思うくらいの熱さ。

心臓が痛い。苦しい。

体が内側から引きちぎられるように痛い。

十字架の上で、最後の晩餐で彼が口にしたパンのように無残に体を引き裂かれた、あのキリストのように……。

この痛さは慣れるものではないが、今まで体験したものどれよりもキツく感じた。

どっくん、どっくん、どっくん、どっくん、どっくん、
どっくん、どっくん、どっくん、どっくん、どっくん……

それは急速にスピードを上げていく。強いて言うなら荒野を走る暴走列車のように・・・

「うがあっ・・・」

ハアハア喘ぎながら彼はドアに向かってよたよたと歩き出した。

・・・これは本当に死ぬかもしれない。そんな恐怖さえ感じた。

視界がぼやけてきて。もう遊園地の発作のときみたいに、痛みを和らげる誰かの姿も現れることもせず。

ただ、苦痛と熱さと寒さと、衝動と。全てが一緒くたになってきたという感覚。

（冗談じゃねえぞ・・・やっと蘭と恋人になれたっていうのに・・・）
また三途の川のお世話になるのだけはごめんだかな・・・

彼は必死にドアに向かって一歩一歩足を進める。歩きたびに、噴出す汗の雫がポタポタと固いコンクリートの上にぽた、ぽた、ぽたと落ちては水玉模様を作っていく。

どくん、どくん、どくん、どくん、どくん、どくん、どくん、どくん、どくん、どくん、どくん、どくん・・・

視界が霞んでくる。もう、限界のようだ。

意識が白濁していた。

「くっ・・・ッ」

彼は苦しさのあまり、自分の胸板をシャツの上から掻き穿る。

辛くて、痛くて、熱くて、どうしていいのかわからなくて。とろけるような、体全てがなくなっていくような。

もうどうしようもなくて

彼はとうとうその場に跪き、それから倒れこんだ。

（くそったれ・・・）『俺は死なねえ』そう決意した直後にこれか

よ・・・)

思わず弱音が出てくる。浮かんできたのは、泣き出しそうな哀の姿。(ごめんな。灰原・・・一緒に生きよう、組織と戦おう。・・・天寿を全うしようつたのに・・・)。こんなことになっちまって・・・約束は守れそうもねえな・・・)

次に浮かんできたのは、博士や少年探偵団。両親・・・それに。

「・・・ら・・・ん」

愛しき女性の名前を口の中で呼ぶ。

小さいころから好きだった蘭。ずっと一緒に育ってきた。同じものを見て、同じ感動をして。ずっと一緒に生きていくものだと思っていた。

こんなに好きなのに。こんなに愛しているのに。ようやく想いを伝えることができたのに。

(死ぬわけにはいかねーよ・・・。おめーを残して、死ぬわけには・・・)

・・・死んでたまつかよ。

「ら・・・」

目の前に優しい彼女の顔があつて。

『新一』と、自分の名前を呼び、にこやかに笑っているように見える。

もう一度彼女の名前を呼ぼうとしたとき、ふと目の前にぼんやり浅黒い足のようなものが見えた。

「・・・？」

新一は目を凝らして見る。

それは『足のようなもの』ではなく、正真正銘『足』そのものであった。

「女神様のご登場、やvv」

今の状況に場違いなほどの明るい声。関西弁の色黒の少年。

それはまさしく服部平次ほかなかった。

「・・・は、服部！？おまえ、どうし・・・」

以前と同じ、“て”と言えないうちに、意識が遠のいていく・・・。

新一は完全に意識を失う直前、ある推測が生まれた。

（・・・また、灰原、か）

新一はほんの一瞬、口元を緩めた・・・。

工藤新一が自分を見上げていた顔を、がくんと下ろしたときとほぼ同時に、平次は時計を見て呟いた。

「タイムリミット、や」

それから妙に演技がかった声でこう続けた。

「『・・・18分オーバー・・・これくらいは許容範囲やな』」

そこで彼の強張った顔がだんだんだらしがなく緩んでくる。

「くううう！言うてみたかったんや、このセリフvvvvどっかの科

学者がよう言うてるセリフやんv vかつこええv v」

彼は嬉しさのあまり身をぶるると震わせた。そしてすぐ我に返る。

「く、工藤の応急処置、はよせな・・・」

彼は慌てて手にもっていたペットボトルの蓋を開き、彼の口に流し込むのである・・・。

少年探偵団 団員吉田歩美が住む、吉田邸。

彼女はずっと哀やコナンのことを考えていて眠ろうとはしなかったが、母親の力もあり、何とか眠ることができた。

しかし、夜中になって彼女は突然尿意を催し、目が覚めたのである。時刻は午前3時30分を指している。

「ママ、おしっこ・・・」

隣で寝ている母親を起こそうとするが起きないので、しかたなく歩美は一人で部屋を出てトイレに向かう。

外では勇ましい女探偵でも、実年齢は7歳の女の子。まだまだ甘えたい時期である。

彼女いわく、外ではコナン君がいるから勇気がもらえ、また哀ちゃんを支えてくれるから、強くなれるのだそうだ。

だから普段以上の力を、パワーをもらえるのだろっ。・・・しかし。

「哀ちゃん、大丈夫かな・・・」

暗い廊下を歩きながら、歩美は再び不安に襲われる。

「コナンくん、ちゃんと哀ちゃんの所へ行ってあげたかな・・・？」

歩美は大きな窓越しに、今まで見たことの無い、高い場所にある月を見た。煌々とオレンジ色に光る満月。

それを見ながら、彼女はそっとパジャマのポケットから探偵バッジを取り出した。

いつでも肌身離さず持っているのだ。寝るときも、お風呂に入っ

いるときも、食事中も、家族と旅行へ行くときでさえも。これを持つてればいつでもみんなとつながっている気がして……。

「……お月様、お願い。哀ちゃんがコナンくんに会えるのを優しく見守っててください……。哀ちゃんと、新一お兄さんを助けてください」

もちろん、この時刻には既に哀も新一も意識を取り戻していて、新一がコナンになろうとしているところだったのだが、博士はどたばたして連絡するのを忘れていたようだ。

歩美はしばらく月にお祈りをささげたあと、まだトイレに行っていないことを思い出して、それを再びポケットに入れようとした。そう、ちょうどそのとき。

「（……吉田さん？）」

懐かしく甘い、しかし少しかすれた声に驚いて辺りを見回した。……誰もいない。

ハツとしてポケットに入れかけていたバッジを取り出してみる。思った通り、発信ボタンがオンのままになっていた。きっと声の主は……。

「……あ、哀ちゃん!？」

信じられなかった……。

歩美は目頭からポロポロと熱いものが零れてくるのを抑えることができずにいた。嬉しくて、涙が止まらなかった……。

「（……バカね、泣かないの）」

優しい彼女の声に慰められる。

「だって……だってえ……」

ひつく、ひつくと泣きじゃくりながら歩美は力が抜けたようにその場にへたり込んだ。

「哀ちゃん、すごく苦しそうだったから、そのまま死んじゃったらどうしようって思ってた……」

「（バカね。あなたたちを残して死ねるわけじゃないじゃない。とくに

こんな甘えん坊さんなあなたを残してね・・・」

クスクス笑いながら哀が言う。もちろん、それはいつもの冷たい笑いではない。優しい微笑み。母親のような、お姉さんのような、温かい微笑だった。

「甘えん坊さんじゃないよう！」

プツと頬を膨らませて歩美が抗議する。そして、言いながらコナンの言うとおりだ、と思っていた。お前たちを残して死にやあしない、と言ったコナンの言葉。

やっぱり彼の言葉は全て当たっている。

そんな彼女に、くすくす笑っていた哀が突然その笑いを止めて、早口で言った。

「（待つて、吉田さん。あなたまさかまだ寝てなかったの？）」

違和感を覚えたらしく、哀がちよつと驚いた声で尋ねた。

「うつん。・・・大丈夫、寝てたよ。今おトイレ・・・」一人で「行つてたの！」

歩美は『一人で』を強調して言った。そして再び立ち上がると早足でトイレに向かって歩き出す。彼女が傍にいとわかったただで、こんなに力が沸いてくる。

「（そう・・・）」

歩美の言葉を聞いて、彼女のほつとしたため息が聞こえる。

「・・・ねえ、哀ちゃん。コナンくん、来てくれた・・・？」

「（・・・え？どうして・・・？）」

突然の彼女の思いがけないその言葉に彼女は驚いたように聞き返した。

「どうしてって・・・」

『どうして・・・？』という言葉聞いて、歩美はコナンが彼女の許に来てくれなかったと理解し、落胆の色を隠せずにいた。結局間に合わなかったんだ、と。

「コナンくんに言ったの。『哀ちゃんが死んじやいそう。哀ちゃんを助けに来て』って。でもそっか。・・・来て、くれなかったんだ」

再び涙があふれて来る。それはさつきと成分が明らかに違うもの。失望と悲しみという材料で作られた涙。

少女の小さな胸が締め付けられるように痛くなった。そのとき、受信機の向こうでくすぐすつと笑い声が漏れてきた。

「哀、ちゃん・・・？」

歩美はハッとして耳を澄ました。まさか。

「（そう。・・・ちゃんと来てくれたわよ。彼）」

いつもの落ち着いた彼女の声。そして、穏やかなその表情。その言葉の節に陰りなんて少しも感じなかった。だから、哀のその言葉を聞いて、歩美の心はぱつと華やかになっていく。

「そっか、よかった！」

嬉しそうに歩美は叫んだ。いつ、どうやって彼が哀のもとへ行ったかわからない。しかしそれがどんな形であろうと、彼女のもとへやってきたことが歩美にとってとても嬉しかった。

「（吉田さん・・・）」

「え？なにになっ？」

哀が何か言おうとしている。歩美は今、その一語でも聞き逃したくなくて、あわてて探偵バツジを耳に当てた。

「（ありがと・・・）」

「うん！」

哀のその言葉に、歩美は嬉しそうに頷いた。哀が笑ってくれることが本当にとっても嬉しくって。

自分は哀ちゃんとコナンくんが幸せに笑っていることが結構好きなんだろうなあ、なんて子供心にちよっぴり考えてみたりして。

「ところでそのコナンくんはどうしたの・・・？」

「さあ。いろいろ走り回ったから今ごろどこかで寝ているんじゃないかしら・・・」

ちよっと彼に対して皮肉を含めた言い方。もちろん、歩美はその言葉の深い意味に気が付いていない。

「そつか。普通この時間じゃ寝てるよね・・・」

「バー口。・・・起きてる・・・よ」

そのとき、ハアハアと喘ぐような声が歩美の耳に届いた。歩美が大好きな大好きなあの声。少し大人びたその口調。優しく、かつこよくて、誰よりも正義感あふれてて、頭がよくて、頼りがいがある、で、サッカーがうまくて、人並みはずれた推理力を持っていて・・・その全てを持つ、大好きな彼の声。

その声が。突然、2人の会話に割り込んできた。

「コナンくん!？」

歩美は声を上げた。

「あなた、どうして・・・!？」

哀も相当驚いたのだろう、声が裏返っている。

「・・・今、帰ってきた・・・。歩美、心配かけて悪かったな」

「う、ううん」

歩美はあふれ出そうな涙を必死に堪え、大きく横に頭を振った。今、どこにいるんだろう。

いつもと違うコナンの状態に、歩美の小さな胸もなんだかドキドキと鼓動が高まっていくようだった。

「灰原、・・・いろいろありがとな。・・・感謝してる」

「・・・私はいいけど、それよりあなた・・・大丈夫なの？」

哀は早口で彼に聞いた。相当動揺しているのが歩美にもわかっていった。そう、哀にも・・・いや、彼女だからもつきつとコナンの状態をわかっているのかもしれない。歩美はそんなことを思ってしまった。

「大丈夫・・・だ。けど・・・ちょっと・・・休ませてくれねーか?どうも・・・つれーんだよ・・・体がばらばらになるっつか。」

「あたりまえじゃない。もう何も考えないでゆっくり寝てなさい」

歩美はそのやりとりを黙って聞いていた。2人が何について話しているかわからなかったのだ。ただ、コナンが相当疲れていることは彼女にも見て取れた。

そして、突き放したような怒った言い方ではあるけれど、心から心配している哀の姿も。思わず、ふっと笑みが零れて。よかった、なんて呟いたりして。

「歩美……」

「あ、……はい！」

突然自分にふられ、あわてて返事をしたために敬語になってしまい、ちよつとドギマギした。

「明日は……絶対戻ってくつから。また、明日な」

「う、うん！」

歩美は笑顔になって頷く。バッチの受話器の向こうでにと力強く笑うかっこいいコナンの姿が見えて。

「絶対……絶対戻ってきてね！」

「ああ、絶対だ。灰原も……。また、明日」

「ええ……。」

コナンの通信が途絶える。歩美もポケットに探偵バッジの電源を切るうとしたとき、

「ホント、気障なんだから……」

という、哀の溜め息混じりの微笑が聞こえた。歩美はその言葉を聞くときと微笑み、それからあわててバッジを握り締めたままトイレに向かつて走り出したのだった。

第31話 タイムリミット（後編）（後書き）

うーふーふーvvvvこつぶです。これもそれほど変わってないけど。

強いて言えば、苦しんでるときにね、新ちゃんが『少しでも恨ませてもらうぞ』って哀ちゃんに呼びかけるシーンがあったんだけど。それをなくしたことかな。・・・それはやめにした（笑）。こっちの方が今のあたし好みです（笑）。蘭ちゃんだけじゃなくて、哀ちゃんも気遣ってやってください、というこつぶの。

それでは、ここまでお読みいただき、ありがとうございました

第32話 真実（前編）

米花総合病院 屋上。

江戸川コナンと服部平次はまだそこにいた。カタカナの『リ』の字のように、体を横にして、ぼんやり空を見上げていた。

時刻はもうすぐ午前4時になるうとしている。高く上がっていた月はいつのまにか西の方へ移動して相当低い位置にあった。

どこかで羽化という一仕事を終えたばかりの蝉が小さく『ジジ・・・』と鳴いている。

そんな中、コナンは先ほどまで使っていた探偵バッジを見つめていたが、それを無造作にポケットに突っ込んだ。

「ホンマ、根っからのかつこつけやなあ、くどーは」

コンクリートに彼と同じように寝っころがっていた平次は今までずっと黙っていたのだが、急に体を起すと、にんまり笑ってコナンを冷やかした。

「あん？」

彼はむっとして黙って平次を見上げる。

「意識のうようになって15分もからんうちに、急にむくってゾンビみたいに起きよって・・・。ほんで次は何やらかすんやる思ったら、かわええ嬢ちゃんたちと『悠長』にお喋りかい」

「うつせーな。起きたときにあの2人の声が聞こえたんだ、しゃーねえだろ」

コナンはふてくされたようにそう言うと、小五郎が先ほど彼にくれたペットボトルの水を一本、ようやく飲み干した。いつのまにか彼の息は正常に整っていた。

「まあ、そこが工藤のええところやからなvvハイ、よおできました！おりこーさんv」

平次はそう言ってから満面の笑みを浮かべ、コナンの頭をポンポン

と軽く2、3度叩く。明らかに子ども扱いだ。

「やめろよ……」

コナンは半笑いになって彼の頭上にあるその手をさっと払う。そんな彼に対して、平次は軽く「ハハ、スマンスマン」と軽く笑った。

「それより……オメーの手に持つてるその液体……」

急にコナンの顔つきが変わった。彼の目線が平次の手にしていたものに行く。

「な、何のことや????」

平次はあわてて手に持っていた空のペットボトルを後ろに隠すが、時すでに遅いだ。

「……オメー、俺の意識失ってる間にそれ飲ませたろ」

「し、知らんで。工藤の気のせいやないか？こ、これはさっきここに来る前に買った……じゅ、ジューズや」

思わず声を上擦らせていた。

「……ジューズ？」

訝しげにコナンは平次をじろじろと見つめる。

「そ、そうや。ジューズや。新発売の新しいカルピスやで」

「それって何味だよ」

「秘密や。限定モンやから、簡単には教えられへんのや……」

平次はコナンにばれないようにと必死だった。今はまだ、灰原哀の依頼を遂行している途中だ。一度頼まれた仕事は最後まで遂行するのが彼のポリシーだ。もちろん、ターゲットに情報を漏らすなんてもつてのほかだった。しかし、コナンは苦笑いを浮かべる。

「オメーなあ。……何でしらばっくれてんのか知らねえけど、バレバレだぜ……。今も俺の口の中が妙に苦くて甘くて酸っぱくて……かなり気持ち悪いんだ。……何もなければどうにかしてくれって感じだぜ……」

コナンはそう言いながらコナンは2本目のペットボトルの水を開けて3分の1ほど一気に飲んだ。口の不味さがどうしても抜けないら

しい。

確かにその液体の色は、自分から『絶対飲んではいけない』という警告を発しているように見えた。妖しい光が出ているのである。明らかにおいしくなさそうな色をしている。

平次はただ愛想笑いをするしかなかった。何せこの薬は灰原のレシピを見て作った自分の作品なのだから。調合どおりに入れたつもりだが、手の震えや緊張からくる汗がぼたり、と落ちて。成分が変わったとしたら……。僅かな不安が残る。

「でも、これのおかげで助かったんだよな、俺……」

コナンが何気なく呟いた言葉を聞き流そうとして、平次はハツとして彼を見た。やはり彼は気づいていた。

平次はどう反応していいのかわからず、しばらく黙っていた。

「……灰原がオメーに頼んだんだろ？俺が元に戻るときの処置を服部が代わりにするようにって……。だからさっきから俺のこと追っかけてたのか……。今ごろ気づいたよ」

平次の答えを待つこともなく、コナンはわかりきったように淡々と話しつづけた。

「いつ着けたのか知らねえけど靴にも発信機ついてるし……。灰原、予備追跡メガネ持つてるもん……。今日の俺の行動はオメーらには全てお見通しだったってわけか……」

コナンはふつと苦笑を浮かべた。ここまでわかっていたら隠す必要もない。平次は諦めて『自供』を始めた。『依頼人』に対しての裏切り行為という名目にはなるだろう。しかし、このことは哀のためでもあるから。変に誤解されて『依頼人』が悪者にされていたら大変だし。

「あ、あんな工藤。あのちっさい姉ちゃんの名誉のために言っとくけど、オマエの告白を邪魔したる思て追跡メガネを俺に託したんやないからな。あの姉ちゃんはおマエのためを思って……」

「わあーってるよ。」

彼はそう平次の言葉を遮った。そしてそれを機にぶつとりと2人の

会話は途絶えた。気まずい雰囲気になったわけではない。

コナンが何か一人考え事を始めたのだ。推理をしているときのように眉間に皺を寄せ、何か考え込んでしまったから

「・・・く、くどー？」

一体何を考えているのだろう。不安になって平次はコナンの横顔を伺い見る。

「・・・・・・」

そしてようやくふつと顔を上げて平次の顔を見上げた。結論は見えたのだろうか・・・。

「なあ、服部・・・。今回のことだけどさ、灰原って本当に俺にあの解毒剤の試作品を飲ませるつもりだったのかな？」

「・・・え、どういうことや」

彼はぎょろりとした目をさらに大きくさせてコナンに尋ねた。

「もしかしたら、もしかしたらだぞ？あの薬って本当は・・・」

「本当は・・・？」

平次は目を爛々と輝かせて、次に彼が言う言葉を今か今かと待ちわびていた。何故江戸川コナンにその解毒剤の試作品を飲ませたのか、彼もずっと考えていたことだったからだ。・・・ところが。

コナンは次の瞬間、ふつと笑みを漏らして平次に対してこう言った。

「・・・いや、何でもねえ。これは俺の推測にすぎねえし、根拠も何にもないんだ。そんな机上の空論をオメーと一番に並べるわけにはいかねえよ」

「・・・は？」

平次は思わず耳を疑った。コナンはじゃあな、と言うと一人院内に続くドアに向かってゆっくりと歩き出した。

どうやら本気でコナンは、平次に彼の『推測』を言わないつもりらしい。

「な、何やねん！そこまで言っただんやったら最後まで言うのが筋っちゅうもんやろ？なあ工藤！」

平次は半泣きになって彼は叫んだ。しかし、時は彼は振り返ることもなく院内に入ってしまったのである。

キィッ・・・ボタン。

ドアが静かに閉まり、彼の姿が消えた。

ぽかんとその後ろ姿を見ていた平次であつたが、突然我にかえると「くそっ！」と口の中で呟き、空のペットボトルを力任せに蹴った。

「・・・そんな俺を仲間はずれにしたいんかい、あのガキは」

まだ蘭に告白したことも、その経緯も、灰原哀との間に何があつたのかも聞いていなかったことを彼は思い出していた。この2日間に、どれだけ大きな変化があるか、予測不可能で。西の空に浮かぶ月。きつとあと30分もすればすっかり姿を隠すだろう。

はあ・・・。大きな溜息が零れる。

「友情つて儚いもんやなあ・・・」

彼は空を見上げて涙目で呟いた。もちろん成分は悔し涙100パーセント。

それから、固いコンクリートの床に再び大の字になった。そして何気なく手に持っている彼に飲ませたペットボトルを眺める。新一の命を救つたといわれる薬。

彼はしばらくそれを見つめていたが、意を決してそれを口に一口流し込んだ。

「ぶはっ・・・ぶはっ・・・ぶっ・・・」

とっても苦い味がして・・・この世のものとは思えない味。今まで飲んだことのある薬のどれひとつも当てはまらない。逆に体を悪くするのではないかという味で。

彼はぽつりと呟いた。

「もしかして調合、間違つたやろか・・・」

それから、まあ俺を仲間はずれにしたバチや。なんて考えて、ごろり、と寝返りを打った。

一方、コナンは屋上と院内をつなぐそのドアを閉めたあとで、ハアアツと、深く大きなため息をつく。

もし自分の推測が当たっていたら、それは何て悲しいことだろう。そう思っていた。

彼はまた彼女のいる815号室に向けて、ゆっくりと歩き出す。

早く彼女の元へ行き、そこでこの考えを述べ、彼女に頭ごなしに否定してもらいたかった。何を言ってるの、と笑って欲しかった。そうして早く頭に憑いて離れないこの考えをきれいさっぱり払拭したかった。

でも、どうしても考えれば考えるほど浮かぶ考えはそれしかなくて。

・・・きつとそれが真実だと彼の中で98%確信していて。残る2%に賭けていた。

もし、自分の推測が『真実』だとしても、それは過去の出来事であり、三途の川と一緒に経験した彼女なら、もうきつとこんな考えを

失くしているかもしれない。

それとも、新たな考えがまた彼女の中に取り巻いているかもしれない。

どっちにしろ、早く助けなければ。真実を彼女の口から聞き出して、楽にしなければ。

それが、今の自分にとって彼女にできることであるから。

工藤新一として、宮野志保……いや、sherryにしてやれることであるから。

しかし、8階へ続く階段を下りながら、急に眠気と疲労が重なったのか、彼は再び思考が緩まるのを感じていた。

そして、目の前がだんだんぼんやりしていき、そのまま彼の意識がぶつつりと途絶えたのだった。

『ナンくん……コナンくん……』

『コナン……！しっかりしろよー』

『コナンくんっ！』

ぼんやりした意識の中で、誰かが自分を呼んでいる。必死に自分を呼んでいる、幼子たちの声。

懐かしい声。遠い昔に聞いたことがあるような、いや、ごく最近だった気がする。

それがいつのことか全然わからなくて。

（俺は工藤新一だ。コナンなんてふざけた名前じゃないはず。大体『コナン』だなんて……。俺は日本人だっつーの。しかも俺は高校生だぜ？悪いけど、子どもの遊びに付き合う暇なんてねーんだよ）

『コナンくん……』

その声は蘭だろうか。

(・・・なんで蘭まで俺のこと、『コナン』なんて呼ぶんだよ？だから俺はコナンじゃなくて・・・・・・・・・・)

「新一だっつーの」

彼はそう呟いて目が覚めた。

「痛っ・・・」

そして目が覚めた瞬間、ひどく頭が痛んで、彼は思わず顔を顰めた。どうやらたんこぶができているようで、包帯やらなにやらが貼られている。・・・その体はもちろん、江戸川コナン。

「よかったー!!!」

彼を囲んできゅきゅと嬉しそうに喜び合うのは、歩美、光彦、元太、そして、蘭。先ほどの声の主だろうか。

・・・どうやら夢を見ていたようだ。いや、寝ぼけていたというのか。それとも、意識が混濁していた？子供たちに呼ばれているのに、『コナンじゃない』なんて勝手に思って。

「・・・ハハ」

思わず乾いた笑みが零れる。痛む頭の傷を押えながら、ここ2日の記憶がありありと浮かんできたから。新一だった時間が大きすぎて一瞬『コナン』としての自分を忘れてしまったのだろうか。あのあと・・・平次と別れたあとのことが思い出せない。自分はどうしたというのだろう。

「・・・よかった。博士呼んでくるからみんなここにいてね!」

蘭はコナンとまともに顔をあわせることもせず、ただ一声そう叫ぶと、あつという間に部屋を出て行ってしまう。

「あ・・・」

『工藤新一』がいなくなった今、蘭は一体どんな顔をしているか、何を感じているかを確認する間もなく、彼女はいなくなってしまう。とんだ肩透かしだ。がつくりして気を抜けた、ちょうどそんなとき。

「（よく寝ていたようね・・・）」

はつとして体を起こし、声のした方を見遣ると、隣のベッドには哀がファッション雑誌を読んでいた手を置いて、こちらを見つめてた。「は、灰原・・・」

そのときになつてようやく辺りを見渡す余裕ができていた。

やはりこの部屋の配置、窓から見える景色から見てどうやらここは米花総合病院　815号室らしい。彼の周りには歩美のほかに光彦、元太もいる。棚の時計は、7月28日曜日　pm3:16を示していた。あれから11時間近く寝ていたようだ。

「（あなた、階段から落ちてたところを彼に発見されたのよ）」

「・・・『彼』?」

「（あら。あなたのお友達の『彼』よ。西の名探偵さん）」

「ああ・・・」

コナンは痛み出す頭を押さえながら昨夜（あるいは今朝）平次が最後に自分に見せた寂しげな表情を思い出していた。

（服部には悪いことをしたな・・・）

ふとそんな考えが浮かぶ。でも、だからといってどうしようもないことだったのだ。今はそう考えることにした。

「大丈夫だよ、コナンくん。そんな心配しなくたって」

歩美がにこにこ顔で言った。

「平次お兄ちゃんとは和葉お姉ちゃんとデートだし・・・」

「デート？」

「そうだよ。なんか新一お兄ちゃんのために昨日は1日損したとか何とか言ってた・・・」

「ハハ・・・」

（やっぱり怒ってやがる・・・）

歩美の言葉に、コナンは思わず渴いた笑いをした。

「それより・・・」

今まで黙っていた光彦が下を向いて何か言おうと口にした。みんなの視線が彼に一気に集まる。それを感じて一瞬躊躇ったように言葉を切ったが、彼は顔を上げてコナンの顔を鋭く睨んだ。

（みつ・・・ひこ？）

その表情に驚いてコナンは彼を思わず凝視する。

「それよりコナンくんは、灰原さんが苦しんでいるとき、一体どこへ行ってたんですか？」

光彦が強い口調でコナンを責めた。彼が目を覚ました直後から言いたくて言いたくてたまらなかったらしい。

「・・・灰原さん、本当に死にそうだったんですから・・・。僕らは何度も君の名前を口にしました。きっと、彼女もそうです・・・。いえ、一番言いたかったのは灰原さん本人なのではないでしょうか??」

哀は驚いた表情を浮かべ、光彦の横顔をただじつと見つめた。その温かい視線に気づかないほど光彦は興奮しているようだった。

「彼女が苦しんでいるとき、あなたは一体・・・どこで何をしてたんですか!・・・答えて・・・答えてください!」

光彦は一滴の涙を流して叫ぶように言った。しーんとする病室内。彼の声が病室いっぱいに響き渡っていた。

「光彦くん、やめて。ここ、病室だよ？」

歩美があわてて止める。

「そうだぞ、光彦。灰原がさっきあんなに言ってたじえねえか。博士のそこに行く途中で凶悪な事件に巻き込まれて、それを一人で解決して帰ってきたって」

「え？・・・灰原？」

その言葉にコナンは驚いて哀の方を見たが、彼女はコナンからそばを向いていた。

「じゃあ・・・じゃあコナンくんは事件と灰原さんと、どっちが大事なんですか！・・・灰原さんの・・・。少年探偵団の団員の命がなくなるかもしれないときに・・・どうしてあなたは・・・」

「それでも、コナンくんは戻ってきたじゃない」

歩美が嗜めようとするが、光彦は納得しなかった。

「それは、事件が解決したからでしょ？解決しなかったらあなたは戻ってこなかった・・・」

その言葉にハツとしてコナンは光彦を凝視した。

この話はでたらめだ、そう言えればそんないいことはない。

しかし、全てが嘘だとは言い切れなかった。

もし蘭が病気だ、両親が危篤だ、誰かが車に轢かれた。そんな報せが遠い地から届いたとしたら、自分は事件を放り出してその人のもとへ行くだろうか。

最終的には行くだろう。しかしその報せに事件性がなかったとしたら。自分は今手をつけていた事件をほっぽってまで彼らの許へすぐに行くだろうか。

・・・いや、きっと行けない。

事件の方が大事だとか、自分以外解決する人間がいないとか、そう

いうことではなくて。

一段落させて、あるいは誰かに後の仕事を任せるまで、それが自分の性格だから。大人の合理だと思っているから。

今は小学生の身であるし、実年齢ですらまだ、17歳の高校生であるけれど、人並みに探偵として頼られていた時期があったから。大人社会の中に身を置いた時期があったから。

工藤新一として、探偵という仕事をしている都合上、済ませなくてはいけない。そう自分の中で思ってしまったところがあつて。ずっとその人物のことが頭について仕事どころではないかもしれないけれども、それでも形式上はきつとそこに居続ける気がした。

それがたとえば何十人の人の命が関わっている大事件だとしたら。自分の私情は後まわしにしてしまうような気がした。どんなに辛くても、どんなに泣きたくても。

そして、きつとこれは子供には絶対納得できないことだとわかっていた。

子供は純粹で、真っ直ぐで。・・・そして真っ白で。

自分にはもう何年も前に忘れてしまったモノ。なくしてしまったモノ。

「コナンくんが灰原さんを想っていないってことは言いません。寧ろ2人は特別な関係だとわかってるから・・・。だからこそ・・・何で」

そこまで言つて、彼はくっ・・・と嗚咽を漏らした。そして、「ごめんなさい・・・」と呟き、彼はリュックを片腕にかけ、一人病室を出て行った。

「お、おい、光彦・・・！」

元太があわてて追いかける。歩美もちよつと出遅れて、それに続き、追いかけようとしたが、踵を返し、面目なさそうに

「ごめん、2人とも。また来るから・・・じゃあね！」

と言つて、早足で部屋を出て行つたのだつた。

残されたのは、哀とコナン。

気まずい雰囲気か2人の間に流れていた。

「（また、2人きりになつてしまつたわね）」

ポツリ、と哀が呟いた。

「え？」

振り返り、コナンは彼女を見た。

「（ごめんなさいね。もつと違った理由を考えればよかったのだけれど・・・別にあなたと彼らの仲たがいする気はなかったのよ・・・）」

申し訳なさそうに哀は言つた。そしてペラペラと再びファッション雑誌を捲る。どこか彼女には生気が無いように思えた。

最近ベッドの中に入りっぱなしで、または他の理由で弱気になつて
いるのかもしれない。　そう、他の理由で。

「俺と蘭のこと、考えてたのか？」

「（え・・・っ？）」

動揺したように一瞬、哀は雑誌を捲つていた手を止めた。そして再び捲り始める。動揺しているのを隠すためか、彼女は目を通してさえない雑誌をペラペラと捲りつづけていた。しかし、微妙に彼女の手は震えていた。それでもただ雑誌を捲りつづけている。

そんな彼女にやりきれなくなり、コナンは自分のベッドから静かに降りて、彼女の白く細い手首を掴んだ。はつと顔を上げる哀。

「灰原・・・オメー・・・」

コナンはいったん口を窄ませたが、思い直したように口の筋肉を戻

し、その言葉を言った。

「・・・どうして俺にあの薬を飲ませた？」

「(え・・・??)」

思ったことと違うことを言われて拍子抜けしたのか、しばらく呆けたようにコナンの表情を見ていたが、笑顔を作ってこう言った。

「(またそれ?・・・何なの、あなたたちは昨日から)」

「・・・オメー、一昨日、俺にAPTX4869の解毒剤の試作品渡したとき、すげえ熱だったよな？」

「(ええ。そうよ?自己管理ができてなかったから・・・。昨日も言わなかった??)」

哀は自嘲する。そのとき、彼は「違うだろ」と軽く遮った。

「俺にAPTX4869の解毒剤の完成品の糸口がどこにあるんじゃないかと探していた結果だろ。博士から聞いたぜ。研究のために徹夜したあと、ふらふらな体に鞭打って、学校に行ったこともあったんだってな。博士が止めるのを聞かずに」

コナンは淡々と話しつづけた。

「(博士ったら、おしゃべりなんだから・・・)」

動揺したように哀は俯いた。コナンはそんな彼女をただ切なそうに見ていた。

「(・・・何?)」

その視線に気づき、彼女はいつものような大人びた笑みを彼に見せた。

「・・・あの薬をもらったときからずっと思ってた。何で灰原はあの試作品を俺に渡したんだろうって。文化祭のとき使ったあの薬を再び催促する俺に対して、オメーは絶対渡そうとはしなかった。『次は死ぬ可能性があるんだから』と言って・・・。それなのに・・・」

「

「(馬鹿らしい。あなたが未練つたらしく蘭さんの事を口にするからじゃない。それならいつそ私があなたたちのために手助けをしようと思っただけよ。あなたは今度の薬を飲んでも死なないと賭けて、

「・・・新しい薬を、あなたに渡した」

そしたらこんな結果になってしまったけど。彼女はそう言うてくすり、と笑った。

「本当にそうか・・・？」

彼はもう一度聞き返す。

「本当にオメーは・・・あの薬を俺に飲ませようとしたのか・・・？」

「（そうに決まってるじゃない！じゃあ私は何であの薬を持っていたっていうのよ！）」

動揺したのか、いきなり声を張り上げてそう言ったために、彼女は激しくゴホゴホと咳き込んだ。

「それは・・・」

コナンは酸素吸入器を口に当てる哀を気遣いながらも、悲しそうな表情でこう言った。

「それは、自分で・・・飲むためさ」

その言葉に、彼女の表情がみるみるうちに蒼く変わっていった。

第32話 真実（前編）（後書き）

ふふふ……。 「真実（後編）」に行く前のプロローグって考えていただければ。

この後が難しいのよね。 うん。 考えなくちゃ、考えなくちゃ、考えなくちゃ。

が、がんばりまーっすっ。 こつぶでしたvvv此処までお読みいただき、ありがとうございます！

第33話 真実（中編）

米花総合病院 815号室。

そこにいるのはコナンと哀、たった2人だけ。

そんな2人の間に重苦しい空気が流れこんでいた。

窓の外は薄暗く、夕立が降りそうな重い灰色の雲が空一面覆っている。

遠くの方で雷雲が見える。そろそろ米花町の方にも来るのかもしれない。夕立が乾ききったコンクリートや土を湿らしに来るのかもしれない。

けれど、今のこの天気は2人の心を如実に映しているように思えた。恵みの雨ではなく、今は……。

33 真実（中編）

「（……自分で飲むため、ですって……？）」
そう小さく叫んだ彼女の表情は血の気がなくなっていた。蒼い表情で、ただ、コナンを凝視していた。

先ほどから2人が続けている話。今回なぜ哀がコナンにAPTX4869の解毒剤の試作品を渡したかについての話。

それが彼女にこんな力才をさせている。彼が語ったその言葉に、哀はひどく動揺していた。

この男はもう、何もかも知っているんじゃないか、そんな不安が自分の中に立ち込めていた。けれど、その動揺を、荒れた気持ちを知られたくなくて。

平常心を保とうと必死だった。

「（どういうこと？効果が一時的な上に、死ぬ可能性が恐ろしいほど強いあの薬を飲んで私は何の意味があるというの？あなたみたいに待ってる人がいるわけでもない私が・・・どうして・・・？）」「ありえないわ。そう呟く哀に対して、コナンはただ辛そうな表情を浮かべていた。

「あの薬は悲しい薬だ。俺にとっては魅惑の薬だが、おまえにとっては・・・」

「（何が言いたいのか？あなたらしくも無い。はっきり言いなさい！）」

哀は掠れた声を最大限に張り上げる。

そんな力才をしないで。哀れまないで。お願いだから。

本当は何度も言いたかった。けれど、口にできなかったのだ。

そんな自分に、コナンは気づいているのだろうか、困ったような顔で、ただじっと見つめていた。そして何を言おうかしばし考えているようで、口をずっと真一文字に結んでいるようだった。

「・・・じゃあはつきり言わせてもらおうよ。・・・灰原、おまえはこの薬を飲んで、一人で黒の組織に行くつもりだったんだろ・・・？」

彼の言葉が、哀の胸に、頭にずん、と深く響いていた。

やっぱり、彼は知っていた。

罪を犯した犯人が、彼に追い込まれるこの状況。まさに今はそんな心理なのかもしれない。そんな考えがふと頭によぎっていた。

とても不安で、とても怖くて。できればこの状況から逃げたかった。しかし。

「（・・・ひどいわね。まさかあなた、もともと私は組織のスパイで、あなたの素性を観察するためにわざとこの姿になって子供の姿

であなたたちと生活を送っていた、とか馬鹿げたこと言い出すつもりじゃないでしょうね。そうだとしたら、全然信頼されてなかったことよね」

「バー口。んなこと考えるわけねえだろ。それに・・・子供たちに見せる優しい表情、俺に見せた組織への恐れ・・・俺はどうしてもあれが嘘だとは思えねえんだ。あれが虚構の日常だったなんて・・・」

そんな優しすぎる彼の言葉に、泣きそうな顔を見られたくなくて、一瞬、うつむき、そして言葉を選ぶように哀が顔を上げる。

「（それじゃあ私が組織に行く意味なんて何があるの？家族も、自分を暖かく迎えてくれる人もいない、ただ嫌な思い出だけが在るあの場所に戻って・・・）」

「『戻る』？いや、違うよ。戻るためじゃない」

彼は小さく首を横に振ってみせた。

「おまえは『助ける』ために組織のいるアジトに向かおうとした。
・・・たった一人で」

「（！！）」

一瞬言葉を失い、思わず目の前の彼の瞳を凝視した。眩暈が。くらり、としてよろけそうになるような衝動を彼女は感じていた。けれど、必死に手すりを握り、倒れないように、自分の動揺を頭のよい彼に、優しすぎる彼に、悟られないように、必死にその状態を保っていたのだった。

自分を見る、彼の、コナンのその蒼い瞳は悲しみの色を湛えていた。

「（くだらないわね・・・）」

目の前の哀は不快極まりない、という表情をして溜息をついた。ど

うせ必死に強がっているのだろう、彼には充分すぎるほどわかって
いた。

そうやっていつも自分をぼろぼろにする、彼女の性格が。

「・・・それが俺の考えすぎならな」

そう呟いてから、彼もまた溜息を一つ零す。

「お前は焦っていたんだ。薬ができないことに。解毒剤の研究が進
まないことに。早く、何とかして彼らをどうにかさせたい。だから、
死ぬ気でデータを集めるつもりだったんだ。自分の研究室に『sh
erry』として忍び込むつもりだったんだよ」

彼の瞳の中には見えていた。

深夜寝静まる阿笠邸。一人の女性が慣れ親しんだその場所を旅立つ
イメージが。

切なそうに、それでも涙を零さずに必死に堪え、米花町を旅立つ彼
女の姿が。

「（仮に私があなたの言うとおり、私が誰にも言わずに一人で組織
と戦うつもりでいたとして、私があの姿に戻る必要は何？『灰原哀』
が『シェリー』に戻る必要って何なの？まさか、あの姿なら、研究
員が助けてくれる。そうあなたは言いたいのか？おあいにく様。研究
室にはもう私の意思を引き継ぐものはいたとしても、私を助けてく
れる人なんてどこにもいない。・・・私は裏切り者だもの、もう部
外者でしかないの。それに、匿ったら殺されてしまう。それが判っ
てるから、彼は私を見つけたら即ジンに報告されて殺されるわ。だ
ったら、そんな辛い思いをして『sherry』にならなくても）」
彼女の言葉が、心なしに早口に感じていた。

お願い、答えなさい。そんな言葉が一瞬間こえたような気がした。
少しずつ、少しずつだが、彼女のその気持ちはもはや隠せなくなっ
ている。必死に演じようとはしていても。

そして、そんな気持ちがわかるから、彼は心が痛かった。

「だから」

コナンは彼女が最後まで言い終わるまで待つてから、ゆっくりと口を開いた。

「俺らに迷惑をかけねえため・・・じゃねえのか？」

はっとしたように自分を見つめるその力才。そしてそれとほぼ同時に、窓の外でゴロゴロゴロと雷音が轟いた。

その音の大きさからして、雷がまた近くに來たようである。しかし、今の彼にはそんなことはどうでもよかった。彼は言葉を続ける。

「（迷惑？）」

「そう。いつも言つてたじゃねえか、おまえが・・・組織の残忍さ、そして執拗さを」

黒の組織のあのジンやウオツカの力才を思い出し、彼はぎりつと齒軋りをした。

「おまえはもし自分が『灰原哀』として乗り込んだら、見つかったとき、『シェリー』が組織を裏切つて姿を消してから空白の数ヶ月があからさまになる。そしてその間おまえに関わった多くの人たちまでが巻き添えを食つちまう、そう思つたんじゃないのか。それがおまえには耐えられなかった・・・。そうじゃねえのか？」

彼の言葉に哀は再びこうすばやく切り返す。

「（バカね、あの効き目は多く見積もつても32時間あればいいとこよ？それ以上経つたら子供の姿に戻つてしまふのよ。結局バレるに決まつてるじゃない）」

哀はくすりと笑つて、いつものように彼を小馬鹿にしたような表情を浮かべる。しかし彼は少しも動じようとはしなかった。哀はそこで笑いを止めると、動揺したようにのろのろと俯いた。

「確かに・・・確かにそうだな。でも、それは細胞が生きているときであつて、もし細胞自体が死んでしまえば伸縮どころじゃねえもん」

「（何が、言いたいのか？）」

哀は俯いたまま、渴いた声で尋ねた。

気丈に振舞っているが、彼女は明らかに激しく動揺しているのがコナンにはわかっていた。

「おまえはあの場所で『宮野志保』のままで、『シエリー』のまま
で死ぬつもりだったんだよ・・・自分を犠牲にしてな」

ぴくり、と再び哀が体を引きつらせ、顔を上げる。彼女の口元がわなわなと震えていた。そんな彼女の表情をどうしても見ていられなくて、彼はそつと目を逸らした。

「そう、おまえは日々自分たちの周りに組織の陰があることに気づいていた。そしてその影が少しずつ迫ってくるのも。だから、おまえは今周りにいるおまえに関わる全ての人を守るために、組織に殺されに行こうとしたんだ。いや、殺されに行つたつうのもな
んか違うな」

彼は無表情で自分の言葉を打ち消した。

「おまえは別に殺されなくてもよかった。ただ、死にやあいんだ。
『宮野志保』のまま永久にいれば・・・。組織に『シエリー』は今
まで『宮野志保』としてどこかに隠れていた　そう印象付けるこ
とができればよかったんだろ・・・？組織に・・・その、32時間以
内に殺されそうになかったら、おまえはまた別の方法で死ぬつもり
だった。どこか身体検査でもばれないところに青酸カリを隠し持つ
とか、舌を嚙むとかして・・・そうだろ？そして死ぬ前に何とか
してデータを俺に送るつもりでいた・・・。俺が元に戻るための
魔法のデータをな」

彼の悲しみを帯びたその瞳は彼女だけを捕らえていた。

どうしてわかってしまったんだろう。彼には全てがお見通しで。
わかってはいたけど・・・でも、知られなくなかった。そして、何
より。

あなたにってしまった罪を、知られなくなくて。

・・・でも、きつとこの様子じゃ、気づいてしまっているのかしらね。

そう思えば思うほど、涙が出そうで。

でも、出すものか、と必死に下唇を噛んで、彼女はずっと下を向いていた。ここで泣いたら、もう、降参したも同然だから。

今は、したくなかったから。最後まで抵抗していたかったから。

哀はしばらく俯いたまま、まるで壊れたブリキの玩具のように固まっていた。今にも出てきそうな涙を必死に堪えて。

そしてあるとき、彼女は再びその薄い唇をゆるゆると開く。

「（・・・それで？私が死ぬつもりだったとして、何故あなたがその薬が渡ってるの？私が飲むはずの薬を何故あなたが飲んでるの？）」

一瞬だけ無空の空気が流れた気がした。

「それで・・・それでオメーはずっと悩んでたんだろ？」

「（・・・え）」

「『どうしてあの時、彼にあの薬を渡してしまったのだろう』ってな・・・」

まっすぐな瞳が彼女の目を捉える。哀は思わず身振いをした。そしてその、一瞬の体の震えをごまかすかのように、タオルケットを肩に掛ける。

コナンは言葉を続けた。

「おまえはその薬を自分で飲むはずだったし、死ぬつもりでいたから、自分用には副作用緩和剤なんて作る気が無かった。だから俺に間違っただけで、そして俺が服用したってことを知ったときはおまえは慌てた。いつでも用意周到なおまえがあのとときに限って、副作用の処置を服部に頼んだのもそのためだ。今回のことはおまえにとって予想外のことだったから」

ああ、ウソが。罪が暴かれる。

哀は思わず目を瞑った。自分の間の抜けたミスと、そしてそれに巻き込まれた彼。

よりにもよって、被害者で、そして一番知られなかった彼に真実を暴かれる。

胸がきりきりと痛むのを、彼女は感じていた。

「（・・・何、言ってるの。『解毒剤の試作品よ』と私、ちゃんと言っただけよ・・・。何かの薬と間違えて渡したわけじゃない、自分の意志であなたに渡した。それをあなたはとうとう説明してくれるのかしら？まさかそれは私の思い違いとだでも言うつもり？」

「ああ、そうだな。確かにそう俺も聞いたよ。ちゃんとお前の口から『解毒剤の試作品よ』ってね。けど、俺は気づいたんだ。あのと、既におまえは高熱にうかされてた。・・・もしかしたら、あのときから、既に意識がなかったんじゃないかってね」

「っ！！！！」

ゴロゴロ・・・ッ ドドドドドーン・・・

とうとう雷はやってきた。知の底から響くような轟きを手土産に。天蓋の隙間から少しずつ、ポタポタと大粒の雨粒が漏れ出して、とうとうその蓋は抜けて、病院の近くを走る車の音さえ聞こえないくらいに激しいどしゃぶりになっていた。

第33話 真実（中編）（後書き）

・・・・・・・・・・・・・・・・後編にするはずが、中編になりました。なんだかすごく長すぎて。

元祖のときはね、すごく苦しかったの。難しくって。でも、今はこの基礎があるから、ちょっとやりやすい。後編も頑張るぞー！

それでは、ここまでお読みいただき、ありがとうございます！きつとあと2、3話くらいで終わります。

最後までお付き合いのほどをよろしくお願いします。

第34話 真実（後編）

「（どういう、こと？）」「

哀は言葉を途切れ途切れに、喘ぐようにその言葉を口にした。コナンはそんな自分を見つめたまま、まるでその反応を確認するかのようにゆっくりと次の言葉を話し出した。

「おまえが俺にしたことは、全て『夢』だったってこと。つまり、意識がなかったんだ。アレはお前の意識じゃない。いうなれば寢言だな。そしてそれを俺は本気にした」

「ちょ、待つて。そんな・・・バカにしないでくれる？そんな夢遊病みたいなこと・・・私が」

「・・・苦しかったんじゃないのか？」

上から遮るように、しかし、聞こえるか聞こえないかわからないほどの声量で、ぼそり、と呟く彼に、思わず言葉を失った。

「そう。苦しかったんだ。・・・俺が。目の前で自分が作った薬のためにちっこくなった人間がいて。そして、弱音ばかり、泣き言ばかり言いまくってる。そんなの前にして、いつも罪の意識に苛まれてたんじゃねえのか？早く解毒剤を作らなければ、作って工藤くんを、蘭さんを楽にさせてあげなければ、みたいな。そんな意識がお前の中にずっとあったんじゃないのか。だから夢の中にまででてきちまったんだよ。俺が、お前の中に」

『解毒剤の試作品よ、使いなさい』

花畑の中。一人、寂しそうに蘭と園子を見つめているコナンの後姿。哀は、それを見つめ、『工藤君』と声をかける。

『・・・あ、灰原。どうした？』

蘭を見つめる、その情けない力才を見られてしまったことに、ちょっと決まり悪そうな表情で彼は笑った。本当に人のよさそうな顔をして。

哀は徐にポケットから持っていた小瓶を差し出すと、につこり笑みを浮かべる。

『・・・これ。・・・解毒剤の試作品よ、使いなさい。副作用もないし、体に無害だから副作用もない。・・・あとは『元に戻らない』薬を考えれば完璧よ』

驚いて自分を見つめるコナンの表情。そして、彼は笑った。

『サンキュー！灰原っ！』

そういつて彼はその小瓶を手に、勢いよく飛び出して、花畑の奥に消えていった。

そんな彼の後姿を、哀は穏やかな表情で見つめていた・・・。

それなのに。

現実は・・・。

「気がついたら、お前は病院に居て、そして隣のベッドにはなぜかコナンではなく『工藤新一』である俺が、寝かされていた・・・。そこでおまえは気づいてしまったんだ。自分が起こしてしまったこ

とを。自分が死ぬつもりでポケットに隠していた解毒剤の試作品を俺に渡してしまったこと。そして、俺はそれを既に服用しているということ……。だからおまえは……。必死で俺を助けようと服部に頼んだ。……。そうだろ？」

「……」

言葉にならない。

彼が言ったこと全てが当てはまっていた。……。気分が悪く、吐き気をも催しそうで。それでも何とか笑みを浮かび続けて。

「（さすが世界屈指の推理小説家の息子ね、と誉めてあげたいところだけど……。でもね、工藤君。そんな危ない薬、どうして私が常備してなくちゃならないのかしら？もし、落っことしてしまったら？まさかそんな薬、拾っても飲もうとする人なんているわけないとは思うけれど……。花火に行くときまで持つていくなんておかしいとは思わない？……。それなら、元からあなたに飲ませるために持つてきた薬。……。そう考えた方が普通じゃない？）」

「……。いや、おまえは俺に渡したその試作品は自分が飲むはずだった薬、それは間違いねえよ」

彼は少しも間を開けずに、また表情の変化なく、はつきりとその言葉を言い切った。

「（何で！？何で言い切れるのよ！）」

「……。それはおまえが優しすぎるからだよ……。」

彼は切なそうな顔を浮かべて自分を見つめている。

「なによ、その理由……。あなたらしくもないじゃない……。理路整然と並べるあなたの推理はどこへ言ったの？」

思わず、泣きそうな表情になって哀は彼に向けて呟いた。

そんな言葉で纏めてほしくないのに。……。そんなことを言われたら、何も言い返せなくなる。

コナンはそんな彼女を気遣うように、彼の眼光には優しさが現れて

いた。そして口元に哀しそうな笑いを含めて、ポツリ、ポツリと話し始めた。

「言つたろ、昨日も。『お前はそんなことは言わない』って。死んでもいいなんて・・・誰かが死んでもいいなんて絶対思わない。なぜなら身内の死を見てきたお前が・・・。そして、あんなに動物を可愛がったり、仲間を大切にしてお前が・・・。昔の、組織にいたおまえはどうか知らねえけど、でも少なくとも今のお前には・・・そんな言葉は似合わないよ」

パラパラと雨足が強まる中、彼はじつと哀の瞳を見つめたまま、逸らすことをしなかった。

「絶対何かあるって思ってた。1回目のときも・・・俺にあの試作品を作ったときも、そうだったんじゃないのか？」

「・・・」

もう動揺は隠し切れずに。哀はもう表情の変化を知られたくなくて、ずっと下を向いたままだった。できることなら、早く話を終えて逃げ出したかった。打ち切りたかった。でも、その足は動かずに、止まっていたたままで。もしかしたら、最後まで彼の推理を聞いていたい、という気持ちもどこかであつたのかもしれない。

『犯罪者』である自分と、その推理を見ていたい自分。その2つが対立していた。

「キャンプの日、『博士に俺にそっくりのロボット作ってくれ』そう頼んだときに俺に向けた視線。・・・おまえが作ったのは試作品であつて、完成品ではないから。死の危険さえあるその薬を俺に安易に渡すわけにはいかなかった。だから黙っていたんだろ。手元にその薬があるにも関わらず。・・・けど、おまえは俺が犯人に撃たれて、入院したとき。本当に蘭に正体がばれているということをおまえは確信したから。それで俺が悩み、最終的には本当のことを全て包み隠さず蘭に言うだろうとわかってたから。そしたら必然的に蘭もまた組織に狙われる対象となる・・・。そしてそのことに俺が

また苦しむ、そんな姿をおまえは見なくなかった。だから俺のためにおまえはその薬を俺に渡したんだ。少しの危険を省みず」

「（・・・随分な自惚れね。）」

掠れた声で何とかその言葉を言っていると、哀はまた再び彼を見据える。

コナンはそれには答えず、チラリと哀に目をやるだけだった。そして再び話を続ける。

「それにおまえはあの試作品が『死ぬ危険性がある』と位置付けながらも、あれほど俺が苦しむとは思ってもみなかったんじゃないか？あるとき・・・おまえが俺にあの薬を渡したとき、『死ぬかもしれないけど、試してみる？』と俺に言ったのは、『工藤新一』の姿で俺が暴れすぎないように牽制をかけたんだ・・・。じゃなきゃ『工藤新一』が生きているという噂が流れ、マスコミにその事実をつかまれたら組織は絶対俺やおまえだけでなく、俺らに関わった何人もの人たちを殺すだろう。そう言うつもりで忠告したはずなのに・・・」

「（あなたは私の忠告も無視して文化祭には出るわ、事件は解くわで暴れ放題だったわね・・・）」

哀がため息をついてコナンを軽く睨んだ。コナンは思わずごめん、と苦笑しながら謝った。

「それに、きつと・・・おまえの予想以上にあの試作品は副作用を伴ったんだ。・・・あるとき、自分の作った副作用の緩和剤がもし間に合わなかったら、と思うとおまえは怖かった。だからあの薬を使うことを封印した。・・・あるときもそう言ったよな」

コナンの瞳が自分を捉えたまま、動こうとしなかった。哀はその視線を正面から捕らえ、じつと彼を見つめ返していた。否定するわけではなく、逆に認めるわけでもなく、ただ手だけは、掛け布団の端をぎゅっと握り締めていた。

「それからずいぶん時間をかけても、それ以上のものは作れなかった。作れたのは、健康な状態でも元に戻る状態に作り出す代わり

に、副作用の危険性がさらに強い薬。だからおまえはそれを『完成させた』とは言うことができなかった。きつと机の奥かどこかにしまつて。誰の目にも止まらないようにしたんじゃないか。．．．なのに、解毒剤の完成に程遠い今の状況に非常に焦っていた極限状態のお前は、俺らの周りでチラホラ組織の陰を感じ始めたとき、その封印を解くことを決意したんだ。それが今回のことだ」

「（．．．．．）」

哀は先ほどから布団の端を掴んだまま、その手を離そうとしなかった。手が微かに震えていた。

「花火大会が終わった直後じゃないにしろ、きつと今週、再来週．．．9月までにはきつとおまえは俺たちの前から姿を消して、組織のもとへ行くはずだったんだ。子供たちに黙って離れることに、おまえは後ろめたさを感じていたんだろ？いつも黒ばかり身につけているおまえが、あんな鮮やかな、しかも歩美ちゃんとお揃いの浴衣を着るなんてな。それに光彦たちにだって、あんな丁寧に自由研究について教えるなんて．．．。いつも『自分で考えなさい』とか言うて鼻であしらうおまえが．．．」

「（あら、ひどい言われようね）」

哀は思わず失笑する。

「しかしおまえは予想外の高熱で意識が朦朧していた。それでも花火大会には行くつもりでいたんだ。おまえが生きていられる中でも体験できないことかもしれないねえから。あいつらと過ごす最後の時間かもしれないねえから。あいつらの中に『灰原哀』という一人の少女と作った思い出をできるだけ多く刻んで欲しかったから．．．」

コナンは哀の顔を伺い見た。しかし、彼女は無表情でただ、彼の顔をじっと見つめているだけだった。

「．．．なあ、灰原。もう、楽になろうぜ？」

彼はゆっくりと彼女の全身に語りかけるようにそう言った。

ゴロゴロ．．．ドドドドーン　バリバリ．．．

この病院のすぐ近くのどこかに雷が落ちたようだ。金属が避けるような耳を劈く激しい音が窓をすり抜けて聞こえてくる。それでも二人は動じず、ただ黙ってお互いの顔をただ見つめあっていた。

もう限界だった。

「（降参よ……。あなたの言ったとおりだわ）」

「・・・そっか」

コナンは緊張の糸が切れたのか、大きなため息と一緒にその言葉を吐いた。そんな彼を見据えながら、彼女もまた小さく溜息をついた。

「（あなたに追い詰められていく犯人の気持ち、今わかったわ。・・・結構スリル満点ね）」

「やめるよ」

そう遮られて、哀は一瞬泣きそうになった。が、泣くものかと再びぐっと唇を噛む。そんな表情の変化に気づいたのか、コナンは優しい口調で言った。

「・・・泣いても、いいんだぜ？」

「（結構、よ。自分で撒いた種なんだから。それに、泣く必要なんて、無いもの）」

そう、泣く必要なんてないのに。どうしてこんなに。泣きたくなってしまうのだろうか。

切なくて、胸が張り裂けそうだったんだろう。

それとも。・・・大事な人をこの手で殺してたかもしれない、そんな気持ちだったのだろうか。

そう、怖かったのだ。

彼を、失くすことが。自分の手で、彼を傷つけることが。

自分は、怖かったのだ。

「は、灰原??」

「（悪いけど、・・・しばらく一人にさせて。・・・お願い）」

彼女は掠れた声で、また、弱弱しく言った。もう、我慢できない。涙が、零れそう。

でも、きっとそうしたら彼が心配するから。優しい言葉をまたかけてくれるから。

自分のせいで辛い目にあわせた人に慰めてもらう資格なんて、自分にはない。そう思っていた。

「ああ・・・悪かったな」

とだけ言って、静かに部屋を出ようとした。しかしそのとき、何か大切なことを思い出して立ち止まり、ゆっくりと踵を返す。

「なあ、灰原・・・」

「・・・」

哀は何も答えない。しかしコナンは今、そのことを彼女に聞かずにはいられなかった。しばしの間を開けて、彼女は反応した。

「一つだけ教えてくれねえか？あの花火大会の日、どうしてお前は黒の服を選んだんだ？よりもよってあんな服を着て歩美ちゃんの気持ちを逆なでする必要なんてないだろうに。・・・俺には、そんなときの気持ちがよくわからねえんだよ。何か重要な意味があるような気がする」

「（・・・ソレは・・・内緒よ）」

「・・・へっ？」

「（少しぐらい優越感抱えさせてもらってもいいとは思っけど?）」
「・・・おい」

くすり、と哀は笑うと、それから背を向けて、ごろり、と横になった。早く行け、そう体でアピールしたつもりだ。

けれど。彼はもう一つ、自分の背中に言葉を浴びせた。

「灰原、おまえ・・・まだ諦めてねえとか言うんじゃないよな」

「（・・・・え？）」

「俺らを置いて、病院抜け出して・・・」

「（あなたが蘭さんのためにそうしたみたいに？）」

彼に背を向けたまま、哀はくすり、と笑う。

「茶化すなよ」

コナンは真面目な顔で言った。それからこう続けた。

「・・・・死ぬなよ」

しばしの間を開けて、哀はふつと笑った。

「（死なないわよ、だって・・・・）」

哀は一度言葉を切って、ゆっくり起き上がると彼の方を向いた。

「（・・・・お姉ちゃんと約束したもの。絶対生きて幸せになるって約束したもの）」

そう、三途の川で久しぶりに会った姉と妹は永遠の約束をした。

あの約束を忘れない・・・。

「そっか」

コナンは嬉しそうに、小さく笑った。

「じゃあ、もしかしたら一連の出来事はみんな明美さんの手で仕組まれたことかしんねーな」

「（え？）」

訝しげに哀は彼を見る。

「おまえがあのだ三途の川で明美さんと逢うことは予定されてたってこと」

そう、哀が解毒剤の研究で体を壊したのも、花火大会で哀がコナンに解毒剤の試作品を渡したのも、コナンが哀の作った試作品で一時危篤に陥ったのも、哀とコナンが三途の川で再会して一緒に生還したのも、全て明美が妹のために起こしたことなのではないだろうか。

本人は知らぬ顔をしていたが、きっとそうだったのかもしれない。

いや、それだけじゃなくて。

もしかしたら『灰原哀』が『江戸川コナン』と出会ったこと自体仕組みれていたのかもしれない。

『シェリー』が組織に殺されるのを待たずに隠し持っていたAPT X4869を飲んで自殺をはかろうとしたのも、すべて天国の明美が動かしていたことかもしれない。

自分の妹が組織を抜けて、博士や子供たち、そして自分の作った薬のただの被験者でしかなかった『工藤新一』と運命的な出会いを果たすために。

「そう考えたら、結構嬉しいと思わねーか？」

につ、とコナンがが決まりの白い歯を自分に向ける。そんな彼の言葉を上の方で聞きながら、

「（お姉ちゃん・・・）」

哀はポツリと呟いた。

もう一度姉に逢いたくなってきた。

あの優しい笑顔、自分を呼ぶ甘い声……。体温は冷たかったけど、心温は誰よりも温かく思えた。

もう一度、もう一度だけ抱きしめてもらいたかった。

「灰原・・・」

心配そうにコナンは彼女の方へ歩み寄る。しかし哀は思いもかけず爽やかな顔をしていた。

「（ねえ、工藤君。おねえちゃんはずっと私のこと、見守ってくれてるわよね）」

「そうだな。明美さんがおまえの今後の幸せを保証してくれるよ」

「（・・・そうだといいわね）」

哀は小さく笑った。

気が付けば雷は遠くへ抜けて、雨は小ぶりになっていた。

きつともうそろそろ雨はやみ、晴れ間が見えてくるだろう。哀の心のように澄んだような真っ青な空が・・・。

そんな気がした。

第34話 真実（後編）（後書き）

こつぶですー。はう。ようやく終わったーvvvvわーい、わーいつ。

ちよつと長かったけど、話的には元祖よりうまくまとめられた気がします。

いろいろ辻褄あわせが大変でしたが、何とかやりきりましたよっvvvvこつぶ幸せですっ。

それではここまでお読みいただきまして、ありがとうございました！
次は最終回！頑張らせていたきたいと思いますー。ふーvvvv

最終話 HANABI

全てが解決したあの日から、2週間が経った。

・・・そう、今日は待ちに待った哀の退院の日。

米花総合病院 815号室。

時刻は午前10時40分をまわったところだ。哀は身支度を済ませ、ぼんやりと病室の窓から外を眺めていた。

もう、帰る準備はできていたのだが、なぜか今はそんな気分になれなかった。

ロビーに行けば博士がきつと待っていてくれるだろう。それでも、動くこともできなくて。

「入るぞ」

ドアの向こうで自分の名前を呼ぶその声に、哀は一度はつとして顔を上げた。

備え付けの鏡で自分の顔をチェックする。

眉尻が下がっていないだろうか、目にクマができていないだろうか、瞳が滲んでいないだろうか。

・・・いつもの顔ができているだろうか。

全ての顔をチェックして、それから、どうぞ、と、振り向かずし声をかけた。

いつものように、燐とした顔を作り上げ、少し強気な表情を浮かべ、彼を迎えた。

静かにドアが開くと、そこにはその声の主である江戸川コナンが待ちくたびれたという表情をして立っていた。

「遅いじゃねーか。博士、もう退院手続きとつくに終えてるぞ」

コナンは入ってくるなり、開口一番こう言つて、軽く哀を睨んだ。
それから持っていたケータイをポケットに入れ、窓際にいた哀の許まで歩み寄ると、彼女の隣に、同じように壁に背を預けた。

「・・・驚いたわ。まさか来てくれるとは思わなかったから・・・
その様子じゃ、子供たちも」

「いや、来てねえよ。何かどうしても抜けだせない用事ができちまつたようで・・・。迎えにいけないことをすごく残念がつてたよ」
灰原の退院迎えにくるの、あんなに楽しみにしてたのにな。それを揃いもこねえなんてどんな用事なんだろうな・・・。なんてばやくコナンとは対照的に、哀は彼らの顔を思い出し、思わず口許をほころばせた。それから冷蔵庫を開いて中身を確認すると、まだ冷蔵庫に残っていたリングオを見つけ、彼に「食べる？」と手渡した。

「ああ」

コナンはそれを受け取り、しゃりりと一口齧りつく。そんな彼を見ながら、彼女は彼女で博士が自分宛に買っておいてくれたゼリーを冷蔵庫から取り出し、一口口に流し込んだ。冷たくて甘いフルーツのぷるるんとした食感とさわやかなアセロラとパインの風味が口の中いっぱいに広がっていく。

その様子をリングオを食べる手を止めてじっと見つめる彼の視線に気づき、思わず居心地が悪くなって視線を逸らした。

「何・・・」

「いや、何をそんなに・・・。。・・・帰りたくねーのか？」

「バカね、そんなことあるわけじゃない。早くあそこに戻って台所やリビングの掃除から始めなきゃ。きつと大変なことになってるわ」

「・・・確かにな」

はは、と乾いた笑いを浮かべて、コナンはもう一口リングオを齧った。それから、哀はちらり、とそんな彼の横顔を一瞥する。

「ん？」

「・・・おめでとつ、と言った方がいいのかしら？晴れて恋人にな

ったそうじゃない。あなたたち」

「・・・ああ」

突如口にした哀の言葉に、少しづつの悪そうな顔をして、コナンは持っていた齧りかけのリンゴをまるでボールのように天井に放り投げた。ボールが再び彼の手に戻ってきたとき、彼はまた言葉を続ける。

「それについては感謝してる。『工藤新一』が自分の寝ている間にどっか行っちゃったことに残念がってたけどな。・・・もう少し遅くまで起きてれば、ってな」

「じゃあ、別れの言葉は言えなかったの」

「・・・まあ、あと少ししたら行かなくてはいけないことは言っていたから」

「そう・・・」

哀はそう呟いてから、しばし口を開くのをやめた。それから、一口、また一口、とゼリーを口に入れる。

「よかったわね」

しばらく重い沈黙が続いたあと、彼がポツリとつぶやくと、少しの間をおいて、コナンは「ああ」と小さくうなずき返した。

「・・・でも、心配ね」

「え？」

「恋人になったってことは・・・わかってるんでしょね」

意味深な笑みを浮かべて、哀はコナンを見遣る。その言葉の意味を探るように、コナンは哀を見返した。

「・・・一度気持ちを確かめあつたら、『逢いたい』『触れてもらいたい』そう感じるのが、強くなるわ。・・・あなたは答えてあげられる？その気持ちに。・・・もう解毒剤はこの手にないのよ？声だけで救える？あの人を・・・闇から、帰ってこないあなたへの不満から救ってあげられる？」

「・・・」

「・・・なんて、意地悪いってごめんなさい。そんなこと言っても

仕方ないものね。こういう風になることはわかってた。元の姿に戻る前に思いを確かめることをすれば、安心感等は沸くけれど、それでも別の不安は残るっていうことぐらい・・・それを承知で私はあの薬を作ろうと思ったんだもの」

自嘲の笑みを浮かべ、哀はコナンを見つめた。

そう、そうして彼はそれを服用した。

「・・・あなたにも強い覚悟があるんでしょう？」

「・・・あ、ああ」

「・・・そう・・・。それじゃあそのことはとりあえずいいけど。

それなら問題はあなたの方ね」

「俺？」

きよとん、とした顔でコナンが哀を凝視する。

「そう。・・・くれぐれも変な方向に走らないように気をつけなさい。多分しばらくはあなた、禁断症状が出るとは思うから・・・」

何気もなくゼリーを再び一口口に入れて哀が言くと、コナンは思わず怪訝な顔をした。

「じゃあまだ副作用とか残ってんのか？」

「・・・そうね、副作用。あなたが蘭さんと恋人になったときに当たったに出た代償の一つ」

「・・・んだよ、それ」

哀は意味深に彼を見上げた。そして、自分の唇にそつと人差し指をあてる。そして、「コレ」と呟いた。

「蘭さんとキスしたんでしょ、あの日。・・・一度体験した蜜の世界、もう一度味わいたいって思うのが筋じゃなくて？寝込みを襲ったり、お風呂を覗いたり、だとか。そんなことをくれぐれもしないこと、いいわね」

「~~~~っ！あのなあ！！！」

真っ赤になつて抗議するコナンに、哀はくすくすと笑った。

しばらく、彼女のくすくすと笑うその笑い声が病室に静かに響き渡る。

笑いながら、哀が彼の表情を伺い見ると、いつの間にか彼の顔は赤面とした表情から、真面目な表情に変わっていた。驚いて、哀がその笑みをやめ、彼を見つめ返す。

「なあ……」

ぼつり、と彼が呟いた。

「……な、に？」

「……オメー、今、どんな気持ちだ？」

はっとして哀は言葉を失っていた。彼は、哀のその表情の変化を一つも逃すものかとするように、ただじつと彼女から視線を逸らすことはしなかった。

「……いつから？」

短い沈黙の後、諦めたように哀がその言葉を漏らした。

いつから、彼は自分の気持ちに気づいていたのだろう。

いつもと変わらずに、彼は私と接していたはずだったじゃないか。それも、演技だったのだろうか。

知ってて、普通に接してくれていたのだろうか。

なんだかとってもはずかしくて。

彼の顔がいつのまにか見られなくなっていた。

コナンはそんな彼女をじつと見つめていた。それからゆっくり口を開く。

「……おまえが意識がなくなつてやばかったとき、歩美ちゃんに

叱られたんだよ、泣きながら。．．．そんなときに。前にも母さんからかわれたことあったし．．．

まさか、とは思ったんだけど．．．」

申し訳なさそうに自分を見つめる彼の顔。

「そう、吉田さんが．．．」

哀は思案顔で顎に手を当てて、呟いた。

そしてあの夜、彼が蘭に自分の気持ちを告白した夜、物思いにふけていた自分のもとへ、突如舞い降りてきた天使のように元気付けてくれた彼女の声を思い出していた。

「悪かったな。おまえの気持ち気づかないでデリカシーのかけらもなくて．．．拳句に俺たちのことまで」

「やめて」

哀は彼の言葉を強く遮った。驚いてコナンが自分を凝視していた。

「謝らないで。私が好きでやったことなの。やりたくなかったら、始めからあなたに解毒剤なんて渡さなかったし、作らなかった。工藤君と2人で子供のままでいたいのなら解毒剤なんて作らずに、ただ、手遅れとだけ言えば済むことだったの。なのにそれをしなかった。だからあなたが悩む必要なんて少しもないわ。悩むのならあの人のことだけにしなさい」

「灰原．．．」

ちいさく、サンキュと呟く彼の声。

彼女はその言葉が聞こえていたが、聞こえないふりをして、ゆつくりと顔を上げた。きりり、とした顔でただ真っ直ぐ前を見つめる。それから、

「さ、行きましょう。博士が待ってる」

と言って、バッグを手にし、颯爽とドアに向かって歩き出した。

「ああ、そうだな．．．」

コナンはそういうと、哀の手からバッグをさりげなく外す。

「ちよつと、何．．．」

「持ってやるよ」

優しい微笑み。そんな彼の表情を避けるようにして、哀は背を向けると、ゆっくりとこう言った。

「ありがとう。でもこれはもう最後の優しさにしてね」

「・・・はあ？」

意味がわからない、という様子。哀は彼の方をちらり、と見ると、表情を変えずにこう言った。

「これ以上あなたを好きになったら困るから」

しばし間が開き、哀が何を言ったのか理解したとたん、コナンの顔はみるみる赤くなっていく。

哀はそんな彼の様子にも動じず、あくまでもクールに、「・・・さ、早く行きましょう。置いてくわよ」と言うと、さっきと同じペースで歩き出した。

「お、おい、待てよ灰原」

自分をあわてて追いかける彼の足音。

しかしそれを待つこともなく、振り返ることもせず、彼女はただ、前へ向かって歩きつづけた。

口許に笑みすら浮かべて。

彼らが阿笠邸についたのは既に正午もとつくに過ぎて、2時を少し回っていた。

「腹が減ってうごけねえよ・・・灰原が病院から出ようとしねえから」

博士が運転する車から降りるとともに、彼がげんなりした顔で呟いた。

「・・・何小嶋くんみたいなこと言ってるのよ。簡単なものを作つてあげるから」

呆れた顔をしつつも、馴れた素振りでコナンをなだめすかす言い方をすれば、ちよつとむつとした顔でコナンがバー口、と言葉を返し

た。

「病み上がりの人間に家事頼むわけにはいかねーだろ？なあ、博士。一度荷物置いたら、どっか連れてってくれよ？」

「いや、それは・・・その・・・まあ、中に入ってから考えんか？暑いし、クーラーの入った部屋で冷たい麦茶なんて飲みながら涼めば、きっと考えがまとまる・・・」

「車の中でも、寒すぎるくらいクーラー効いてたぞ？それに麦茶だって」

「まあ、いーからいーから」

慌てたように彼は早口で言うと、2人を玄関に押し込むようにして追いやった。

それから、逃げるように足取りを急がせて車の運転席にすばやく乗り込むと、車庫入れを始める。

「・・・なんだよ、あれ・・・」

呆然とした様子でコナンが呟いた。運転席では、博士が2人に早くいけ、というようにジェスチャーをしている。

「・・・行ったほうがよさそうね・・・」

「そうだな」

2人は首を傾げつつも、阿笠邸に足を踏み入れた。

哀にとっては2週間ぶりの「わが家」。

ずっと、帰りたいと願っていた、場所。

中に入った瞬間、懐かしい匂いに彼女は一瞬立ちすくむ。すーっと胸につく懐かしい匂い。

温かい匂い、優しい匂い、柔らかい匂い……。

おそらく自分以外誰にもこの匂いはわからないだろう。

そう、組織の匂いを感じ取るみたいに、哀はいつのまにかこの愛にあふれたこの匂いを、懐かしくて温かい匂いも感じ取ることができていた。体に、ココロの中に染み付いていたのだ。

この匂いをかくことを自分はどれほど待ちわびていたことだろう。どうして気づかなかったんだろう、自分の居場所はまだこの場所以外考えられなかった。

それなのに自分からこの地を離れようとしていたなんて。あの嫌な息の詰まるような苦しい場所で死のうとしていたなんて。

なのに、そんな自分を、ここではまだ受け入れようとしてくれている。迎えようとしてくれている……。

「おい、灰原……どうした？」

心配そうにコナンが哀の顔を覗き込む。

「え……？」

それからポケットからハンカチを取り出し、哀に差し出した。

「……？」

素直に受け取ってはみたものの、哀はきょとん、とした顔で彼の顔を見つめていた。

「それは、哀しみの涙？……なわけねーよな」

につ、とコナンは白く綺麗に並んだ歯を彼に見せると、ほら、とハンカチを差し出した。

「……感じるだろ、家が、お前を待つてくれたんだぜ？」

「え？」

「『お帰り』って声、聞こえねえか？」

彼がすう、と大きく息を吸う。

「温かい匂い、感じねえか？……おまえが来た瞬間、この空気がいつきにやわらかい空気になったの……。おまえは感じないか？」

ああ。

彼もまた、気づいているのだ。この匂いに。
人だけではなく、この家も自分を温かく迎えてくれていることを。

「ただいま」

哀は、小さくぽつり、と呟いた。

「お帰り・・・」

彼が、この『家』に変わって彼の声で代弁してくれた。

につ、彼が再び微笑む。哀もその笑顔につられて、思わずココロから微笑んだ。
温かい空気。
やわらかい空気がそこに。

「なんじゃ、まだここにいたのか？」

そのしゃがれた声にびくつとして哀とコナンが振り返る。車庫入れを終えた博士が少し苦笑まじりの表情でそこに立っていた。

「もう、部屋に入ってると思ったぞ」

「別にいいだろうが。そんな病人急がせてどうするつもりだよ。・・・
何だか変だぞ、今日の博士」

「そうかのお？気のせいじゃろ？」

博士が心外だ、という表情で言うと、早くリビングに荷物置いて中に入りなさい、と促した。

コナン、哀に続き、博士の順番で、3人は奥の部屋に入っていく。

「そーだ、あとで灰原退院パーティやらなくちゃな」

「いいわよ、そんな」

「俺が言わなくても、きつとあいつらやろうつて言い出すぜ？あいつらのことだから」

「・・・そうね」

くすくすと笑いながら2人は廊下を歩き、その部屋の前で立ち止まった。それから、何気なくドアを開ける。

そして2人が同時にその部屋に入る瞬間、せーの、という声がどこかで聞こえて・・・

「おめでとう！哀ちゃん」

パンパン・・・パーン！と激しく鳴るクラッカーの音に、哀は思わず目を丸くした。

そこにいるのは、蘭、園子、平次、和葉、元太、光彦、それに歩美の7人。20センチくらいの大型クラッカーを2人で一つ。計3個のクラッカーがぱーんっ！と大きな音を上げ、2人を出迎えた。大型クラッカーからは、「哀ちゃん、おめでとう！」というメッセーじや、哀の似顔絵、大きな紙ふぶき。沢山のものが飛び交って。

・・・クラッカーのくす玉バージョンだ。きつと、博士のお手製だろう。しばらく、白煙が蔓延していた。げほげほ、部屋中人々のむせ返る声が聞こえていた。

「・・・あ、ありがとう・・・」

しばらく火薬の匂いに咽ながらも、それでも目元は嬉しそうに笑っている。その笑顔を見て、一同は本当ににっこり笑った。

部屋にはさまざまなディスプレイが飾られている。横断幕や、折り紙の飾りつけ。金色のモール。

そして、テーブルにはケーキやチキン、和食に中華、イタリアン。本当にさまざまなご馳走。

「・・・こういうこと、だったのね」

哀は咽ながらも、全てを察し、隣で満足そうに笑っているはずの彼に囁いた。・・・が。

「・・・おまえ・・・ら。一体、どういうことだよ、これっ」
「え？」

動揺したように、頭に青筋立てて、彼は子供たちを見つめていた。
・・・彼も何も知らなかった、という顔をして。

「だーって、コナンくんいつも抜け駆けするじゃない」

「そのお返しだぜ、悪かったな」

「・・・これで、チャラにしてあげますからね！」

「オレはまだまだやでー！」

「~~~~！」

どうやら、彼には誰も教えなかったらしい。とても悔しさそうに地団太を踏む彼を見て、哀は思わずぶつと噴出した。

そう、彼女の退院を祝う宴はこうして幕を開けたのだった。

歩美の乾杯の音頭を皮切りに、特大フライドチキンを争う平次と元太、園子のカラオケワンマンショー、博士の新作発明品の発表会、光彦の怪盗キッドに扮してのマジックショー・・・。

それはとつともとっても楽しい一時。

みんなの笑顔がそこに沢山蔓延していた。

午後7時を過ぎ、外はすっかり暗くなっていた。蝉ももう鳴くのを止めていて、やけに静かな夜。

10人は阿笠邸の裏庭で花火をしていた。これは歩美の提案。米花

花火大会のときは高熱のために、哀はあまり楽しめなかったのではないか、という彼女の気遣いからきたものだった。

案の定皆は賛成し、コンビニやスーパーでたくさんの花火セットを買いあさり、今ではさまざまな花火を楽しんでいる。そして哀と歩美はあの日と同じ、お揃いの浴衣を身につけて・・・。

哀はぼんやりとみんなから離れたところで線香花火をしていた。先ほどまでは歩美たちと花火を楽しんでいたのだが。今はそういう気分になれなくて。

それから、煌々と輝く少し欠けた月をそっと見上げた。一人物思いに耽りながら。

すべてはあの日、米花総合病院の815号室で、彼が言ったとおりだった。

自分の所為で彼をここまで苦しめたのだ、という後悔からでた単純かつ重大なミス。それは否定できない。

けれど、実際はそれだけではなかった。彼女、灰原哀があの花火大会の夜に、彼、江戸川コナンに解毒剤の試作品を渡したのは。

そう、全ては。

あの計画を狂わせたのは花火大会の夜に見せた、彼女たちが自分に見せた涙がきっかけだったのかもしれない。

浴衣を着てこなかった自分を責め立てた幼い少女。

そして、幼馴染を想って泣いたもう一人の少女。

あの2つの時間がなければ、自分は彼に解毒剤を渡すことはしなかった。『情』というものは全て花火大会に行く直前に捨ててきたつもりだった。

浴衣を着たくても、頭がふらふらして袖を通すのもイヤだった。自分には『浴衣』なんて女の子の服を着る資格なんてない、そう神様が言っているような気がしてきて。

だったら、自分が一番似合う服『黒の服』を身に纏おう。そう思ったのは事実だった。

自分はあと何週間後には死ぬ運命。それなら、別に思い出なんて作らなくてもいいじゃないか。寸前に思い直したのも事実。

浴衣なんて着なくてもいい。吉田さんに嫌われてもいい。そのほうが後でココロ残りもないかもしれない。

そう思い、博士が止めるのも聞かず、全身黒の服を身に纏い、皆の元に現れた。

けれど。待っていたのは、やっぱり彼女の涙であつて。「ともだち」とぶつけた彼女の涙であつて。

裏切られた、そう思われるのが苦しくて、胸がずきずきと痛んだ。

とんとん拍子に進んでいった哀の浴衣着付け計画。

家に戻れば、蘭から新一への思いを告げられて。関係ないはずの、ただの彼女が可愛がつている居候の友達であるはずの自分にぶつけた彼女の言葉を聞いて。

「コナン」とあなたは似てる、そう泣きながら言う彼女に対して。

そんな彼女たちを見て、いつのまにか、死に向かっていたココロの氷は少しずつ溶けていった。

花火大会に戻れば、自分をココロから気遣う少年がいて。可愛いと笑ってくれる皆がいて。固かったココロが穏やかになっていくのを感じていったときに、あの夢を見た。

いつも見る夢は、あんなに恐怖に怯えているのに。殺されたり、追

いかけられている夢なのに。あんなに穏やかな表情で『解毒剤を渡す』なんて夢見たこと無かったのに。

どうしてあのとき、自分は穏やかに笑えていたのだろう。

今にして思えば、それは自分や彼が今まで思っていた『苦しかった』という理由ではなくて・・・。

「本当は、ただ、早く彼に渡してあげたかったんだわ。だからあんな夢を見た。早く、解毒剤を作って、・・・私は彼の、そして彼女の笑顔が見たかった・・・。ただそれだけだったんだわ」

そう、だって自分にもわかっていたから。

三途の川に行ったとき、自分が『大切な人』と考えたときに浮かんできた人物の中に、彼女の顔がすぐに浮かんできたことで気づいてしまったから。

彼女も自分の中でなくてはならない存在の人であることに、気がついてしまったから。

そう、自分は。

誰かが幸せになることで、幸せを感じるのだ。誰かの笑顔で、「よかった」と微笑むことで、幸せを感じられる。

誰かの泣いた顔なんて見たくなくて。大切な人が傷つく顔が見たくなくて。

自分のせいで大切な人がココロを失うのはもつての他で。

たとえ、その相手が自分の愛した人だったとしても。

他の人が聞いたら馬鹿みたい、って笑われるかもしれないけれど。でも、それが本当のことだから。

ド、ド、ド、ドーン ド、ド、ド、ドーン

どこか遠くで打ち上げ花火の音がする。

きっと隣町で花火大会が行われているのだろう。

しかし、その花火はビルの狭間に微かに見えるぐらいで、ここからはあまり楽しむことはできなかった。

「花火、か」

思わずぼつり、と呟く。

もし、本来の計画どおりいけば、哀は今年の花火大会を最後に姿を消すつもりだった。今、この場所にはいないはずだった。

灰になって、ちりになって、この空気をさまよっていることすらできなかつたかもしれない。

牢獄のような暗く寂しい部屋で、一人、骨になっていたかもしれない。

はたまたジンたちの目の前で、屈辱的な最期を遂げていたかもしれない。

・・・しかし今はこうして大好きな仲間とともにここにいる。

そう、今、自分はこうして、生きている。生きているのだ・・・。

「哀ちゃん、何ぼんやりしてるの？一緒にこっち来て花火やろうよ！」

その声に哀はハッとして顔を上げた。

気が付けばさつきまで明るく輝いていた手元の花火はただの黒い塊へと変わっていた。哀は思わず苦笑する。

縁側では蘭が自分に向かって、大きく手を振っている。

そしてそこには自分を見つめているコナンの姿もあった。博士も光

彦も歩美も元太も平次も和葉も園子も・・・。

みんな、みんな自分を迎えてくれる。哀は思わず口元に柔らかな微笑みを浮かべ、彼らの待つ場所に向かってゆつくりと歩き出した。

皆の許に行きながら、彼女はあることに気がついていた。

ドーンと轟く音を聞きながら、ふっと口許を綻ばせ、「そう」と呟いて、頭上に輝く大きな花火を見上げた。

そう。

あなたたちは花火。自分の身を呈して人々の心に希望を与えるために輝く花火。

あなたたちは明日が見えなかった私の心に希望を与えてくれた。延々と続く闇でしかなかった私の心をまっすぐ照らしてくれた。

あなたたちの笑顔が私を救ってくれる。

あなたたちの笑顔が私を幸せにする。

あなたたちの笑顔が私に未来を与える。

そしていつかなりたい。

誰かのココロに希望を与える、笑顔を与える。

そんな素敵な花火に。

最終話 HANABI（後書き）

終わりましたー。こつぶですー。

いや、元祖と少し違う終わり方にしました。コナンくん登場させてません、最後はね。

ここまでほぼ2ヶ月。

私も、こんなに早い更新になるとはも思いませんでした。とっても楽しくて、休みの日は一日中パソに向かって書きなぐって。

なんだか3年前のあのときを思い出します。スランプは・・・うふふ、やっぱり抜けませんでしたー（笑）。

いや、これはスランプ、っていうかネタがない、ってことで、スランプは関係ないのかもしれないねえ。ネタ探しに行かなくちゃ、かなっ。ふふふ。初歩的なことに気がつきました、こつぶです。えへへへ。

それではここまでお読みいただきまして、ありがとうございますー！！！！こつぶでしたっ。

またいつかお会いする日を楽しみにしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5767a/>

H A N A B I

2010年10月9日07時04分発行